

共同研究——万德寺蔵『聖徳太子伝』翻刻——

# 目次

解題	小島惠昭	三
書誌	渡辺信和	三
翻刻		一七

## 解題

愛知県瀬戸市塩草町の真宗高田派万徳寺に「聖徳太子伝」（以下「万徳寺蔵本」と略記）全五冊を所蔵する。江戸時代の地誌「尾州府志」「張州雑志」「尾張志」に万徳寺宝物として見えているもので、「尾張志」は「世に流布の太子伝とはたがひてめづらしき古書なり」と述べている。

近年に至っては、太田正弘編『愛知県史料叢刊・瀬戸市内所在史料』（昭和四十四年刊）に奥書のみを紹介されているが、若林隆光編「聖徳太子関係文献目録」（『聖徳太子と日本文化』所収・昭和二十六年刊）小倉豊文編「聖徳太子」研究資料目録」（『聖徳太子と聖徳太子信仰』所収・昭和三十八年刊）阿部隆一著「室町以前太子伝記類書誌」（『聖徳太子論集』所収・昭和四十六年刊）をはじめとする文献目録に見えていない。万徳寺蔵本は一部の研究者にはその存在が知られてはいたけれども、その調査研究は行なわれていなかったといえよう。聖徳太子の伝記は個人の伝記として最も多く現存するけれどほとんど未刊の写本として未調査のままであることが反省されつつあるのが現況である。かかる多くの伝記を成立させた背景である太子信仰の史的調査はそれらの分析による以外はないことと考えられる。本研究所は昭和五十四年六月四日に万徳寺資料調査を行なった。その時本書を写真撮影し検討した結果、本書の翻刻によって太子信仰の史的解明の一助となそうという結論に至った。万徳寺住職安藤師に

翻刻許可を求めたところ、幸い御許しを得たため、ここに翻刻する次第である。

聖徳太子の伝記の代表とされている『聖徳太子伝暦』（以下「伝暦」と略記）は太子没後まもなく萌芽し、その後発展してきた太子信仰によって成立した先行の信仰的伝説・説話を集大成したものである。伝暦の撰者・成立時期については、故藤原猶雪博士の考証による藤原兼輔延喜十七年（九一七）原撰説（『日本仏教史研究』聖徳太子伝暦復元の研究）が定説であった。藤原兼輔原撰説に対しては、阿部隆一氏（前掲論稿）・林幹彌氏（『日本宗教史論集』「聖徳太子伝暦」について）によって疑問が投げかけられている。それは永観二年（九八四）成立の『三宝絵詞』以来、古来の説悉く「平氏撰」とある理由からであった。万徳寺蔵本は第一・二冊の内題に「聖徳太子伝暦 平氏撰」と記される。伝暦の現存諸本は字句の異同が相互にあるけれど、大差のある異本は存在しない。「暦録」「七代記」「本願縁起」等の引用書の引文が大字の本文となっているか小字双行の注文になっているかの文章形式上の差異のみである。しかるに、万徳寺蔵本の文章内容は伝暦のものと相違するから、内題に記す伝暦とは異種の太子伝記である。

伝暦以後、伝暦の研究註釈書や法隆寺願真の「古今目錄抄」のように当時の太子信仰の口伝・説話を集録・論議したもののほか伝暦を敷衍しながら後世の口伝・説話を包摂増補した太子伝記諸本が成立した。太子伝記諸本のうち、後代の太子伝記の藍本となったのは、阿部隆一氏が前

掲論稿において文保本太子伝と仮称されるものである。それは文中に鎌倉時代末の文保年間の記事が見えるからである。『聖徳太子全集』第三卷には醍醐寺蔵本が所収されているが、現存文保本太子伝のうち最も古い写本は日光輪王寺天海蔵本である。日光輪王寺天海蔵本に奥書よれば、原本は「四天王寺苜田坊之秘伝」にして、その奥書には「不可出院内又不可有外見以起請文唯是一人付属也」と記される。この秘伝から「応永十二年<sup>乙酉</sup>七月晦日於四天王寺蓮華蔵院之内護摩堂大愚叟生年六十二而書写校合仕<sup>早</sup>」の道智書写本を、応永十五年（一四〇八）撰津国西成榎並下庄西方赤河大金剛院三蔵坊住侶性算が転写、嘉吉二年（一四四二）撰津国東成郡志宜寺庄法安寺光明院において法印権大僧都有海が書写、今本は享徳四年（一四五五）撰津国渡辺仏勝寺宝乘院において阿闍梨全智の書写という次第で伝写されたものであるという。（『日光山「天海蔵」主要古書解題』）

しかるに、万徳寺蔵本第五冊奥に記す同筆の識語に物語る本書の伝授由来を解釈すれば、次の如くである。本伝は「苜田坊之秘伝」にして、「四天王寺東門村蓮華蔵院護摩堂」において書写した。原本奥書には、本伝は院外に伝えるべきではないけれど、起請文がある場合にのみ唯一人に付属するもので、他見は許さないという。本伝が秘本といえども、道見は誓約をなしたゆえに、苜田坊長老龍雄から書写することを許された。筆者は沙弥元泰で、時に寛正三年（一四六二）五月のことであった。

日光輪王寺蔵本親本と万徳寺蔵本親本とはともに秘伝であること、日

光輪王寺蔵本第一次転写本と万徳寺蔵本とはともに蓮華蔵院護摩堂において伝授書写されたこと、日光輪王寺蔵本にいう「四天王寺苜田坊」と万徳寺蔵本にいう「苜田坊」とは同じことを指すと考えられることという共通点を見出すことが出来る。万徳寺蔵本第五冊二十丁裏九行目の「茨田池」と二十一丁目裏九行目の「茨田寺」の「茨」に「セリ」の読み仮名を付けるから、万徳寺蔵本では「苜田坊」が「茨田寺」を指すように見られる。しかし、「茨田」は河内国茨田郡（現在大阪市鶴見区）の地名で、「マンダ」「マムタ」「マツタ」と読むべきである。日光輪王寺蔵本の「苜田坊」の「苜」は「カウ」「ギャウ」「カン」と読むから、「セリ」とは読めない。おそらくは、書写の時に「苜」「苜」のどちらかを誤って書いたことと考えられる。

右の如くなれば、日光輪王寺蔵本と万徳寺蔵本とは同じ親本からのものといえようけれど、日光輪王寺蔵本は首に太子讚嘆表白を冠して本文に入り私年号を用いる年代記で元來絵説きを主眼とした太子伝記であるから、万徳寺蔵本の文章とは異なる。日光輪王寺蔵本と万徳寺蔵本とは異種の太子伝記であるゆえ、四天王寺の苜（苜）田坊には二種類の太子伝記が秘蔵されていたといえよう。

但し、万徳寺蔵本の本文は十六歳守屋合戦の部分のみ異筆で、文章も異なることから、その部分のみ異種の太子伝記から引用したものと見られる。十六歳守屋合戦の部分は私年号を用いる文保本太子伝に類似するから、苜田坊秘伝の別本の太子伝記あるいはその類本から引用したと考

えたい。

万徳寺蔵本の文章形式は基本的に大字の本文と、小字双行・改行低一格や小字・改行低一格小字双行の注文から構成されている。「元興寺之本記」「本願縁起」「六角縁起」「曆録」「松子伝」のように引用書の引文が改行大字の本文となつているところがある。これは万徳寺蔵本親本の祖本の形式を踏襲したもので、伝暦古写本の場合に引文を大字本文とする本は書写時期あるいは祖本の成立時期が古い本であるから、古態を示しているものと考えられる。しかしながら、引用書引文は「松子伝」に見られる改行大字本文・本文中の小字双行・改行低一格や小字・改行低一格小字双行というような様々な形式を成すものがあり、祖本に増補したものか、祖本の形式を改めたものか断定し得ないところもある。注文に本文の語句の注記として本文中の小字双行の形式を成すところは祖本にあつたものか不詳である。

万徳寺蔵本の引用注文は右に記した改行大字の本文の形式を成す諸書からと、「或説」「平氏云」「古老人云」「有伝」「氏云」「平氏伝」「豊浦寺本記」「或伝」「伝記」「有説」「私云」「或伝記」「口伝」「一説」「別紙」「秦記」「障子伝」などから引用する。「元興寺之本記」「本願縁起」「六角縁起」「豊浦寺本記」「秦記」は寺院縁起類である。「曆録」「障子伝」は伝暦にも引用される奈良時代撰述のものである。「松子伝」は「大鳥部松子伝」とも記しているが、現在は逸書である。親鸞の『上宮太子御記』や顕真の『古今目錄抄』に引用されるから、鎌倉時代には流布し

ていた太子伝と考えられる。『古今目錄抄』によれば、文松子は「太子之舎人也、梵天化身云」と記される人物であるけれど、伝の巻数については「一卷伝云、松子伝」「十二巻者集諸太子伝、此内有松子伝云」、「松子伝者或十巻或十二巻云、御廟内、文者第十巻文云」、「松子伝云一卷伝」とも記す。『古今目錄抄』に「一卷伝云、松子伝、敏達天皇即位二年癸巳聖徳太子降誕云」と引用する箇所は、『上宮太子拾遺記』に「一卷太子伝曰、淳名倉太玉敷皇子、治天下十四年、即敏達即位二年癸巳、聖徳太子降誕文」と引用する箇所に相当する。『上宮太子拾遺記』に「一卷伝曰、自敏達天皇即位第二年<sup>巳</sup>癸誕生。至推古天皇即位第三十年又五十ヶ年也云」「癸巳生敏達二年、壬午滅推古卅年、又云二年巳後、又云後滿五十年（中略）已上一巻伝意如此」と引用する箇所は、万徳寺蔵本第五冊二十九丁表に「松子云、太子四十九歳、御入滅ヲ延給（中略）太子滿五十歳十二月廿一日<sup>癸</sup>日ノ時也」と引用する箇所に相当する。これの記事からして、「松子伝」は伝暦が「二巻伝」と通称されたように「一卷伝」と通称されていたこと知れる。「平氏云」「氏云」「平氏伝」は同書のことを指していると考えられる。「平氏伝」といえば、『古今目錄抄』が伝暦を「平氏伝」と記して引用するように、伝暦のことを指すけれど、万徳寺蔵本に引用する「平氏伝」は伝暦とは異なる。万徳寺蔵本が引用する「平氏伝」は、字句の異同はあるけれど、文保本太子伝の本文に類似する。わずかにその例を挙げれば、万徳寺蔵本第一冊十五丁表の太子四歳条に「平氏言」として引用する箇所は、醍醐寺蔵本の「太子御出世以前ニハ、

我朝衆生劫初以来、更不思<sub>レ</sub>知父母、重恩<sub>一</sub>、其翔<sub>ニ</sub>唯同<sub>ニ</sub>畜生<sub>一</sub>、凡孝養父母、善根、万善万行、中尤第一殊勝、善根也(下略)に相当する。万徳寺蔵本第一冊十六丁裏の太子五歳条に「平氏言」として引用する箇所は、醍醐寺蔵本の「誠此未來記、御詞一モ無<sub>レ</sub>違<sub>一</sub>、太子十五才、秋暮、御伯父敏達天皇有<sub>二</sub>崩御<sub>一</sub>(下略)に相当する。万徳寺蔵本引用「平氏伝」は文保本太子伝の一本である若田坊秘伝の別本太子伝記と考えられるのである。この「平氏伝」「平氏云」「氏云」と同じく、「或伝」と「伝記」と「或伝記」、「或説」と「有説」、というように呼称が異なれども同書と考えられるものと、「古老人云」「私云」「口伝」「一説」「別紙」と引用する口伝・秘書の類のもの詳細は不明である。万徳寺蔵本において、「平氏伝」「松子伝」「古老人云」をはじめとする伝記・口伝を多く引用することは本書の特色であり、とくに逸書の「松子伝」の復元という点に意義があらう。

万徳寺蔵本各冊には異筆の施入識語が奥書されている。宝永七年(一七二〇)万徳寺第十六代円応の記した由緒書によれば、万徳寺の縁起は以下の如くである。安藤駿河守隆光は親鸞聖人に帰依し、法名を源海と号し、武蔵国豊島郡荒木に万福寺を創立した。源海上人の真弟海円上人は正応元年(一二八八)武蔵国荒木より今の尾張国春日井郡赤津村に來り、万徳寺を草創した。第九代円林上人の時、大檀那松原下総守広長は寛正五年(一四六四)客殿・太子堂を造立し、太子伝記・太子絵伝ならびに寺領山林を寄附した。しかるに、享祿・天文の兵乱によって仏閣僧

坊悉く焼失し、旧記靈宝多く散失し、豊臣秀吉の代には寺領山林悉く没収された。徳川の世と成り、寺領山林を安堵され、円式・円政・円窓の三代の間に客殿・庫裡・太子堂・鐘樓・惣門悉く再建されたという。往古より、万徳寺太子堂には秘蔵の太子十六歳孝養像を安置する。太子像は毎年旧曆七月二十二日の太子会に開帳され、近郷近在の門信徒が参詣することである。太子絵伝四幅は土佐光信筆と伝えられるもので、第一・四幅のみ現存し、第二・三幅は江戸時代初期に桑子妙源寺本を模写したものである。寛正五年(一四六四)施入識語に「尾州山田郡内飽津保上村太子堂」は、旧赤津村白坂に在る雲興寺の永享二年(一四三〇)雲興寺授与証状に「尾張国山田郡飽津保内白坂雲興寺」と記すから、現在の万徳寺のことをいうことは明らかである。太子伝記を寄進したという松原下総守広長は江戸時代の地誌によれば、春日井郡今村に在った今村城の城主という。

## 書誌（凡例）

本稿は万徳寺蔵『聖徳太子伝』（外題）の翻刻である。

万徳寺蔵本は後述書誌に示すように、第一冊と第二冊の巻頭には「聖徳太子傳曆 平氏撰」とする内題を持つが、第一冊の最初に附された総目録には、「太子伝目録」とあり、『聖徳太子伝曆』（『聖徳太子全集』三所収等）が暦の年次で説話を纂集しているのに対して、万徳寺蔵本は聖徳太子の年令によって説話を纂集しているほか、文中に「平氏云」とする引用文がある点などからみて、『聖徳太子伝曆』そのものを直接にうけた系統の写本ではないと思われる。しかしまた、外題の「聖徳太子伝」も、表紙そのものが後補であるし、題簽の筆跡も本文の筆跡のいずれとも異なるものであるので、本来の書名であるかどうかはわからな

い。第五冊の最終丁（三十七丁）裏を切り離して卷子装とした寛保二年（一七四二）に附された円応の識語には「聖徳太子伝」とあるので、少なくともそれ以前に「聖徳太子伝」と称されたものであろう。とりあえず万徳寺蔵本『聖徳太子伝』と称することとする。

『聖徳太子伝』諸本については、阿部隆一氏の『室町以前成立聖徳太子伝記類書誌』（昭和四十六年、平楽寺書店、『聖徳太子論集』所収）に詳しいが、万徳寺蔵本についての書誌は記載されておらず、同系統と思われる

本もなきさうである。

氏が文保本太子伝とされる「太子伝」の他、国書総目録では四種類の別本が挙げられているが、これらとの関係は未調査である。文保本太子伝の一本とされる醍醐寺蔵本（『聖徳太子全集』三所収）と比較してみると、太子の年令による説話の配列などの共通性はあるものの、巻頭の「太子讚嘆表白文」が万徳寺蔵本にはないことをはじめ本文にかなりの出入がみられ、別系統と考えられる。ただし、同じ文保本太子伝の一本日光輪王寺天海蔵蔵本の第八冊末の奥書は、年次の違いはあるもののほぼ同様の文面で万徳寺蔵本第五冊末（三十六丁裏以下）にみられるので、何らかの関連を考えなければならぬ。

万徳寺御住職安藤憲雄氏の御諒解を得て、ここに翻刻するものであるが、諸本との関係等は今後の課題としたい。

### 一、書誌

a 写本 五冊

b 所蔵 愛知県瀬戸市塩草町 万徳寺

c 大きさ 縦二十六・八センチ、横二十・一センチ。ただし現状

は、改装時に本の天地を切つてそろえたものらしく、第二冊の二十五丁裏、同三十七丁裏等では最下段からはみ出して記された送り仮名が切られて判読しづらくなっており、第二冊四十五丁表では上段にはみ出して注された傍書の最初の文字が切り落

されて判読できない。改装は虫損、破損を補修して行なわれたものように、第一冊全丁と第二、三、四、五各冊の多くの部分に丁全体にわたる裏打が、また、第三冊、第五冊には丁の一部分のみの裏打が施されている。前述の第五冊末最終(三十七)丁裏が切り取られ別装となったのはこの改装後であるので、遅くとも寛保二年以前の改装である。

d 綴じ方 袋綴。現状は五ヶ所に綴じ穴をあけて綴じてある(第五冊最終丁裏にもある)が、糸の取れた第三冊、第五冊をみると、五ミリ程背寄りに、四つ目綴の跡と思われる穴がある。その綴じ穴の最上段と最下段は一部切り取られているので前述の改装時の切りそろえは一センチ以上であったと思われる。

e 表紙 表紙には四つ目綴の跡がなく改装時のものと思われる。柿色。題簽は左端にあり、それぞれ「聖徳太子伝 一」(同) 二」「(同) 三」「(同) 四」「(同) 五」とある。

f 丁数 第一冊 三十六丁 (目録五丁を含む。目録最終丁の裏は白紙。)  
第二冊 四十七丁 (十七丁は表が五行で終っており裏は白紙。)

第三冊 四十四丁  
第四冊 四十四丁  
(最終丁は裏が白紙であろうと思われるが、現在は裏

表紙に貼ってある。)

第五冊 三十七丁

(最終丁裏は別装となり現在は裏打紙がみえている。)  
いずれも遊紙はない。

g 目録 第一冊はじめに総目録をあげる。目録は太子の年令とそこに収められた説話・記事の題目を挙げる。それぞれの題目のはじめに朱の合点を記す他、人名等にも同じ朱の合点を施した部分もある。目録も翻刻したが、目録に示された題目と本文中の合点との関係は、以下の表のようである。

太子年令		説話題目	冊	丁
一歳	御受胎辛卯正月一日 御本地救世観音垂迹 (達磨大師対面思禅師夏)	a 内は、本文中で合点は記されているけれども、段落がくぎられず行の途中から始められているもの。 b 内は、本文中では合点が記されず、説話として独立していないもの。	一	六一オ 八一ウ 九一オ 十一ウ 十二一ウ 十三一ウ
二歳	南無仏御舍利夏			
三歳	桃花与松葉之御問答			
四歳	兄才御遊 (天下孝々之初)			

五歲	敏達天皇崩御 學文書御手習之初	十五一ウ	四天王寺建立 △六角堂建立并御守本尊▽	四十二一ウ
六歲	經論御披見 前身御物語	十七一ウ 十八一ウ 十八一ウ 十九一ウ	自百濟國律師惠聰來期并佛舍利、寺工、鑪盤工、 瓦工、画師、呪師渡附神下、若木卿、馬台前、 扶桑卿之沙	四十三一ウ 四十四一ウ
七歲	自去年之經論披見畢 (正五九月十六日) (六齋日) (二季彼岸夏)	二十一オ 二十一オ 二十一オ	崇峻天皇非命相事 日本卅三个国成六十六个国給夏 自百濟國 <small>善心</small> 善藏比丘尼來朝	一一オ 二一オ 五一オ
八歲	自新羅國釈迦三尊渡	二十一一オ	十一月十五日御元服事	五一ウ
九歲	天照大神三面之御鏡夏 熒惑星事土師連八嶋奏聞敏達天皇事	二十四一ウ 二十六一オ	崇峻天皇為順新羅百濟任那國軍兵二万六千余騎被 遺事	九一オ
十歲	東夷日本乱入太子以神变御对治事	二十八一オ	真駒奉煞崇峻天皇夏	十一一ウ
十一歲	御兄并一門王子卿上等卅六人弓石詩歌、管絃、 文藝、相撲等教給	一一オ	推古天皇即位 (皇太子為儲君給)	十六一オ 十八一ウ
十二歲	自高麗日羅上人將來	五一オ	四天王寺再興	二十二一オ
十三歲	自高麗國石像弥勒將來 △豊浦寺建立事▽	八一オ 八一オ	光慈菩薩經讀喚并、教之寺塔發起夏 土佐南海光木夏并、吉野比曾寺事	二十二一ウ 二十三一ウ
十四歲	守屋勝海連堯向興啟寺 (善光寺如来御事)	十一ウ	惠聰 兩法師結夏開夏勤行初執行 对惠慈法師法華經落字夏	二十四一ウ 二十五一オ
十五歲	御父用明天皇即位	十五一ウ	法興寺造了 <small>御願</small> 御母	二十六一オ
十六歲	用明天皇崩御 (守屋御对治) △用明天皇御葬 御行▽	十八一オ 十九一オ 四十一ウ	百濟國阿佐太子來朝同歸唐事 芹摘后御事 馬駒事并日本國飛行諸神御問答夏	二十七一ウ 三十一一ウ 三十七一オ

聖德太子伝

	三	四	五
廿八歳	四十三ウ	一ウ	十八ウ
大地振夏	一ウ	平京開給事	二十一ウ
(新羅国自猷孔雀鳥夏)			
廿九歳	三一ウ	太子妙説夏	二十四ウ
攻新羅事	三一ウ	自高麗金送渡事	二十四ウ
上宮太子申夏	四ウ	遷班鳩宮給夏	二十四ウ
卅歳	四ウ	大和國中令付大道給事	二十五ウ
法隆寺三尊堂事	四ウ	望椎坂北給事	二十六ウ
令任那救夏	五ウ	丈六二區奉居元興寺事	二十七ウ
曲河老翁事	五ウ	於橋寺勝鬘經講説并天花事	二十七ウ
卅一歳	五ウ	遣唐使事	三十一ウ
攻新羅事	八ウ	諸国井提事	三十五ウ
自百濟曆本、天文地理渡夏	八ウ	妹子臣婦朝事	三十六ウ
如來信州下向事	九ウ	隋朝使入京事	三十六ウ
卅二歳	十一ウ	法華經御夢取來事	三十八ウ
米目王子依灵国調伏於筑紫葬給事	十一ウ	製勝鬘經疏給事	四十ウ
製五行位給夏	十二ウ	於四天王寺七日夜念仏事	四十ウ
卅三歳	十二ウ	(同善光寺如來御状并御返事)	四十一ウ
近江国長命寺觀音事	十二ウ	自高麗 <small>發微</small> 法定二口僧來朝	四十二ウ
撰津国仲山寺夏	十二ウ	黑駒蹈太子御脚事	四十二ウ
大和檢限寺 <small>欽明天皇御善提所</small>	十二ウ	製勝鬘經疏給	四十二ウ
仏法肩白馬來漢土事	十三ウ	天皇御狩事	一一ウ
卅三歳	十三ウ	維摩經御講釈	一一ウ
製憲法十七个条給	十七ウ	自百濟国化來人事	二ウ
改朝礼事	十七ウ		
楓林御夢事	十九ウ		
西師夏	十九ウ		

百濟国俗人来朝

四十二歳 諸国令堀井堤事

大道修治夏

科長御基造夏

飢人事

四十三歳 梵網経将来

犬喰煞鹿夏

千人出家夏

椎坂山神舞事

四十四歳 製法華経疏

惠慈法師帰国

四十五歳 御具足共寺々施入

天皇御惱事

新羅国薬師如来奉渡

四十六歳 勝鬘経講説夏

奈良西京未来記事

四十七歳 海表国興軍事

膳姫俱前身御物語

婆羅門僧事

科長墓所御出事

四十八歳 畿内巡見夏

蒲生河異形物夏

諸国池水成血色

聖徳太子伝

二一〇

三一〇

四一〇

四一ウ

五一〇

八一〇

八一〇

九一ウ

十一〇

十一ウ

十一一〇

十二一ウ

十二一ウ

十三一ウ

十五一〇

十五一ウ

十六一ウ

十七一〇

十七一ウ

十九一〇

十九一ウ

二十一〇

二十一ウ

山崎寶寺夏

縫一万段装事

科長御廟巡見事

津国宰献異形物

千余种菜夏

四十九歳 桃花宴事

天下臨幸夏

天変事

御最後奉拝

御蘇生事

五十歳 間人皇后奉別事

五十一歳 二月廿一日夜半御遷化

二一一一〇

二一一一ウ

二二一一ウ

二二二一ウ

二三三〇

二五一一〇

二五一一ウ

二六一一ウ

二七一一〇

二八一一〇

二九一一〇

三一一一ウ

本文中の各年令毎の冒頭説話には合点はなく、太子の年令の上に朱丸印を捺す。これも合点と同様に扱った。また、太子三十歳の条の説話(記事)のうち、「画師夏」と「遷都之事」とは目録と本文中とでは配列が逆になっている。

h 内題 第一冊の巻頭(六丁表)および第二冊の一丁表の最初に

「聖徳太子傳曆 平氏撰」とある他は、第三、四、五冊いず

れにも内題、尾題はない。

i 本文 本文は準漢文体表記。文中に割注を施すほか、長文の引

用、私注をやゝ小字で記す。多くの場合一段下げとなってい

る。小字の引用文には書き下し文体表記もみられる。これらのすべての部分に対して、訓点、振り仮名、捨て仮名等が施され、まゝ行間に傍注が附され、音読熟字には中央に、訓読熟字には左端に——線が施されるところもある。

また朱筆で、前述目録部分の他、本文中にも合点、朱丸印、読点が施されている。第三冊三十五丁表・裏の破損部分が朱筆で本文を書き入れてあるほか、第五冊十五丁裏から十七丁表にかけて朱筆の頭注と漢数字を伴った合点が入れている。

第四冊十一丁表及び十六丁裏は本文の一部が切り取られ、第三冊二十七丁裏、二十八丁表は本文に影響のない範囲で下の方が切り取られている。第二冊三十一丁表に附箋があるほか、本文中に貼紙による補訂がまゝある。

j

筆跡 本文は二筆。第一冊、第三冊、第四冊、第五冊の全体と、第二冊の一丁から十七丁表、三十八丁表から最終丁までの第一筆。第二冊の十八丁表から三十七丁裏が第二筆である。この第二筆部分は文体等にも違いがみられ、より文保本太子伝に近い内容であり、すぐ前の十七丁が表五行目まで書かれただけで以下が白紙となっている点から考えて、親本に太子十六歳の条(守屋合戦)が欠落していて別本から補入したものと思われる。

第一筆は、第一冊の目録及び第五冊末の奥書きとも同筆である。

り、奥書きにある「筆者沙弥元泰誌之」の元泰の手であると思われる。

訓点等には、本文と同筆で、朱筆以前のものとそれ以後のものがある他、少なくとも二種類の補筆があるようである。それらのうち、うすく書き入れたものが最も後のものである。

朱筆は、書き入れ、頭注、漢数字を伴った合点やまゝうすく、後の補入であろうと思われる、他の朱丸印、合点、読点とは別筆である。

各冊末および別装となっている第五冊末三十七丁裏に記された松平下総守広長の寄進文は、これらのいずれとも別筆である。

k

用字 漢字には異体字、俗体字、略字が多く用いられている。そのうち目録にみられものを例にとると、

御(御)	垂(垂)	支(事)	栴(桃)
荅(答)	才(弟)	关(癸)	遊(遊)
經(經)	土(土)	惑(惑)	夷(夷)
對(對)	并(并)	卿(卿)	等(等)
弓(弓)	木(等)	麗(麗)	勒(勒)
来(来)	奥(奥)	律(律)	畫(畫)
乘(桑)	汰(汰)	尼(尼)	直(直)
斂(斂)	再(再)	發(發)	佐(佐)

吳(異) 殿(殿) 觀(觀) 津(津)  
 条(條) 夢(夢) 遷(遷) 說(說)  
 區(區) 賜(鬻) 講(講) 取(取)  
 蹈(蹈) 傍(修) 梵(梵) 致(致)  
 舞(舞) 足(是) 仁(々) 施(施)  
 惱(惱) 姬(姬) 所(所) 寶(寶)  
 宴(宴) 扶(拜) 蕓(蘇) [出例順]

等である。

また片仮名では、「コト」に「ト」「シテ」に「ノ」、「タテ  
 マツル」に「上ル」、「タマフ」に「玉フ」、「トモ」に「尼」、  
 「ネ」に「子」があてられている。

## 二、凡例

翻刻にあつては以下の方針に従った。

- a 改丁、改行は原態通りとした。
- b 割り注は活字を小さくし、一段下げの引用については本文と同じ  
 大きさの活字で組み、その丁がすべて一段下げで組まれている場  
 合には\*印を第一行上に与えた。
- c 本文に書き入れられたものうち、あきらかに後の補入と思われる  
 の振り仮名と、朱で入れられた熟字を示す線及び読点はこれを省  
 いた。

d その他の朱筆については、合点、朱丸印を除き□で囲み右肩に朱  
 として示した。

e 漢字は原則として正字体を用いた。当用漢字も略字とみなして正  
 字体に改めた。(正字体、俗字体等の判断は、大修館書店『大漢  
 和辞典』縮刷版第五刷に拠った。)

別字として採り挙げたものには以下のものがある。

夏↓事、才↓弟あるいは第、木↓等、煞↓殺、余↓餘、万↓萬、  
 所↓所、飯↓歸、弁↓辯、辨あるいは辯

また、本来別字であるが、書写者の書きくせから別字と判断すべ  
 きではないとしたものには、以下のものがある。

釈↓釈(釋)、状↓汰、个↓个(ヶ)、尾↓尾、牙↓牙(互)、頁  
 ↓頁、改↓改、番↓番(ただし、一例のみは番とする。)

正しく表記されていないが、意味の上から判断して別字としたも  
 のに、

己、巳、巳がある。

f 本文に入れられた訂正には右あるいは左に記号を与えたもの  
 と、斜線で消したものの、ぬりつぶしたものがあり、右あるいは左、  
 下などに訂正した文字がある。証正した文字はその位置に小  
 さく示し、訂正された文字は左に、記号を与えて示した。ただ  
 し、前述『大漢和辞典』に載せられていない誤字と思われるもの  
 の、また重ね書き、ぬりつぶしなどでもとの文字が判読できない

ものは□とした。

g 補入は。印を与えて右あるいは左に書かれている。書かれていた位置に小さく記した。

h 重ね書きされている部分の上に書かれたと思われるものを本文に採用し、下のものが判読しうる場合には右に○に入れ小さく示した。

i 附箋あるいは貼紙に記された文字は□で囲んで、それぞれ、附、貼と右肩に示した。

j 傍書された注記はその書き始めの高さを原態通りとし小さい活字で組んだ。

なお、翻刻は、第一冊、第二冊、第三冊を渡辺が、第四冊、第五冊を小島が担当し、問題点を検討し、整理統一したものである。

聖德太子伝 一

(一才)

太子傳目錄

太子<sub>辰</sub>御受胎辛卯正月一日 御本地救世觀音垂迹

達磨大師對面思禪師<sub>支</sub>

二歲<sub>癸巳</sub>南無佛御舍利<sub>支</sub>

三歲<sub>甲午</sub>桃花年與松葉之御問答

四歲<sub>乙未</sub>兄才御遊 天下孝々之初

五歲<sub>丙申</sub>敏達天皇御崩御 學文書御手習之初

六歲<sub>丁酉</sub>經論御披見 前身之御物語

七歲<sub>戊戌</sub>自去年之經論披見畢 正五九月十六日

(一ウ)

六齋日 二季彼岸夏

八歲<sub>己亥</sub>自新羅國釋迦三尊渡

天照大神三面之御鏡<sub>支</sub>

九歲<sub>庚子</sub>災惑星事土師連八嶋奏聞敏達天皇事

十歲<sub>辛丑</sub>東夷日本亂入太子以神變御對治事

十一歲<sub>壬寅</sub>寅御兄才并一門王子卿上等卅六人弓石詩歌

管絃文藝相模木教給

十二歲<sub>癸卯</sub>自高麗日羅上人將來

十三歲<sub>甲辰</sub>自高麗國石像彌勒將來 豐浦寺建立事

(二才)

十四歲乙守屋勝海連發向興嚴寺 善光寺如來御事

十五歲丙御父用明天皇即位

十六歲丁用明天皇崩御 守屋御對治 用明天皇御葬

四天王寺建立 六角堂建立并御守本尊

自百濟國律師惠聰來朝并佛舍利寺工鑪盤師瓦工

畫師呪師渡附神下若木卿馬臺前扶桑卿之汰

十七歲戊崇峻天皇非命相事

十八歲己日十卅三个國成六十六個個國給夏

十九歲庚自百濟國善心比丘尼來朝 十一月十五日御元服事  
善藏

(二ウ)

廿歲辛亥崇峻天皇爲順新羅百濟任那國軍兵二万六千余騎

被遣事

廿一歲壬子直駒奉煞崇峻天皇夏

廿二歲癸丑推古天皇即位 皇太子爲儲君給 四天王寺再興

廿三歲甲寅光啓菩薩經讚嘆并數之寺塔發起夏

廿四歲卯乙土佐南海光木夏并吉野比曾寺事

惠慈 兩法師結夏開夏勒行初執行  
惠聰

廿五歲丙辰對惠慈法師法華經落字夏 法興寺造了御母  
ナリ

廿六歲丁巳百濟國阿佐太子來朝同歸唐事

(三才)

廿七歲戊午摘后御事 黑駒事并日本國飛行諸神

御問答支 新羅國自獻孔雀鳥支

廿八歲己未大地振支 自百濟國貢駱駝羊白雉事

廿九歲庚申攻新羅事

卅歲辛酉上宮太子申支 法隆寺三尊堂事

令任那救支 曲河老翁事

卅一歲壬戌攻新羅事 自百濟曆本天文地理渡支  
通甲方術書

如來信州下向事 嚴嶋大明神支

卅二歲癸亥米目王子依異國調伏於筑紫露給事

(三才)

製五行位給支 近江國長命寺觀音事

同國觀音寺御建立 攝津。仲山寺支

大和檜隈寺欽明天皇御菩提所 佛法眞白馬來漢土事

卅三歲甲子 製憲法十七個條給 改朝禮事

楓林御夢事 畫師支 遷都之事 平京開給事

卅四歲乙丑太子妙說支 自高麗金送渡事 遷班鳩宮給事

大和國中令付大道給事

卅五歲丙寅望推坂北給事 丈六二區奉居元興寺事

於橋寺。勝 覽經講說并天花事

(四才)

卅六歲丁酉唐使事 諸國井堤事

卅七歲戊辰妹子巨歸朝事 隋朝使入京事

法華經御夢取來事

卅八歲己巳製勝鬘經疏給事 於四天王寺七日夜念佛事

同善光寺如來御狀并御返事

卅九歲庚午自高麗發微二口僧來朝 黑駒陷太子御腳事  
法定

四十歲辛未製勝鬘經疏給 天皇御符事

四十一歲壬申維摩經御講釋 自百濟國化來人事

百濟國伶人來朝

(四ウ)

四十二歲癸酉諸國令堀井堤事 大道修治夏 科長御基造夏

飢人事

四十三歲甲戌梵網經將來 犬喰煞鹿夏 千人出家夏

椎坂山神舞事

四十四歲乙亥製法華經疏 惠慈法師歸國

四十五歲丙子御具足共寺々施入 天皇御惱事

新羅國藥師如來奉渡

四十六歲丁丑勝鬘經講說夏 奈良西京未來記事

四十七歲戊寅海表國興軍事 膳姫俱前身御物語

(五才)

波羅門僧事 科長基所御出事

四十八歲己卯內巡見支 蒲生河異形物支

諸國池水成血色 山崎寶寺支 縫一万袈裟事

科長御廟巡見事 津國宰獻異形物 千余種藥支

四十九歲庚辰桃花宴事 天下臨幸支 天變事

御最後奉拜 御蘇生事

五十歲辛巳間人皇后奉別事

五十一歲壬午二月廿一日夜半御遷化

(五ウ)

白紙

(六才)

聖慮太子傳曆

平氏撰

欽明天皇諱 天國押開廣庭 磯城嶋金判宮 治卅二年

抑太子御母金判宮治卅一年庚春二月第四皇子橋豐

日尊納庶妹 間人穴太部皇女爲妃

○夫聖德太子御入胎者金判宮治卅二年卯春正月朔

子夜橋豐日尊后間人皇女御寢有處妃夢金色僧

容儀太艷 枕立吾救世願在願暫宿后腹妃問爲誰

僧答曰 吾救世菩薩也 大悲觀音御事家在西方妃答云妻腹垢

穢不淨也 何宿貴人僧曰 吾更垢穢不厭唯望勳宿人間

(六ウ)

妃不致辭讓左右隨 命僧懷權色躍入口中妃驚悟唯嘆

中猶似吞 物妃太奇 語 皇子 答云你育必得聖

人生給吾等養 御夢合有御悅紅 然妃御懷妊有日

來 慈悲智慧深重成給 故一切女人懷妊 胎內子

善惡顯 是經八个月一出 妙音其言異說 皇子并妃

太奇一說 我急出世迷 救娑婆我居本師所爲往

生然妃御產近付 歟喜給而其月去九月成 御產無經

十二月 妃心小悲給事是非無 諸人奇

然仁皇卅一代敏達天皇諱淳名倉太玉敷天皇

(七オ)

欽明天王橋豐日尊 兄王宮同大和國城上郡三輪御太子也

鄉古蒙村泊瀬河邊磯城嶋金判宮欽明天皇

第一也 敏達天皇治十四年內裏同大和國

十市郡雙槻澤田宮也

妃告皇子云去年四月廿三日欽明王磯城嶋宮崩御

成給戀慕心無便然妻有侍身以空送日月凡女人懷

妊近死期云皇子誕生無過定死道難遁娑婆思出

名殘惜宮中巡可遊皇子誠可然宮中四方莊

嚴并構冥給后喜近習之侍女采女俱臨向成給心

(七ウ)

如遊覽在既御馬屋到御座折節不覺俄太子誕

生成給女濡喜急抱取寢殿入奉后患不座宿幄內

皇悅給彼產所西方赤黃光來照囉殿內良久而止

敏達天皇猶居東宮乍聞此異命駕來臨有亦金

色光明在照曜天皇大異勅群臣曰此兒後必異世

然誕生敏達天王元年壬辰年號金光三年云正月一

日甲日時馬也故馬屋皇子馬習事多口傳

天皇命有司定大湯坐若湯坐而沐浴給太子御

身端嚴美麗御膚異香薰馥過檀沈水若湯水

(八才)

亦赤染井赤染井天皇持天皇持綾綾祿祿一番抱舉一番抱舉次授次授皇后皇后五年丙五年丙説多説多

申炊屋姫申炊屋姫尊后尊后 妃三番授父皇子此王子太子 皇子授授妃為皇后

披披懷懷抱抱給給御身太御身太 馥馥其後定其後定孀母大島部松子 傳傳十二人平氏傳

三人一近江大臣日增姫二蘇我大臣月增姫 乳母次第次第々々披披懷懷  
三妹子三妹子大臣玉照姫三人

太子抱給太子抱給 太子御身馥太子御身馥一度身觸移一度身觸移衣裳衣裳經經數月數月不不

消消三日之夕三日之夕天皇設天皇設宴賜宴賜物羣臣物羣臣七日之夕七日之夕皇后設皇后設

宴賜宴賜物後宮後宮大臣已下相次獻大臣已下相次獻饌饌稱稱之養之養產經產經四月四月

後太子能言能語後太子能言能語不妄不妄啼啞啼啞同夏四月三日磯嶋宮同夏四月三日磯嶋宮

御宮諱御宮諱淳名倉太玉敷皇淳名倉太玉敷皇 尊即位成給尊即位成給欽明天皇欽明天皇

(八ウ)

才二御子御母子才二御子御母子石姬石姬宣化天王娘宣化天王娘爰二不思議爰二不思議

太子御誕生後舉太子御誕生後舉右御手右御手更開不更開不給諸人奇特申給諸人奇特申

也但二歲時御舍利出給也但二歲時御舍利出給

夫聖德太子者夫聖德太子者救世觀音之垂迹救世觀音之垂迹佛躰佛躰而現而現三人躰三人躰

亦十善之儲亦十善之儲 君也然乃往過去君也然乃往過去号号正法明王正法明王如來如來無緣無緣

濟度之慈悲誓願濟度之慈悲誓願以以種々形種々形遊遊諸國土諸國土度度脫衆生脫衆生

然釋尊八相成道折節然釋尊八相成道折節五天竺五天竺丙西方舍衛大城丙西方舍衛大城主主

波斯匿王女宮勝鬘夫人號御母波斯匿王女宮勝鬘夫人號御母末利夫人申然末利夫人申然

勝鬘夫人阿踰闍國要照王之才勝鬘夫人阿踰闍國要照王之才一后成給一后成給此國此國往古往古

(九ウ)

自外道住、佛法不信邪法、正法思、故夫人緣天契。

深連枝情愆、佛無悲給春日之見、花芳艷心不染

秋之月出、無常觀念計、有時珠簾內、佛法記念有、釋

尊自然出現、夫人歡喜不紅、此時御說法御經勝鬘經名夫人自誓十才受

天、華雨、伎樂蒼天滿々、此依功德、勝鬘夫人變成男子

晨旦國衡州衡山至給、彼山五岳有一般若峯二柱枯

峯三惠日峯四囀融峯五柴蓋峯、靈山淨土、五岳如、爰生

他生、惣此山ニハ法華飛仙祝融四禪花殿、紫行、廿余町峯在六生、五岳第一般若

臺之南、岳惠思禪師申其時隨文帝御世當數年次

聖德太子伝、一

(九ウ)

年号大和八稔、丁南天竺自達磨大師云人來對三面思

禪師、思禪師念、達磨六時修道念禪比丘問云此山住、禪比丘曰

化度有、亦否念禪比丘答云化度無只瀧之水冷々、松吹

風音、也、達磨南天竺香至大王皇子也但此王三人儲君有、才一月成多羅才二功德多羅才三菩提達磨御事、依此

達磨和尚念禪比丘勸云是自在、東海國、其名日本云彼

佛菩薩化法無亦權化聖者化儀無故受、生衆生不

死離、空墮、在三塗、從冥入冥不達、本覺、無始訖、切已

來、無明眠、長夜、五十六億、難值、每月、嗚呼十種勝利

者現生之善緣四箇之功德者菩提指南、持小善者必

(一〇オ)

得三大利、是本誓所レ飯也、念禪答言、吾修所化行是

也、但此山廿稔有レ縁其後彼生、然、吾先立廿歲、

待三春秋、飛向レ東乘レ白雲、衡山申、下剋出、其日戌、初日

日本大和國富三小河至給平郡、然皇居登見給花

鳥風月遊、田舎下見、化論闡淨理、計悲哉、愛欲朋友

羈身貪染遊戲費、心三名聞之風前、智灯長消輕

慢之山頂、法水難住、或説、現栗毛馬平郡住給ヘリ又或、然念禪、説、他所化度依太子四十二歳出現

比丘衡山之二十年化留遷化日本來其時仁皇卅一代敏

達天治也御父橘豐日王子申、卅二代帝用、御母穴太部、明天王申

(一〇ウ)

間人皇女、金光三年、正月一日、甲、日中之馬剋誕生、

只救世觀音垂迹成、不思議一不可レ定、

○太子二歲、癸、春二月十五日於我朝無佛世界、始施見

佛聞法兩益、給、然御誕生已後既二歳御時、右御

手、不開、間上一仁、下万民至、奉、成、不思議思、折節二月

十四日夜乳母玉照姬之錦、衾、下御寢、成、其曉、丑刻云

御寢覺在告、言御乳母、良玉照姬承名、阿兒名乘、然、

阿兒天明、向、吉方、此程、演、心中思、穴賢、勿、相妨、御乳母

承、此旨、申、様定、子細有御事、在、抑君未、幼稚御座、

(一一〇)

何事心中深思食侍哉明日撰吉日日向吉方御披露

有覽事自私爭善惡之奉向三方角君經奏問依

御許申太子聞食此事帝披露觀念亂可惡思

食御詞違言實其義無汝寢入阿兒寢入覽御乳

母謙給事有難此言御濁佛法興行守屋妨給然

初祝也御經文ニモ初善中善即御乳母寢入給程無天明

太子御喜有寢起立顯雪御膚赤御袴着程十五日

寅時成御兒是ナリ御誕生之時自未開右御手舒給

合掌有白玉搥身之御舍利金色放光曜給官町灯

(一一一)

失光御舍利之光朗也太子東向高聲南無佛南無佛

三返唱此南無佛御舍利者太子先生勝鬘夫人之御時宮中之

侍女采女各驚起立玉照姬起立火何御事夜中不例獨

起立自昔未聞忌々物名呼給耶申禁太子後樣見

返大睇給夫無量億劫難聞佛御名唱奉忌々物名

呼申謗法罪痛思食角申御意睇給然此御舍

利吾朝才一寶別朝家御守昔自法隆寺々僧毎

日唱梵音伽陀一奉稱揚讚嘆福田也然生身之觀

音我朝之聖德太子顯二歲童男身現見佛聞法之兩

(一一六)

益以未代住給事優曇花自<sub>レ</sub>有難耳<sub>レ</sub>或說云不依所制七歲之後此態取番

平氏言夫我朝者國常立尊始天神地神之十二代者

經<sub>レ</sub>數千萬劫<sub>レ</sub>佛法不聞<sub>レ</sub>名字<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>神武天王<sub>レ</sub>仁王始廿九

代猶日本不<sub>レ</sub>弘<sub>レ</sub>佛法<sub>レ</sub>然如來滅後一千四<sub>五百年</sub>百<sub>異本</sub>十六年我

朝佛法渡其時帝<sub>レ</sub>人皇卅代欽明天王治天下十三年

壬<sub>中</sub>十月十三日百濟國<sub>レ</sub>金銅釋迦像一光三尊<sub>レ</sub>弥陀智

度論百卷雖<sub>レ</sub>渡佛法之諱難<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>猶加<sub>レ</sub>無佛世界生身

之觀音顯<sub>レ</sub>聖德太子<sub>レ</sub>始弘<sub>レ</sub>佛法<sub>レ</sub>抑二月十五日者<sub>一六</sub>

濟日隨一捨惡持善<sub>レ</sub>砌也<sub>二</sub>西方教主<sub>レ</sub>弥陀善逝<sub>レ</sub>御緣

(一一七)

日攝取不捨砌也<sub>三</sub>本師尺尊生死無常<sub>レ</sub>別示日須

史聞此即得究竟砌也<sub>尤</sub>天地感應日成仍<sub>レ</sub>大聖世

尊<sub>レ</sub>之開<sub>レ</sub>全身舍利<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>東方<sub>レ</sub>如何<sub>レ</sub>尋<sub>レ</sub>東方十方根源<sub>レ</sub>

萬事始成<sub>レ</sub>故昔在靈山<sub>レ</sub>教主三世諸佛出世本懷一切

衆生成佛善緣四十余年未顯<sub>レ</sub>眞實妙法折節眉

間光東萬八千世界<sub>レ</sub>放給<sub>レ</sub>故今聖德太子向<sub>レ</sub>東方<sub>レ</sub>顯<sub>レ</sub>

多生本懷<sub>レ</sub>給見佛聞法<sub>レ</sub>兩益施給<sub>レ</sub>

○太子三歲<sub>甲</sub>春三月三日桃花宴<sub>レ</sub>御祝有<sub>レ</sub>此始尋<sub>レ</sub>吾朝<sub>レ</sub>自始<sub>レ</sub>非昔晨

且國自始事也<sub>雖</sub>然此御祝<sub>レ</sub>尤天下豐饒<sub>祭國</sub>下太平壽命長<sub>遠</sub>息災安樂行<sub>是</sub>四慶之祭<sub>申</sub>歎然震旦之周成王御惱御座

(一三才)

口傳故智惠辯才成大臣在其名周公旦中彼大臣園内桃花之  
盡數持三月三日帝行幸成奉酒華浮帝王獻奉君叡感紅氣  
食周公祝之一聲戲給然酒  
百樂最頂申此時

然豐日宮之後園桃花御林有三月三日太子祝奉豐日

皇子同后侍女采女太子俱後園御行成桃花之御祝

有太子千秋萬歲喜樂祝祭給愛豐日皇子左右御手

松葉與桃花持太子近就勅問在何祝優有太子左右

御手捧取松葉哈笑皇子恠思食太子心中問其御

言抑松與桃者共祝之物申相當今日一天學桃花既何

太子色莊句妙成桃花不取松葉愛耶太子答曰花與

(一三ウ)

花時桃花祝言也松與桃花爲合言語無殊勝之明句  
詠給其句云桃者其色紅句雖妙唯一旦榮物也久友

不待松者千年滿其色不替是久友也重詠給

樣桃花一旦榮物松葉千年貞木松子傳百千云平氏  
傳千年云

父皇子叡感之余開御懷奉抱太子大成恐言阿兒

父御手奉抱登百丈之巖一如浮千尺浪太畏太危言

皇子有御感太子摩頂言汝今日之語何自染心肝

實驚叡慮難有勅定宮中還御成

○太子四歲乙未春正月御父豐日宮之内少王子逢數遊

(一四才)

給侍 此皆聖德太子之御兄才也摩呂子親王簡嶋王子番 王子小林  
王子大原王子小嶋王子雲見王子難波王子早采王子石見王子

勝負之道爭 高聲詞 戰鬪喧 音宮中聞侍問御父豐

日皇子欲奉 誠諫 珠策 中自亦御袴楚 取捧 白答 南

殿御出成御風情天氣以外惡見 給者皇子達宮中之

東西悚 逃竄 給尔時太子御衣脫捨顯 雪御膚 合掌

早雨 泣 給皇子皇女向 給 皇子太子問言汝等何兄

才不和 穩便不 成間其罪 誠 爲順向 皆既逃去處汝獨向

太子淚流言 是自上者梵釋四王諸天星宿光比善惡御

覽間橋立昇難是自下 堅牢地神冥官冥衆開眼勸善

(一四ウ)

惡 不孝者不 戴 誓給者地穿穴難隱阿兒倩 以 者父其

子打誠 給 非惡 其身令善 也 啓白座御淚咽 給 皇子皇

女御乳母奉 始御前人々面々感被 申様抑此君今年僅

四歲成給御心至難 有彼御答 御衣之上受給 可徹膚 向

給 之難 有各々淚流給 父豐日王子心中糸情 思食答置

言 願拳不當笑顏 汝岐疑非 只今日 大悅給 妃御披懷

太子抱奉 加寵愛 其身太香 非常 或說云一抱奉數月 經懷香

太子皇女啓白給様母只慈 深遠悲闕 父慈遠悲尙深

故父子教 爲以枝雖誠只子愛 云是 即佛教之印文

(一五才)

然皇子王女驚<sub>レ</sub>歡慮<sub>ニ</sub>大稱美<sub>ニ</sub>

平氏言太子御出世無以前者我朝雖<sub>ニ</sub>神國申<sub>ニ</sub>切初以來

衆生更<sub>レ</sub>父母深恩思不<sub>レ</sub>知其振舞案<sub>ニ</sub>畜類不<sub>レ</sub>異<sub>ニ</sub>

凡孝養父母之善根万行万善根本實<sub>ニ</sub>父悲母慈<sub>ニ</sub>父

母之慈悲諭<sub>ニ</sub>佛菩薩之慈悲同但母一筋子慈思

入<sub>レ</sub>惡<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>惡稱<sub>ニ</sub>愛<sub>ニ</sub>子父慈雖<sub>ニ</sub>遠<sub>ニ</sub>悲猶深<sub>ニ</sub>故孝經父

母至親<sub>ニ</sub>而不<sub>レ</sub>尊君至尊<sub>ニ</sub>而不<sub>レ</sub>親唯父<sub>ニ</sub>衆<sub>ニ</sub>尊親義<sub>ニ</sub>父

母恩德尤難<sub>レ</sub>報故孝順者父母諸天者守護現世者

安<sub>ニ</sub>佛前<sub>ニ</sub>後世者佛前耳<sub>ニ</sub>

(一五ウ)

○太子五歲<sub>丙</sub>春三月敏達天皇豐御坎<sub>食</sub>屋姬尊皇后

祝奉其日大臣公卿參<sub>内</sub>大裏大和國十市郡雙槻澤

田宮天下無雙之皇居也諸卿參<sub>内</sub>南庭<sub>ニ</sub>向<sub>ニ</sub>后宮<sub>ニ</sub>一面立

連奉拜時太子宫中忍立出給始御足大地下獨庭上

御行<sub>ニ</sub>向<sub>ニ</sub>后宮<sub>ニ</sub>再奉拜給起伏儀<sub>ニ</sub>誠如<sub>ニ</sub>成人<sub>ニ</sub>貴賤之驚<sub>レ</sub>目天

皇皇后太加<sub>ニ</sub>寵異<sub>ニ</sub>寵異衆人<sub>ニ</sub>然太子御乳母達<sub>ニ</sub>大驚<sub>ニ</sub>火

何成御事共哉日月落<sub>ニ</sub>大地<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>淺猿<sub>ニ</sub>御事也庭上走出

太子奉<sub>レ</sub>抱奉<sub>レ</sub>入<sub>ニ</sub>宮中<sub>ニ</sub>各御前侍歎<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申<sub>ニ</sub>樣抑太平太

子備<sub>ニ</sub>十善御位<sub>ニ</sub>四海主<sub>ニ</sub>一天儲君<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>成<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>然自昔已來我

(一六オ)

朝風儀可備ニ 王位ニ王子御足大地下給事不レ可有今日痛

御足大地下給問爭御位可ニ就給 各被ニ歎申ニ太子蜜語

御乳母ニ抑 阿兒深心無ニ左右ニ爭可レ知阿兒依ニ利生志深ニ

假生ニ此國王宮ニ先生月氏生震旦生物六欲四禪王位備

已過今日域小國王位更無望人間有位之榮果夢

中如樂阿兒利生爲雖ニ王宮生來今年五廻春秋送然

當帝之御命十個年限 崩御可レ成其後父皇子續レ位

僅二年可レ成其後阿兒伯父子崇峻天王相續給 五个

年内可ニ崩御成 然阿兒廿一歲之内奉レ別ニ三代君ニ其後

(一六ウ)

后宮卅四代女帝御門可ニ被レ祝給 諱號推古天皇 賢王也  
御治卅六

阿兒其時彼王成ニ儲君ニ始 關ニ白殿下ニ日本國任レ意進退

任ニ多生ノ之本懷ニ建ニ立堂塔 佛像經卷弘ニ四方ニ濟ニ渡吾朝

衆生ニ令レ詣ニ西方木師之臺ニ思ニ後代ニ今日臣下先立勤ニ奉

○奉之儀式相構 此由不レ可レ知人ニ御乳母達此由承大

驚被レ申 吾君神明之玉躰 御座加樣委未來事知食

給事難 有不思議成申給

平氏言誠此未來記之御詞一無 違太子十五歲秋

暮 御伯父敏達天皇崩御成給其後用明天王備レ位

(一七〇)

內裏大和國十市郡竝槻村建內裏二號三豐日宮二僅二

年十箇月不<sub>レ</sub>足崩御成<sub>ニ</sub>其後太子十六歲御伯父子

崇峻天皇續<sub>レ</sub>位內裏同大和國倉橋山之定也故倉橋

宮中御治世五箇年之內崩御成給實太子廿一歲

之內三代帝盡給太子五歲之未來記明<sub>ニ</sub>其

後太子廿二歲推古天皇續<sub>レ</sub>位口傳欽明天皇之女即位<sub>ニ</sub>敏達天皇之后也

同大和國高市遠明香南宮也然太子此時備<sub>ニ</sub>皇太

子之位<sub>ニ</sub>二天四海握<sub>レ</sub>掌弘<sub>ニ</sub>三行佛法<sub>ニ</sub>間五歲未來記之

詞寸分不<sub>レ</sub>違難<sub>ニ</sub>有御事也推古天皇御治世卅六年<sub>ニ</sub>

(一七〇)

同太子五歲秋八月一日妳母示曰阿兒欲<sub>ニ</sub>學<sub>ニ</sub>文書<sub>ニ</sub>欲<sub>ニ</sub>

手習<sub>ニ</sub>墨筆紙奉<sub>レ</sub>言<sub>ニ</sub>御乳母難<sub>ニ</sub>心得<sub>ニ</sub>侍<sub>ニ</sub>申太子重

勅有樣良汝達未<sub>レ</sub>知筆山野之獸毛集捲<sub>ニ</sub>筆名古今

千年松煙取墨名心中思事白紙面書注<sub>ニ</sub>言給<sub>ニ</sub>乳母

奉<sub>レ</sub>奏<sub>ニ</sub>皇子<sub>ニ</sub>其折節震旦百濟國博士學呵云者來

皇子彼學呵博士召<sub>レ</sub>此由勅有太子外典之師匠成給<sub>ニ</sub>

後五德之博士申太子問<sub>ニ</sub>一字<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>千字<sub>ニ</sub>悟<sub>ニ</sub>給亦每日數

千字書學給<sub>ニ</sub>經<sub>ニ</sub>三年<sub>ニ</sub>流<sub>レ</sub>筆如<sub>レ</sub>電光<sub>ニ</sub>時人大奉<sub>レ</sub>感後

生可<sub>レ</sub>畏難<sub>ニ</sub>有子細也

(一八才)

○太子六歲丁酉冬十月自百濟國經論二百余卷五十卷云

并律師禪師比丘々々尼始將來是者去年丙夏比

學阿博士之依意顯被遣大別臣問今丁酉十月經論

并比丘々々尼等共歸朝有此由自百濟國奉奏以

レ狀云其狀云此狀別傳也

龔敬送渡處之經論并僧尼者於華梵尤尊者之

甚重也然今日域片州之奉獻帝尤可奉崇

其二八之大國五百之中國者諸佛出世之其數甚

雖多釋迦牟尼佛一代教主爲獨尊梵緣五十

(一八ウ)

余會也其法數者雖八万法藏一乘尤難有故

獻二百余卷才一其名號法華一卷之數者七卷品之

數者廿八品文字之數者六萬九千三百八十余字也

功德亦如文耳仍可隨喜恭敬

進上 日本御門 自百濟國敬白

太子待天皇床下奏曰阿兒情欲奉見將來經論天

皇驚歎慮太子問言此經論申者昔未日本無者也

何時披見申哉太子勅答申給樣者阿兒昔衡劬

衡山歷數十身修行佛道習學侍是阿兒前身之

(一九七)

事也夫佛法之大意申者一切衆生一念心說顯給彼一

念心者方法之一心也方法一心者非有非無性相常念

躰也然一心即三身三身即一心三世諸佛通達爲故

諸惡莫作諸善奉行也是一代正教之肝心也言給

君臣打手鳴舌大稱美申給

平氏云太子六歲先生御物語如二明鏡一是鳥窠和尚白

樂天問答古老人云鳥窠和尚然震旦國白樂天云風月之

達者在即外典之奧義極文士也日本詩作法事アリ

有時帝潯陽云處流人間無常觀折節其近所鳥

(一九八)

窠和尚一个無心人在斷言語坐禪事四十年也亦

上高木卅年人不至僧有白樂天聞即行即

問云如何是佛法大意僧答云諸惡莫作衆善奉

奉行白樂天亦問云是三歲孩兒得其二三歲小兒云鳥窠重云通知雖三十八老

翁不知不知弁云仍白樂天赤面不開口問訊歸云

然間天皇經論被見許奉給太子喜每日燒香散

花在開春白給明年之春一遍畢同七歲之時御

說法月之六齋日二季彼岸御披露云

○太子七歲戊去年之百濟國經論披見在春二月天

(二〇オ)

王并百官亦百濟國、律師禪師比丘々々尼等中、說ニ彼

經論之大意、令ニ聽聞ニ給、皆隨喜渴仰、成給、然日別懈

怠無令、講給者既、冬月至一遍畢、此年太子奏ニ皇帝、

言、佛教恩德難、有此三覆八交、一月六正年巳二生云

三覆八交、正五九月之十六日事也、  
一月六正、六齋日年巳二生、二季彼岸也、每月之六齋日二八月、

彼岸申者捨惡持善日也、然梵王帝釋四大天王諸

天聖衆堅牢地神炎魔十王、悟道之冥官司命司錄

俱生神等悉來臨影向在、普天率土之一切衆生、普惡

之被記侍也、此日願者殺生、令ニ禁制ニ御坐、阿兒佛教讀

(二〇ウ)

依其旨微妙也、皇帝言、僅六齋記、太子言、六齋

日、申月之八日十四日十五日廿三日廿九日晦日也、白月三日、梵

天帝釋四大王衆下、善惡注給、黑月三日、梵釋太子

大臣巳下之天衆并炎魔諸王堅牢地神部類從屬

來臨、善惡之二報走給、當此日、煞生禁制可有煞生禁

制、事是仁之基也、仁與聖其心近故、孔子設ニ五常化ニ

衆生、五常、仁義、如來說ニ五戒、教ニ群生、姪妾語飲酒戒是也

此日行惡現、當天命之罰、必子孫絶可後者、三塗得苦

四惡輪廻冥々、君慈悲孝恩志、身中諸願成就富貴

(一一六)

充滿之備、德後、如意生、淨土、太子說、天皇、大御感在、

大臣耳目驚、來朝、僧尼渴仰之行、禮拜、依、皇帝勅、

大臣、國々、町々、難、制戒之宣旨、下給、此時、自我朝、修善、

之功、德始、

平氏言、太子生年七歲之御言、世及、末法、不可、朽、恐、可、

恐、善惡因果、理、若不、弁、黑白、從、冥、迷、冥、自、苦、沈、苦、

誠、太子、之、御、利、生、無、量、億、劫、難、報、凡、我、朝、日、域、受、

生、人、倫、出、家、在、家、男、女、各、別、申、誰、可、不、蒙、太子、慈、

悲、之、大、恩、凡、御、恩、深、譬、從、一、入、再、入、紅、色、深、德、尊、譬、

(一一七)

從、三、千、顆、万、顆、之、玉、潔、可、尊、々、々、此、時、制、戒、

○太子八歲、己、多、十、月、自、新、羅、國、或說勅使、弘、賀、榮、賢、申、二、人、臣、ナリト、獻、送、佛、

像、太子奏曰、是、西、天、之、聖、人、釋、迦、文、佛、靈、像、也、末、世、尊、之、

銷、禍、蒙、福、慶、之、招、災、縮、命、阿、兒、依、讀、佛、經、其、義、微、妙、

也、望、可、奉、崇、天、皇、大、悅、奉、安、置、供、養、今、興、福、寺、東、金、堂、在、釋、迦、像、是、ナリ、

又有記云、敏達天皇八年、己、多、十、月、新、羅、國、悉、達、太、子、之、

佛、像、獻、送、此、由、以、狀、奉、奏、勅、使、弘、賀、榮、賢、云、臣、下、其、狀、云、

謹、東、海、日、域、片、州、奉、渡、釋、迦、文、佛、三、尊、觀、音、與、虛、空、

夫、彼、佛、像、之、因、位、尋、三、月、支、中、天、竺、迦、毘、羅、衛、國、淨、飯、大、

(二二才)

王之太子摩耶夫人所生也、申本來久成如來也、以從

果向因、利生、世々番々出世、唱從因至果之正覺、雖爲

利、苦海衆生、還入三六趣之古郷、忝隱本地清涼之月、漸

交、分段生死之闇、出法性眞如之城、同忘想顛倒之塵、

示、誕生於蘭毘尼園、唱正覺於菩提樹下、實一代能

一化四生之慈父也、儲權實於教門、施冥顯於利益、隨

緣應同之利生已、盡雙林入滅、時臨告人天衆、以後

群生爲渡生身、一傳所奉、移新佛之像是也、然天竺

震旦、利益歲久而今住、東土利生佛意、所奉渡也、仍

(二二ウ)

國王大臣可奉至信敬、耳、

進上日本御門

自新羅國

內裏大和國十市郡雙槻澤田宮也、然天皇是人形齊、

思食百官召集此事何、尋給物部守屋中臣勝海連、

士等進出異儀被、申樣抑吾朝神明之造、始給國成、故

神國名皆神御氏子也、然一天風和四海浪靜、也是他國之

人形也、此奉崇國土禁忌也、風聞西天習、主君父母兄才

夫妻離、必男女形作由承也、是非吾國之神祇、亦非親君、

昔敵國人形成、今更不可崇敬有、就中吾先祖尾越

異

(二三オ)

大連時欽明聖代加々留浮人形自三百濟國送渡一度

見之神御答在七年目氣侍也先祖自見物惡人形今

更不可見申爰蘇我大臣妹子臣等奏言異國之於

人形天皇貴言給吾々奉隨勅命禍福只可奉任天

之運君言於指何獨致異論申哉此時守屋勝海共大

怒太師御前退出給是哉守屋惡逆始成太子大臣等

言守屋勝海連等佛法之由來不知哀也定運不久

此時太子言樣彼大聖釋迦像者由來久御事也其因位

果後之功德申昔久遠如來也今淨飯王宮誕生示七

(二三ウ)

歲發心十九出家卅成道十善万乘之獸位三界之獨

尊仰人天大師尊說法僅五十余年御年八十春比

終涅槃思食滅後之衆生其爲御身金銅之聖容移

奉程無雙林之煙上給菩薩聲聞人中天上申不及

五十二類者戀慕淚咽然以來此尊像禮歸依渴仰奉

然雖下天竺留正身一千余歲衆生利益給他土之結緣

無故震旦新羅渡四百余歲之廻星霜國王大臣雖奉

信敬今吾朝出來給是三千界第一靈像也阿兒先生

於衡山奉峯多生尊一故此理明也然吾朝神明之

(二四オ)

御國、神祇之利生貴、事往古自之習也、彼神明之御本

地、此佛菩薩、垂迹也、譬神明與ニ佛陀、如、水與、冰、如、影形、

言給、君臣一心信敬成奉、彼佛像與ニ太子、人佛不二尊、給

平氏言其後、彼佛像、大和國建、伽藍、號ニ元興寺、彼三尊、

安置供養奉然、太子御入滅、後四十余歲、比人王卅九代

天智天皇、御時、大織冠、敵男、談海公、興福寺、氏寺被

建時、本、元興寺、彼釋迦、三尊、奉、迎、今、東金堂之正面、

本尊、丈六、金銅、藥師如來、之御前、立被、奉、居、彼釋尊、

訖、宣在云、吾佛法、東漸、之願力、依、粟生邊土、之此國來、

(二四ウ)

何、西方奉、向、早、東方奉、向、託宣有、依、之、今、興福寺、之

東金堂、後門、東向、居奉、此義也、然、西方之、彌陀如來、

極樂、東門、打開、東向給、故、朝衆生、西方向、歸念、云云

然、釋尊、正、躰、金銅、移留、末代、之衆生、利益、御、坐、日域

神國、其例有、歟、可、秘、口傳、故、太子、凡、聖、之、化儀

不、可、變、別、口傳、

抑、我、朝、開闢、之、始、天照大神、御、本地、之、事、夫、忝、大神宮

於、高、天原、我、本地、顯、末代、之、欲、知、氏子、神明、自、三面、之、銅

鏡、用意、在、本地、之、貞、移留、給、神熊、申、思、食、樣、御、本地

(二五オ)

不<sub>レ</sub>移<sub>レ</sub>問<sub>一</sub>番顯給御正躰之御鏡、紀伊國吉野河奉<sub>ニ</sub>投<sub>レ</sub>

入<sub>レ</sub>給<sub>、</sub>然紀湊、流給海人懸網奉<sub>ニ</sub>引<sub>上</sub>今<sub>、</sub>日懸解懸之

御宮是也、或說日前解前、又第二番御鏡、如<sub>ニ</sub>御意<sub>、</sub>移<sub>レ</sub>顯

不<sub>レ</sub>給伊勢海奉<sub>、</sub>捨今伊勢之内宮外宮之鏡、宮是也

伊勢嶋ヤシヲノミチヒニ顯テミセシカ、ミノカケナハスレソ實天照大

神之御正躰第三番御鏡移、百王一百代之御重寶、

内裏之溫明殿安置有好侍所之御鏡是也、可<sub>レ</sub>秘<sub>ミ</sub>

親子不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>傳、然天照大神之御本地、内侍所御鏡之面移

顯給眞實御正躰、聖德太子之御本地救世觀音御躰

(二五ウ)

也天竺震旦之釋尊御躰、日本神靈之鏡、御躰聖德

太子御躰本地垂迹難<sub>レ</sub>有<sub>ミ</sub>

古老人云彼釋迦像今至有難、其由來尋、人皇八十

代高倉宮治十二年治承四年之多比依平家惡逆

南都東大興福兩寺始、諸堂諸院燒給、瑜伽唯識之

法門悉皆燒失、同金銅十六丈、盧舍那佛始、數千

万、佛像平家惡逆依一時、灰燼成給、時此佛像者高

一由旬之虛空上、煙炎中、金色之光、放見給、佛法破

滅悲、内有難、御事也、平家之有様書傳、此事尊

(二六オ)

書其後此尊大地下給藤原氏寺興福寺東金

堂安置奉釋迦像也西金堂御座自然由出觀世

音書連侍然太子八歲御時自新羅國渡來日本

第一釋迦尊是也亦或說元興寺雷光燒  
時ヨリ山階寺在

○太子九歲庚夏六月比一奇特侍御門奉奏其由來

土師八嶋申物住吉西濱洲崎閑居證心詠歌送二年序

此我朝之今樣之然晝終日歌暮夜通夜歌明故松吹  
始メト申也

風琴之調思岸打波鼓定洲崎之千鳥友呼音有

由事與思成吹風立浪就弁舌無滯今樣作詠侍折

(二六ウ)

節夜々異人來相和歌尋常者非聲實美妙面白

八嶋送歌返歌天明行方見難波濱隱時在亦雲中

上時有亦住吉浦海中飛入時在其形如大鬼神也

惣禁忌之歌共詠侍八嶋恠思參內裏奉奏其時帝

人皇卅一代御門敏達天皇也然百官召集勅有樣

先代先王御時加樣事侍哉具引例文可被勸申

勅在各雖被引先規之例文不分明余時天皇御言

有樣聖德太子未然方來德有此事何哉太子勅

問承翼奉奏給阿兒是案榮惑星申星侍歎彼

(二七ウ)

星人間兵亂飢渴不熟災難出來 現ニ童子形ニ世間少

童子相交來年之善惡作レ歌披露故天無レ口以レ人

嘯事爲云物天五星在五行五色主 歲星東主春

木色青甲乙云榮惑星南主夏火色赤丙丁云大白

星西主秋金色白庚辛云辰星北主冬水色黑壬

癸云鎮星中主土色黃戊巳云此星五行五色本源

生年隨ニ日月示ニ吉凶此五星内南主榮惑星也夏火

色赤丙丁云此星人良 現常人間童子中交好レ 諳未

然之夏歌蓋以 者此星之所爲成歟有 天皇驚ニ叡慮ニ

(二七ウ)

言 樣此太子非レ悟ニ 内典外典一陰陽之道 通達ニ天文地理

美在 重勅問在抑此星禁忌之歌詠 侍吏何哉太子

良久案勅答言給 是惣 天下亂別 朝家之御大事也一

定明年東方之千嶋夷吾朝亂入王位可レ成レ望歟明年

之春三月中能々御愼 可レ侍懸レ鏡勅答 君臣是聞給

大驚太子奉レ貴給 又有時彼變化者八嶋家薨 來歌

詠面白夏無ニ 是非一八嶋共詠侍 彼變化者交名住町今

樣作詠相尋知 思夜深人定及ニ五更天ニ時分調子取是

歌侍 我宿之寢語 音者誰或說ツクルト云 達新閑亦那能

(二八オ)

連四方之草上母三遍押返々々面白歌侍 彼變化之者

面白思 其返哥 者已身之交名住町悉詠顯侍 其哥云

天地原住夏火星何 種 豐聰尔都會地我朝大和詞天

ホノヲ星トハ榮惑星ノ事也豐聰ト云ハ日本ニハ十八ノ異名アリ其中豐葦原國云然此國事何夏聖德太子問奉云是三返詠畢

天明方成 難波浦從丹町程飛ニ虛空ニ住吉浦海中沈侍

然太子懸鏡此星之事知給 可レ知此星末代有事

○太子十歲辛 春二月下旬之比東夷日本亂入合戰既始 越丑

伊勢伊賀二王城近責來

平氏云彼夷本國從吾朝二東北相當鬼門之方漫々大海中

(二八ウ)

一千卅余有嶋國是千嶋之荒夷申四天大將軍先數

万億眷屬召具彼亦此國來王位爲奉奉

尔時王城者大和國城 上郡三輪鄉古蒙村泊瀬河邊磯

城嶋金刺宮也彼夷大勢東海東山兩道自責上其勢

何千万云數不知既先陣大和國三輪山北城戶峯云可

取陣後陣未與州石開之石踏秋田城不出云實天下

亂日本一大夏成者君大驚弼慮臣下大臣召集群臣

急參内申主上御出有此事如何哉勅問下 尔時小野

大臣進出引先規之例一勅答申給 者此國粟散邊土雖

(二九オ)

小國、東夷西戎動、成臨中、東國千嶋夷人皇十二代景

行天皇、諱大是彥天皇 尊或説御代亂入有、可殺煞、可

放、由承給及今親及、及猿藉不可、及是非之評定急馳

向破、却城郭可致、粉骨之合戰言給、然天皇上宮太子

近就言、様汝今程十歲也去年六月之樂惑星理、一言不

違、然汝幼少也雖違、万事此克如何、太子答言給様少

兒何國之御大事議、足耶雖、然今之群臣評定承皆

衆生滅亡之義也、今雖對治給、未來亦不可止、阿兒進欲

趣、戰場幼少身力用難、叶欲退、亦朝家御大事是極也

(二九ウ)

抑彼夷共、有様其咻同、鬼神力用自在也、或矢前塗

毒放侍、其矢當者千万人獨難、助或雨、霧隱城、或毒

鼓藥鼓云、鼓打戰行軍秘術多、百萬驕之軍兵以

合戰雖、有更不、可叶、歎給者君臣心小、成給良久太子

世今向、覺侍言、然夷共其數多與州防戰、凶蝦如雲霞

死、共不退、猶進來關々、破城郭、夷亂入然間、長谷山打超

三諸山陣取、岩根河原合戰、東州軍兵以下男女夷難恐

西國落集、如稻麻竹葦、兵食盡沈、飢江河水渴、飲不能

況於、飯酒乎、故互其兵食論、心外成害、或爲合戰、死或

(三〇六)

爲<sub>レ</sub>飢渴亡七難競來天下亂合蘇我大臣守屋連等廻秘

術於<sub>二</sub>山田城戶峯<sub>一</sub>七谷築籠水灌如海水<sub>一</sub>上構浮橋敵

此押奇時構鎮放凶徒其數池底沈池底劍菱殖城木

戸石扉鐵逆木引違色々軍旗立竝氏々官箭前調

散々禦共凶夷如雲霞賁入七谷池凶徒沈成陸地然

間官兵共弱如冰白劍手以甲傾月梓弓矢弣事希也

此上鳳城龍樓可危天皇稻淵河與行幸在

有傳云敏達天皇彼夷恐難痛天照大神御代自人王重寶

與奉傳神璽寶劍內侍所等三種神祇御隨身在御輿被

(三〇七)

食速皇居御出有大和國稻淵山與成行幸給御輿之前

後卿上雲客袴楚取步行御共有鳴々申給樣抑天照

大神吾朝百王一百代安穩無爲守御誓侍當帝三十一代

也今六十九代守不給御裳灌河流今此御代絕給耶近

悲給然忝天子出王宮既迷山林給御有樣夢覺思

分方無淺猿御哀也然太子之神變以東夷退出太子九

歲之榮惑星不思議也

尔時太子奏問有樣阿兒蒙御許趣彼夷城以謀宗大

將軍等賁出相尋所存趣和心重加教諭取其重盟

(三一ウ)

奪<sup>ニ</sup>貪<sup>ニ</sup>性<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>伺<sup>ニ</sup>世間案否<sup>ニ</sup>言<sup>レ</sup>給<sup>ニ</sup>天皇大悅給<sup>ニ</sup>群臣大太子

奉<sup>レ</sup>貴<sup>ニ</sup>愛<sup>ニ</sup>喜<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>數<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>太子一人數<sup>ニ</sup>萬<sup>ニ</sup>夷<sup>ニ</sup>共<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>奉<sup>レ</sup>入<sup>ニ</sup>難<sup>ニ</sup>義<sup>ニ</sup>也

亦<sup>レ</sup>太子之神<sup>ニ</sup>變成<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>叶<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>御父豐日皇子御心中推

量<sup>ハ</sup>哀<sup>也</sup>也此時君臣誠東西長闊如<sup>レ</sup>心細侍也然太子召<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>

御馬<sup>ニ</sup>蘇我大臣計召具夷城三輪山打向給<sup>ニ</sup>此山申<sup>ニ</sup>忝<sup>ニ</sup>

太子之御氏神三輪大明神之和光利生之靈山也故太子

大鳥居前下馬在<sup>ニ</sup>左右御手搔合苦<sup>ニ</sup>東夷難御祈誓

有<sup>ニ</sup>御心內難<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>良在後召<sup>ニ</sup>御馬<sup>ニ</sup>趣<sup>ニ</sup>夷城<sup>ニ</sup>給<sup>ニ</sup>余時城中之夷

共太子奉<sup>レ</sup>懸<sup>レ</sup>目面々申様抑愛見來人異相有此國聖人

(三一ウ)

生給<sup>ニ</sup>聞<sup>ニ</sup>年未<sup>ニ</sup>十歲計幼稚不肖<sup>ニ</sup>人奉<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>賤<sup>ニ</sup>此人事<sup>ニ</sup>是程

幼少成<sup>ニ</sup>小童殺<sup>ニ</sup>何<sup>ニ</sup>云<sup>ニ</sup>盡<sup>ニ</sup>始<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>是哉夷力運<sup>ニ</sup>余時太子彼夷降伏<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>食

始現<sup>ニ</sup>神力<sup>ニ</sup>給<sup>ニ</sup>一番石取投上給者盤石成如<sup>ニ</sup>雷<sup>ニ</sup>虛空鳴夷

城響此岩三破一越三上峰幡摩國逸濟郡海落<sup>ニ</sup>墮付

一奥州三股砂摩墮付<sup>(前)</sup>一三河國墮付今岩根云處是

也夷噴成種々軍秘術行<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>叶<sup>ニ</sup>此石響如<sup>レ</sup>雷進退極大

仰天逃隱<sup>ニ</sup>夷多<sup>ニ</sup>余<sup>ニ</sup>恐<sup>ニ</sup>惶<sup>ニ</sup>腹<sup>ニ</sup>發<sup>ニ</sup>逃<sup>ニ</sup>夷<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>其<sup>ニ</sup>在<sup>ニ</sup>町<sup>ニ</sup>大和國

宇多郡腹發<sup>ニ</sup>是也太子猶東夷威加<sup>ニ</sup>教<sup>ニ</sup>諭<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>食<sup>ニ</sup>定

弓惠矢番能引放給<sup>ニ</sup>此矢ハ三日ノ如<sup>レ</sup>雷出<sup>レ</sup>聲夷城七遍鳴

(三二一)

廻天上地下下亂轉 千嶋之荒夷共弓矢之本末不弁

中四人大將軍頭 付鳴廻彼四人夷太子之御前跪合

掌助ニ命計ニ給 乞降彼蝦夷裝束色々綾錦衣裳裁

着席皮淺嵐 皮腰卷己命共惜鷲名羽季立中黑

妻黑天面遠霞村雲 與申名羽貫集頸懸侍 太子備

御前ニ置命等 財奉助給歎申余時太子告夷四人將軍

言先汝等大將軍等 交名并副將軍亦名字搦召

具勢員悉名乘申 勅給夷共各名乘申 時太子重

云汝亦暫靜 阿兒汝等交名各勢員數悉朕知食

(三二二)

也先汝等四人 大將軍交名一人綾糟一人魅師一人走

雲一人飛雲已上四人 二人副將軍交名一人夜叉神童

一人菊彌童云其外召具千嶋夷員三億六万八千七

百卅余人也 勅給夷共同音奉感君御勅更不違申日

本神也 深奉信敬余時太子告夷言汝等自昔日本妨

間其所存憾 可申上是何事耶凡上代傳聞大足彦

十二代景行天皇御代ナリ

天皇 尊御代汝先祖夷如今亂來令殺者斬應原

赦今遵前例一人不可助群臣一同會議定然今東

西南北自軍兵共如雲霞馳來汝等命可助事不可

(三三〇)

有云而阿兒煞生深誠間不叶可助急々汝等所存

可申貢給四人、大將軍答申様實如君勅定昔臣

等先祖千嶋之荒夷共此國渡侍一人生不歸本國

被失申故一先祖之會替恥爲雪一亦先祖如所存

日本國悉皆統領程難叶侍自王城東半國賜臣亦

進退仕存侍也申尔時太子言抑已等所存兩條共

存外也夫汝等形同鬼神一身亦鬼神之有力用其軍兵

共如雲霞各同心何物歟可對揚然此國雖粟散邊

土小國神明之造出給國成名神國亦此國生來貴賤

(三三一)

上下神明氏子成其力用勝他國之夷軍秘術汝等不

可及阿兒今年僅十歲也今朕一人力用以汝亦數千方

人難叶何云哉日本多神明之氏子順上古末代努々

不可思寄勅給夷大勢怖懼太子奉信敬一只命計

御助有降奉乞尔時太子勅有様只今汝等命吉

様御門奉奏可助事易共已等及子孫代代亦加々

留狼藉可至事一定也此夷共閉口不弁是非太子重

言汝等奉懸三輪明神自今以後日本怨不可成深

誓可立不然而先例可誅言其時夷共懼怖急至泊

(三四オ)

河<sup>カ</sup>洗<sup>シ</sup>手<sup>テ</sup>口<sup>コ</sup>向<sup>ム</sup>三<sup>ニ</sup>諸<sup>ノ</sup>山<sup>ニ</sup>而<sup>シ</sup>盟<sup>ス</sup> 日<sup>ヒ</sup>臣<sup>ニ</sup>等<sup>ヲ</sup>蝦<sup>シ</sup>夷<sup>ス</sup>自<sup>レ</sup>今<sup>ヨリ</sup>以後<sup>ノ</sup>子<sup>シ</sup>々<sup>ト</sup>

孫<sup>ミコ</sup>々<sup>ト</sup> 用<sup>ヒ</sup>清<sup>キ</sup>明<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>悉<sup>ク</sup>奉<sup>ル</sup>仕<sup>ヘ</sup>天<sup>ノ</sup>闕<sup>ニ</sup> 若<sup>シ</sup>臣<sup>ニ</sup>等<sup>ヲ</sup>盟<sup>ス</sup>違<sup>フ</sup>背<sup>カ</sup>天<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>諸<sup>ノ</sup>

神<sup>カミ</sup>及<sup>シ</sup>天<sup>ノ</sup>皇<sup>ニ</sup> 靈<sup>ミコト</sup>臣<sup>ノ</sup>種<sup>ヲ</sup>絶<sup>シ</sup>滅<sup>ス</sup>奉<sup>ル</sup>可<sup>ク</sup> 誓<sup>ヒ</sup>請<sup>フ</sup>文<sup>ヲ</sup>奉<sup>ル</sup>尔<sup>ト</sup> 太<sup>ミコ</sup>子<sup>ト</sup>

奉<sup>ル</sup>奏<sup>ス</sup>御<sup>ミコト</sup>門<sup>ノ</sup>綾<sup>ヲ</sup>錦<sup>ヲ</sup>等<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>與<sup>フ</sup>録<sup>ヲ</sup>物<sup>ヲ</sup>本<sup>ノ</sup>處<sup>ニ</sup>放<sup>シ</sup>還<sup>ス</sup>貪<sup>ム</sup>性<sup>ヲ</sup>止<sup>ム</sup>給<sup>フ</sup>夷<sup>ト</sup>

云<sup>フ</sup>ラウ<sup>ク</sup>ハイ<sup>シ</sup>ヤム<sup>ツ</sup>ケイ<sup>カ</sup>ン<sup>イ</sup>シツ<sup>マ</sup>シヤ<sup>ク</sup>イ<sup>シ</sup>マ<sup>シ</sup>マ<sup>セ</sup>ハ<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>或<sup>ハ</sup>武<sup>氏</sup>  
例<sup>ヲ</sup>引<sup>テ</sup>神<sup>ノ</sup>變<sup>ヲ</sup>現<sup>玉</sup>ヘト<sup>云</sup>心<sup>ナリ</sup>

太<sup>ミコ</sup>子<sup>ト</sup> ヒ<sup>ン</sup>ケ<sup>イ</sup>ス<sup>ン</sup>ホ<sup>ウ</sup>セ<sup>ン</sup>サ<sup>ヒ</sup>ヤ<sup>ウ</sup>ム<sup>ス</sup>ン<sup>キ</sup>ヤ<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>安<sup>程</sup>事<sup>ト</sup>云<sup>心</sup>ナ<sup>リ</sup>

夷<sup>ヒ</sup>云<sup>フ</sup> サ<sup>ク</sup>テ<sup>ン</sup>ク<sup>ル</sup>ヤ<sup>ク</sup>ハ<sup>リ</sup>シ<sup>テ</sup>ン<sup>カ</sup>イ<sup>ナ</sup>キ<sup>ン</sup>ヤ<sup>ホ</sup>ウ  
早<sup>ク</sup>嶋<sup>ヘ</sup>歸<sup>ラ</sup>ント<sup>云</sup>心<sup>ナリ</sup>

太<sup>ミコ</sup>子<sup>ト</sup> ヒ<sup>ン</sup>ソ<sup>ロ</sup>ク<sup>ス</sup>チ<sup>ヤ</sup>ウ<sup>ケ</sup>イ<sup>ヤ</sup>サ<sup>ン</sup> 然<sup>也</sup>早<sup>飯</sup>ヘシト<sup>云</sup>心<sup>ナリ</sup>

其<sup>ノ</sup>後<sup>ハ</sup>東<sup>ノ</sup>夷<sup>ハ</sup>日<sup>本</sup>不<sup>レ</sup>來<sup>ハ</sup>然<sup>上</sup>一<sup>天</sup>御<sup>喜</sup>下<sup>万</sup>民<sup>樂</sup>興<sup>隆</sup>佛<sup>ト</sup>

(三四ウ)

法<sup>ノ</sup>之<sup>ハ</sup>悅<sup>ム</sup>成<sup>ル</sup>比<sup>丘</sup>比<sup>丘</sup>尼<sup>等</sup>太<sup>ミコ</sup>子<sup>ノ</sup>御<sup>恩</sup>報<sup>難</sup>云<sup>云</sup>

尾<sup>ビ</sup>州<sup>シウ</sup>山<sup>サン</sup>田<sup>テン</sup>郡<sup>クニ</sup>内<sup>ノ</sup>飽<sup>ボウ</sup>津<sup>ツ</sup>保<sup>ホ</sup>上<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>於<sup>テ</sup>

太<sup>ミコ</sup>子<sup>ノ</sup>堂<sup>ノ</sup>寄<sup>リ</sup>進<sup>ム</sup>之<sup>ヲ</sup>

松<sup>マツ</sup>原<sup>ハラ</sup>下<sup>ノ</sup>總<sup>ソウ</sup>守<sup>シュ</sup>廣<sup>ヒロ</sup>長<sup>チヤウ</sup> (花<sup>ハナ</sup>押<sup>シ</sup>)

寬<sup>寛</sup>正<sup>正</sup>五<sup>五</sup>年<sup>年</sup> 甲<sup>甲</sup> 三<sup>三</sup>月<sup>月</sup>六<sup>六</sup>日<sup>日</sup>

聖德太子傳 二

(一才)

聖德太子傳曆

平氏撰

○太子十一歲壬寅春二月大和國於高市郡難波鋌池之

北成小林園中卅六人童子引率様々形々御勝負

在始武藝道教給是名弓石遊太子告童子達言抑

日本神國人心賢謀過餘國人男子身尤於諸道可

稽古有歟就中文武是定慧二法也知文道爲君

致忠爲父母有孝亦天下之政道并撫育萬民惣悉

備仁義禮智信之五常今日吉日成先可稽古武藝

道

(一ウ)

平氏云藥師十二神將千手廿八部衆等皆往古如

來久成薩埵也四天八天等皆往古賢聖成隨類應同

之日忝改柔和忍辱躰弓箭持刀杖執惡魔降伏

況於凡夫身哉此道闕爭平怨敵可靜國凶徒哉

太子先引弓放矢給思食矢坪更不離御良昔之漢

朝養由躰繼更盈弓勢角哉與見給其後亦圍碁

雙六盤之上御遊共也氏言抑此道ハ震且ノ天子堯王并子

彼之石皆名在聚砂其名文字書付多砂共打混太子

片時之間文字次才撰次才悉讀連給故弓石遊號此

建ト申人始造出給ヘリ加様御遊太子悉連給

(二才)

外詩歌管絃等御遊不及申云

氏云夫釋尊因位承給御年八歳五天竺才一學匠

毘沙婆羅蜜師匠定二年内書論學極十歳御時

御伯父之忍天隨十九種之藝能習極十一歳御時

摩訶麻耶大臣娘耶輸多羅女提婆太子論種々

勝負之能盡給御時中弓之能有難然厚三寸之

鐵之鼓七重掛重遠十俱盧舍立矢放給七重金の

射通其矢大地八万由旬之底金輪際至提婆此金

的八俱盧舍立三射通俱盧舍ト云ハ天竺之言我朝ニハ六町ヲ一里、二百八十四里ヲ天竺十俱盧舍云委八相傳見ヘタリ

(二ウ)

太子又告諸童子相撲之勝負在吾朝之始或亦竹馬打

鞭昇三虚空二分雲踏霞空中行住坐臥御座法華廿七品、妙庄嚴太子

淨藏淨眼之神變モ今、諸童子達驚目及仰天凡大聖權太子不可有勝劣一見ヘケル

化神變可驚非隨類應同之前不思議成事共也加樣

武藝之御遊教給畢其後太子教三文之藝問答給然

三十六人童子御約束有様一切難字調逆語訓聲共

悉書集面々心々問給言如此理數日也或傳十日計問答有ト云

余時卅六人私歸告父母云私作難辭而令詔太子太

子有日卅六人童子左右推分四方五人宛四方四人宛已

(三才)

上八方卅六人立御身中央座 御約束之理問給言然彼

童子達一切之難字訓聲逆語長短書集卷物共同

音讀上太子問奉太子何悉聞食分給一々明々無滯

處答給如斯連日御勝負太子等人更不御座彼卅

六人童子交名爲末代大和國法興寺之講堂壁板太

子御自筆書付給

摩呂子親王筒嶋王子 米目王子 小林王子 大原王子

小嶋王子 雲見王子 難波王子 早來王子 石見王子是

皆太子御兄才并御一門之王子達也次亦卿上雲客之

(三ウ)

君達之交名書連 嶋角童子 小嶋童子

早走童子 鬼勝童子 岩手童子 月影童子

檜隈童子 小松童子 山路童子 坂住童子

走出童子 椿木童子 鳥羽童子 弓取童子

早目童子 足輕童子 繩手童子 片山童子

遠山童子 高松童子 鬼取童子 葛木童子

十市童子 田邊童子 犬養童子 馬耳童子

都合三十六人也 抑此童子達皆是大聖權化久位通

達大菩薩也暫成主伴利生顯太子威德給(リト云)

(四才)

平氏傳 此童子尊注 卽卅七尊也但童子卅六人也此

卅六人童子 一會所化定能化聖德太子師才共卅七尊

余時御父豐日皇子太子并王子達連日遊給間木陰

立忍有御叡覽宮中還御成后語奉給抑馬戶王

子生年自巳來之振舞驚耳目奇特共也雖然此程連

日王子達俱遊在形心言不及就中今日卅六人童子立三八

方同時難問詞悉聞分明々答實不思議侍云自今

日太子八耳之王子可申勅定有

氏云抑遠尋二月氏二代教主之釋尊十大弟子座

(四ウ)

迦葉上行 阿難多聞 舍利弗智慧 須菩提解空 優婆離持律

富樓那說法 目連神通 迦梅延論議 阿那律天眼 羅喉羅密行

其中大目健連申耳德座天耳自在 承又阿那律尊目

德開座天眼自在 承今聖德太子不劣給亦近聞震

且漢朝天子始才三代皇帝申國王御代十人臣即釋

尊如三十才子各一德具足侍承其十人臣中離朱二人

臣下上首云離朱云臣天眼自在德有譬阿那律尊

者此離朱乍居千里之 又伶倫云臣天耳自在德譬目連

尊者此伶倫乍居千里之彼聖德太子今日本生承乍居月

外蟻之親子物語聞云

(五才)

氏震且理弁實三朝威德自在王子也皇子皇女大稱

美給只太子救世觀音化現成三世了達之智慧即也

雖然隨類應同之前不思議成御支共也力如金剛力士

智慧如大聖文殊慈眼如觀音說法如富樓那身輕如

疾風雲飛一身香如栴檀窓普天卒土拔群無雙之太子也

○太子十二歲癸卯秋七月高麗國之沙門日羅聖人將來

其比敏達天王賢人求故遠百濟國渡勅使其勅使吉

備海部羽嶋連申太臣渡給然百濟國章北達申尋

得賢人歸朝此時彼日羅上人折節渡百濟國亦日本

(五ウ)

欲渡時節成彼船便船章北達相共本朝將來此日羅

心中之智慧廣大攝津州付難波浦御門奏聞自王城阿

部臣久米物部贊子大連大伴糠手子連等遣問國

政章北日羅依詔命言夫治國家基先與行三寶哀

人民政慈悲憲法可宗勅使歸落此由奉奏彼賢

人異相申上太子彼日羅異相聞食奏天皇言阿兒

望隨使臣往難波館視彼旅人天皇詔曰是輕行支也

不許給太子父豐日皇子蜜語御顏垢塗墨麻衣服

繩葛帶馬飼童子下主十二三人召具並肩連袂遊

(六才)

戲彼旅人伺 被御覽時日羅上人彼童子中之太子見

告二奴子此 童子身通力自在也是神人也 床下太子捉

奉 太子急逃去給日羅大驚履脫遙禮日羅聖德太

子奉 知太子還御成父皇子諮 彼大國客伺見侍阿

兒先生才子也心安蒙御許行先。支共互可清談

太子新 御衣修儀 日羅房所御行成眉間放光日羅

身放光太子奉謝庭上跪 合掌禮文以讚 其文云敬禮

救世觀世音傳燈東方粟散王唱三々禮拜奉心之中

哀也

(六ウ)

氏云是吾昔之本師也生替給對面申哀也昔師匠遙老

良可御座二生形改 給故僅十二三童子成給悲哉吾御

才子 雖未改先身故年老衰 然太子御本地西方於極

樂補處大士亦於南方補陀落教主也今亦此土座大悲

利生之粟散主 故此文以讚也

尔時太子不取敢次兩句文唱給 其文云

從於西方來誕生 開演妙法度衆生

然大國 人々太子信敬奉吾朝 太子觀音化現知 太子告

日羅一言 抑阿兒與汝多生師才契深重也然汝未生替

(七オ)

頭戴三三冬雪眉垂八字霜腰張三梓弓殘命幾哉阿兒

汝師成一二生替雖隔生不忘昔之事誠易離有

位天變亦難會生死無常也太子流御淚給日羅共

流淚太子推淚言樣良日羅汝身相勘見存命近可

盡可惜被害他事言日羅驚推淚申上聖人難

免況於凡夫身中心中哀也

氏云只今將來太子奉禮其爲成不久死太子奉離事

悲流淚然先生太子示給吾此國化留日域東海生汝

共可生給言夜只今太子御驚依思出故吾君奉

(七ウ)

別自後乳飲子母離心地一日片時本國心不留侍衡

山御入滅之後相當六年一葉之船棹萬里若海漂

君奉尋程心不任海上成高麗百濟年月送船中浪

上苦心鬢髮長生偏俗人貞也雖然今二生之

師奉見歡喜無極申運命近盡事流淚

然太子與日羅終夜清談雖御座一人人悟不得明日太

子大和宮還御其後日羅太子信敬奉

氏云抑太子如御言日羅上人十二月晦日夜播麻明

石油新羅國人殺畢日羅蘇生曰此是我驅使奴

(八才)

木所爲也非敵云畢死

太子聞食語左右言日羅是聖人也常禮日天子故

身光明有阿兒漢土在時才子也因果目前也此前業

所感但後必生都率內院諸人可慎因果理也

○太子十三歲甲辰秋九月從百濟國石像馬腦彌勒菩薩

之佛像一軀奉渡或說二臂之如今之古京之元興寺在

東金堂蘇我大臣請奉其佛像安置供養奉尔時太

子蘇我大臣敎化爲願主大和國高市郡豐浦庄內

大伽藍令建立金堂三間四面講堂七間二面僧坊五

(八ウ)

十六間鐘樓一字經藏一字二階樓門一字溫室一字

五重之寶塔一基此大伽藍太子十三歲御年造立畢

太子有歡喜號與嚴寺御自筆書給今所名豐浦

中間世人彼寺豐浦寺申傳是日本最初佛閣也彼

寺御本尊欽明天王御代百濟國齋明天王自被送渡

一光三尊彌陀如來太子八歲之御時自新羅國所來金

銅釋迦三尊彼石像之彌勒安置供養奉同住持百濟

國住侶慧僧惠弁兩人高僧也是一光三尊將來之時

來朝幡磨國居請此寺令住持也亦太子三人乳母敎化

(九才)

成<sub>レ</sub>尼<sub>ニ</sub>戒<sub>ハ</sub>名<sub>ハ</sub>善<sub>ニ</sub>信<sub>ニ</sub>禪<sub>ニ</sub>藏<sub>ニ</sub>慧<sub>ニ</sub>善<sub>ニ</sub>云<sub>ハ</sub>三<sub>ニ</sub>人<sub>ノ</sub>之<sub>ハ</sub>比<sub>ハ</sub>丘<sub>ニ</sub>尼<sub>ニ</sub>衆<sub>ト</sub>成<sub>レ</sub>給<sub>ハ</sub>日<sub>ニ</sub>

本<sub>ノ</sub>之<sub>ハ</sub>女<sub>ニ</sub>人<sub>ト</sub>也<sub>ハ</sub>是<sub>レ</sub>此<sub>ノ</sub>寺<sub>ヲ</sub>令<sub>レ</sub>住<sub>セ</sub>太<sub>ニ</sub>子<sub>ト</sub>彼<sub>ノ</sub>寶<sub>ヲ</sub>塔<sub>ヲ</sub>在<sub>ニ</sub>拜<sub>見</sub>司<sub>馬</sub>達<sub>言</sub>

樣<sub>ハ</sub>夫<sub>ハ</sub>寶<sub>ヲ</sub>塔<sub>ヲ</sub>尤<sub>モ</sub>佛<sub>ヲ</sub>舍<sub>レ</sub>利<sub>ヲ</sub>奉<sub>レ</sub>納<sub>也</sub>汝<sub>ハ</sub>佛<sub>ヲ</sub>舍<sub>レ</sub>利<sub>ヲ</sub>可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>崇<sub>ム</sub>尔<sub>ハ</sub>

時<sub>ハ</sub>蘇<sub>我</sub>大<sub>臣</sub>勅<sub>答</sub>申<sub>樣</sub>夫<sub>ハ</sub>日<sub>本</sub>國<sub>常</sub>立<sub>尊</sub>天<sub>地</sub>開<sub>故</sub>天

神<sub>地</sub>神<sub>十</sub>二<sub>代</sub>雖<sub>當</sub>。ニ<sub>數</sub>千<sub>万</sub>劫<sub>不</sub>聞<sub>佛</sub>法<sub>名</sub>字<sub>亦</sub>從<sub>仁</sub>皇

始<sub>已</sub>來<sub>一</sub>千<sub>四</sub>百<sub>余</sub>歲<sub>帝</sub>仁<sub>王</sub>廿<sub>九</sub>代<sub>宣</sub>化<sub>天</sub>皇<sub>治</sub>至<sub>佛</sub>

法<sub>尚</sub>難<sub>レ</sub>知<sub>就</sub>中<sub>欽</sub>明<sub>天</sub>王<sub>代</sub>百<sub>濟</sub>國<sub>一</sub>光<sub>三</sub>尊<sub>來</sub>臨<sub>雖</sub>尾

越<sub>大</sub>連<sub>依</sub>ニ<sub>申</sub>成<sub>攝</sub>州<sub>難</sub>波<sub>海</sub>種<sub>々</sub>罪<sub>行</sub>奉<sub>レ</sub>沈<sub>者</sub>亦<sub>本</sub>無

佛<sub>世</sub>界<sub>成</sub>畢<sub>然</sub>今<sub>太</sub>子<sub>御</sub>誕<sub>生</sub>在<sub>二</sub>歲<sub>之</sub>御<sub>時</sub>御

(九ウ)

手<sub>中</sub>自<sub>御</sub>舍<sub>利</sub>出<sub>現</sub>座<sub>一</sub>天<sub>之</sub>御<sub>珍</sub>寶<sub>私</sub>不<sub>頂</sub>戴<sub>余</sub>

之<sub>御</sub>舍<sub>利</sub>更<sub>無</sub>如<sub>何</sub>得<sub>安</sub>置<sub>奉</sub>ニ<sub>云</sub>尔<sub>時</sub>太<sub>子</sub>示<sub>言</sub>夫<sub>佛</sub>法<sub>ハ</sub>

非<sub>遠</sub>心<sub>中</sub>即<sub>近</sub>汝<sub>專</sub>信<sub>心</sub>豈<sub>不</sub>得<sub>佛</sub>舍<sub>利</sub>仍<sub>可</sub>奉<sub>祈</sub>請<sub>ニ</sub>

教<sub>化</sub>給<sub>尔</sub>時<sub>大</sub>臣<sub>信</sub>敬<sub>命</sub>肝<sub>一</sub>食<sub>持</sub>齋<sub>祈</sub>念<sub>奉</sub>佛<sub>舍</sub>利<sub>ニ</sub>

三<sub>七</sub>日<sub>也</sub>然<sub>廿</sub>一<sub>日</sub>午<sub>刻</sub>飯<sub>持</sub>來<sub>其</sub>飯<sub>上</sub>一<sub>粒</sub>御<sub>舍</sub>利<sub>放</sub>ニ

金<sub>色</sub>光<sub>一</sub>忽<sub>然</sub>顯<sub>給</sub>大<sub>臣</sub>歡<sub>喜</sub>無<sub>極</sub>爰<sub>大</sub>臣<sub>凡</sub>夫<sub>身</sub>悲<sub>ハ</sub>

生<sub>ニ</sub>小<sub>疑</sub>心<sub>且</sub>舍<sub>利</sub>爲<sub>レ</sub>弁<sub>ニ</sub>全<sub>身</sub>且<sub>爲</sub>除<sub>末</sub>代<sub>衆</sub>生<sub>疑</sub>鐵<sub>質</sub>

上<sub>置</sub>奉<sub>鍤</sub>以<sub>打</sub>不<sub>摧</sub>給<sub>有</sub>時<sub>鐵</sub>數<sub>中</sub>入<sub>金</sub>鍤<sub>中</sub>入

放<sub>光</sub>催<sub>不</sub>大<sub>臣</sub>流<sub>隨</sub>喜<sub>之</sub>淚<sub>即</sub>奉<sub>レ</sub>納<sub>瑠</sub>璃<sub>壺</sub>奉<sub>供</sub>養<sub>ニ</sub>

(十才)

此時太子拜見彼佛舍利、押隨喜淚、告大臣言、阿兒先

生於衡州山、多生間雖修行佛道、顯奇特、希大臣已功

德成就人也、尊哉大臣自今已後結父母契、共爲善知識、

興隆佛法、諸願成就、是實如來之全身也、則豐浦寺五重

寶塔心柱下奉納給、然此御寺調三寶之教、佛法繁

昌國成給、氏云我亦今三寶近畜小善、皆是上宮皇太

子無邊之恩德也、誰無量億劫奉報謝哉、夫三寶品多

殊尊者住持三寶也、住持三寶也、佛法僧三也、此年蘇我大臣臥病、

床下崇神心也、委在與

(十ウ)

○太子十四歲乙、春三月物部弓削大連中臣勝海連等

內裏參奏曰、先天皇、至子陛下、疫癘未息、人民可絕

良思、蘇我臣木與二行、佛法天皇詔曰、灼然、且斷佛法、  
一光三年ノ由來、遠ク月氏、二月蓋長者之所罪、依ナリ

太子聞食流淚、奏曰、守屋勝海連等未因果之理不

知、修善福到行、惡禍來是自然之理、如來教也、阿兒聞

古之聖人勝於大災、故有唐旱、殷水之辜、今之疫癘、以

德可除、何更滅始興之法、能免將死之命、耶、二臣如今必

蒙天禍、二臣不聽自寺々詣、祈倒堂塔、毀破佛像、放火、

燒之、取所燒餘佛像、棄難波、嘔江、喚出三人、尼、奪其

(十一才)

法服並加答蓋。是日無雲而大雨大風吹震動太

子諂。皇子曰。禍始於此。又此日國中人民發瘡死者

充滿。其患瘡者言痛如燒斫。老少竊語云。是燒

佛像。罪歟。太子諂。皇子曰。如來教滅而更興。而更

滅。如今一臣破法報。致此瘡病。應祈請而脫。皇子

與太子擊香炉。禮佛七日。瘡皆平愈。此年夏

六月大臣馬子宿禰奏云。臣疾久不愈。願猶憑三寶。

詔太子汝獨可行。唯斷余人。乃以三尼更付大臣。

依歡喜太子賀之。曰。以大臣威興此妙教。佛善哉。

(十一ウ)

大臣新營精舍。供養三尼。佛法初自茲遂興云。

豐浦寺本記云。敏達天皇即位十三年甲辰。聖德太子十三歲春。一

月。比天王奏。一勝地取。同年八月。蘇我大臣命大野岡北石寺塔

立。給太子臨幸。之禮拜供養給。太子御自筆興嚴寺號。

今豐浦寺申彼守屋大臣燒拂云。

又元興寺之本記云。聖德太子十二歲癸卯秋九月。比佛像安

置供養給。其比自天下疫病發死者。多依之物部弓。

削守屋大連中臣勝海連等先例之事。申佛法破滅之

由。評定聖德太子奉謗仍時之帝。仁王卅一代敏達天皇

(十二オ)

御代雙槻澤田宮參内申奏上奉様抑日本神造出

御座故號ニ神國ニ上從一人下及ニ万民ニ神産育給者悉神

氏子也故國之政以ニ神事ニ爲先今聖德太子始我國建立

堂塔ニ彼異類異形物號レ佛崇給故日本神明之御靈

荒ニ國中一疫病之災起天下不穩 早蒙ニ御許ニ祈ニ倒堂塔

毀ニ破 佛像ニ存侍也 申主上打笑 給勅定有様夫前車

覆見 後車誠 然先帝之御代汝親尾與大連依ニ惡

見ニ彼如來奉レ行レ咎難波海奉レ入此日自天 火雨降 内

裏金刺宮燒失君臣共失給豈不レ可レ恐哉以外言更

(十二ウ)

御許無 守屋不レ及ニ是非ニ御前退出猶佛法破滅之惡

念工 是 雖レ經ニ數月ニ不レ及ニ善惡裁斷ニ爰守屋心思様我

承ニ神明御託宣ニ設君無ニ御許ニ神明之有ニ御許ニ令レ滅ニ仏

法ニ思心折節才六天魔王心念様日本秋津嶋神國

也亦我所レ領也其内衆生皆悉吾眷屬也佛法興行

六道四生有情漸以滅小 思障導神申 差下成ニ神子之

躰

氏云彼神子年六十有余女神子也丙文之唐衣赤唐裳

着シ八尺紅之懸帶皆水精之念珠懸レ頸妻紅扇持

(十三オ)

守屋宿所ニ化來云

守屋宿所令ニ化來大臣對面問云汝何者巫女答曰自

神子申女也大臣問神子云者何緣巫女答云夫一切之

神明者有ニ神通自在薄地之凡夫對直顯レ駄物言給支

更無故神氏自如巫女乘遷迷衆生之心明託通支申

物神子申也云尔時守屋大臣思様是神明我等加護

有通化也大悅急殿内請入申此間不審存子細多頓

我氏神苻都部大明神御託宣承申其時神子自

元魔王使成大喜捧幣帛曳裙帶一時程舞戲拍

(十三ウ)

手五駄投レ地躍狂侍有様申無量良在出大音聲大

地響託宣云抑我朝神國成神代十二代仁皇始今

至雖<sup>經二</sup>數千万劫何代異國之人形崇爲三國之政其例昔

更無汝等大臣事新何事問哉急々佛法破滅寺

塔燒失可尔時天下太平四海豐饒成然此間崇ニ他國

異形者ニ故我朝之神明靈荒疫病國中滿託宣時

大臣魔王託宣更不<sup>レ</sup>思實神明御託宣思信教頭

傾<sup>レ</sup>地隨喜合掌種々實物與侍神子一物不<sup>レ</sup>取書消

様打失云<sup>氏云人皆不思議奇特思成ケレトモ後ニハ魔王變化ト心得ケリ</sup>

(十四才)

時大臣可<sub>レ</sub>然蒙<sub>ニ</sub>神明<sub>ノ</sub>之告<sub>ヲ</sub>第<sub>ニ</sub>弓削小連相語則一族之

若輩召具都合其勢五百余驕豐浦寺馳向

或傳云此時守屋舍才受<sub>ニ</sub>病患<sub>ヲ</sub>万事一生罷成<sub>ル</sub>守屋

大臣馳向云抑御邊病モ無<sub>ニ</sub>別<sub>ノ</sub>之子細聖德太子云少人物不

レ知他國異形者崇號<sub>ニ</sub>佛法<sub>一</sub>故也然只今氏神之御託宣ヲ

聞<sub>ニ</sub>新義之崇尊故<sub>ヲ</sub>我朝之神明靈荒國中病患發起<sub>ス</sub>ト

云仍舍才小連病ノ床ヲ起上<sub>ヲ</sub>只今氏神御託宣ヲ承ハレハ

身心安樂ニ罷成心地ス早々堂塔ヲ發向給ヘト申時刻ヲ不

遷同心シケリト云

(十四ウ)

無<sub>レ</sub>罪僧尼行<sub>レ</sub>咎中太子御乳母三人比丘尼袈裟衣

剝取顯<sub>ニ</sub>雪膚<sub>ニ</sub>庭上樹縛付加<sub>レ</sub>咎令<sub>レ</sub>恥又二人高僧之

法服剝取着<sub>ニ</sub>俗衣<sub>ニ</sub>右近次郎左近次郎云俗名付山城

國泉河邊流置侍也或傳云彼僧尼  
播磨國流罪云寺塔放<sub>レ</sub>火佛像

經卷<sub>ヲ</sub>火烟成<sub>レ</sub>哀哉釋迦阿彌陀二尊之靈佛黃金之

膚守屋一念噴<sub>レ</sub>患炎痛八十種好<sub>レ</sub>粧佛閣僧坊之火烟

共<sub>ニ</sub>焦給<sub>ニ</sub>實南閻浮提無<sub>レ</sub>竝御本尊三國相承靈佛

也申<sub>ニ</sub>今日本機緣盡<sub>ニ</sub>侍<sub>ニ</sub>被<sub>ニ</sub>思知<sub>ニ</sub>哀也時傳燈聖德

太子并蘇我大臣涙<sub>レ</sub>流彼豐浦寺炎共成<sub>ニ</sub>焦給<sub>ニ</sub>人々

(十五才)

皆取止、不及力止給、但彼炎上中、一奇特侍、彼

釋迦彌陀、二尊各鳥瑟、頭竝光明赫奕、猛火不<sub>レ</sub>理

給、御座、守屋見就、取出種々罪奉<sub>レ</sub>行、不<sub>レ</sub>損給、其

時守屋大嗔、幾内五个國炭集十方吹立、七日七夜

塗身苦奉、雖<sub>レ</sub>然如來不<sub>レ</sub>損給、猶放<sub>レ</sub>光明給、守屋不

及<sub>レ</sub>力難波堀江投入給、或傳云此幾内炭、苦奉、大臣父、  
時欽明聖代時、罪行津國難波海沈中、

雖<sub>レ</sub>然水面浮共立竝給、尔時守屋兄才初、上下口々誹謗

申、依水底沈隱給、其誹謗言、抑吾朝災、成人形火、不<sub>レ</sub>燒水、不<sub>レ</sub>沈、  
併符都大明神同天地神々他方、拂給、

其時晴天白日成、頓、大風大雨降雷電礮礮、亦黑雲一

(十五ウ)

村飛來城、上覆、其中異類異形鬼在高聲叫云汝

父欽明天皇佛法不<sub>レ</sub>信敬、破<sub>レ</sub>失故佛法擁護之諸天

其命奪取魂、三途痛、然今汝佛法令<sub>レ</sub>破滅、故命絕

内裏、可<sub>レ</sub>燒火雷火鬼毒王以下聲々叫、此時自君御惱

就給、八月十五日崩御成太子、彼大風大雨御覽禍從

是始、凡一光三尊、衆生利益、爲遠自西天震旦、  
來又日域來給、善光寺如來是ナリ

○太子十五歲、丙午春正月庶妹、穴太部間人皇女立給爲<sub>レ</sub>

皇后、前年即太子之御母也、秋九月即<sub>レ</sub>位用明天皇

諱、橘豐日尊、欽明天皇才四子敏達天皇、才三弟也、盤余池邊雙槻、宮二年

(十六才)

内裏大和國高市郡池邊雙槻村豐日宮申亦用明天

皇申昔從天照大神御代代々重寶神璽寶鏡内

侍所等三種神祇請取始三万機政二千秋万歲金輪聖王

之玉牀安穩奉祝御座一天風和四海浪靜也或傳七日相當日太子奏聞

爰太子有日御門奏奉給樣阿兒閑天子之玉牀奉拜

見侍者實備三王相四海主見給也但御壽限全可レ久不思

奉僅二年十个月見給御淚流給良在抑涙言實玉

牀安穩壽命長遠御座阿兒一身悅思侍共生者必滅

會者定離自元心不任世界也早雨々々打泣給御前之

(十六ウ)

卿上雲客各初雖成天上之悅今愁歎之色深不レ及是

非尔時天皇勅言朕壽之短成不レ歎位不レ奉讓太子生前

恨也勅給太子答申綸言實命肝忝侍共阿兒先生天

竺震且之國王大臣位皆悉經過來侍何此小國之王位望

有耶然阿兒全此土久不レ可有言君臣皇后采女皆流涙

給又有傳云太子十五歲丙午用明天王即位其秋之比

諸臣并將軍等召集守屋以下邪臣誅罰任心三寶

可弘通評定在太子示諸臣勅定有様穴賢可穩密云

此中妄惑不當之愚士在名竹熊云此由大連返註守屋

(十七才)

大臣大驚軍勢引率河内國志記郡阿都部木

本之城引退弓削鞍作阿都部三个所殿舍運

渡構ニ城郭一物部大明神奉祝日夜捧五色幣帛一

無罪用明天皇并聖德太子奉呪咀佛法破滅之

惡行令増長此時天皇御惱就給

(十七ウ)

白紙

(十八オ)

○太子十六歲<sub>丁未</sub>夏從<sub>二</sub>四月之比<sub>一</sub>依<sub>二</sub>守屋大臣咒咀天王

御惱付給誠<sub>二</sub>一天御歎四海之愁成侍<sub>一</sub>太子夙夜看

病御座片時不<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>離御衣帶不<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>夜程裝束掘

不<sub>レ</sub>給<sub>二</sub>天皇御供一飯<sub>一</sub>玉へハ太子一飯<sub>一</sub>玉へリ天皇再飯<sub>一</sub>玉へハ太

子再飯<sub>一</sub>玉へリ天皇取上不<sub>レ</sub>食<sub>一</sub>太子御覽不<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>入誠<sub>一</sub>天上

悲<sub>一</sub>四海之愁此<sub>一</sub>也然<sub>一</sub>太子御衣上懸<sub>一</sub>御袈裟<sub>一</sub>取<sub>二</sub>金香呂<sub>一</sub>

神明佛陀有<sub>二</sub>御祈談晝夜念誦雖<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>懈<sub>一</sub>天皇御惱

定業<sub>一</sub>御座一分無<sub>レ</sub>驗<sub>一</sub>次第日々衰<sub>一</sub>身心夜々疲<sub>一</sub>御座間

太子御淚<sub>一</sub>流<sub>一</sub>最後<sub>一</sub>之<sub>一</sub>孝養<sub>一</sub>勸<sub>一</sub>申<sub>一</sub>給<sub>一</sub>樣<sub>一</sub>抑<sub>一</sub>依<sub>一</sub>君<sub>一</sub>之<sub>一</sub>御惱<sub>一</sub>

(十八ウ)

無<sub>二</sub>他念<sub>一</sub>雖<sub>二</sub>御祈禱申<sub>一</sub>實<sub>二</sub>定業<sub>一</sub>御惱<sub>一</sub>一分之無<sub>二</sub>利勝<sub>一</sub>二<sub>レ</sub>万<sub>レ</sub>更<sub>一</sub>此

世<sub>一</sub>之<sub>一</sub>望<sub>一</sub>思<sub>一</sub>食<sub>一</sub>切<sub>一</sub>一<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>求<sub>一</sub>菩提<sub>一</sub>夫<sub>一</sub>君<sub>一</sub>成<sub>一</sub>一天<sub>一</sub>主<sub>一</sub>先<sub>一</sub>世<sub>一</sub>十<sub>一</sub>善<sub>一</sub>戒<sub>一</sub>功<sub>一</sub>德<sub>一</sub>也

然<sub>一</sub>天<sub>一</sub>子<sub>一</sub>備<sub>一</sub>万<sub>一</sub>乘<sub>一</sub>位<sub>一</sub>普<sub>一</sub>天<sub>一</sub>率<sub>一</sub>土<sub>一</sub>衆<sub>一</sub>生<sub>一</sub>親<sub>一</sub>也<sub>一</sub>國<sub>一</sub>土<sub>一</sub>之<sub>一</sub>衆<sub>一</sub>生<sub>一</sub>惡<sub>一</sub>業<sub>一</sub>

國<sub>一</sub>王<sub>一</sub>御<sub>一</sub>一<sub>一</sub>人<sub>一</sub>之<sub>一</sub>罪<sub>一</sub>障<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>成<sub>一</sub>東<sub>一</sub>來<sub>一</sub>惡<sub>一</sub>趣<sub>一</sub>之<sub>一</sub>業<sub>一</sub>果<sub>一</sub>難<sub>一</sub>遁<sub>一</sub>御<sub>一</sub>座<sub>一</sub>乎

早<sub>一</sub>三<sub>一</sub>寶<sub>一</sub>值<sub>一</sub>愚<sub>一</sub>發<sub>一</sub>大<sub>一</sub>願<sub>一</sub>給<sub>一</sub>夫<sub>一</sub>三<sub>一</sub>寶<sub>一</sub>佛<sub>一</sub>法<sub>一</sub>僧<sub>一</sub>也<sub>一</sub>何<sub>一</sub>世<sub>一</sub>誰<sub>一</sub>人<sub>一</sub>不

貴<sub>一</sub>此<sub>一</sub>法<sub>一</sub>隨<sub>一</sub>彼<sub>一</sub>善<sub>一</sub>願<sub>一</sub>往<sub>一</sub>生<sub>一</sub>佛<sub>一</sub>果<sub>一</sub>無<sub>一</sub>疑<sub>一</sub>然<sub>一</sub>阿<sub>一</sub>兒<sub>一</sub>祖<sub>一</sub>父<sub>一</sub>欽<sub>一</sub>明

天<sub>一</sub>皇<sub>一</sub>御<sub>一</sub>代<sub>一</sub>之<sub>一</sub>時<sub>一</sub>奉<sub>一</sub>隨<sub>一</sub>身<sub>一</sub>一<sub>レ</sub>光<sub>一</sub>三<sub>一</sub>尊<sub>一</sub>之<sub>一</sub>如<sub>一</sub>來<sub>一</sub>來<sub>一</sub>朝<sub>一</sub>慧<sub>一</sub>聰<sub>一</sub>惠<sub>一</sub>弁

守<sub>一</sub>屋<sub>一</sub>親<sub>一</sub>子<sub>一</sub>二<sub>一</sub>代<sub>一</sub>相<sub>一</sub>繼<sub>一</sub>選<sub>一</sub>俗<sub>一</sub>流<sub>一</sub>罪<sub>一</sub>行<sub>一</sub>彼<sub>一</sub>高<sub>一</sub>僧<sub>一</sub>食<sub>一</sub>出<sub>一</sub>善<sub>一</sub>知<sub>一</sub>識<sub>一</sub>

有<sub>一</sub>飯<sub>一</sub>依<sub>一</sub>臨<sub>一</sub>終<sub>一</sub>之<sub>一</sub>信<sub>一</sub>敬<sub>一</sub>至<sub>一</sub>給<sub>一</sub>種<sub>一</sub>罪<sub>一</sub>如<sub>一</sub>草<sub>一</sub>露<sub>一</sub>消<sub>一</sub>業<sub>一</sub>障<sub>一</sub>冰<sub>一</sub>雪<sub>一</sub>

(十九才)

如消安樂不退土可至御教化有ケレハ天王隨喜不レ紅

或説云 此時天王鞍作佛子勅下文六佛像  
奉造立坂田寺安置供養給阿彌陀也

然一天御惱折節成百官晝夜參内群臣其數多中

守屋大臣聞ニ此由ニ忽發ニ惡心ニ高聲異儀申ケルハ抑彼百

濟國所渡佛像是吾朝不吉物者也故欽明敏達二代

帝相承既行ニ還俗流罪一侍人當帝御代御在ニ許用ニ

只今宮中召入 不可然放ニ荒儀ニ大怒云悲哉守屋大臣

天皇御臨終妨 偏 魔縁成悲 尔時蘇我大臣聞ニ守屋

異儀ニ被レ申様抑是爲ニ吾君ニ太子最後勅定備給ヘリ

(一九ウ)

誰人忝太子綸言可背大臣異儀以實無道也急々

彼僧可レ召申給ケル 蘇我大臣使立遂引ニ豐國法師惠聰惠弁

令レ入ニ内裏ニ太子御悅不レ紅握ニ司馬連 手ニ捍レ渡而語云三

寶妙理人不レ知妄生ニ異國説ニ邪見成ニ暴ニ于今大臣心皈ニ福

田ニ卒レ師令レ祈レ壽是阿兒廻レ悲折節喜也云尔時守屋彼僧

來見大床 飛下散々相當云抑吾朝日本國從ニ神代仁皇

至レ今不レ聞ニ佛法云者名ニ如己等ニ異形者無レ更而聖德太子當

代不レ限代々加様異形之者崇ニ國給故天下病難起君受ニ

御惱ニ通身不和成給臣 國禍退 誰敢及ニ異儀一散々相當

(二十オ)

氏云 悲哉守屋逆罪已重々タリ當來之惡趣マテ思像痛ケレ彼僧守屋父時ヨリ  
今二代帝及マテ惡人生會度々雖被行還俗遠流科、哀恨無限云

雖然此無佛世界張ニ 佛法ニ思志是也々々四依弘經并 恨更無ケリ  
弘

其時太子御衣袂覆ニ御顔ニ流ニ御涙ニ給尔時卿上雲客等視ニ

此逆罪ニ一同談合言樣抑吾朝天子者泰天照大神卅七代

御子孫御蒙濯河水上流久御夏共也亦卿上雲客等臣ニ木

又天兒屋根尊 至ニ臣等ニ十七代御苗 齋成ニ主伴禮儀ニ

奉レ助ニ朝家政ニ 者也自レ元君南面臣北面直ニ 貴賤之禮儀ニ者也

夫上代古今 未レ聞ニ卿上雲客之身悲類亂討到ニ 依ニ所犯ニ早

止ニ天上出仕ニ禁獄 可レ被レ處亦配流 可レ行互 僉議種々成問

(二十ウ)

守屋聞ニ此趣ニ重代奉公之用明天皇、最後遷化、御有様、不レ奉レ視

天上退出 重禍至成 去程守屋年來水魚、如契侍告、中

富勝海大臣并舍才弓削小連水ニ云抑吾身既籠ニ成朝敵一日  
連

本國中何浦何嶋歟非ニ王土然思切企ニ合戰ニ打死名欲レ上ニ後代ニ

如何耶々時勝海連弓削各尤可然同心云誠年來之契約、加

様、御一大夏爲也早々軍 計夏可レ被ニ内談申ニ中守屋舍才弓

削小連申様大和國內裏近侍問惡 可レ然相講 城郭、同心人々

引籠、世間、聞守屋勅堪之身、令ニ籠居ニ披露天皇崩御

成給ハ、定兼日 御用意 河内國中尾御陵、可レ有ニ御葬送ニ

(二十一オ)

定給へハ其選御奉<sup>レ</sup>伺<sup>ニ</sup>便宜爲<sup>ニ</sup>神明怨敵<sup>ニ</sup>聖德太子可<sup>レ</sup>奉<sup>ニ</sup>生<sup>イ</sup>

取<sup>ト</sup>申<sup>レ</sup>人々尤可<sup>レ</sup>然同心時守屋大臣大喜云元河内國尾越<sup>ニ</sup>

大臣宿處也亦臣爲本領也生國成可<sup>レ</sup>然殊<sup>ニ</sup>天皇御陵程近早々

打越河内國志記郡木本弓削申處相構城郭楯籠へシ相講

世披露<sup>ハ</sup>勅<sup>カ</sup>壇<sup>カ</sup>之<sup>ハ</sup>身<sup>ニ</sup>籠居云可<sup>レ</sup>申支度<sup>ニ</sup>魔<sup>ニ</sup>彼城之有様片々

田園中一村在<sup>レ</sup>里東西南北遠陵軍七月上旬之比成<sup>レ</sup>諸方

稻取集如山四方築積重號稻村城云へリ四方大堀講<sup>ニ</sup>三重<sup>ニ</sup>

講<sup>ニ</sup>五重木戸<sup>ニ</sup>八方高矢藏支<sup>ニ</sup>度<sup>ニ</sup>數千方杖楯立並軍兵雲

霞如馳集<sup>ニ</sup>其外南北東西城數八个所也本城中高十丈

(二十一ウ)

余榎木其木高矢藏支度大和山城和泉河内軍勢

集甲三千余騎諸國馳集軍兵都合其勢廿九万三千三百九

十余騎<sup>ニ</sup>彼城後<sup>ニ</sup>守屋先祖之氏神物部<sup>ニ</sup>符都大明神<sup>ニ</sup>

奉<sup>レ</sup>祈<sup>ニ</sup>弓箭冥加<sup>ニ</sup>亦無<sup>レ</sup>咎聖德太子咒咀奉<sup>ニ</sup>然靈驗無

雙之神明鳳並<sup>レ</sup>薨珠簾錦帳之光曜大悲利生御身成<sup>ハ</sup>和<sup>レ</sup>光

同<sup>レ</sup>塵内外之鳥居社頭莊殿<sup>ニ</sup>金銀七寶鏤<sup>ニ</sup>心言難<sup>ニ</sup>及<sup>ニ</sup>然禰

宜<sup>ニ</sup>神主<sup>ニ</sup>捧<sup>ニ</sup>五色弊帛<sup>ニ</sup>投<sup>ニ</sup>金銀米錢<sup>ニ</sup>太子咒咀<sup>ニ</sup>侍雖<sup>ニ</sup>然神不

亨<sup>ニ</sup>非禮<sup>ニ</sup>只<sup>ニ</sup>正直<sup>ニ</sup>宿<sup>ニ</sup>頂儀<sup>ニ</sup>耶太子患<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>給<sup>ニ</sup>只守屋城中<sup>ニ</sup>物

佈<sup>ニ</sup>共大來<sup>ニ</sup>抑守屋身親<sup>ニ</sup>手勢共<sup>ニ</sup>一番敵子弓削田大臣<sup>ニ</sup>勇

(二十二オ)

木本大臣三男遠治大臣其外片野小連小野邊大臣守

屋舍弟物部弓削小連并同心逆臣中臣勝海大臣手勢一

千余騎惣近國之勢三千余騎遠國軍兵注不及凡都合

廿九万三千二百九十余騎記ケル

余時守屋勅堪身籠居申合戰用意全世無陰

惡吏千里走好事門不出太子此由聞食雖更驚不給唯

天皇御惱之万死一生成深在御悲歎耳也天皇既御臨終

近成給蘇我大臣小野大臣等被召御惱床被昇起太子

子最後在御對面遺言座様夫朕病尋常之歎歎思

(二十二ウ)

侍今生限只今也哀哉恩愛之道悲哉愛別離苦最後御

淚咽給ケリ良在押奉言太子常出家志深見給相構朕

依三崩御之歎不可出家明年十七歲必元服可執行存侍

先立恨ナレ中就尾越連等佛法皇法朝敵成定汝遺恨

有若彼等誅罰給軍評司馬達内談有政道法小野

大臣請談在相構各不代朕太子覆給苦有御遺言合掌

時善知識僧依向西奉閑彌陀名號奉進念佛十反斗唱御

年四十二歲年號勝照二年七月上旬終生者必滅之理示給へり

實十善万乘之御位勢力自在乍申無常使不免上然

(二十三オ)

去年秋御則位在、今年秋御昇霞也、誠電光朝露之

世中也中、太子御母間人皇后不レ飽別之御歎沈、給哀也

侍女采女悲聲、月卿雲客愁歎無レ聲、方殊太子御悲歎

心言難レ及貴賤雖ニ隔有レ親子離別悲無レ心身思可レ知

太子御淚流言、様是守屋大臣奉レ兇咀殺ニ者也、言御恨

深思食間玉鉢、御棺納假、十市池上奉レ移深ク藏給

余時太子諸臣并將軍等告言、抑守屋勝海兩臣爲レ佛法

成レ怨敵ニ爲レ皇法ニ爲レ朝敵ニ畢然天皇御最後之時、御恨

深、問御送以前鬪尉一御孝養可レ思、宣旨被下ケリ

(二十三ウ)

此時諸臣押レ淚奏申様君之御昇霞之折節剩御

葬送、以前合戰之御企、後々末代之間、不レ可レ然旨一同奏

被申ケレハ、太子重言諸臣申處最叶ニ道理、雖然守屋重

重犯罪云雖レ盡先一歲與嚴寺令ニ敗壞ニ佛像經卷破

損、并僧尼蹂躪、還俗流罪行亦今年天皇呪咀煞奉

而已、御最後臨終折節、狼籍謀叛企、以外之喧嘩也然

天王御在生時、互胡越成レ思、况御喪後、相隨、不レ可レ有只

彼等誅罰、言ケレハ諸臣最御理也、申ケレハ聽四天之大將

軍、被定先一番小野大臣、被レ名持國天、二番蘇我大臣名

(二十四オ)

多門天ニ三番秦、河勝名ニ廣目天、四番遠見亦禱臣、名ニ増長

天ニ給四天之幡、被レ指、サテ太子之御兄弟、武山、皇子入野

尊八嶋部王子麻呂子王子磯嶋尊椿、市、王子筒嶋尊、

米目王子小林尊池邊王子、手王子小槻、王子萱野王

子朝霧遠屋尊磯田王子竹田尊田村、尊押坂、王

子額田朝香王子大別、尊大原王子岡本王子走出王子

立野尊早木王子石見尊清見、王子高岡王子難

波王子 已上五十三騎ニテ 鶴宮、打出

蘇我大臣勢、先會弟稻目部連、境部臣境瀬臣板夫

(二十四ウ)

連蘇我大臣子息、入鹿大臣嶋角、臣神手、小連疾目、臣古

臣馬耳連等也其孫、小林大夫鳥取連、八木大臣弓削連

椎坂輕野臣立山、戸連一門、鳥野、連白雲、大連早行連

王陳、連佐伯大連舟江連、繩手連八代、大夫三成連武

野武箭連等始、一門卿相纔五十七騎、高橋宮、打出

妹子大臣勢、子息小野、田連高名臣伊梨野臣孫嶋

角太夫日野臣檜岐麻呂大臣舍弟、勝野大、夫近江臣

浦清水、大夫稻瀨、連勝野、田木始、神屋宮、六十二騎、先陳

懸打出ッ

(二十五才)

大伴糠手連勢 子息中見臣波多馬手連舍弟大伴村

主鳥村大夫一門 大伴紘子連大鳥部松子連小鳥邊大夫

始 已上其勢三十二騎 飽波宮 打出

阿部境 部臣勢 子息鯨 子連孫馬手連鹽屋連葛木

臣橋本臣吉備海部 羽嶋 連賢子連 小野田連 小山田立野

連武山 大臣犬養 造穂積 臣中屋臣早野連木始

已上廿四騎 岡本ヨリ 打出ツ

秦川勝勢 子息勝田大臣川來連勝野造 舍弟川滿

連安河大臣鳥河 造等始 已上其勢廿騎 法貴寺

(二十五ウ)

宮 打出ツ 凡六个處宮 打出ル其勢纔二百五十三騎也

守屋勢卅万騎聞 對陽 不可及云へり 雖然七月六日斑鳩

宮 打出給テ其日申尅 生駒峰 打登太子言 此日比内典

外典盡言和面誘引 共御方軍兵纔二百五十三騎此勢

斗太子呵羅々々笑 給ケリサテ太子其夕 河内國澁河假

屋城籠 給ケリ是 不知守屋勝海連等申 此間太子天

皇御惱御歎沈給万支損置 給ヘル由承然今夜蘇我大

臣宿處高橋押寄先蘇我大臣等打取穴太 王子宅部

王子二人御靈 廻向上テ其後太子奉レ打事 糸可 安既打立

(二十六才)

癡ナレ二人之王子トハカ、リケル處太子只今既發向給志記澁河舟越先帝之夏也

若江人走騒告ケレハ守屋聞レ是實敷不レ思使遣見セケルニ一

定也告ケル間城郭木戸堅里々道々關居太子待懸上ル守

屋軍兵申太子軍兵定無勢御座サレトモ其中只一人不

座皆是勇猛強盛之軍兵共夜陰臨忍打被レ打奉トテ終

レ夜カ、火ヲタキ大鼓打螺吹稠雖用心太子夜打不足也其夜

澁河假屋城楯籠給ヘリ明七日拂曉諸臣召言阿兒煞生

深令痛聞先逆臣城立ニ使者欲レ聽ニ心之所趣如何言ケレハ

四大將最同心申問使遠見赤壽一通之御書遣ケリ其狀云

(二十六ウ)

抑吾國者天神七代地神五代以來至仁皇苗裔治國

掌代政始自己來水上皇尊子々孫々御計也然今汝等

奉背朝帝之命違背重々之宣旨不レ奉レ恐天下中就鵝

王有ニ出世ニ哀ニ衆生ニ故崇ニ西天之佛法助ニ東土之群類御計有

所違背雌雄是悲剩堂塔佛閣令放火破滅佛像經卷一

此上爲皇法ニ朝敵爲佛法ニ怨敵也今不滅逆心天下群類

難濟度以レ先試相尋子細爲皇子達并諸心臣今爰發向

且者悔先非且留後惡破却楯籠城塙改惡心可レ參

悲哉汝等不レ知佛法深理迷因果道理只翻一心得億劫

(二十七オ)

寶<sup>ハ</sup>然<sup>ハ</sup>奉<sup>ル</sup>崇<sup>ム</sup>神<sup>ノ</sup>明<sup>ニ</sup>可<sup>ク</sup>貴<sup>ム</sup>佛<sup>ノ</sup>法<sup>ニ</sup>若<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>是<sup>レ</sup>改<sup>ム</sup>邪<sup>ノ</sup>見<sup>ヲ</sup>歸<sup>シ</sup>依<sup>ル</sup>三

寶<sup>ハ</sup>息<sup>ヲ</sup>偏<sup>ニ</sup>執<sup>リ</sup>生<sup>ニ</sup>信<sup>ヲ</sup>敬<sup>ス</sup>然<sup>レ</sup>共<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>善<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>識<sup>ト</sup>同<sup>ク</sup>神<sup>ノ</sup>明<sup>ノ</sup>佛<sup>ノ</sup>陀<sup>ノ</sup>與<sup>ス</sup>

行<sup>ハ</sup>俱<sup>ク</sup>共<sup>ニ</sup>悅<sup>ム</sup>足<sup>ク</sup>者<sup>モ</sup>也<sup>ナリ</sup>仍<sup>シテ</sup>狀<sup>ト</sup>如<sup>ク</sup>件<sup>ナリ</sup>

勝照三年七月七日守屋大臣宿町 阿兒等狀トソアソハシケル

サル程二人大臣御狀給守屋宿町行此趣云入守屋超<sup>ス</sup>狀<sup>ト</sup>

拜見雖<sup>ト</sup>申<sup>テ</sup>兩<sup>ノ</sup>使<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>對<sup>シ</sup>面<sup>ニ</sup>門<sup>ノ</sup>外<sup>ニ</sup>立<sup>テ</sup>存<sup>テ</sup>外<sup>ナレ</sup>雖<sup>シテ</sup>然<sup>レ</sup>守<sup>ル</sup>屋<sup>更<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>承<sup>ル</sup></sup>

引遍牒申ケリ其狀云、

謹闕ニ上宮太子之繪<sup>(繪)</sup>旨<sup>ハ</sup>大<sup>ニ</sup>衣<sup>ノ</sup>規<sup>ノ</sup>式<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>非<sup>ニ</sup>日<sup>ノ</sup>城<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>之<sup>於</sup>風<sup>ノ</sup>儀<sup>ニ</sup>

夫吾朝者神國<sup>ニ</sup>崇<sup>ム</sup>神<sup>ノ</sup>明<sup>ニ</sup>祭<sup>ス</sup>神<sup>ノ</sup>祇<sup>ヲ</sup>事<sup>ス</sup>往<sup>テ</sup>古<sup>ノ</sup>定<sup>ム</sup>法<sup>也</sup>然<sup>レ</sup>仁<sup>ニ</sup>

(二十七ウ)

\* 皇十代御門崇神天皇御世 水上大日 靈 尊自奉始已

來當帝御代及三卅二代一敢持無退轉一者也然豐國 聖德太

子誕生給以來始取三集異國人形一號三新儀之佛法一給へり

於三臣等一未<sup>レ</sup>聞<sup>ク</sup>先<sup>ニ</sup>跡<sup>ニ</sup>依<sup>テ</sup>之<sup>貴<sup>ム</sup></sup>本<sup>ノ</sup>朝<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>明<sup>ノ</sup>之<sup>靈<sup>ヲ</sup></sup>荒<sup>ク</sup>奉<sup>ル</sup>

國家不<sup>レ</sup>太平一四海及<sup>テ</sup>亂<sup>ニ</sup>動<sup>ス</sup>一人民多<sup>ク</sup>病<sup>ヲ</sup>被<sup>テ</sup>侵<sup>ル</sup>死<sup>ス</sup>輩<sup>充<sup>ル</sup></sup>

滿<sup>ク</sup>此<sup>上</sup>日本<sup>ニ</sup>任<sup>テ</sup>風<sup>ノ</sup>儀<sup>ニ</sup>破<sup>テ</sup>滅<sup>ス</sup>佛<sup>ノ</sup>法<sup>ヲ</sup>一令<sup>テ</sup>信<sup>ヲ</sup>敬<sup>ス</sup>神<sup>ノ</sup>明<sup>ノ</sup>之<sup>一</sup>道<sup>計<sup>ス</sup></sup>

座<sup>ニ</sup>然<sup>レ</sup>我<sup>等</sup>同<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>仕<sup>テ</sup>奉<sup>ル</sup>背<sup>ニ</sup>宣<sup>旨<sup>ト</sup></sup>爲<sup>ス</sup>國<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>豐<sup>ニ</sup>饒<sup>ト</sup>助<sup>ト</sup>俱<sup>ニ</sup>開<sup>ル</sup>

歸<sup>ル</sup>洛<sup>ノ</sup>喜<sup>ヲ</sup>啓<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>然<sup>レ</sup>屍<sup>ト</sup>此<sup>地</sup>朽<sup>ク</sup>終<sup>ニ</sup>青<sup>ノ</sup>葱<sup>ノ</sup>寧<sup>ク</sup>成<sup>名<sup>ト</sup></sup>末<sup>ノ</sup>代<sup>不<sup>レ</sup>流<sup>ル</sup></sup>

深潭水淵積 新儀之佛法不可信敬 謹尊答

(二十八才)

七月之日上宮太子御返報 守屋狀トソ書タリケル

然兩臣叛參守屋心寐奏答由申上其後秦川勝申

守屋城郭見廻 侍心言不及四方四壁高三重 堀

五重木戸八方高箭倉門々垣楯目驚ニ軍兵幡靡

馳集如雲霧ニ充滿守屋舍弟三嶋細多連大伴大臣

子息弓削田大臣片田小連致多連武熊大夫吉備臣阿都

部連橋屋連遠田大夫等始一門其勢都合十万余騎聞

此外中臣勝海連十万余騎守屋城中校 山林曠野陳取又

御方官軍纔二百五十三騎 百千万一分難及望 今日引

(二十八ウ)

還給テ國々軍兵召集靜御計 有スラント申ケレハ太子聞召

云 悲哉無勢成 今日空引還御方軍兵皆守屋同意

以レ爰佛教云爲ニ佛法ニ身命輕 如ニ瓦礫ニ佛法重 如ニ盤石ニ說然

汝等捨ニ輕命ニ重法可レ與若如レ 說何死有阿兒只一人也不レ然

レ可ニ引還ニ御馬鞭 當先陣懸打出給ヘハ二百五十三騎之官

軍三手分押寄 秦始皇兵法學 漢高祖三畧傳今限

見ケリ毒鼓無明鼓 打蕪大邪見貝吹四門八陳推合恒沙

時上 天地響斗也天鏑 矢鳴渡軍喚箭叫 音上有頂之雲

上下金輪沙界底徹帝釋修羅之喜見城戰是爭可レ勝

(二十九オ)

見ケル南門大將軍大手陳成間太子御方武山王子入野尊

麻呂子親王釵手王子米目王子小林王子遠矢尊并蘇我之

大臣境部臣板夫連八庶大臣神手連始門前近貴寄

射不白切不引面不振戰サテ東門守屋舍弟三嶋細田武

熊大夫鹽屋連始一万余騎堅寄手兵副將軍秦川

勝舍弟川滿川安遠見赤見葛木大養連等始一万余

騎門前近貴寄散々戰ケルサテ阿都部川原之大將勝海

連一門卿相十万余騎堅寄手兵大伴糠手連大吉波多

馬手松子大臣等始一万余騎押寄命不惜散々戰ケル

(二十九ウ)

妹子大臣子息小野田連嶋角大夫近江臣蒲清水等始

以下官軍入賀々々南門大手陳責ケル守屋方三十万騎大勢

箭先調散々訪馬鼻竝懸間無勢成無力太子三返引退

給ヘリ第三度御時御方官軍或落或被打辰冠合戰始

未尅成リヌレハ太子御方釵手王子小槻王子首七人重手被玉ヘリ

其外勝野清水等始五人重手負三人被打蘇我大臣勢板

夫連疾目臣等始手負十人死人八人秦川勝海妹子大臣

等始手負廿三人死輩十三人也已上手負四十五人被打輩

廿四人也ミサル程守屋勝海兩陳被打輩五百余人手負輩

(三十オ)

千余人、聞ケルサル程、太子宮池假治丸御舍人調子丸主従三騎

被ニ打作ニ澁河城御心懸落給ケルニ三嶋弓削波多阿都部

連二百余騎、追懸上ル間二人舍人落失、只太子一人落給ケル

既被打給ヘカリシ太子難遁思食、四方キツト御覽ケレハ御目

近天掠木有一本、太子誓云佛法吾朝可レ弘心無雖ニ草木一

今我助カシト有レ抑ケレハ、即其木左右破、太子風度中懸入

給ケレハ木如レ本愈合ケリ敵大勢追懸、其間三町斗之内

太子不ニ打無念也、彼此雖レ奉レ尋神變御隱、無力空

レ手歸、無念サル程、秦川勝小野妹子大臣等太子奉

(三十ウ)

離渡送レ船盲目杖似、失流涙馳廻、太子奉レ尋思外木

中出給ヒケレハ木又如レ本愈合太子彼木向合、掌言佛法惠命

依ニ此木ニ絞也、神明也々也、御感有、彼木神妙掠木云ヘリ

昔木倒失、今木二代生替也、忝太子六具指堅、栗毛馬七尋余大馬、乍レ召彼木

有ニ御出ニ敵御方同心奇特也、奉感

其後太子澁河城引還給、官軍共飯酒、與御馬水草

令餉給ヘリ、明朝澁河之城開、大和國鷓鴣宮、還行有三日

經亦押寄給ヘリト云サル程、太子命ニ左右大臣言、興隆三寶、利

益ニ衆生、發願非、不可叶故、經曰一切諸法、以願爲根本、願

(三十一オ)

無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>成就<sub>一</sub>故四天王像奉<sub>ニ</sub>造<sub>レ</sub>供養<sub>ニ</sub>致<sub>ニ</sub>祈請<sub>ニ</sub>思早可<sub>レ</sub>奉<sub>ニ</sub>

御曾木<sub>ニ</sub>聽<sub>レ</sub>大臣<sub>蘇我大臣</sub>入<sub>ニ</sub>山中<sub>一</sub>白膝<sub>ニ</sub>之木取來<sub>ニ</sub>太子奉<sub>レ</sub>奏

太子大御喜在言此木天竺<sub>一</sub>白膝薩折羅婆云唐土勝

軍木云軍<sub>イサニカウヤトケリ</sub>勝木書<sub>ニ</sub>今度軍之門出<sub>コソケレト</sub>吉<sub>ニ</sub>御喜在<sub>ケレ</sub>軍兵

皆々悅合<sub>ヘリ</sub>太子自四天王像造給<sub>ケレ</sub>ヘリ一夜中四十九躰御長

三寸也楯面立竝加持供養給發<sub>ニ</sub>大願<sub>ニ</sub>難<sub>レ</sub>有<sub>多聞北持國天東</sub>增長南廣目西<sub>其之</sub>

附  
四天願文

願文云南無皈命頂禮四天王尊像夫忝請<sub>ニ</sub>釋尊之遺勅<sub>一</sub>

成<sub>ニ</sub>佛法守護<sub>主</sub>故今奉<sub>ニ</sub>拜請<sub>ニ</sub>然連<sub>阿兒昔在<sub>ニ</sub>靈山<sub>聽法衆<sub>上</sub>蒙<sub>ニ</sub></sub></sub>

無佛世界之弘法利生勅<sub>ニ</sub>故今生<sub>日域<sub>ニ</sub>欲<sub>ニ</sub>興<sub>ニ</sub>立<sub>佛法<sub>ニ</sub>爰<sub>一人<sub>外</sub></sub></sub></sub>

(三十一ウ)

道在<sub>爲<sub>ニ</sub>佛法破滅障<sub>導</sub>是大魔王也早々<sub>四天王<sub>住<sub>ニ</sub>在世之遺勅<sub>一</sub></sub></sub></sub>

阿兒加<sub>レ</sub>力合戰<sub>令<sub>レ</sub>勝給<sub>然<sub>ニ</sub>建<sub>ニ</sub>立<sub>大伽藍<sub>奉<sub>レ</sub>號<sub>四天王寺<sub>安置<sub>ニ</sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub>

形像<sub>ニ</sub>末法五濁<sub>群類<sub>濟度<sub>共佛果臺<sub>詣<sub>今<sub>然<sub>守屋<sub>從類<sub>降伏<sub>一</sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub>

奉<sub>レ</sub>獻<sub>三</sub>天王<sub>是四天王<sub>不<sub>レ</sub>有<sub>擁護<sub>者怨敵之守屋難<sub>誅罰<sub>庶幾<sub>一</sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub>

釋尊之違<sub>ニ</sub>遺勅<sub>ニ</sub>四魔怨敵降伏<sub>六趣群類利益給<sub>へ若如<sub>祈願<sub>一</sub></sub></sub></sub>

合戰打勝逆臣平<sub>物<sub>建<sub>ニ</sub>立<sub>四天王寺<sub>與<sub>三行<sub>三寶<sub>此願更非<sub>一</sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub>

私願<sub>ニ</sub>諸佛定感應冥衆<sub>必隨喜給<sub>感<sub>若然<sub>佛神天等<sub>一</sub></sub></sub></sub></sub>

加<sub>ニ</sub>威力<sub>ニ</sub>毒矢雖<sub>當<sub>レ</sub>身肉<sub>勿<sub>レ</sub>破利釵雖<sub>切骨穿<sub>無<sub>各金剛那</sub></sub></sub></sub></sub>

羅延身力<sub>令<sub>レ</sub>得給<sub>へト御祈請有<sub>サテ今<sub>一度押寄弓削之</sub></sub></sub></sub>

(三十二オ)

逆徒擲取明日心安三寶與行急奉<sub>レ</sub>訪<sub>二</sub>天王御菩提<sub>一</sub>言

マツサキ懸打出給相隨<sub>レ</sub>官軍<sub>共</sub>今度纔百九十余騎也太

子道終佛法難<sub>レ</sub>弘事御物語難<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>大和信貴山東北阿

多迦邊<sub>ホトリツ</sub>通給<sub>セ</sub>ケリ爰破木荷<sub>タル</sub>田夫一人參<sub>マ</sub>相ケルカ太子無<sub>レ</sub>勞成

御悲歎有能々承荷<sub>タル</sub>破木彼<sub>コノ</sub>投捨<sub>テ</sub>嗟<sub>ハ</sub>合<sub>レ</sub>掌申様カムル

卑賤身<sub>ニテ</sub>侍<sub>ハ</sub>佛法難<sub>レ</sub>弘逆臣難<sub>レ</sub>靜<sub>シ</sub>由承<sub>リ</sub>愚癡心底哀

貴奉<sub>レ</sub>思間御供召具<sub>ニ</sub>是持擔<sub>ヲ</sub>守屋手習<sub>ヲ</sub>程見侍<sub>ト</sub>望

申<sub>ス</sub>不思議ナル太子大有<sub>ニ</sub>御喜聽被<sub>リ</sub>召具<sub>ニ</sub>其田夫齡<sub>ハ</sub>五十

余也長高其身甚大也眼賢力人勝荷<sub>ル</sub>木八束有人奇

(三十二ウ)

試持上<sub>ニ</sub>スルニ大力兵<sub>ヲ</sub>八人土アケヲモセス其擔<sub>ヲ</sub>長一丈三尺太一尺余

柱<sub>ト</sub>大如<sub>シ</sub>桂是非<sub>ニ</sub>只人<sub>ニ</sub>偏權化之人也<sub>ト</sub>佐合<sub>レ</sub>其男名阿多迦翁號<sub>ス</sub>也

サル程守屋彌東西南北八个町城郭構里々村々逆軍群

集<sub>ル</sub>如<sub>シ</sub>稻麻竹葦<sub>ヲ</sub>河内和州津州以外<sub>ニ</sub>軍兵駒鞭<sub>ヲ</sub>馳來<sub>ル</sub>

如<sub>シ</sub>雲霧<sub>ニ</sub>國中充滿山林曠野陣張家々軍<sub>ノ</sub>旗吾不<sub>レ</sub>

劣指上其勢幾千万云數不<sub>レ</sub>知太子是<sub>レ</sub>御覽語<sub>ニ</sub>大臣等<sub>ニ</sub>云

佛法難<sub>レ</sub>值難<sub>レ</sub>弘以<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>知吾愚慮身<sub>ト</sub>雖<sub>モ</sub>忝儲<sub>ト</sub>君身<sub>ト</sub>

二代御門勅報預<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>論言<sub>ニ</sub>万民<sub>ニ</sub>早飯<sub>ニ</sub>依佛法<sub>ニ</sub>逆臣不<sub>レ</sub>可

隨由兼日<sub>ト</sub>今至<sub>ル</sub>宣下<sub>ル</sub>處皆背<sub>ニ</sub>天助<sub>ニ</sub>隨<sub>ニ</sub>逆臣<sub>ニ</sub>是偏愚

(三十三オ)

癡、疇、行、佛、法、難、相、故、也、是、以、法、花、經、文、云、無、量、無、數、劫、聞、是

法、亦、難、能、聽、是、法、者、此、人、亦、復、難、若、但、讚、佛、乘、衆、生、役、罪

咎、破、法、不、信、故、墜、於、三、惡、道、云、へ、り、是、佛、法、難、信、難、弘、夏、也

而、違、勅、命、隨、逆、臣、悲、ト、テ、太、子、ハ、ラ、ト、泣、給、へ、承、及、官、軍

皆、鎧、袖、濕、無、其、時、山、麓、老、翁、一、人、山、畠、打、有、ケ、ル、カ、鍬、提、出、來

太、子、行、相、上、ル、時、太、子、急、御、馬、下、給、ケ、レ、ハ、官、軍、共、皆、馬、下、ケ、リ

太、子、老、翁、御、顔、指、合、御、物、語、雖、有、人、是、不、知、サ、テ、太、子、御

着、折、有、御、用、意、赤、糸、鎧、白、星、打、甲、御、劔、弓、筋、給

左、青、地、錦、鎧、直、垂、御、免、有、過、分、至、也、御、劔、十、文、字、ハ、キ、大、中

(三十三ウ)

黒、矢、負、重、藤、弓、大、タ、ク、マ、ン、キ、ヲ、絃、音、々、々、ト、シ、ケ、ル、氣、色、普、通、之

人、不、見、年、齡、六、十、計、白、髮、半、過、目、カ、フ、ラ、高、目、大、眼、中、金、色

有、光、其、長、七、尺、斗、也、太、子、是、御、覽、大、御、喜、有、俄、除、目、取、行

給、へ、り、此、老、翁、坂、本、參、ト、テ、坂、相、臣、名、付、給、へ、り、阿、多、迦、參、付、ケ、ル

田、夫、阿、多、迦、造、成、ケ、ル、二、人、共、甲、冑、給、官、位、昇、間、由、疇、不、知

官、軍、共、云、ケ、ル、様、未、推、出、高、名、見、へ、タル、支、侍、ラ、ヌ、ニ、兼、官、位、昇

不、足、ナ、レ、ト、申、合、ケ、ル、サ、テ、此、度、面、々、勇、猛、之、心、住、守、屋、城、へ、ソ、押、寄

此、時、先、陳、小、野、大、臣、後、陳、蘇、我、大、臣、也、先、陳、マ、ツ、サ、キ、絹、着

女、姓、一、人、來、間、小、野、大、臣、大、怒、云、ク、軍、門、出、女、人、相、不、吉、荒、々

(三十四オ)

制<sup>セイ</sup>ケレ共女少<sup>シヤク</sup>不<sup>サ</sup>レ驕<sup>カス</sup> 夫軍門出<sup>サツカス</sup>女人相給<sup>ニヒメコソツ</sup> 今度合戰<sup>イマノ</sup>御勝可<sup>ミカシ</sup>レ有故也<sup>ト</sup>

付<sup>ツキ</sup>ニ此言<sup>コト</sup>一口傳<sup>クハツ</sup>在<sup>ニ</sup>神宮皇后之<sup>カミミヤノミコノ</sup>新羅對治夏也<sup>ニシラノタガヒナツメ</sup>云<sup>イハ</sup>ヘリ此聞<sup>コト</sup>小野大臣<sup>コノノノオノノ</sup>ケニモト思馬打<sup>オモウマウチ</sup>ノケ通<sup>ト</sup>

彼女太子參相胸間<sup>カノメノタチノサマノムネノマヅ</sup>六目鎗矢取出<sup>ムロクメノヤリヲデ</sup>奉<sup>ヲ</sup>ニ太子<sup>タチノ</sup>申様此矢<sup>コトノヤリ</sup>只今<sup>イマ</sup>

佛法怨敵之守屋<sup>フツポフノオンノノ</sup>最中射年來之本望<sup>サマノミヤノトシノマシノホノノゾク</sup>遂給<sup>ツキ</sup>ヘト云<sup>イハ</sup>是則<sup>コト</sup>

口傳<sup>クハツ</sup>教興寺<sup>ケウキウジ</sup>弁才天也<sup>ヒンサイテン</sup>其後太子官軍勇成<sup>コノノノタチノクワンクンユウセイ</sup>テ吾不劣<sup>ワガニセ</sup>進<sup>シ</sup>ケルサル程守<sup>シヨウ</sup>

屋高矢藏打登<sup>ヤカウヤサウチノトノ</sup>太子又押寄給<sup>タチノマシヨリ</sup>ヘルヲ奉<sup>ヲ</sup>見申<sup>ミマシ</sup>能々佛法弘度<sup>ニヒヒノミヤノ</sup>

思食<sup>シヤク</sup>纒<sup>マシ</sup>小勢<sup>コノセ</sup>或被打或疵<sup>ハヒ</sup>ヲ被<sup>カ</sup>殘少見給<sup>ノコシノミ</sup>ヒルマス又押寄給<sup>マシヨリ</sup>ヘハ

ユ、シキ明大將軍哉<sup>アキラノオホノタケノサマ</sup>於<sup>ニ</sup>今度<sup>イマノ</sup>守屋鎗矢<sup>シヤクノヤリ</sup>一奉<sup>ヒツク</sup> 咲ケルサル程<sup>シヨウ</sup>

太子三手分三方<sup>タチノミツテノミツ</sup>推寄時突<sup>オシヨリノトキノツク</sup>造<sup>ツク</sup>ケル守屋方<sup>シヤクノカタ</sup>待稱<sup>マテイノナリ</sup>ナレハ

(三十四ウ)

獺大邪見之音<sup>ノブノオホノサヤミノネ</sup>上時聲<sup>ノウノトキノネ</sup>合ケル爰<sup>コノ</sup>阿多迦山<sup>アタカノヤマ</sup>參<sup>マシ</sup>ケル阿多迦<sup>アタカ</sup>

造<sup>ツク</sup> 只一人阿都部城打向遠敵<sup>タチノヒトノアツベノシヤノチノウチノトウノトウノ</sup>射落石<sup>イライシヲ</sup>打害<sup>ウチガシ</sup>近櫓<sup>チカノ</sup>打煞<sup>ウチコロス</sup>

太刀切門々垣楯重々<sup>タチノキリノカドノカドノカドノカドノ</sup>木戸家々<sup>キドノイヘノ</sup>城郭打破<sup>シヤノクワノウチ</sup>拔捨<sup>ヒキス</sup>ケレハ面ヲ

向者一人無カリケリ又生駒<sup>ムカシノヒトノナシノカケリ</sup>坂本參付<sup>サカノノ</sup>タル坂相臣<sup>サカノノ</sup>利劔<sup>トキノ</sup>拔持<sup>ヒキ</sup>阿都部

河原稻村城打向面<sup>カワノノイヌノムラノシヤノチノウチノ</sup>不<sup>セ</sup>振懸入<sup>ヒラケ</sup>中臣勝海連<sup>ナカノノ</sup>十万余騎中<sup>トウマンニヤクノ</sup>

取籠散々<sup>トケノ</sup>戰ケル中臣勝海連<sup>ナカノノ</sup>處大力<sup>トコロノチカラ</sup>甲者也<sup>ウツモノ</sup>トハ乍<sup>ト</sup>云

權化兵阿多迦造<sup>ケンカノヒノアタカノツク</sup> 相<sup>サマ</sup> 一手モトラス被<sup>カ</sup>レ<sup>レ</sup>打太子御方兵<sup>ウチノタチノミカドノヒノ</sup>迹見赤<sup>アトノミ</sup>

檮秦川勝吉備羽嶋坂本神手連等始<sup>ヒノアキノカハノカチノヒノノ</sup>廿三騎者共一<sup>ニヤクノ</sup>

二木戸破<sup>ニノキドノ</sup> 守屋一強<sup>シヤクノ</sup>婆多連弓削小連等始<sup>ハハタノ</sup>二千余騎<sup>ニヤクノ</sup>

(三十五オ)

打向イッ今最後戰ト、カウ たり秦シ始皇シ兵法習漢高祖シ三略傳學セシ

人ヒト彼太子ノ神力相ム 目暗心失メ、レ、キケルコソ哀也ニ 奇特キ在合戰ノ半ハ

見ミ時トキ虛空クウ黑雲クモ 時トキ音繁ネ 上太子ノ御方也ト 名乘兵ノ在大盤ニ

石雨シ渴磨カ輪寶刀リン 如ニ雨雨アメ下逆軍頭ノ 鏝透ニ 射矢シ 射空ニ

打折ウ 多シ陳屋火懸チ 猛火マ 滿ミ 天西風テン 頻吹敵陣ヒ 黑煙ク 吹入フ 入ル

逆軍力弱ギャク 弓箭本末キウ 不知シ 甲カウ 脫鎧ト 捨落散シ 其數不知是

即四天王ソク 御加護ミ 愍ニ 三世諸佛サン 十方シウ 聖衆シウ 一佛イツ 不レ 漏ル 太子ノ 合力カ

座ザ 云ト へリ然間御方シ 彌勇ミ 成責入シ ケリ 其時守屋シ 子息シ 阿都

部連等始首シ 甲カウ 三百余騎サン 阿都部南門ア 今最後打出イ

(三十五ウ)

太子ノ 御方ノ 二人客軍少ニ ヒルマス打向ニ 三嶋阿都部連申様

此ナル兵ヘ 日比太子御方ニ 無ク 者尋見テ 三嶋連進出ニ 大音聲ト

申様抑今日太子御方大將軍外二人客軍勇成戰コソ

以實佐ニ 誰人御名乘有ニ ソ申ケル其時坂相臣放ニ 大言一名

乘様汝等對非ニ 可ク 名乘ニ 弓箭法ニ 有間我名名乘靜聞

吾レ 是レ 國非レ 仁天竺靈山之大衆ニ 毘沙門天ト 是我也今日日本ト

信貴山住持常須彌之半服住四魔之惡魔降伏ト 多聞天ト

吾事也我ト思ハン兵近寄ニ 手習ニ 程見ニ ヤトテ利劔打振懸入ト

給ハ へ惡業ニ 兵風前塵如四方ハットソ散ニケル 爰勝海連舍弟

(三十六ウ)

大野連十市大夫云者始、五百余騎、打出阿多、造打向大音

上申様吾是天兒屋根尊、廿一世御孫。大中臣勝海

奉仕

連敵<sup>附</sup>大野連、吾也是座、客軍誰人名乘聞、云タリケリ

阿多迦造是聞珍、承ユ早吾對、汝等ニ非レ可ニ名乘、今

何、可レ隱太子佛法歸依、志懇切、御座間命、不惜合力、今日

名阿多迦、造常住、栖、天竺清涼山竹林精舍住持、大聖衆文殊

吾事也、是ハ阿多山ニテノ山人也、名乗終、件擔ヲツ取懸入、給ヘハ如ニ雲

其時八束薪十二部經也又檀文殊銀也

霞二軍兵佛力神力、コラヘスシテ、吾先、落失、サル程、稻村城中、大ナル

榎木有、是高矢藏、支度守屋高矢藏、登、太子、近給、

(三十六ウ)

只矢一射落奉、六目鎬、打番、大音聲、名乗様三千年一度

開優曇花、只今太子相、珍、此矢守屋私、非ニ放矢ニ氏神物

部、大明神放給フ御矢也、既、戸太子請取給、トテ能引、放ケリ、其

矢走渡太子御鎧當落、太子迹見赤禱將軍命護世四天王

御矢雖レ放言、赤禱詔承、誓云是吾非ニ放矢、又非ニ太子御矢ニ

是即護世四天王放、給御矢也、定弓、惠矢番和順引廻

六目鎬、ツトソ、射渡ケル、其鎬、目、每三、飯神咒讀經等各別

音出、如、雷、高矢藏、三返、鳴廻、垣楯、間、ツト入、守屋、胸坂

ハツタト當、アケマキ懸、ウラ、風度、射透、ケル、守屋、心猛思、四

(三十七オ)

天王御矢當暫タマラス高矢藏、マツサカサマニソ落ニケル大將軍射

落サル、ヲ見テ逆軍共亂、騷御方官軍勝乘、責入ケルニ

卅万騎聞、兵行方不レ知落失ケルコソ不便ナレ其時秦、川勝

太子秦様今日合戰多矢數守屋雖、當其身一不レ立

四天王御矢、忽射落トテモ、御支四天王御劍給テ守屋、

首勿侍ラント申ケレハ太子可然丙毛、銘打御劍給ケル川勝

馬、飛下守屋向云汝不レ知因果理、恣、逆罪造只今欲

入ニ禁裏ニ早改ニ邪見ニ宜ニ守屋云守屋聞ニ此言ニ合掌唱云、

如我昔所願今者已満足化一切衆生皆令レ入ニ佛道ニ云ヘリ

(三十七ウ)

川勝返答云我願既滿衆望亦足如レ是互心閉唱守屋、

首勿ケリ哀哉守屋生年卅六歳、河内國志城郡弓削城、

朝露消名末代殘ス云太子守屋頸御覽ノ能々孝養

宮池鍛冶師丸預法隆寺、孝養在、

付レ劍ニ沙汰在 一丙丁槐、劍是劍蘇我大臣預、劍也今天王寺高藏、在云、  
一吉切槐、鏃是劍ニテ守屋頸取太子入滅第三年當照雲卷天上、

大將被レ打後守屋子共十五人被レ、打手負疵、被者幾千万、

云數不レ知擲取生取、二百七十三人也守屋城火懸天界霞、燒

上勝時トット作、入レ夜澁河城ヘソ引還給ケル二人客軍鎧甲

弓箭門外脱捨行方不レ知失ニケルコソ奇特ナレト云、

(三十八才)

去程守屋并勝海連等押領所々田園河内國弓

削鞍作 祖父間衣摺地草足代御立葦原町集

十二万八千六百四十町攝津國勢摸江鵜田熊瀨水

散地所集五万四千二百十代都合十八万六千八百

九十代悉寺々寄進 早但守屋私領一万領以迄

見赤禱勸賞 行 本願緣起云守屋臣是生々世々相傳之破賊也  
昔於震旦現男女身一教化衆生一時吾身隨

順如影不離 經五百生 決云守屋臣敏達天王即位年四月三日任大

連守屋首切太刀 長二尺五寸ハ本ヨリ六寸計置有銘以黃金  
鑲四ノ字此劍ハ長谷川在之

銘丙毛 同十日太子大和國神屋宮引飯給太子詔云  
槐林

(三十八ウ)

逆臣滅 今安堵 仰故其所 近來安堵 申去生取所二

百七十三人男女召人皆死罪可行 由諸臣一同奏 太子

死罪 ナタメサセ給ヒテ 流罪定 兄部連小野連以下二百

七十人鬚鬚剃太子御自 教化御 面々發心三飯持

釋尊遣法御弟子成昨日 逆臣侍黨 今日 引替佛

陀弟子成 順逆二縁共皆皈佛乘理 法師之形成上

業行僧成ヘカリケレトモ佛法違犯咎罪障懺悔爲天王

寺法隆寺四十六个寺等諸寺承仕法師爲配分

遣之又守屋大臣勝海連等宗 大將軍頸八法隆

(三十九オ)

寺廻廊之乾、才三間柱下深埋御孝養共有守屋

頸<sup>ニ</sup>法華經<sup>ト</sup>書<sup>ニ</sup>光明眞言<sup>ト</sup>又殘<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>生<sup>ク</sup>取<sup>ル</sup>六十余人<sup>ト</sup>内守屋

妻妾并息女以下廿余人<sup>ト</sup>相節<sup>テ</sup>所<sup>ニ</sup>添<sup>テ</sup>甲斐國<sup>ト</sup>物部

信濃國<sup>ト</sup>安曇更級<sup>ト</sup>流遣<sup>テ</sup>守屋妻者阿部境<sup>ト</sup>部臣妹

檜隈<sup>ト</sup>姫也又息女者玉照<sup>ト</sup>姫女也女人心<sup>ト</sup>夫<sup>ト</sup>別<sup>テ</sup>子母<sup>ト</sup>離親

離國<sup>ト</sup>隔<sup>テ</sup>境<sup>ト</sup>隔<sup>テ</sup>悲<sup>シ</sup>心<sup>ト</sup>之中<sup>ニ</sup>推<sup>シ</sup>量<sup>シ</sup>哀<sup>シ</sup>也就<sup>テ</sup>中<sup>ニ</sup>玉照<sup>ト</sup>姫太子

御妳母<sup>ト</sup>何宿<sup>ト</sup>給<sup>フ</sup>ヘカリケレトモ<sup>ト</sup>中<sup>ニ</sup>臣<sup>ト</sup>羽取<sup>ト</sup>連<sup>ト</sup>妻女<sup>ト</sup>ナリケル故

蘇我大臣強<sup>ク</sup>訴<sup>テ</sup>申<sup>テ</sup>太子<sup>ト</sup>刀<sup>ヲ</sup>及<sup>セ</sup>不<sup>レ</sup>給<sup>フ</sup>羽取<sup>ト</sup>連<sup>ト</sup>相共<sup>ニ</sup>上<sup>リ</sup>野國

流<sup>レ</sup>守屋<sup>ト</sup>二男<sup>ト</sup>片野<sup>ト</sup>田連<sup>ト</sup>三男<sup>ト</sup>辰孤<sup>ト</sup>連<sup>ト</sup>等<sup>ト</sup>筑<sup>テ</sup>前<sup>ニ</sup>國<sup>ト</sup>鞍手

(三十九ウ)

肥前松浦<sup>ト</sup>流<sup>レ</sup>遣<sup>テ</sup>此外<sup>ニ</sup>橋屋<sup>ト</sup>連<sup>ト</sup>以下<sup>ニ</sup>人<sup>ト</sup>筑<sup>テ</sup>後<sup>ニ</sup>國<sup>ト</sup>山本<sup>ト</sup>御井

豐後國<sup>ト</sup>大野<sup>ト</sup>海部<sup>ト</sup>流<sup>レ</sup>遣<sup>テ</sup>此外<sup>ニ</sup>屋<sup>ト</sup>屋<sup>ト</sup>從<sup>テ</sup>類<sup>ト</sup>十<sup>ニ</sup>余<sup>ト</sup>人<sup>ト</sup>四<sup>ニ</sup>大<sup>ト</sup>將

軍別<sup>ト</sup>給<sup>フ</sup>又<sup>ニ</sup>守屋<sup>ト</sup>私<sup>ニ</sup>領<sup>テ</sup>田園<sup>ト</sup>十二<sup>ニ</sup>万<sup>ト</sup>所<sup>ト</sup>蘇<sup>レ</sup>我<sup>ト</sup>大臣<sup>ト</sup>妹子<sup>ト</sup>大臣

大伴<sup>ト</sup>糠手<sup>ト</sup>連<sup>ト</sup>秦<sup>ト</sup>川<sup>ト</sup>勝<sup>ト</sup>等<sup>ト</sup>配<sup>テ</sup>分<sup>テ</sup>給<sup>フ</sup>逆<sup>テ</sup>徒<sup>ト</sup>共<sup>ニ</sup>諸<sup>ト</sup>國<sup>ト</sup>配<sup>テ</sup>流<sup>レ</sup>被<sup>ル</sup>

上<sup>レ</sup>今天<sup>ト</sup>下<sup>ニ</sup>靜謐<sup>ト</sup>本願<sup>ト</sup>緣<sup>ト</sup>起<sup>テ</sup>云<sup>フ</sup>守屋<sup>ト</sup>臣<sup>ト</sup>是<sup>レ</sup>生<sup>ク</sup>々<sup>ト</sup>世<sup>ト</sup>々<sup>ト</sup>相<sup>ト</sup>傳

破<sup>レ</sup>賊<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>震<sup>レ</sup>且<sup>ニ</sup>漢<sup>ト</sup>土<sup>ト</sup>現<sup>レ</sup>男<sup>ト</sup>女<sup>ト</sup>身<sup>ト</sup>ニ<sup>レ</sup>弘<sup>ク</sup>興<sup>テ</sup>佛<sup>ト</sup>法<sup>ト</sup>教<sup>ト</sup>化<sup>シ</sup>有<sup>ク</sup>情<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>時

從<sup>テ</sup>順<sup>テ</sup>吾<sup>ト</sup>身<sup>ト</sup>ニ<sup>レ</sup>如<sup>ク</sup>影<sup>ト</sup>不<sup>レ</sup>離<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>身<sup>ト</sup>終<sup>レ</sup>後<sup>ニ</sup>歷<sup>テ</sup>五<sup>ニ</sup>百<sup>ト</sup>生<sup>ト</sup>發<sup>シ</sup>起<sup>シ</sup>大<sup>ト</sup>小

寺塔<sup>ト</sup>崇<sup>ク</sup>三<sup>ニ</sup>六<sup>ト</sup>宗<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>教<sup>ト</sup>法<sup>ト</sup>是<sup>レ</sup>善<sup>ク</sup>者<sup>ト</sup>敵<sup>ト</sup>成<sup>レ</sup>惡<sup>ク</sup>者<sup>ト</sup>友<sup>ト</sup>不<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>又

太子<sup>ト</sup>討<sup>テ</sup>二<sup>ニ</sup>爵<sup>ト</sup>守屋<sup>ト</sup>臣<sup>ト</sup>ニ<sup>レ</sup>給<sup>フ</sup>支<sup>ト</sup>是<sup>レ</sup>則<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>明<sup>ク</sup>法<sup>ト</sup>性<sup>ト</sup>虛<sup>ク</sup>軍<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>故<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>切<sup>ト</sup>衆

(四十才)

生斷惑證理可成佛顯其理給故三度劣給へりは一  
切衆生之貪瞋癡之三毒煩惱難降伏表示四度必

令誅給支是一切衆生見佛聞法依功德常樂我常四

德波羅蜜可證得一表理實難在太子無明煩惱怨敵

守屋大臣誅給還御大和宮成流涙向用明天皇入滅

之御棺在禮拜押涙生有如御時敬奉御心中具申給

抑佛法王法成障尊大魔守屋逆臣既如思食令誅早

是君最後之御一念御恨深間御葬禮前令誅也今

此世一念不留妄執令遂往生淨土本望阿兒與隆佛

(四十才)

法宿願頓成就先片聖靈始奉訪六趣四生舊親必再  
會一佛淨土奉期御涙流給諸卿皆咽涙去程七月廿

九日御葬御行有御棺莊白御輿奉出宮中一卿上雲

客后妃采女各臥倒同御道泣悲給哀也太子顯孝々

(泣々)

御志御棺御輿後陣之輶御肩懸九子親王御履

脫御跣泣々大和國自河内國中尾御陵山越道遠々

御歩有左右御足血流出草土紅染哀難盡

氏云大聖釋尊父淨飯大王崩御御時自荷一金棺動

葬禮之義式給へり今吾朝聖德太子亦如斯々

(四十一オ)

物道間 哀共心言不<sub>レ</sub>及中 大和國下津道邊下梓 宮中

用明天皇里内裏也名<sub>ニ</sub>離山宮<sub>ト</sub>給<sub>ヘリ</sub>葬禮之御時彼宮

門外御行成 太子三度 悶絶給御顔色替給時刻久移

御共之人々歎之上又歎重御葬御與押留仰天被<sub>ニ</sub>愁

歎<sub>ニ</sub>奇特侍<sub>ト</sub>自<sub>レ</sub>天細雨降 太子之御貞上計瀝 有<sub>ニ</sub>御蘇

生<sub>ニ</sub>押<sub>レ</sub>涙言 父王在生之御時一月兩度定有<sub>ニ</sub>御行<sub>ニ</sub>古宮也

阿兒同有<sub>レ</sub>勇參 今余所栖見成 通支悲 早雨<sub>ニ</sub>ミ御落

涙有<sub>レ</sub>皆人濕<sub>ス</sub>袖其後涙共越<sub>レ</sub>山河内國石川郡科長<sub>リ</sub>里

中尾陵岩屋御棺奉<sub>レ</sub>納給<sub>レ</sub>卿上雲客諸共同陵門原上之

(四十一ウ)

土底 俱奉<sub>レ</sub>泣悲給ケレトモ生死<sub>ニ</sub>之道成<sub>レ</sub>泣々<sub>ト</sub>大和國返給

太子還御道間 御歎共申中々疎也角<sub>ト</sub>豐日宮入給<sub>レ</sub>何

時師子御床 主失奉涙之露積<sub>レ</sub>宮中之東海南北后

妃采女愁歎聲滋 一天書暮四海成<sub>レ</sub>暗 凡<sub>ニ</sub>普<sub>ニ</sub>天<sub>ニ</sub>率<sub>ニ</sub>土<sub>ニ</sub>之

内君崩御 悲淚袖潤如何田父野人至 親子之別悲也况一

天之君成 秋之千草色 歎色見 太子十五歲秋暮 御伯

父敏達天王奉<sub>レ</sub>後又十六歲秋初 父用明天王別給<sub>レ</sub>兩年

俱打連戀慕之淚難<sub>レ</sub>押<sub>レ</sub>但生老病死<sub>ニ</sub>浮<sub>ニ</sub>世<sub>ト</sub>中愛別離苦人間

後先立習 思食難<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>去<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>御佛事<sub>ト</sub>被<sub>ニ</sub>流罪<sub>ニ</sub>僧<sub>ニ</sub>二人

(四十二オ)

尼三人被三召上ニ七々御孝養抽ニ忠丹ニ至ニ懇誠ニ御營ニ時選

日重云共太子御歎彌深

去程阿多迦 御誓願四天王有ニ祈請ニ如ニ御本意ニ思食今

天王寺可レ被レ立定 但於ニ何山ニ可レ令レ取ニ材木ニ有ニ御清談ニ情

以漢土有時道占 正 妹子大臣召具高橋河東辻 御祈

請問之御 時木嶋 森方 烏木 含北 南飛來近邊 樹ノ

枝居 太子言 サテハ 是 此深山入杣取 可也 飯給又稻木

杣原 問レ占給時 一人老翁馬材木負 東山 西行 謠云

荒玉ノ年立飯春風難波ノ浦ニ舟ヤ付ク覽ト

(四十二ウ)

太子是聞召語ニ左右大臣ニ言 是併 佛神告也荒玉云ハ

弓削守屋木日來邪見其妄執改也年立飯云ハ可ニ

興隆三寶ニ年來也春風 佛 春風喻也逆臣滅 他國番

匠瓦作木百濟國海凌 近日難波浦着 急材木取調他

國巧匠木 寺塔造立 云心也難波浦舟付 云弘誓舟也衆

生濟度願可ニ成就ニ也急杣山可レ入遙遠見渡 霞中尋北

山邊入給其比 宇治橋無 筏構 大河渡給其杣山所山

城國愛岩郡土車里柳田郷田夫野人栖也村々在家

少々有東西北三方深山高聳 黑雲常立東西大

(四十三オ)

河有自比南流、南宇治河東、西流、太子云、此地四神相應、地、未來帝都之所也、吾入滅、度後二百余歲、經帝都、

此所移帝王相繼治、代佛法世界住、萬民來集利益、

莫大、讚給誠桓武天王御宇人王五十年天應元年四月、

大和國平城宮山城國長岡宮移、今平安宮是也、然、

太子杣取始、御守本尊、多良木奉懸御自斧取、

大木切給其斧、音山響地動然、間、卿上雲客諸共、木、

切枝剝給太子夕部及還御成、多良木懸奉御守、

取給、更不離給、放光明給、太子詔云、此本尊末代利益、  
就之イロフマンノタラノ木ヤト云フ是ヨリハンマレリ

(四十三ウ)

鑿此止住御、也其義、彼砌一字佛閣、造立給今六角、

堂是也、抑此本尊、申太子七生之御本尊也、然、太子、

吾朝御誕生御後淡路國岩屋浦小唐櫃一海上、

浮光赫奕、現由人申合、太子勅使以慈惠法師也、取給、

御覽御淚流、言是吾七生本尊、御身離不給御長、

三寸三分殿  
三寸金銅如意輪也、是救世觀音、五六角堂緣起、

云上宮太子於震旦為三南岳大師、居三六根相似之位、

於日本顯三上宮太子、備三耳聰利之德、太子本地救世、

觀音也、傳記云救世觀音者、二臂如意輪也、或、

(四十四オ)

十二臂皆有ニ深義ニ太子正是如意輪也然太子多材

木取給任ニ宿願ニ於ニ玉造岸ニ四天王寺建立給畢逆軍

亡魂鯨 魃蚊 蝸 變高鹽荒波 成岸崩寺破 時百濟

國博士學呵高麗德胤木奏云 龍鬼魔緣地也各

相申故太子廿二歲時彼寺移建ニ立 荒陵地ニ委 四天

王寺記有過去七佛入涅槃之地 故荒陵ト云也

太子十七歲  
人王三十三代崇峻天王元年 戊申 御諱泊瀬部 朝倉

尊申欽明天王才二御子用明天王才八御弟也都大

和國十市郡倉橋上宮也太子十七歲 戊申 春三月百

(四十四ウ)

濟國齊明王使律師惠聰等獻ニ佛舍利ニ經云十二粒并

寺工二人鑪盤師一人瓦工二人畫師一人呪師二人渡

實 去年太子道占不レ違人申 并齊明王送文有其

表文云日本王傳奏承 陛下紹レ基 踐レ祚肇 興ニ佛

法ニ漢帝東流夢法王西來獻 於今驗 矣傳燈聖皇

復 誕ニ附神下ニ立レ幢 眞人重出ニ馬臺前ニ臣等不レ堪至

喜奉レ渡ニ三藏大師律師比丘ニ伏調陛下照ニ佛日於

若木之郷ニ掩ニ 慈雲於扶桑之邑ニ也此送文誠以貴漢

帝東流夢者後漢帝明御夢金像東 飛來 御覽

(四十五才)

其御夢不違漢明帝永平七年摩登法關云上人天

竺佛法白馬負來獻漢朝是釋迦教法也誕附神下

口授觀世音禪師

者天竺國達磨大師始到來漢土弘通禪定法後來

臨附神下化導日域衆生附神日本名也立幡真人

重出馬臺前者即是救世觀音變化南岳思禪師

豐日尊妃間人皇女胎內處終二十二月於廐戶宮御

馬前誕生佛法幢立給云心也又馬臺者日本異名也天

朝昔大海中嶋在黑雲常聳霧霞立掩潮鎮滿在見

陰無見又出故馬臺云カケロウト談故野馬臺云異說多之也

(四十五丈)

又照佛日若木鄉天照大神天岩戶閉陰給時此日本國常

闇成夜晝弁無然諸神集七日夜神樂之時五百神之

枝五百鈴付天地感應舞給時大神天岩戶出給故諸

神喜彼木高間原植置給時誓云神力此世有限者枯

楊事勿翠之青葉榮梢鎮若也依之若木鄉申也又

扶桑邑者伊弉諾伊弉冉一神古山嶋海河作鄉々邑

邑定八万四千草木種植給時三鬼有彼草木一夜食

盡二神大敷給多草木失中桑原與蓬計生滋二神

恠其桑梢見給三足金鳥有鳴云桑弓蓬矢以射給

今之鹿野用更

(四十六才)

彼三鬼必滅、鳴早東方指去、今出羽之羽黒權現是也。

本地大圓鏡地、如來不動明王也、尊意得桑弓持三鬼。

滅草木國立衆生憐、給故扶桑邑云へり、此木説依雷電之時、皆人桑原云ナリ。

去百濟國獻送、所佛舍利、橋寺并元興寺奉安置、彼

國、律師比丘等、天王寺法隆寺等、令住持、同渡寺工畫

師瓦造等、以寺々建立給御悅有、皆屋敷共賜令止。

住給畫師鞍作、住呪師等、鞍作西神楽村止住、日本ノツル師始也。

番匠大工廣瀬、郡作田村止住、番匠之先祖。

(四十六ウ)

尾州山田郡内飽津保上村於

太子堂寄進之

松原下總守廣長(花押)

寛正五年甲申三月六日

聖德太子伝 三

(一オ)

○太子十七歲<sub>中</sub>戊冬十月崇峻天皇密召太子曰汝有神

通之賢德從幼少昔人善惡知相云朕即位治<sub>ニ</sub>万乘

寶位<sub>ニ</sub>者幾之年月哉太子勅答有様閑拜見天子王

跡奉<sub>ニ</sub>悉備<sub>ニ</sub>十善御位<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>四海主<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>王相實目出御也但

君一惡相備<sub>ニ</sub>御目内<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>是非命相<sub>ニ</sub>必懸<sub>ニ</sub>劍失<sub>ニ</sub>命惡相

言<sub>ニ</sub>君驚<sub>ニ</sub>叡慮<sub>ニ</sub>太子重奏給<sub>ニ</sub>赤文貫<sub>ニ</sub>眼是必傷害<sub>ニ</sub>之

相也君左之御眼内赤筋十文字通備<sub>ニ</sub>此相<sub>ニ</sub>給人貴賤

上下共必懸<sub>ニ</sub>劍失<sub>ニ</sub>命也若不審御座<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>鏡實否<sub>ニ</sub>可有<sub>ニ</sub>

叡覽<sub>ニ</sub>依君臨<sub>ニ</sub>鏡有<sub>ニ</sub>叡覽<sub>ニ</sub>一定也亦時君驚<sub>ニ</sub>言<sub>ニ</sub>彼非命業<sub>ニ</sub>

(一ウ)

如何轉載太子奏給樣是過去御宿業也若崇<sub>ニ</sub>三寶<sub>ニ</sub>

御<sub>ニ</sub>依<sub>ニ</sub>佛法力<sub>ニ</sub>萬一免<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>歟

氏云惣此帝幼小御時自御心武ノ弓箭兵具翫ヒ物之是

非不<sub>レ</sub>許惡<sub>ニ</sub>シク御座問父王遠國奉<sub>ニ</sub>押籠<sub>ニ</sub>用明天王崩

御後群臣相儀奉<sub>ニ</sub>尋出<sub>ニ</sub>天子位<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>然御長七尺五寸

御眼如<sub>レ</sub>照<sub>ニ</sub>玉内<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>光近<sub>ニ</sub>從人々<sub>ニ</sub>目見<sub>ニ</sub>合奉<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>叶<sub>ニ</sub>云

但君御壽治<sub>ニ</sub>千秋万歲<sub>ニ</sub>玉牀安穩<sub>ニ</sub>雖<sub>ニ</sub>乞願<sub>ニ</sub>依<sub>ニ</sub>御眼<sub>ニ</sub>之惡相<sub>ニ</sub>

御命促<sub>ニ</sub>五廻之春秋可<sub>レ</sub>成御前立給者卿上雲客言<sub>ニ</sub>

太子父用明天王之御良奉<sub>ニ</sub>見<sub>ニ</sub>僅<sub>ニ</sub>二年十个月之前後<sub>ニ</sub>

(二才)

言給一分不違悲歎無申限太子此時之御言一定成廿一  
歲之御時可弁

○太子十八歲己酉春二月倉橋宮參內有國々政執行給

時御門奏言夫日本始已來仁皇十二代景行天王御

代未國々分一嶋國在十三代帝成務皇帝御時始

三十三個國分置給間今無退轉然當帝御代亦分

六十六個國成御座存然閻浮提去海上僅十万余里

五天竺國數九億四万八千六百九個國在是十六大國云

次又三万九千六百余國在是五百中國號次又十二万

八千余百余个國在是十千之小國云然天竺自東去三五

(二ウ)

万里之海上有五之國一震旦二百濟三任那四衡州五

蒙古國也此五個國中納三万五千六百卅余个國是五唐

云又三韓新羅國天羅國高麗國是二万九千七百五

十二略經南山浮州船之數十一億二千六百有餘國在其内佛法繁昌國八百八十個也  
十有余國有其外無量粟散國在阿兒此國內天竺

五唐三韓世々生々成國王生后妃采女弘如來教法利

益衆生就中衡州衡山六生機緣盡今片州日域來臨

而吾朝無量粟散國中秋津嶋云實小嶋國雖其

名無隱僅卅三個國少六十余个國成侍殊吾朝雖賤小

國神明之御國依成他國無隱故東西荒夷雖成望

(三六)

依神明威光美<sub>一</sub> 末代此國不<sub>レ</sub>傾<sub>一</sub> 國主亦忝 大日靈尊

御子孫、代々相續、百王一百代治、天下、一天風納、四海浪靜、

而自<sub>二</sub>神武天王<sub>一</sub>至<sub>二</sub>當帝<sub>一</sub>三十三代也、賢王申者施<sub>二</sub>慈

悲<sub>一</sub>一天<sub>一</sub>哀<sub>二</sub>萬民<sub>一</sub>、御政也、仍國中百姓、令<sub>二</sub>安穩<sub>一</sub>、思食<sub>二</sub>臣下

遣<sub>二</sub>諸國<sub>一</sub>卅三個、六十六個國成道直令<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>給<sub>二</sub>諸國百

姓荷<sub>二</sub>御就物<sub>一</sub>、隔<sub>二</sub>山川<sub>一</sub>、橫行令<sub>レ</sub>苦<sub>二</sub>心身<sub>一</sub>、支不便也、然末代

萬民無<sub>レ</sub>煩樣可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御政<sub>一</sub>、敷奏奉<sub>レ</sub>給<sub>二</sub>天皇大悅<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>然奏

聞也、言<sub>二</sub>天皇聽<sub>一</sub>三人大臣宣旨<sub>下</sub>給<sub>二</sub>其交名<sub>一</sub>近江<sub>二</sub>臣蒲

完人<sub>二</sub>臣鴈阿部<sub>一</sub>、臣牧吹<sub>二</sub>三人也<sub>一</sub>、或說云近江大臣實名蒲完人、大臣実名

(三七)

各戴<sub>二</sub>綸旨院宣<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>向諸國<sub>一</sub>、近江<sub>二</sub>臣東國<sub>一</sub>、下<sub>二</sub>向完人<sub>一</sub>、臣北

國<sub>一</sub>、下<sub>二</sub>向阿部<sub>一</sub>、大臣西國<sub>一</sub>、下<sub>二</sub>向各定<sub>一</sub>、國々境<sub>二</sub>付<sub>レ</sub>名定<sub>二</sub>海道<sub>一</sub>、乃至

貴賤上下男女人民百姓、次才振舞悉<sub>レ</sub>執行<sub>二</sub>定飯洛<sub>一</sub>、參內

申<sub>二</sub>任<sub>一</sub>、勘定<sub>二</sub>國定<sub>一</sub>、付<sub>レ</sub>道<sub>二</sub>由奏奉<sub>一</sub>、分<sub>二</sub>伊勢<sub>一</sub>、國<sub>一</sub>、成<sub>二</sub>伊賀<sub>一</sub>、國<sub>一</sub>、分<sub>二</sub>尾

張國<sub>一</sub>、成<sub>二</sub>志摩<sub>一</sub>、國<sub>一</sub>、參<sub>二</sub>河遠江<sub>一</sub>、一國<sub>一</sub>、分成<sub>二</sub>兩國<sub>一</sub>、伊豆<sub>二</sub>駿河<sub>一</sub>、甲

斐相<sub>二</sub>樸武藏安房<sub>一</sub>、上總<sub>二</sub>下總<sub>一</sub>、常陸<sub>二</sub>國昔<sub>一</sub>、八個國<sub>一</sub>、今成<sub>二</sub>

十五個國<sub>一</sub>、是名<sub>二</sub>東海道<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>十五個國次<sub>一</sub>、近江<sub>二</sub>美濃飛彈信

濃<sub>一</sub>、上野<sub>二</sub>下野<sub>一</sub>、出羽<sub>二</sub>奥州<sub>一</sub>、昔<sub>二</sub>四個國<sub>一</sub>、今成<sub>二</sub>八個國<sub>一</sub>、是名<sub>二</sub>東山

道<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>八個國次<sub>一</sub>、若<sub>二</sub>狹越前<sub>一</sub>、加賀<sub>二</sub>能登越中<sub>一</sub>、越後<sub>二</sub>佐渡<sub>一</sub>、昔<sub>二</sub>三

(四才)

个國コク今成イマナリ二七個國ニシチコク是名ナリ北陸道ホクリクミチ爲七個國次ニシチコクノツギ丹波丹後但馬

因播伯耆出雲石見隱岐昔四个國コノヨリ今成イマナリ二八個國ニハチコク是名ナリ山

陰道カミミチ爲八個國次ニハチコクノツギ播磨美作備前備中備後安藝周防

長門昔四个國コノヨリ今成イマナリ二八個國ニハチコク是名ナリ山陽道サンヨウミチ爲八個國次ニハチコクノツギ紀伊

國淡路阿波讚岐伊豫土佐昔三个國コノヨリ今成イマナリ二六個國ニムヅコク是名ナリ

南海道ナンカイミチ爲陸个國次ニリクコクノツギ筑前筑後肥前肥後豐前豐後日向

大隅薩摩壹岐對馬但壹岐對馬亦此兩國コノヨリ六十六箇國ニムヅコク外

嶋國シマクニ也彼鎮西九个國コノヨリ昔六个國コノヨリ今成イマナリ二九個國ニユヅコク是名ナリ西海道サイカイミチ

爲九个國次ニユヅコクノツギ大和大城河内和泉攝津國オホオホシホノチノクニ是名ナリ五畿内イツセノチ爲五

(四ウ)

都合以上六十六箇國 嶋國二

郡數五百六十一郡 并 神社大小三千一百五十社

仁皇十代崇神天王御代諸國造營社是崇峻御代

又自推古天王崇奉大小諸神數一万三千七百余社

同男女數男九億一万四千百廿一人  
女三十億一万七千廿一人

彼三人勅使者皆權化也文殊普賢虛空藏

余時崇峻天皇大有御感言人王十代崇神天王之御代

舟車作始并冠衣裳履造始又崇神始給又十二

代帝景行天王御代武氏大臣始月卿雲客等群臣

(五才)

定<sub>レ</sub>國三十三個國成奉<sub>レ</sub> 雖<sub>レ</sub>朕代<sub>レ</sub>新六十六個國定<sub>レ</sub>王城付<sub>レ</sub>

定<sub>レ</sub>七道<sub>レ</sub>上下<sub>レ</sub>往來<sub>レ</sub>之無<sub>レ</sub>煩<sub>レ</sub>人民安穩<sub>レ</sub>之利益施<sub>レ</sub>是大慶<sub>レ</sub>

之至極也但上宮太子之方便也

氏云尊<sub>レ</sub>上宮生身<sub>レ</sub>佛身<sub>レ</sub>人躰<sub>レ</sub>化佛法興隆<sub>レ</sub>非國中政道<sub>レ</sub>本トシ

末代<sub>レ</sub>衆生無<sub>レ</sub>煩<sub>レ</sub>大慈<sub>レ</sub>大悲<sub>レ</sub>垂給<sub>レ</sub>夫大國<sub>レ</sub>穆王<sub>レ</sub>天子<sub>レ</sub>天下飢饉<sub>レ</sub>

悲<sub>レ</sub>十善<sub>レ</sub>御身<sub>レ</sub>苦<sub>レ</sub>民憐<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>民<sub>レ</sub>正直<sub>レ</sub>四海泰平也<sub>レ</sub>

古老人云吾朝廷喜天曆<sub>レ</sub>モ絹布<sub>レ</sub>民<sub>レ</sub>下米錢<sub>レ</sub>貧家送給<sub>レ</sub>ヌ

宣旨<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>モ此時也<sub>レ</sub>

○太子十九歲<sub>レ</sub>庚春三月百濟國<sub>レ</sub>戒律學問比丘尼<sub>レ</sub>善心<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>

(五ウ)

朝太子於<sub>レ</sub>天皇御前<sub>レ</sub>試問<sub>レ</sub>釋義律義<sub>レ</sub>尼等不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>辨答<sub>レ</sub>

天皇勅曰<sub>レ</sub>何必<sub>レ</sub>遠問<sub>レ</sub>於海表<sub>レ</sub>之國<sub>レ</sub>如今眼前<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>此三藏大

師<sub>レ</sub>太子十七歲<sub>レ</sub>御時五字八教<sub>レ</sub>之玉曆<sub>レ</sub>三藏大師來朝也

同年冬十一月十五日<sub>レ</sub>夜太子十<sub>レ</sub>御元服<sub>レ</sub>然太子<sub>レ</sub>御出家<sub>レ</sub>望<sub>レ</sub>

深<sub>レ</sub>御元服<sub>レ</sub>之望<sub>レ</sub>更不<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>時用明天王<sub>レ</sub>是御覽<sub>レ</sub>最後<sub>レ</sub>之

遺言<sub>レ</sub>朕別悲<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可有<sub>レ</sub>出家<sub>レ</sub>朕蘇生<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>明年十七<sub>レ</sub>元服<sub>レ</sub>

執行<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>今最後<sub>レ</sub>取向<sub>レ</sub>成不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>力穴賢御身<sub>レ</sub>出家<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可有<sub>レ</sub>

御淚<sub>レ</sub>流言<sub>レ</sub>太子思食<sub>レ</sub>煩<sub>レ</sub>御座<sub>レ</sub>御伯父崇峻<sub>レ</sub>天皇即位<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>

太子十七歲<sub>レ</sub>成給<sub>レ</sub>雖<sub>レ</sub>御元服<sub>レ</sub>之沙汰<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>十八十九<sub>レ</sub>之春秋<sub>レ</sub>過多<sub>レ</sub>

(六オ)

半成行共御元服可有様無依之父用明天皇戀慕奉

御涙流亦御伯父崇峻天王恨奉給就此御出家御志

彌深然三衣一鉢御用意在參倉橋宮先御舍兄麻

呂子親王近奉御涙流申給様夫兄弟之宿縁貴斷

金之契不淺而我等用明天王離奉無憑方一孤子也然

一切草木一根枯千枝俱萎又一切男女獨之新後百愁

起凡會者定離之悲生有者難通申只吾身獨歎也

然阿兒十八九之大童久憂世住出家修行身成父天

王問御菩提同四生之舊跡吊共佛果詣臺為其御暇

(六ウ)

只今參内申也急々御暇申請可給其時御兄麻

呂子親王大驚御恨尤也俱流淚聽上殿在此由帝

奏聞有君大驚御慮太子御前被召勅云只今之出

家暇何事朕即位後万機之政重元服不奉執行支

定恨可侍妻子珍寶及王位臨終時不隨者  
唯戒下及施下不遂今世後世為伴侶彼釋尊古天

竺摩伽陀國主淨飯大王儲君可備万乘寶位此文心

信浮世厭營華流轉三界中恩愛不能斷棄恩入無為真實報恩者思食切御年

十九春二月八日御出家在苦行六年御年卅唱等正覺難行六年

三界獨尊成給阿兒今年十九也今日十五日諸天影向

(七才)

齊日也遂<sup>ナリトケシ</sup> 出家本望<sup>ノ</sup> 三衣一鉢<sup>ヲ</sup> 主上<sup>ノ</sup> 入<sup>リ</sup> 御見參<sup>ム</sup> 給<sup>ヘ</sup> 帝進<sup>ム</sup>

退至極<sup>アリ</sup> 只元服計<sup>ト</sup>也<sup>ナリ</sup> 太子十九出家<sup>ス</sup> 思深<sup>ク</sup> 再三<sup>ニ</sup>

御元服<sup>ノ</sup> 綸言<sup>ヲ</sup> 難<sup>ク</sup> 有<sup>リ</sup> 御返<sup>ス</sup>

余時小野大臣太子申<sup>ケル</sup> 忝<sup>ハ</sup> 西方<sup>ニ</sup> 大聖救世<sup>ノ</sup> 大願利生<sup>ノ</sup> 方便<sup>ヲ</sup> 御身

也<sup>ナリ</sup> 暫<sup>ク</sup> 吾朝<sup>ノ</sup> 生<sup>キ</sup> 金輪<sup>ニ</sup> 善家<sup>ニ</sup> 一天儲君<sup>ト</sup> 成<sup>リ</sup> 給<sup>ヘ</sup> 爭<sup>フ</sup> 天子<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 再三<sup>ニ</sup>

綸言<sup>ヲ</sup> 無<sup>ク</sup> 御用<sup>ニ</sup> 裁<sup>ハ</sup> 譬<sup>ハ</sup> 綸言<sup>ヲ</sup> 如<sup>ク</sup> 汗<sup>ヲ</sup> 出<sup>シ</sup> 再<sup>ニ</sup> 下<sup>リ</sup> 飯<sup>ヲ</sup> 臣<sup>ト</sup> 西<sup>ノ</sup> 天<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 夏<sup>ニ</sup>

傳承<sup>ム</sup> 釋尊<sup>ノ</sup> 御在世<sup>ニ</sup> 淨明居士<sup>ト</sup> 申<sup>ケル</sup> 本地大聖<sup>ノ</sup> 文殊尊<sup>ノ</sup> 入<sup>リ</sup> 重

玄門<sup>ノ</sup> 薩埵等覺無垢<sup>ノ</sup> 大士成<sup>リ</sup> 共隨<sup>シ</sup> 所依<sup>ト</sup> 折俗形<sup>ヲ</sup> 利生<sup>ヲ</sup> 垂

給<sup>ヘ</sup> 申<sup>ス</sup> 殊<sup>ニ</sup> 文殊<sup>ノ</sup> 普賢<sup>ノ</sup> 彌勒<sup>ノ</sup> 觀音<sup>ノ</sup> 勢<sup>ヲ</sup> 至<sup>リ</sup> 等<sup>ク</sup> 外<sup>ニ</sup> 菩薩<sup>ヲ</sup> 達<sup>ス</sup>

垂<sup>レ</sup> 髮<sup>ヲ</sup> 着<sup>シ</sup> 寶冠<sup>ヲ</sup> 給<sup>ヘ</sup> 共慈悲<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 利生<sup>ヲ</sup> 貴<sup>ク</sup> 也<sup>ナリ</sup> 但<sup>シ</sup> 慈悲<sup>ハ</sup> 是<sup>レ</sup> 濟

(七ウ)

渡<sup>リ</sup> 根源利生<sup>ノ</sup> 又大聖<sup>ノ</sup> 善巧<sup>ノ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 然<sup>レ</sup> 形<sup>ヲ</sup> 出家<sup>ノ</sup> 在家<sup>ノ</sup> 有<sup>リ</sup> 隔<sup>リ</sup> 心<sup>ヲ</sup> 勤<sup>ク</sup> 行<sup>フ</sup>

不<sup>レ</sup> 可<sup>ク</sup> 有<sup>リ</sup> 差<sup>リ</sup> 別<sup>ニ</sup> 早<sup>ク</sup> 奉<sup>リ</sup> 任<sup>シ</sup> 綸言<sup>ヲ</sup> 御元服<sup>ノ</sup> 可<sup>ク</sup> 有<sup>リ</sup> 定<sup>ム</sup> 今日出家<sup>ス</sup>

吉日成<sup>ル</sup> 元服<sup>ニ</sup> モ 吉日<sup>ノ</sup> 可<sup>ク</sup> 成<sup>リ</sup> 是<sup>レ</sup> 万人<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 慶賀<sup>ノ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 申<sup>ケル</sup> 給<sup>ヘ</sup> 君<sup>ノ</sup> 大稱美<sup>ス</sup>

有<sup>リ</sup> 然<sup>レ</sup> 小野大臣<sup>ノ</sup> 推<sup>シ</sup> 今日上宮太子<sup>ト</sup> 御元服<sup>ト</sup> 天下<sup>ニ</sup> 披露<sup>ス</sup> 有<sup>リ</sup> ケレハ

一天<sup>ノ</sup> 擧<sup>ゲ</sup> 成<sup>リ</sup> 喜<sup>ム</sup> 卿上雲客<sup>ト</sup> 其數<sup>ヲ</sup> 多<sup>ク</sup> 參<sup>リ</sup> 內<sup>ニ</sup> 申<sup>ケル</sup> 太子<sup>ノ</sup> 不<sup>レ</sup> 及<sup>ク</sup> 是<sup>レ</sup> 非<sup>ズ</sup>

侍<sup>ト</sup>

余時天皇左右大臣<sup>ノ</sup> 有<sup>リ</sup> 清談<sup>ヲ</sup> 抑<sup>シ</sup> 太子髮<sup>ヲ</sup> 役<sup>ヲ</sup> 誰<sup>ノ</sup> 人<sup>ノ</sup> 可<sup>ク</sup> 定<sup>ム</sup>

天上<sup>ニ</sup> 內談<sup>シ</sup> 侍<sup>ト</sup> 者<sup>ト</sup> 小野大臣<sup>ト</sup> 太子<sup>ノ</sup> 御舍<sup>ノ</sup> 兄<sup>ト</sup> 麻呂<sup>ト</sup> 子<sup>ト</sup> 親王<sup>ト</sup>

可<sup>ク</sup> 然<sup>レ</sup> 勅<sup>シ</sup> 答<sup>ス</sup> 申<sup>ケル</sup> 同<sup>ク</sup> 左右<sup>ノ</sup> 紙燭<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 役<sup>ヲ</sup> 人<sup>ト</sup> 左<sup>ノ</sup> 小野大臣<sup>ト</sup> 天王<sup>ノ</sup> 定<sup>ム</sup> 給<sup>ヘ</sup>

右蘇我大臣

(八才)

然太子十九冬十一月十五日、夜御元服有、一天御悅千秋

障三從苦轉

(八ウ)

万歳御祝在、卿上雲客同喜奉、御祝言酒三々九度

氏云然大聖尺尊未來授記別、其名普光功德山王如來、示給

成、諸臣調、尺拍子、翻羅綾袂、庭上竝居、詠歌太子奉

余時阿兒發大願、未來世於無佛世界弘佛法、言然生々

祝給其時今様今世、歌傳侍也、其歌

世々勝鬘名乘有情利益

君万歳御代、我等御隱侍、鶴龜戲任、幸心祝言有

古老人云有難太子、論言御入滅後、人皇四十五代聖武天王

御名乘定在、并御冠可食義也

太子再來也、東大寺建立戒壇、立給其表、文序自筆被遊

余時太子勅言、阿兒昔有名字、佛子勝鬘、可名乘、比名

ケルニ菩薩戒弟子沙彌勝鬘トソ書給ヘル

阿兒昔天竺舍衛大城主波斯匿王、息女生勝鬘夫人

同太子御冠被食其產冠御、良實美人、人間界人、更不

云時答、孝養父母、功德、釋迦牟尼如來生合奉、忽女五

見給侍女采女雲客卿上、驚目、余時小野大臣之御前

(九才)

被立<sub>レ</sub>盃鏡<sub>ニ</sub>太子移<sub>レ</sub>鏡御白<sub>レ</sub>御覽<sub>ニ</sub>父天皇<sub>ニ</sub>思食<sub>ニ</sub>出<sub>レ</sub>

雙眼流<sub>ニ</sub>御涙<sub>ニ</sub>言<sub>ニ</sub>哀此<sub>ニ</sub>產冠<sub>ニ</sub>白父王<sub>ニ</sub>御覽<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>何<sub>ニ</sub>御喜可<sub>ニ</sub>

有<sub>レ</sub>生死無常習<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>御覽<sub>ニ</sub>崩御成<sub>ニ</sub>悲然<sub>ニ</sub>西王母<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>秦始<sub>ニ</sub>

皇<sub>ニ</sub>照<sub>ニ</sub>照<sub>ニ</sub>鏡<sub>ニ</sub>照<sub>ニ</sub>人心<sub>ニ</sub>善惡<sub>ニ</sub>又<sub>ニ</sub>陳<sub>ニ</sub>武唐<sub>ニ</sub>鏡<sub>ニ</sub>再<sub>ニ</sub>顯<sub>ニ</sub>夫<sub>ニ</sub>妻<sub>ニ</sub>契<sub>ニ</sub>又<sub>ニ</sub>昔<sub>ニ</sub>

曆大夫鏡<sub>ニ</sub>移<sub>ニ</sub>戀<sub>ニ</sub>人<sub>ニ</sub>白<sub>ニ</sub>今<sub>ニ</sub>阿兒<sub>ニ</sub>鏡<sub>ニ</sub>移<sub>ニ</sub>自身<sub>ニ</sub>白<sub>ニ</sub>懷<sub>ニ</sub>舊<sub>ニ</sub>御淚<sub>ニ</sub>

言<sub>ニ</sub>麻呂子<sub>ニ</sub>親王<sub>ニ</sub>始<sub>ニ</sub>皆<sub>ニ</sub>濕<sub>ニ</sub>袂<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>喜<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>愁<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>彼<sub>ニ</sub>太子<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>衣<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>

鉢<sub>ニ</sub>今<sub>ニ</sub>法隆寺<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>五<sub>ニ</sub>綴<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>御鉢<sub>ニ</sub>同<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>寺<sub>ニ</sub>

古老人云勝鬘經講讀之時被<sub>レ</sub>懸御袈裟是也

○太子二十歲<sub>辛</sub>秋八月比崇峻天皇欲順<sub>ニ</sub>新羅<sub>ニ</sub>百濟<sub>ニ</sub>任<sub>ニ</sub>那

(九ウ)

國<sub>ニ</sub>多<sub>ニ</sub>軍兵<sub>ニ</sub>被<sub>ニ</sub>召<sub>ニ</sub>集<sub>ニ</sub>大伴大臣<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>大將軍<sub>ニ</sub>都合<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>勢<sub>ニ</sub>二<sub>ニ</sub>方<sub>ニ</sub>六<sub>ニ</sub>  
葛木大臣爲<sub>ニ</sub>副將軍<sub>ニ</sub>

千余騎如<sub>ニ</sub>雲霞<sub>ニ</sub>馳<sub>ニ</sub>參<sub>ニ</sub>參<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>天皇<sub>ニ</sub>召<sub>ニ</sub>太子<sub>ニ</sub>勅<sub>ニ</sub>云<sub>ニ</sub>夫<sub>ニ</sub>小國<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>大

國<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>大山<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>深谷<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>九山<sub>ニ</sub>塵<sub>ニ</sub>本<sub>ニ</sub>八海<sub>ニ</sub>露<sub>ニ</sub>源<sub>ニ</sub>大小<sub>ニ</sub>自然<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>泉淺<sub>ニ</sub>深<sub>ニ</sub>アリ

草木大小有<sub>ニ</sub>大國<sub>ニ</sub>豈<sub>ニ</sub>小國<sub>ニ</sub>陵<sub>ニ</sub>哉<sub>ニ</sub>若<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>吾<sub>ニ</sub>國<sub>ニ</sub>何<sub>ニ</sub>穩<sub>ニ</sub>新羅<sub>ニ</sub>  
是<sub>ニ</sub>自然<sub>ニ</sub>也

任<sub>ニ</sub>那<sub>ニ</sub>伏<sub>ニ</sub>何<sub>ニ</sub>諸<sub>ニ</sub>臣<sub>ニ</sub>等<sub>ニ</sub>宜<sub>ニ</sub>詔<sub>ニ</sub>順<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>新羅國<sub>ニ</sub>大王<sub>ニ</sub>太子<sub>ニ</sub>獨<sub>ニ</sub>奏<sub>ニ</sub>  
動<sub>ニ</sub>吾<sub>ニ</sub>朝<sub>ニ</sub>煩<sub>ニ</sub>

給<sub>ニ</sub>樣<sub>ニ</sub>臣<sub>ニ</sub>先生<sub>ニ</sub>大國<sub>ニ</sub>受<sub>ニ</sub>生<sub>ニ</sub>彼<sub>ニ</sub>任<sub>ニ</sub>那<sub>ニ</sub>高麗<sub>ニ</sub>新羅<sub>ニ</sub>百濟<sub>ニ</sub>等<sub>ニ</sub>案

內<sub>ニ</sub>知<sub>ニ</sub>侍<sub>ニ</sub>而<sub>ニ</sub>大國<sub>ニ</sub>合<sub>ニ</sub>懷<sub>ニ</sub>習<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>國<sub>ニ</sub>壽<sub>ニ</sub>限<sub>ニ</sub>果<sub>ニ</sub>報<sub>ニ</sub>運<sub>ニ</sub>否<sub>ニ</sub>知<sub>ニ</sub>可<sub>ニ</sub>傾<sub>ニ</sub>時

分<sub>ニ</sub>知<sub>ニ</sub>侍<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>而<sub>ニ</sub>今<sub>ニ</sub>六<sub>ニ</sub>七<sub>ニ</sub>个<sub>ニ</sub>年<sub>ニ</sub>間<sub>ニ</sub>大國<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>左<sub>ニ</sub>右<sub>ニ</sub>不<sub>ニ</sub>可<sub>ニ</sub>傾<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>也

今<sub>ニ</sub>合<sub>ニ</sub>戰<sub>ニ</sub>可<sub>ニ</sub>思<sub>ニ</sub>食<sub>ニ</sub>留<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>徒<sub>ニ</sub>我<sub>ニ</sub>朝<sub>ニ</sub>費<sub>ニ</sub>人<sub>ニ</sub>力<sub>ニ</sub>哉<sub>ニ</sub>言<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>帝<sub>ニ</sub>更<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>御<sub>ニ</sub>用<sub>ニ</sub>

(十ウ)

大逆鱗御座<sup>シキ</sup>

太子告<sup>テ</sup>小野臣<sup>ニ</sup>言<sup>ハ</sup>君<sup>ノ</sup>臣<sup>ノ</sup>諫<sup>ヲ</sup>有<sup>リ</sup>爲<sup>シ</sup>賢王<sup>ト</sup>此帝自<sup>レ</sup>元御性

惡<sup>ク</sup> 忠臣諫更無<sup>シ</sup>御用<sup>ニ</sup>御壽程奉<sup>レ</sup>見實短命僅<sup>ニ</sup>五<sup>ノ</sup>年

見給<sup>ヘリ</sup>明年必御命盡<sup>ナシ</sup>遂<sup>ニ</sup>軍本意<sup>ト</sup>座<sup>ト</sup>御年幾<sup>ヤ</sup>哀<sup>シ</sup>小水魚

隨<sup>レ</sup>日如<sup>レ</sup>促<sup>ク</sup> 命悲哉<sup>カナヤ</sup> 貴賤上下共兼不<sup>レ</sup>知<sup>シ</sup>死生<sup>ト</sup>也太子大敷給

天皇太子御諫終無<sup>シ</sup>御用<sup>ニ</sup>二万六千余驕<sup>リ</sup>鎮西<sup>ト</sup>下數

百艘船以已万里海上漕出新羅百濟聞<sup>レ</sup>此深日本

調伏依<sup>テ</sup>彼呪咀<sup>ニ</sup>大將軍<sup>大伴臣</sup>乍<sup>ツ</sup>二人<sup>ニ</sup>俄受<sup>テ</sup>病不能<sup>レ</sup>遂<sup>ニ</sup>

本意<sup>ニ</sup>

(十ウ)

\* 太子自<sup>レ</sup>元本地救世觀音垂迹<sup>ヲ</sup>吾朝成<sup>リ</sup>人臣<sup>ト</sup>備<sup>ニ</sup>未<sup>レ</sup>然方便

德<sup>ヲ</sup>乍<sup>ツ</sup>居天竺震且遠鏡安否懸<sup>レ</sup>鏡無<sup>シ</sup>曇<sup>リ</sup>知<sup>レ</sup>食給<sup>ヘリ</sup>崇峻

天王實愚<sup>コソノアホカニ</sup> 御座<sup>シ</sup> 爰<sup>ニ</sup>古老人云<sup>フ</sup>其時大將軍妻妾松浦

佐用姫申<sup>ト</sup>天下無<sup>シ</sup>隱美人也夫婦互<sup>ニ</sup>飽別悲<sup>シ</sup>鎮西<sup>ト</sup>共<sup>ニ</sup>肥後

國留置給然間入唐兵船出<sup>ル</sup> 彼松浦佐用姫高山登<sup>リ</sup>彼男

船漫々海上漕出<sup>ル</sup>遙見<sup>ル</sup> 脫<sup>リ</sup>絹招<sup>ル</sup>離別思<sup>フ</sup>不堪忽<sup>シ</sup>平臥

消入其間成<sup>リ</sup>石也是名望夫石云其後神現<sup>ル</sup>一切男女夫妻

別離歎<sup>シ</sup> 助給<sup>ル</sup> 誓<sup>フ</sup>今其利生新成鎮西肥後國松浦大明神

是也自<sup>レ</sup>其彼山絹招山申傳侍也實別路樣々<sup>ニ</sup> 申<sup>テ</sup>親子

(十一オ)

兄才師君別勝 夫妻別難 忍彼松浦佐用姬飽別死云

今人思助 神顯故此意万葉集歌讀

遠妻人松浦佐用姬妻戀 平臥 自生 松哉 昔今實

人知不夫妻之別悲也云

然彼大將軍等度々合戰受病不叶數万軍兵打二人共

飯國雖失二面目三再城不レ上亦彼松浦佐用姬別悲終無墓

成畢 抑彼御合戰非無謂人皇十四代仲哀天皇八幡

大菩薩御父彼國弓箭依崩御成給其時十六代應神

天皇末十五代御門神宮皇后入胎不レ生給父天王最後

(十一ウ)

之御置言依女躰成共彼應神天王御腹持給故數万

軍兵之大將軍成異國對治給故其子孫動 日本欲傾

煩也依此崇峻天王彼軍思食立給へり雖然大國運強

依日本軍兵呪咀殺太子御悲在云阿兒君奉諫御承

引無人力盡給言實貴太子御言也皆人感申云

○太子廿一歲壬子崇峻天王治五年春二月比天王命三蘇

我大臣言朕思大和倉橋之下井原立宮室隨四

季證三叡慮思食如何大臣答言彼倉橋山者高

山崎四方而竝清風梢夕日影幽深谷水荒流動洪

(十二六)

水難無<sub>レ</sub>間<sub>レ</sub>下井原宮室不可<sub>レ</sub>然由勅答言依<sub>レ</sub>此君逆

鮮色不<sub>レ</sub>紅 天皇蜜勅<sub>ニ</sub>太子<sub>ニ</sub>曰 天尊地卑貴賤之位也君

南面臣北面是常理也而蘇我大臣内縱<sub>ニ</sub>私欲<sub>ニ</sub>外似<sub>ニ</sub>詐

飭<sub>ニ</sub>爲<sub>レ</sub>朕不忠臣也太子同心初崇<sub>ニ</sub>佛法<sub>ニ</sub>實信心不<sub>レ</sub>切驕

心甚<sub>ニ</sub>内心懸<sub>ニ</sub>王位望<sub>ニ</sub>所詮蜜逆臣欲<sub>ニ</sub>誅汝<sub>ニ</sub>以爲<sub>レ</sub>何太子奏

曰 殊背<sub>ニ</sub>論言<sub>ニ</sub>驕心甚<sub>ニ</sub>也夫我朝之天子忝<sub>ニ</sub>百王<sub>ニ</sub>一百代悉

大日靈尊御子孫相續成<sub>ニ</sub>四海主<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>全人身<sub>ニ</sub>王位不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>叶

但被<sub>ニ</sub>誅<sub>ニ</sub>其命<sub>ニ</sub>思食可<sub>ニ</sub>留給<sub>ニ</sub>一敷<sub>ニ</sub>三綱<sub>ニ</sub>五常<sub>ニ</sub>聖人難<sub>レ</sub>行

陽九百六愚臣爲<sub>レ</sub>害如何大臣可<sub>レ</sub>謂<sub>ニ</sub>驕臣<sub>ニ</sub>佛教有<sub>ニ</sub>三六波

(十二ウ)

羅蜜<sub>ニ</sub>其中忍辱<sub>ニ</sub>佛深戒<sub>ニ</sub>臣願陛下<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>此功德<sub>ニ</sub>助<sub>ニ</sub>驕臣<sub>ニ</sub>坐

華嚴經<sub>ニ</sub>十難中<sub>ニ</sub>能忍辱爲<sub>レ</sub>難諫申<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>天皇順<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>

天皇忍辱深持給<sub>ニ</sub>今年<sub>ニ</sub>御厄年<sub>ニ</sub>私曰<sub>ニ</sub>三綱者<sub>ニ</sub>内典<sub>ニ</sub>三歸也

君臣父子夫婦也此三綱以<sub>ニ</sub>結如<sub>ニ</sub>維<sub>ニ</sub>忠綱<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>定心也<sub>ニ</sub>五常<sub>ニ</sub>八者

内典<sub>ニ</sub>五戒也<sub>ニ</sub>外典<sub>ニ</sub>仁義禮智信云也<sub>ニ</sub>亦慈和順賢真五也<sub>ニ</sub>三

綱<sub>ニ</sub>五常<sub>ニ</sub>内外共<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>賞翫<sub>ニ</sub>于<sub>ニ</sub>今<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>捐法也<sub>ニ</sub>有益無益集云陽

九百六者陽沈五陰沈四在合爲<sub>レ</sub>九也漢書律曆云<sub>ニ</sub>四千六百一

十七年<sub>ニ</sub>名陽九<sub>ニ</sub>トス<sub>ニ</sub>九辰也<sub>ニ</sub>問云<sub>ニ</sub>何<sub>ニ</sub>陽九年<sub>ニ</sub>答云<sub>ニ</sub>甲寅年<sub>ニ</sub>自壬戌

年至<sub>ニ</sub>マテ<sub>ニ</sub>九年<sub>ニ</sub>天下大飢饉スル<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>故宋人<sub>ニ</sub>九年<sub>ニ</sub>貯<sub>ニ</sub>設也<sub>ニ</sub>

(十三オ)

情以陽九百六厄年時天子位有<sub>二</sub>无危<sub>一</sub>以其愼有也如<sub>レ</sub>是厄

年當亂逆企ヌレハ天子傾臣兵勝乘云ヘリ是陰陽深談スル

秘法ナリ尤德以運保慈以凶伏可譬若大臣是不<sub>レ</sub>弁進天王

進不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>給云心也

凡天皇意性剛腸 不容<sub>二</sub>物非<sub>一</sub>太子常謀納<sub>レ</sub>用數度各

二月三月霞共立歸卯月五月郭公鳴歎思夏衣七夕

姫夜明 八月九月風立神無月有比人御門獻<sub>二</sub>山猪子<sub>一</sub>天王

指猪日何日如<sub>レ</sub>斷<sub>二</sub>此猪類<sub>一</sub>斷<sub>二</sub>朕所<sub>レ</sub>嫌之者<sub>一</sub>大<sub>二</sub>子聞食大<sub>一</sub>

子タム蘇我大臣  
(臣)

驚奏曰火何成御夏天下禍始<sub>二</sub>此御一言<sub>一</sub>口是禍門舌是

(十三ウ)

禍根禍言一度出<sub>二</sub>罵追<sub>一</sub>更不<sub>レ</sub>違御大事此一言可<sub>二</sub>出來<sub>一</sub>

天皇於<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>親承人々傍被<sub>レ</sub>召聊令<sub>二</sub>曲宴<sub>一</sub>群臣左右宿

衛之人各賜<sub>二</sub>祿物<sub>一</sub>太子自戒曰今日之勅卿等莫<sub>レ</sub>語<sub>二</sub>他

人一誠言昔今讒臣亂<sub>レ</sub>國云此一人之愚士在心內思樣

今日之勅他人不可<sub>レ</sub>語重祿賜況此蜜大臣聞如何悅

令得<sub>二</sub>恩賞<sub>一</sub>思問竊大臣宿所行告令<sub>レ</sub>知如<sub>レ</sub>案大臣悅テ

種々引出物愚士大喜暇乞爲<sub>レ</sub>出大臣思樣斗<sub>レ</sub>空無<sub>レ</sub>究

得<sub>レ</sub>寶無<sub>レ</sub>充此謂<sub>二</sub>一御門之勅命御恩不知<sub>一</sub>又實有難

太子之御誠乍蒙<sub>レ</sub>忽忘<sub>レ</sub>恩背<sub>レ</sub>誠不忠之臣也以<sub>レ</sub>一察<sub>レ</sub>万此

(十四オ)

臣内裏參仲言後悔不可叶思子息小林入鹿臣命門外

自喚歸愚士令切頸其從者一人共被切愚士貪欲深故

空飛鳥嶺山禁走獸江海住鱗皆依欲失身云リ

主從三人被失早其後大臣入鹿臣林臣嶋角大夫亦召集

蜜内談云今勅命如我等被誅申夏無疑君貴治世

事運命有程也死後焰王之斷罪亦惡業可畏只天下

聞打奉失此事何哉爰入鹿臣等申尤可然君為君臣

又為臣但此夏案召東漢直駒私憑給彼奴力強劫成

強

者也亦御門寵愛甚内外出入大臣奉公仁也申大臣大悅

即直駒語取能々其貪性賺色々寶賜其後此夏語

(十四ツ)

直駒無左右承其後直駒玉樓金殿隙伺程十月廿

三日夜直駒内裏忍入竊近付錦帳折節内侍女官皆

寢入宿衛卿相不待駒大悅拔劍玉躰三度奉指天王驚

高聲召群臣内外騷夏如雷急固門々求東西不知行方

天王遂崩御成給悲哉天王御心武申セトモ毒劍玉躰世間常

破シ事 御年七十二歲申崩御成給

聞万民騷如市駒聽大臣宿所行以劍決實否一定也

大臣大悅引率一族急内裏參諸人驚佐日比人擲取刎

首大臣熊知今大臣熊推量雖在皆人口閉不云太子大

有御歎曰陛下不用愚兒之言終失給蜜告小野臣言

(十五才)

是偏大臣結構駒禍也哀駒人用言共天命之報今見

可大臣終不可遁是皆過去報也太子十七歲太子妹子臣

等相議同內裏參內葬奉天皇王子三人御座世間

畏忍隱給大臣深用心其後駒殿中出入無懼昇

進過分人之耳目驚角經日月程何便有竊大臣息女

太子才二后汚三河上姬二其聞雖忍天地物不見過誓哉

健大臣此事聞大怒駒擲取髮庭前木掛自取弓番

箭大怒曰汝三辜在一汝雖吾言用二天皇殺罪次汝

性癡駒我怒哀不計輒奴手以天王煞奉重罪三汝

(十五ウ)

卑身吾姬汚辜每數一罪則放矢爰駒叫曰吾愚只

大臣知天王貴不依思縱我雖有辜何忘大恩如是行

給耶云但河上姬汚哀不可陳凡夏之蟲入火寄笛秋

之男鹿加々留山野畜類戀故身命失也強不可陳

自余皆是大臣辜也其時大臣大腹立自拔劔頸打

落是偏煞二天王二奉天命報也太子聞食謂左右曰

大臣雖誅直駒二千歲之後惡名更不可雪唯河上姬ヲ犯

氏云太子御言一不違是驕者不久其後入鹿謀叛

之故鎌子連一門三千人自害五色鬼王成黑雲飛入

(十六オ)

此罪報也。彼此先業之所感也。一世怨害非也。一門滅失時。

甘樫自害己劍懸。鎌子連トハ蘇我大臣也。

○太子廿二歲癸丑。推古天王治元年諱豐御炊屋姬。天明

之女敏達。小懇田宮治卅六年春正月立法興寺。利柱。太

子臨禮給。百濟國自所獻舍利。安置塔心柱。其夜舍利

放光。再三度見聞之。貴賤隨喜。此利柱ヲハ間人皇女  
自誓立給トモ云又有

說推古天王 同夏四月天王召太子云。朕今雖得天子位。女

姓不解除。物万機政滋。日々慎故。自今日以太子爲儲君。一

天之政。悉任太子。太子固辭退。申給天皇重勅云。朕忝

(十六ウ)

雖備万乘之寶位。女人之身。不解生物。偏朕爲耳目。再

三勅給。太子依度々。論言不辭給。天王大御悅。勅群臣曰。

朕女人也不解性物。万機日々慎國務。滋宜天下之事。皆

啓太子。即日立太子爲皇太子。仍稱攝政。万機悉委焉。

時年廿二。是橘豐日天皇第二子也。母穴太部間人。

皇女也。曆錄曰。皇女懷胎之日。巡禁中。當麻戶。生

依之爲名。身有聖智。兼知未然。内外二教。無不巧妙。

天皇愛之。令居宮南。故稱上宮太子。今坂田寺是其

宮所也。

(十七オ)

抑攝政太子之御本地生身觀音童男優婆塞小王

三身圓滿之示化現人王卅四代推古天王儲君龍樓鳳闕

之月前忝助三方機之政限末代直百王理亂亦觀念坐

禪之床上偏廻濟度利物之計鎮專興隆佛法思給

三身圓滿者太子誕生ヨリ十九歳マテハ童男身優婆塞身

廿二歳ヨリ五十一歳マテハ小王身也

私云攝政攝祿理大國周成王御時以周公旦爲攝政之始我

朝以聖德太子爲攝祿之臣始太子攝祿臣ヲ相續シ給ヘトモ

生身ノ觀音權者ニテ御座ス故太子入滅在テ七年ニ御子孫ハ一

(十七ウ)

度失早二代トモ不相續給其後中絶自推古天王經廿一代

後仁王五十五代文德天王御時又攝政位執行其時藤原

氏之先祖以大政大臣良房忠仁公爲關白始忠仁公基經照

宣公忠平等以來至一條殿相續在夫攝政之位申

國王末幼若國政執行給十五以前水時攝政天蹕ヲ奉懷

南殿天蹕御座南面政執行給ヘルヲ名攝政天蹕十五歳以

後攝祿臣ハ云關白殿下御國王之御後見一天四海ヲ任我

意執行給ヘシ

然是歲四天王寺再興本願緣起云敬田院斯地內在

(十八オ)

池號<sub>ス</sub>荒陵池<sub>ニ</sub>其底深<sub>シ</sub>青龍恒居處<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>丁未歲<sub>ニ</sub>始建<sub>ス</sub>玉  
造岸上<sub>ニ</sub>改<sub>シ</sub>點<sub>シ</sub>此地<sub>ニ</sub>鎮<sub>シ</sub>祭青龍<sub>ニ</sub>癸丑歲<sub>ニ</sub>癸丑歲<sub>ニ</sub>癸丑歲<sub>ニ</sub>移<sub>シ</sub>荒陵東<sub>ニ</sub>

斯處<sub>ニ</sub>昔釋迦<sub>ノ</sub>如來轉法輪<sub>ノ</sub>所也<sub>ナリ</sub>亦時生<sub>シ</sub>長者身<sub>ト</sub>供<sub>シ</sub>養奉<sub>ス</sub>

如來<sub>ノ</sub>助<sub>シ</sub>護佛法<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>是因緣<sub>ト</sub>起<sub>シ</sub>立<sub>ス</sub>寺塔<sub>ト</sub>此地<sub>ニ</sub>敷<sub>シ</sub>七寶<sub>ト</sub>故青

龍恒<sub>ニ</sub>守護麗水東流<sub>ニ</sub>號曰<sub>シ</sub>石玉出水<sub>ト</sub>以<sub>テ</sub>慈悲心<sub>ト</sub>飲<sub>シ</sub>之爲<sub>ス</sub>

法藥<sub>ト</sub>寶塔金堂相<sub>ニ</sub>當<sub>シ</sub>極樂東門中心<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>髻髮六毛<sub>ト</sub>相<sub>ニ</sub>

加佛舍利六粒<sub>ト</sub>籠<sub>シ</sub>塔心柱中<sub>ニ</sub>表<sub>シ</sub>利<sub>シ</sub>六道<sub>ト</sub>之相<sub>ト</sub>寶塔第一<sub>ト</sub>

露盤手鏤<sub>シ</sub>金表<sub>シ</sub>遺法與滅<sub>ノ</sub>之相<sub>ト</sub>金堂內安<sub>シ</sub>置<sub>シ</sub>金銅救世

觀音像<sub>ト</sub>百濟國王吾入滅<sub>ノ</sub>後戀慕渴仰<sub>ノ</sub>所<sub>ニ</sub>造像也<sub>ナリ</sub>在<sub>シ</sub>三百

(十八ウ)

濟國<sub>ニ</sub>之時<sub>ニ</sub>佛像經律論法服尼等<sub>ト</sub>渡<sub>シ</sub>送<sub>シ</sub>吾朝<sub>ニ</sub>相當<sub>シ</sub>欽明

天皇治天下壬申歲<sub>ニ</sub>也<sub>ナリ</sub>復禪師比丘<sub>ト</sub>尼呪師造佛工

造寺工等相重渡送<sub>シ</sub>相當<sub>シ</sub>敏達天皇治天下丁酉歲<sub>ニ</sub>

丁酉太子六歲太子受<sub>シ</sub>儲君位<sub>ト</sub>固辭<sub>シ</sub>再三<sub>ニ</sub>云臣天性薄愚<sub>ナリ</sub>

志<sub>シ</sub>航<sub>シ</sub>玄極<sub>ニ</sub>遊<sub>シ</sub>魂彼岸<sub>ト</sub>銷<sub>シ</sub>志道場<sub>ト</sub>過去<sub>ノ</sub>之世身歷<sub>シ</sub>數十<sub>ト</sub>

遷<sub>シ</sub>化漢土<sub>ニ</sub>僅爲<sub>シ</sub>王族<sub>ト</sub>練<sub>シ</sub>法通覺期<sub>ト</sub>到<sub>シ</sub>淨土<sub>ト</sub>而今<sub>ニ</sub>叨<sub>シ</sub>預<sub>シ</sub>儲

君<sub>ト</sub>委<sub>シ</sub>以<sub>テ</sub>三万機<sub>ト</sub>神器難<sub>シ</sub>滿寶祚易<sub>シ</sub>類<sub>ト</sub>伏惟<sub>シ</sub>陛下<sub>ニ</sub>紹<sub>シ</sub>徽號<sub>ト</sub>

居<sub>シ</sub>紫極<sub>ニ</sub>馭<sub>シ</sub>八州<sub>ト</sub>以<sub>テ</sub>仁壽之化<sub>ト</sub>無<sub>シ</sub>三才<sub>ト</sub>以<sub>テ</sub>柔和之猷<sub>ト</sub>海表隨

化率土因<sub>シ</sub>蹤<sub>ト</sub>嘉瑞頻來<sub>ト</sub>豐穰<sub>ト</sub>相保伏願陛下<sub>ニ</sub>擇<sub>シ</sub>賢良<sub>ト</sub>

(十九オ)

以輔治用善哲以撫民則萬國歡心四海平安 臣出家

入道爲度外者與隆佛教紹曜玄風 天皇不聽勅曰

阿兒勿善汝爲耳目非阿兒如何治國太子不敢固辭

天下之人聞而大悅如遭慈父愛母云

太子十二歲天皇幸再興

本願緣起文云臣忝慕儲君位再三固辭出家入道爲

度外者與隆佛教紹曜玄風 天皇不聽 不敢固辭製

十七憲章爲王法規模一流布諸惡莫作之教爲佛法

之棟梁遂受五戒一名曰勝鬘往昔在婦人之時釋迦

來說勝鬘經以其因緣故講說是經肇製義疏一衡

(十九ウ)

山數十身修行時持誦法華經故復製疏義二百濟

高麗任那新羅貪狼之情恒以強盛攝伏彼等州

爲令歸伏造護世四天王像向置西方復代々世々王位

固令守護莫傾國臣存忠貞之懷佛子勝鬘敬奉請

三世諸佛十方賢聖梵釋四王龍神八部一切護法等

起誓言是敬田院定戒律之場放逸者削跡慈心者

常住弘道興教法華勝鬘兩部經典古節講演 其

供養祈以東生郡陸个坪水田應輪物獻供而已每

月六齋日寺町四面內煞生禁斷堂院僧坊飼養牛

(二十オ)

馬、長以制止清淨寺地、莫令汚穢、掠寺物、不加修補、任

意誤犯如此無饑者、曾非佛弟子、護世四天王、噴加三可

責、若有後代不道、主邪逆、臣若掠犯寺物、若破障、吾

願令獲破辱、三世諸佛十方賢聖之罪、墮在無間地

獄、永莫出離、子孫苗裔蒙無量災、壽命短促、官位失

亡、雷電霹靂悉以震裂、若有與隆輩、官位福榮、自

以相續子孫世々常安常樂、悉殖勝因、吾入滅後、或

生三國王后妃、造建數大寺塔、於國々町々造置數大佛菩

薩像、書寫數多經論疏義、施入數多資財寶物、田

(二十ウ)

園等、或生比丘比丘尼長者卑賤身、弘興教法、救濟有

情、是非他身、吾身耳、若修理物、用盡無其析、申請公

家、以之充用、矣玉造岸、西方瓦燒置、二万枚埋藏、竈

穴、至修理時、鑿取用而已、須多施入、封戶田園、可念

無所之、雖然末代、道俗無饑、貪欲日々增競、爭寺物、

應墮三途八難中、假令雖無寺物、曾莫滅亡、若有國

郡司、狹邪心、寄夏公家、奪妨田地、還為俗財、符攝

寺奴婢、令驅使之時、定知佛法滅盡、畢當于此時、

王位日々競、君臣愆序、奪靜國務、父子義絕、國

(二十一才)

王后妃其數滿國官物滅亡王臣相共恒乏飢渴鬼

神悉嘔疾病 日々百姓擾亂兵繁綿々可哀 可傷

若擎一花一香恭敬供養若以一塊一塵拋入此場

遙聞寺名遠拜恭如斯等者結緣一淨土唯不混王

土不攝國郡不掌 僧官資財田地併以委護世四天

王悉以押領後々代々妨障永可斷又四个院建立

意趣何以識乎施藥院是令殖一切芝草藥物之

類順方合藥隨各所樂普以施與療病院是令

寄宿一切男女無緣病者日々養育如師長父母

(二十一才)

於病比丘相順療治禁物蒜宗任願樂所令服養

愈但限日期祈乞三寶至于無病莫違戒律努

悲田院是令寄住貧窮孤獨單已無賴者日々

養願莫令致飢渴若得勇壯強力時可令役仕四

个院雜支其養析物攝津國河内兩國官稻各

參仟束以是供用而已三箇院國家大基教法最

要也敬田院一切衆生皈依渴仰斷惡修善速證無

上菩提也肆箇院建立緣起大概如斯

歲次乙卯 佛子勝鬘太子未來普光功德山王如來佛授記

(二十二オ)

大和國廿四个所 四天王寺 法隆寺 菩提寺 妙安寺 長林寺 岡本寺 學問寺  
山城國二河内四个所 近江十二个所 出羽一个所 伊勢一个所 駿河一个所  
日七七大寺 日四十六个所也

○太子廿三歲甲寅春二月朔 詔皇太子及大臣令興隆三

寶。是時諸臣連等各國々郡々 興道寺元興寺日向

寺定林。等建立是時 諸臣連等皆々信佛法造立寺

塔。或傳記云太子推古天皇内裏於清凉殿讚嘆光愍

菩薩經。君臣共翻信敬袖隨喜渴仰之詠成給然其

比。攝州難波四天王寺計未諸國堂塔無故西天程遠

勘不遑震且漢明帝時興王寺白馬寺等佛閣始其

後數万伽藍出來也日本自甲辰歲比伽藍出來雖乙巳

(二十二ウ)

歲守屋依雜言失畢今佛法最初四天王寺奉始甲寅

年諸國之每二國府一建立大伽藍一名二國府寺是光愍菩

薩。堂塔建立功德三寶尊敬利生尊明給也

○太子廿四歲乙卯春土佐南海夜有大光物亦時々有聲如

雷經三十个日矣夏四月着淡路嶋之南岸嶋人不

切取交薪燒其香遠薰諸人希代不思議 恠太子此由

聞食遣使令見 或說嶋人恠時之關白 彼木長八尺繞五尺

也太子御覽有大御悅一令持參内裏太子奏云是沈水

香名赤旃檀木也生南天竺國南海岸彼靈木生在

(二十三オ)

所極難所也三方盤石數百丈峨々聳一方海漫々

惡風高波不絶然人倫難通夏月諸蛇相繞毒勢

身忽冷成故夏月人矢射立冬月蛇蟄海後折採

或説ニハ此木葉落余木見 久沈水故為沈水香 雞古香花名  
マカハス故夏矢射立テ多切 丁子

不<sub>レ</sub>久者為<sub>ニ</sub>淺香<sub>一</sub>而今陛下與<sub>ニ</sub>隆釋教<sub>一</sub>肇造<sub>ニ</sub>佛像<sub>一</sub>故上

釋梵奉<sub>レ</sub>初下 龍神八部等 感<sub>ニ</sub>佛德<sub>一</sub>數千萬里之雖<sub>ニ</sub>海上<sub>一</sub>

漂<sub>ニ</sub>送<sub>ニ</sub>此靈木<sub>一</sub>也君早垂<sub>ニ</sub>淑感<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>作<sub>ニ</sub>佛菩薩像<sub>一</sub>御座<sub>ニ</sub>夫

造<sub>ニ</sub>佛菩薩像<sub>一</sub>禮拜尊重有<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>小<sub>一</sub> 緣<sub>ニ</sub>然本師釋迦如來<sub>一</sub>

十一功德經説 一世々眼目清淨 一生所無<sub>ニ</sub>惡<sub>一</sub> 常生<sub>ニ</sub>貴家<sub>一</sub>

(二十三ウ)

四身如<sub>ニ</sub>金色<sub>一</sub> 五珍玩豐饒 六生<sub>ニ</sub>賢善家<sub>一</sub> 七生<sub>ニ</sub>得王家<sub>一</sub> 八

金輪得<sub>レ</sub>位 九成<sub>ニ</sub>梵天王<sub>一</sub> 二十不<sub>レ</sub>墮<sub>ニ</sub>惡趣<sub>一</sub> 十一後生還<sub>ニ</sub>能敬<sub>一</sub>

重<sub>ニ</sub>三寶<sub>一</sub> 能除<sub>ニ</sub>三世八十億劫罪<sub>一</sub> 故增<sub>ニ</sub>一阿含<sub>一</sub> 云釋尊

昇<sub>ニ</sub>初利天<sub>一</sub> 御母為<sub>ニ</sub>摩耶<sub>一</sub> 二夏九旬說法 間優填王波

斯匿王須達長者至 佛戀慕奉時 大臣奏 佛形像

彫 禮拜恭敬可<sub>レ</sub>有言 優填王悅用<sub>ニ</sub>赤旃檀<sub>一</sub> 彫<sub>ニ</sub>釋尊形<sub>一</sub>

像 則此木也是木佛始也 波斯匿王聞<sub>レ</sub>之乃用<sub>ニ</sub>黃金<sub>一</sub> 鑄

像 是金佛始也 又須達長者此御木 用<sub>ニ</sub>赤旃檀<sub>一</sub> 彫<sub>ニ</sub>佛像<sub>一</sub>

也 又內典錄云 漢明帝使秦景云 臣遣<sub>ニ</sub>月支國<sub>一</sub> 得<sub>ニ</sub>優

(二十四才)

填王彫。形像一勅圖<sub>釋子</sub>。聖相。一即至洛陽。是畫像始也。同秦

景用土佛像顯是土佛始也。私云須達長者所作之佛像。嵯峨之釋迦也。故君

此御木以急佛像思食立御坐太子苦。奏申給。推古

天皇大喜。何佛像可奉造哉。太子勅答申給。何佛像尊

侍。此世界西方極樂之補處。大士觀音有位之國成。觀音

靈像可然申給。君即百濟國之佛工鞍作鳥命彫。聖

觀音像。同大和國吉埜郡比曾寺安置供養給。彼靈像

常放光。故名現光寺。

或傳記云。此寺供養時攝津國四天王寺大和國法隆寺同比

(二十四ウ)

曾寺三个寺。法會執行給ケルニ何レニモ皇太子御坐ケルト云

貴哉。太子救世觀音之變身ニテ自在神力之化身隨類應同

之前ニハ不思議成御事トモ也。彼比曾寺ニハ七个院。在一西院

二傳燈院。三溫室院。四行幸院。百濟院。六安居院。七東院也。

同。此年。五月。高麗僧惠慈法師。百濟國僧惠聰法師

將來。此兩僧弘涉内外。尤深釋義。太子問。道々答問。知

知。答問。一知。十問。十知。百。彼二僧。太子真人也。奉讚

彼。兩僧結夏開夏之勤行。執行。是。日本。結夏開夏之

始也。其日。四月。七月十五日。取大小二百日也。然。四月。大小之日

(二十五才)

取故定日無也

古老人云彼夏百日內二月五月六月之間潤月有此時法隆寺

太子傳聞ト云

○太子廿五歲丙辰夏五月語惠慈法師曰法華經中落

<sup>朱</sup>字落句在師之所見者如何師答啓他國之經亦無有

<sup>朱</sup>落字太子曰於此句際一字落耳吾昔所持之經思有

<sup>朱</sup>字法師答啓殿下所持之御經在何處乎太子微笑答曰

在大隨衡州衡山寺般若臺上法師大奇合掌禮拜

亦或傳云太子問惠慈法師曰當世流布法華經中序

(二十五ウ)

品答文序二万燈明佛置吾先身所持經二万億燈

明佛云此億字一落又藥王品中藥王苦行之句文動

<sup>朱</sup>行大精進捨所愛之身下句供養於世尊爲求無上

<sup>朱</sup>無上惠二句文落思師之所見如何哉惠慈法師大驚

<sup>朱</sup>不存知不存知由被答申一尔時太子言我昔爲靈山聽

衆一本師釋尊之金言具承侍豈有一字一句之誤吾

卅七時將來師所見聞尔時慥可見給仍惠慈法

法師合掌禮拜有太子言君吾奉憑師匠如何凡士

拜給哉惠慈法師答言誠愚僧於今世假雖爲師

(二十六オ)

殿下先生之師匠也故吾自大國尋參也ヲリ何權化ニ

人成白地凡夫難レ弁ノ或說二万億ニ文字アリ日月燈明佛八王子、  
云所ニ有八子アリ深入無際ト云所無際アリ藥王品文

冬十一月比有司啓法興寺造了中宮寺是日惠慈法師

惠聰法師始住法興寺彼寺太子御母間人皇后之御

願引地築壇時忝皇后御衣袂入土持運亦居石立

柱觸御手二侍十箇年内造畢故四十六个伽藍之中

御母御願所殊貴思食也然金堂御本尊太子十六

歲之御長移二臂如意輪一刀三禮自奉造立金堂

講堂五重寶塔鐘樓經藏六十二間廻廊金銀鍍

(二十六ウ)

朱門交給太子廿五歲御供養此時御門奏奉設

無遮會二千時有二紫雲如華蓋形降自西天覆堂

塔上變爲五色雲後或爲龍神形或顯鳳凰躡或

現人畜形良久天覆連向西聳去太子合掌目送告

卿上雲客等言抑此五色瑞雲依此佛閣造立功德

一切人畜五障極惡人此堂塔自吹風觸皆極樂可往

生天感應有ニ此祥也但三百年之後霜露結衣五百

年後四面廻廊破失矣口傳云彼二臂如意輪觀音  
御衣木中御母皇后御髮切奉籠申也可秘

彼皇后正西方極樂能化入重玄門之彌陀如來促ニ六十

(二十七オ)

萬億那由他恒河沙由旬之御身、顯三障三從之女人、躰

極重惡人、導方便化來、日本太子正救世觀音也、故四

句文、大慈大悲本誓願、愍念衆生如一子、是故方便從

西方誕生、并州與正法、我身救世觀音、定惠契女大勢

至、生育我身大悲母、西方教主彌陀尊、此寺五額

有、一東門法滿寺、二南門飛鳥寺、三西門元興寺、四北門

法興寺、五中門元始寺、又中宮寺、然太子如未來記、過

五百年、悉破壞、交朱丹、二階樓門、摩尼鏡、無今、二階

金堂、一字塔婆、一基殘留、諸堂、破秋霧、不斷香

(二十七ウ)

烟立上扉落、夜月常住燈挑、本尊奉拜霜雪降朝、鳥

瑟之頭戴、三冬雪、風雨滋、暮青蓮、御眼流、紅淚、給疑

瓦松生垣、苔生氣色似、山野、寒庭荒末、人迹絕、草深

是、人生滅、知義也、或說、ニハ三百歲、後十二月晦日、雷火有、麤失

古老說、ニハ人皇八十九代龜山治文永年中、一人之比丘

嚴重依靈夢、感得天壽國曼陀羅、達天聽再

與口傳アリ

○太子廿六歲、丁巳夏四月、百濟國之自天、蹕調貢、余時

百濟儲君阿佐太子臨、此使、天子奉、奏給樣東海片

(二十八才)

州正身之觀音現、入躰、出世在、傳承任、勅命、可結緣

申、時君、綸言、彼日、域粟、散片、土雖、爲小國、之天子、天神、

之性、傳人、倫同、枝葉、也故、智惠、巧秤、廣博、況彼、於化來

人、哉法、華經、廿四品、之妙音、菩薩、之師弟、御問答、仍彼、阿佐

太子、召具、三百、余人之、供奉、上下、遠自、西天、東土、將來、聖

德太子、此由、聞食、吾朝、小國、宮室、見苦、事悲、給然、彼

百濟國、宮室、莊嚴、美麗、人間、界住、家共、不覺、宮殿

万々、樓閣、重々、鳳闕、黃金、鸞、萬連、立瑠璃、寶幢

照地、幡蓋、繖、天泉、水影、曇疑、顏梨、壁畫、紅玉、瓔珞、垂露

(二十八ウ)

隨、風亂、轉龍、樓金、殿內、異香、薰沈、檀交、簫笛、琴

笙、篳篥、琵琶、鏡銅、鈸樂、之聲、誠雲、上棲、也言語、更不

及、然吾、朝禁、中彼、國百、分不、及一、輕賤、舟楫、夷小、國片

土、悲也、岡本、南宮、并澤、田宮、吾朝、莊嚴、無雙、皇居、其時、橘京、

云、今之、橘寺、也亦、小經、田、彼、阿佐、太子、乘寶、輿、指玉、幡紫

蓋、音樂、奏供、奉之上、客乘、莊馬、前後、左右、圍繞、西國、山

城、國泉、川渡、奈良、坂上、洛給、余時、聖德、太子、彼、阿佐

太子、位勢、并三、百余人、之供奉、在形、爲御、覽三、輪山、北

成、穴師、森忍、隱給、へり、爰、阿佐、太子、御舍、人須、知摩

(二十九オ)

申 此成當辰巳山麓 一定聖人座 敷瑞雲聳 侍申阿

佐太子恠御覽給 實紫雲高聳 即聖德太子御座

知食寶輿昇居 合掌給 三百余人供奉之人々皆馬下

成三禮拜 聖德太子顯 思食眉間之白毫放阿佐太子頂

照乃三百余人及 即阿佐太子放光謝給 其後澤田宮

入奉聖德太子御對面有

或傳云太子御兄才三人同色御裝束ヲトムノへ同床ニ竝坐 阿

佐太子無左右ニ聖德太子不奉見知 其後太子雙御手開

印文在口傳アリ阿佐太子彼印文御覽有驚拜給ヘリ同

(二十九ウ)

左右御手左右御足之掌皆秘文在 余更不知彼印

文大悲經文也或說文保元年七月十四日遠江國橋本西

福寺示現在云々

阿佐太子奉見聖德太子雙御手掌雙御足掌秘文有

故大床下出庭上右膝着地合掌恭敬曰

合掌敬禮 救世大士 觀音菩薩 妙教流通 東方日國

四十九歲 傳燈演說 大慈大悲 敬禮菩薩 合掌二字ハ今所加本無

亦敬禮ヨリ 太子合目須臾眉間放一白毫長三丈許良

久縮入阿佐更起再拜兩段 尔時百濟國三百余人之供

(三十オ)

奉衆我朝之卿上雲客等各成信伏隨喜心給其後並

座床以異國詞様々形々有御問答是已前今當之御

清談也既阿佐太子還御成給聖德太子惜名殘播磨

國明石浦御送在聖德太子還御成謂左右曰是吾昔

身為三弟子昔戒善薰修依今生大國宮為儲君王子

師弟契深今數十里烟浪分尋來は無華妙文在可町  
諸佛土常與生有難

松子傳云抑吾君之御壽限百濟國王子最初之御對面

之時禮文僅四十九年宣給今年御年已廿六歲也殘

年月今不幾思付可奉別事悲是會者定離習

(三十ウ)

云ナカラ悲歎淚滿袖太子臣告言汝悲歎事

勿實生者必滅之理權者實者難遁者也本師釋尊

十九出家生別八十入滅之死別分段生死悲是也

又變易生死佛果臺今生歎後生喜也吾又如是今

生愛別離苦後ハ一佛善緣之臺俱詣耳

○太子廿七歲午春三月膳娘為妃太子三人妃事就テアマタ  
義アリ一人ハ伯父妃敏達

天皇女一人ハ川上妃蘇我三月太子自イカルカウ宮アノクニ飽波指過窪

田打渡屏風清水御心澄奥津高堤打通十市宮參

内及夕横道中津道懸給岡本宮通給其比膳村一人

(三十一才)

有老女二年、鬪齡傾、無一人子、悲余身如何兒養、思無

可然事、經二年、月二處、或年二月廿六日、倉橋山中、尾時不

月光赫奕、不思議、見程光闕、落人大佐合、其次日、薪

取男共行、尋見月落、見所、膳葉引覆、面白端正女

子捨置、泣音異聞、只物非、山人四方、逃去其中、男申

縱何變化者也、赤子分際、何事可有、山深里、遠人迹、絶

所化、狐狼食物、成事可、不便一人里、近具行、膳村捨置、

老女是、見付大喜、取上懇養、育角經二年、月一程、此子

桃李粧、馴敷楊柳、姿タヲヤカニノ仙洞、后妃深宮、采女

(三十一ウ)

是過見、去程生年十六歲、三月半、草庵竹編戶之中

年月送程、其養母行步、今不叶、昨日爲汝我仕、今日

汝我仕、今心計册、我身何成、後汝獨殘如何、漸世間之

態習、箆籠持澤根、芹摘出、其隣女共三三人伴、三輪

川原橋邊三町計、行根、芹摘、箆籠入、其時聖德太子

乘鳳輦、供奉人々、前後圍繞、三輪大明神、御參詣有

近邊上下、万民遙敬奉、見此三人、女共中、兩人近付奉拜

此、姬計根、芹摘、御行、不奉拜、太子是、惟給命、御使

三人内、二人遙吾見、一人更不上面、其顔何疵有、問給

(三十一オ)

此姫答申 我身全疵片輪無又可奉恥事無我身父母

共不持倉橋山捨置 赤子也然膳老女被養昨日草菴

我身册 今歲闌行步不叶身成今日 汝我孝 出立孝

養笹籬根芹摘程心外拜不侍申勅使還此由奏太子

委聞食是有由女 御輿近召寄 御覽 日比奔走有后

妃采女勝假染 御物語後千歲 契 ホシク思食汝妻定

問給女申 懸賤身 誰人可契月漏來便 桂男通 外不覺

申太子然 男子習無主女憑世常事也今行合物語

更其契不淺 別仲人不可有汝妻憑可 仰有 姫顔打

(三十二ウ)

赤令恥氣色也太子重勅有様今日吉日 阿兒此夕汝

宿夜行可更一定 殊勝寶ヲ出給ヘリ 今ノ世ノ憑ト申始ナリ 急歸儲之物可有

其用意赤白合 飯欠苜々 芟祝 汁手白猪子草俵

皮漢虎敷皮此外不可有太子聽岡本宮還御

成彼膳姫歸老女此由披露母大悅連 二人女共咲申 聖

德太子下手近侍 口惜一天皇太子海内采女任心給麻

衣賤性 シツノメカ根芹摘 御情懸御詞通 給給輕 結句又

夫婦契成 仰有 實事敷長物語申 愚 抑太子申欽

明天皇御孫用明天皇第三王子推古天皇々太子今

(三十三ウ)

一天四海攝政君御物今夜御夜行穴實 申去老女

云御儲物共不ニ心得申一爰百濟國之博士有 此不審

成博士意得是目出度御祝之物共也華梵 金輪之

七寶之弟一寶女備祝鴛鴦契久戀慕之情 慙 成

時尤用給者也但日本今此事案 赤白合飯 赤白米之

夏也 是白米變赤米ト成自然供云ヘル米也此米ハ 夫妻之祝此

白米經千歲ニ自然變赤成 男女ノ和合赤白糲ナリ

米用艾莒莒麥祝 汁 田自然出來富福神草也又ハナキト 夫云花ハ白是日本ニ名多是等午頭

天王日本ヘ天下給其在所河内國石川郡大黒 手白猪子 澤根芹

申其時同國薩伽田申處人女在是ト夫婦契時用給草也 草俵皮 十補懸編 漢虎敷皮 七補懸編 藥 申其時老

聖德太子伝 三

(三十三ウ)

女喜申是皆易者也太子優婆貧事知食加樣之物

儲也此優婆家申草庵葦桓柴戸藥葉也是等

可レ安歸老女心内思 猿年比日比數穢 タランヲハ太子敷

進夏返々恐也近隣之人々里々村々有緣無緣士民

勸申樣申出付人岡敷樣成共今日不思外聖德太

子優婆之女 許入給可御儲敷物 十補七補懸編

藥 葉 葦可敷藥ニ初定一程四五百枚計所望也且者

君御爲且私芳恩成可其上一樹之陰宿一河流汲皆

是先世契也况一村受レ生既七旬齡及日頃老女身人

二四九

(三十四オ)

數不<sub>レ</sub>待今日<sub>ハ</sub>後太子<sub>ヲ</sub>聳奉<sub>レ</sub>取去共面々<sub>ヲ</sub>爭<sub>レ</sub>輕奉可<sub>レ</sub>是

五枚彼三枚編與勸不<sub>レ</sub>實咲者有又猿御事有

信輩有一上之御爲一<sub>ハ</sub>所我執也其上此<sub>ハ</sub>所蘇我大臣之

御知行也若實事此事不<sub>レ</sub>承何科預哉面々五枚十

枚宛持集 其日申酉一時中五百枚計出來老女大

喜近隣民憑膳之南原假屋形立太子奉<sub>レ</sub>待供御

勸杯用意土器瓶子等調去程戌亥時終不<sub>ニ</sub>御行<sub>ナ</sub>待

時過給去太子御口スサミニテ御ケリト老女内入外出居不

居立不<sub>レ</sub>立待奉程夜半計成今姬疑折節南方見赤衣

(三十四ウ)

馬上臣下續松高捧御前進八劍宮前見渡其時老

女只今御行成東西走廻漸近給奉<sub>レ</sub>見太子鳳輦召<sub>レ</sub>五

百人倍從引具巍々蕩々御行成近鄉百姓共集遠拂

然太子御輦下給草表席坐給蘇我大臣妹子大臣

始五百余人假屋四面並居太子姬御對面海老等月

御言不<sub>レ</sub>淺老女被<sub>ニ</sub>召仕<sub>ハ</sub>走廻有<sub>レ</sub>脚上中云懸御祝<sub>レ</sub>所男

召仕申老女申様適在下鴈男皆逃去一人不<sub>レ</sub>候優婆

自外可<sub>レ</sub>然者無俄元服參シヤクマヲカケ烏帽子引入出ケレハ

猿烏帽着風情哉卿相雲客各咲合老女御杯進太子

(三十五才)

姫互御目見合給如形御勸杯有太子姫御杯取上

給御前置給老女申今朝優婆養姫今日太子妃也

御杯取上給上先三問召可哉勸申太子道理折

給又取上聞召老女角申卿相雲客各咲合其後御

杯月卿雲客中遣給夜深御酒宴有還御成其後

五百人倍從等后奉迎給老女同車入浴目出事共也

昨日膳老女卑賤身也今日養姫幸依綾羅錦緞身

纏葦輿乘百官圍繞金闕出入天下事一向老女心任

思見人是仰聞者是浦山老女同冬比古郷歸近隣

(三十五ウ)

士民悉召集各席編假屋打面々情深事悅金銀七

寶財與其上分々隨園田畠與然間親類老女見袂校

遙聞見マホソクソ中去太子后先世宿縁深御借老床上

同穴契不淺鴛鴦衾下比翼枕並年月送春秋經

程男女王子廿五人御理哉々々比姫是大勢至菩薩

西方

化現也太子觀音也廿五人王子廿五菩薩是也其後老女

齡漸闌行太子御勸依出家比丘尼形成入阿申中

宮寺臨終正念順次往生遂今膳寺爲彼老女太子

命三葛木臣一建立給寺也

(三十六オ)

氏云太子常御言我三財有一妃二調子丸三駒彼膳姫

倉橋山月落雙破其中生給申傳故此嬪宮御名多

倉橋姫言膳姫言芹摘姫言但本地大勢至變化成不思

議一不可定

松子傳云大慈大悲本誓悲願也衆生愍念給如一子是

故方便西方自邊州誕生與正法我身救世觀音也定

惠契女大勢至也我身生育大悲母西方教主彌陀佛

也眞如實相本一鉢也三現同一身日域化緣亦已

盡西方淨土還歸爲度末世衆生父母所生血肉身遺

(三十六ウ)

留膳地也此廟峯三骨一廟三尊位也過去七佛轉

法輪所也大乘相應功德地也一度參詣離三惡趣

決定往生極樂界中

或傳云人王六十代一條院御時正曆五年有人賜

宣旨致祈請入御廟處三御棺或御骨有或御骨

無不審之間押悲涙詠曰

有ヤ君ナキヤ妃ナラン。タマクシケヲホツカナクモヌルムソテカナ

院御返事ニ  
八耳ノ君コソイテンシツノヲカユカリ人コソシラハシルラン

御骨無カ妃ノ御棺ニ當レリ

(三十七オ)

同夏四月命左右言阿兒心求吉馬國々郡々尋名馬

一千疋可進上勅有然諸國自尋名馬僅廿日余其内

一千疋爲進上太子彼馬共御覽在御心相叶神力自

在之馬撰給爰甲斐國自奉馬四爪白黑駒進上太

子數百疋馬中此馬指言是神馬也可召留自余如本

本國可歸言

氏云此馬根本信濃國井上牧駄馬在四足白天龍トモ云

雷トモ云天下姻依彼黑駒生無程成長信乃井上自甲

斐駿河富士淺間嶽飛通人取ト欲眼瞼鼻息吹目

(三十七ウ)

光明人眼見合難不取爰甲斐國之國司秦河勝

太子綸旨申下向彼馬讀懸侍彼馬心隨被取河

勝悅皇太子奉馬也

余時太子言樣此馬舍人吾朝小國產者不可叶大國者

可相應言百濟國調使丸舍人付給次宮池加治師丸

是日本人也

氏云彼調使丸生年十八歲也甲辰年來朝此時太子十三歲御時ナリ

太子様々形々仰付黑駒令飼給然卯花之露契敷五

月雨比程無打過林鐘就々聞越行七夕之合悅明月八

(三十八才)

月風身冷早來九日菊祝 比過其月下旬成太子調使

丸召言黑駒庭乘馳 太子御覽在告近從之人言此

黑駒神力自在龍馬也 試太子被召御心如步 太子御

喜有言昔悉達太子金泥駒周穆王八疋駒爭比黑駒

可勝勅在一首御詠歌在

一三千歲耳二合事客之三黑駒 乘心四今世識也

調使丸承給申ケル

法之駒者君與馴何今自天住月手取見

太子馭彼東西北御遊有種々無盡御手綱食秘曲神

(三十八ウ)

變之更雖多言語不及無違 毛舉其後太子内裏臨

幸成推古天皇奏聞有様臣今年天下無雙求得名

馬一侍此馬得飛行相一希代名馬也臣三寶持 言 姫才二 膳

黑駒第三 但今是儲事皆天下賢德也君大稱美在 調使丸ナリ

勅有 臣賢人成德也 太子重奏聞有様臣三日三

夜暇可給一歲諸國數 大伽藍建立令雖侍 万機之御

政滋臣不能巡見 亦日本國中垂跡坐 大小諸神濟度

利生御有様 可奉問答志深侍也而今年幸得此飛

龍一早蒙御許 佛神可拜見任天皇命聽 依太子七

(三十九ウ)

日七夜有ニ精進ニ相ニ當、八日ニ侍日太子召ニ調使丸ニ勅有様黑

駒赤旃檀鞍置前奉、勅有、聽丸如レ勅莊嚴御馬奉同、

宮池加治師丸參太子告ニ一人舍人ニ曰、朕今乘ニ此馬ニ三日

三夜之間、日本國之虛空飛佛神拜見問答志侍只今

可レ行但ニ一人共可ニ召具ニ加治師丸日本小國受レ生者成朕

雖レ加ニ神力、全虛空共不レ可レ叶故可レ留汝勿レ恨調使丸大國、

者成思有ニ子細ニ馬右轡、取付相構、不レ可レ離勅有御馬、

被レ召暫有ニ御觀念、其後金御鞭當坐、彼馬忽ニ万里、

之虛空飛上踏レ雲分レ霞行間、貴賤万民驚レ目奇、

(三十九ウ)

異思奉レ成去程、太子忽ニ金峯山金精大明神杉洞至給、

太子明神申、給様夫神明臨幸志、偏佛法擁護爲也然、

欽明天皇十三年僧聽ニ二年、春天竺靈鷲山金剛峴之

丑寅、角破烈乘ニ白雲ニ万里蒼海涉、緣土下大和國大

峰止皆以金也、此金彌勒出世時普閻浮提地可レ被、

敷、金也然間爲守ニ此山、東隅堺來化給大慈大悲、方

便和光利物善巧偏、佛法弘通本誓也願明神我弘、

法志助日域佛法守給、祈請給其時明神忽現御、玉、

冠傾金扉押開自誓約給、爲レ守ニ和國佛法、我靈鷲

(四十才)

山、金剛囉出、向此界也。詫給太子忝尊思食、山上峯望  
給語ニ調使丸ニ曰、吾遷化後一百四十余歲時有ニ優。塞行

者、此砌行祈ニ執金剛神像ニ出佛法護持、靈神皇法守

護權化即涌出、岩屋到給又告丸曰、此岩屋過去諸

役行者也

佛法輪、町也又古仙遊行栖也情、案ニ過去世ニ閑思ニ未來

時、戀慕淚潤レ袂哀也、深山洞付給時思外三人鬼神

行合給鬼王合、手膝屈奏申、我等過去、今至、鬼神報

受、苦患轉、善身得令給申、太子種々教化授レ戒給、苦患

怒息、鬼王大喜御引出物眞弓、奉此弓自在也其眞

(四十ウ)

弓、爲未來ニ太子御自指植、給、故其町眞弓河原申也

又一人女人忽然、太子御前參太子命、調使丸、由來問給女

人答云、我一人、鬼子有、昔自今至、不離、母惱、支無間願大

聖此身助給、申其時近召御覽、左脇鬼子有、赤、如、朱、白

牙、似、釧、太子命ニ調使丸ニ云、汝威振其鬼子可レ投吾、鬼母取行

詔給調使丸承、命、忽其鬼子取投、大和國生駒嶽、太子

其鬼母、御馬邊召具多、谷峯越同釋迦嶽并佛生國

峯付給、調使丸語曰、汝知是峯過去諸佛轉法輪入

涅槃砌十方、賢聖坐禪得悟峯也、千巖峨々、雲霧

(四十一才)

切空中顯 万谷沈々 石岩破 遠流凡峯 風谷水八解脫

響有哀貴 蘇莫者峯 簫吹 給時樹神感不堪竊

出 舞遊調使丸太子此由奏 忽伏隱 三重岩屋參

給彼岩屋內外映徹明 事如鏡日中以前 胎藏界十

三大會佛菩薩明王天等說法遊行給光明赫奕

顯現日中已後金剛界九會尊儀羯麻等無量

儀式皆悉現前日正中時 尺迦彌勒千手三尊形貞

端正 現給又一石塔有方八寸也是阿育大王投給塔

婆也 是以藏王涌出穴 去程太子此岩屋打過給志麻

(四十一才)

國粟嶋過伊賀國阿拜名張兒宮巡禮 伊勢國桑

名日長打過 大神宮參 給大峯自召具給 鬼母乙女子

大神宮進 給太子中給 抑當社降化第六天魔王心

宥 我朝佛法守給 御計也願往昔住之本願佛法助護

給其 尾張國中嶋熱田打過三河八橋遠江濱名橋打渡

駿河國志太盛顏 打通富士峯付給 調使丸告云 此峯夫

嶮極嶺靈勝地也仰望三其望不知幾万仞 願其下遠數

千程巨 頂五佛四菩薩 听座八葉九尊內證也登涉 非

神 誰敢遊居 昔人王弟六代 御門孝安天皇 御宇靈嶽

(四十二オ)

始涌出遙見青天嶺白衣天女舞遊是隱彌勒本地即示

淺間正躰自余以來靈現無雙勝地也我入滅後一百歲

時優婆塞行者有勒行鎮護國家峯故吾登此嶺

佛法弘宣志為啓白也其伊豆國箱根甲斐國八代物部

相模國鎌倉打過武藏國豐嶋入間河打渡安房國朝

夷長狹森御覽上總國墳生天羽打過下總國結城墳

生里過常陸國筑波大峯飛越其夜鹿嶋社通夜給

上野下野多胡足利王造遠田社打越出羽國村山秋田

城巡見北陸道懸給佐渡國羽茂賀茂森打過越後國

(四十二ウ)

三嶋古志山越中國立山御覽能登國羽昨珠洲浦加

賀國白山越前國足羽信乃國更綾飛驒益田飛越近

江國滋賀栗田通若狹三方自山城國葛野紀伊國打

過三日三夜東山東海北陸道巡見給三日申申西間岡

本宮選御成給踏雲分霞諸國御覽捧三十卷注文奏進

天皇御前給天皇大喜御是雲上記名又高原記云へり

其正本蘇我入鹿誅時為大臣岡本宮燒時節悉燒失

無念無申計抑廟堀河内国石川郡磯長里定太子此

地形御覽曰吾為利生出衡山入此日城降伏守屋邪見

(四十三才)

於<sub>レ</sub>在々處々<sub>ニ</sub>造<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>四十六个<sub>ノ</sub>伽藍<sub>ニ</sub>化<sub>レ</sub>度<sub>ニ</sub>一千三百余僧尼<sub>ニ</sub>

一說云<sub>ニ</sub>太子急<sub>ニ</sub>推古天皇<sub>ノ</sub>御前<sub>ニ</sub>臨行<sub>ニ</sub>成天皇<sub>ノ</sub>大稱<sub>ニ</sub>美有<sub>ニ</sub>太子

奏<sub>レ</sub>曰<sub>ニ</sub>抑臣<sub>ノ</sub>今年<sub>ニ</sub>相<sub>レ</sub>叶<sub>レ</sub>意<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>神力<sub>ノ</sub>自在<sub>ニ</sub>馬<sub>ニ</sub>日本國<sub>ノ</sub>僅<sub>ニ</sub>三日<sub>ニ</sub>三

夜間<sub>ニ</sub>巡見<sub>ニ</sub>一切<sub>ノ</sub>諸佛利益<sub>ノ</sub>方便<sub>ノ</sub>悉問<sub>ニ</sub>答<sub>ニ</sub>侍<sub>ニ</sub>忝<sub>ニ</sub>御本地<sub>ノ</sub>皆

往古<sub>ノ</sub>如來<sub>ノ</sub>久成<sub>ニ</sub>薩埵<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>故此<sub>ニ</sub>五濁<sub>ノ</sub>垂<sub>レ</sub>跡<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>雖<sub>ニ</sub>隨類<sub>ノ</sub>應<sub>ニ</sub>同<sub>ニ</sub>御

利生<sub>ニ</sub>泥中<sub>ノ</sub>如<sub>レ</sub>蓮<sub>ノ</sub>故<sub>ニ</sub>大明神<sub>ノ</sub>申<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>亦<sub>ニ</sub>一切<sub>ノ</sub>神明<sub>ノ</sub>本地<sub>ノ</sub>之內<sub>ニ</sub>證

隱<sub>レ</sub>位<sub>ニ</sub>現<sub>ニ</sub>應<sub>ニ</sub>同<sub>ニ</sub>之形<sub>ニ</sub>利益<sub>ノ</sub>衆生<sub>ノ</sub>大菩薩<sub>ノ</sub>號<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>然<sub>ニ</sub>一切<sub>ノ</sub>神明<sub>ノ</sub>

之御本地<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>躰<sub>ノ</sub>可<sub>レ</sub>化<sub>ニ</sub>衆生<sub>ノ</sub>慈悲<sub>ノ</sub>垂<sub>レ</sub>給<sub>ニ</sub>權現<sub>ニ</sub>云<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>實<sub>ニ</sub>三

身<sub>ノ</sub>則<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>躰<sub>ノ</sub>也<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>點<sub>ノ</sub>合<sub>ニ</sub>王<sub>ノ</sub>用<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>此時<sub>ニ</sub>諸神<sub>ノ</sub>貴德<sub>ノ</sub>并<sub>ニ</sub>佛器<sub>ノ</sub>領<sub>ニ</sub>共<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>記<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>卷物<sub>ノ</sub>六<sub>ニ</sub>卷<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>

(四十三ウ)

太子命<sub>ニ</sub>丸言<sub>ニ</sub>汝<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>三日<sub>ニ</sub>三夜<sub>ニ</sub>間<sub>ニ</sub>忘<sub>レ</sub>疲<sub>ニ</sub>隨<sub>ニ</sub>吾<sub>ニ</sub>誠<sub>ニ</sub>忠<sub>ニ</sub>士<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>丸啓<sub>ニ</sub>曰<sub>ニ</sub>

意<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>覆<sub>ニ</sub>空<sub>ニ</sub>飢<sub>ニ</sub>更<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>覺<sub>ニ</sub>唯<sub>ニ</sub>如<sub>レ</sub>步<sub>ニ</sub>陸地<sub>ニ</sub>但<sub>ニ</sub>諸國<sub>ノ</sub>高山<sub>ノ</sub>皆<sub>ニ</sub>御馬<sub>ノ</sub>

足<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>見<sub>ニ</sub>侍<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>吾<sub>ニ</sub>身<sub>ノ</sub>飛<sub>ニ</sub>虛空<sub>ニ</sub>覺<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>內<sub>ニ</sub>大宰<sub>ノ</sub>釋迦<sub>ノ</sub>嶽<sub>ノ</sub>駿河<sub>ノ</sub>

富士<sub>ノ</sub>峰<sub>ノ</sub>御馬<sub>ノ</sub>脚<sub>ノ</sub>少<sub>ニ</sub>懸<sub>ニ</sub>覺<sub>ニ</sub>侍<sub>ニ</sub>申<sub>ニ</sub>諸臣<sub>ノ</sub>聞<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>奇異<sub>ノ</sub>之<sub>ニ</sub>思<sub>ニ</sub>信

敬<sub>ニ</sub>袖<sub>ノ</sub>振<sub>ニ</sub>合<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>太子<sub>ノ</sub>丸<sub>ノ</sub>稱<sub>ニ</sub>美<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>へ<sub>リ</sub>此<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>御廟<sub>ノ</sub>之<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>所<sub>ニ</sub>求<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>

駿河<sub>ノ</sub>之<sub>ニ</sub>富士<sub>ノ</sub>峯<sub>ノ</sub>御覽<sub>ニ</sub>河內<sub>ノ</sub>國<sub>ノ</sub>石川<sub>ノ</sub>郡<sub>ノ</sub>磯長<sub>ノ</sub>里<sub>ノ</sub>過<sub>ニ</sub>去<sub>ニ</sub>七<sub>ニ</sub>佛<sub>ノ</sub>之

轉<sub>ニ</sub>法輪<sub>ノ</sub>處<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>尤<sub>ニ</sub>足<sub>ニ</sub>稱<sub>ニ</sub>美<sub>ニ</sub>即<sub>ニ</sub>廟<sub>ノ</sub>所<sub>ノ</sub>可<sub>レ</sub>定<sub>ニ</sub>十五<sub>ニ</sub>歲<sub>ニ</sub>但<sub>ニ</sub>丙子<sub>ノ</sub>歲<sub>ノ</sub>御年

同<sub>ニ</sub>八月<sub>ニ</sub>新羅<sub>ノ</sub>國<sub>ノ</sub>自<sub>ニ</sub>獻<sub>ニ</sub>孔雀<sub>ノ</sub>一隻<sub>ニ</sub>天皇<sub>ノ</sub>歡<sub>ニ</sub>覽<sub>ニ</sub>恠<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>稱<sub>ニ</sub>躰<sub>ニ</sub>太子

奏<sub>ニ</sub>曰<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>稱<sub>ニ</sub>鳳<sub>ノ</sub>者<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>新羅<sub>ノ</sub>南海<sub>ノ</sub>丹穴<sub>ノ</sub>之<sub>ニ</sub>山<sub>ニ</sub>天王<sub>ノ</sub>勅<sub>ニ</sub>曰<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>聖<sub>ノ</sub>人

(四十四才)

徳不能教之、其夜天王御夢此鳥成ニ鳳凰ニ數鳥來尊

中鶴千秋樂歌遊其晨、天皇勅ニ太子ニ説ニ其容ニ太子大悅給

言是瑞鳥、君御壽百歲也、世治給、支卅六箇年也

尾州山田郡内飽津保上村於

太子堂寄進之

松原下總守廣長(花押)

寛正五年 甲申 三月六日

聖德太子傳 四

(一オ)

○太子廿八歲已春三月太子候望天氣奏曰夏之初必大地

振普天卒土大歎可出來是即君女人御身備天子位二百

王之理亂深御心中不被懸御政疎故覺侍也誠一天風

和四海浪靜風雨隨時日月光鮮萬民快樂併賢王聖

主之政妙由時而君蒙天地賁給故近日大地振天下人民

歎出來矣天皇大驚叡慮此由天下有披露兼令屋舍

堅給御祈禱不紅雖然夏四月大地振山崩江河埋海傾

逆浪茫茫堂塔佛閣屋舍悉破損山棲獸飛行鳥類江

海鱗等及身心不安況於人倫哉故眼黑白難弁耳不離

(一ウ)

物人々叫喚聲彼大地震一日一夜也天皇詔太子曰

抑火何成世中上代未傳聞是朕女人身天下主故天

地之崇成坐覺侍朕御代加樣之大難起悲忝御歎

有太子蜜奏曰天男為陽為地為女為陰之理不

足即陽迫而不能通陽道不填即陰塞而不得達

故有地震陛下為女主居男位唯御陰理不施陽德

故有此譴抑地震申堅牢地神所作也凡娑婆

世界大地厚十六萬餘緒那彼大地之底本地大聖文

殊變化顯堅牢地神雖載此大地不重但率土不孝

(二オ)

師君父母ニ者出來又一天之主万機之政疎 時大地俄

重堅牢地神頭 五躰熱惱給時身躰動 故大地動

搖云然只今之地振先記規未聞是案 御慈悲政有可

伏願德澤潤物仁化被民天王大悅下天下勅今年

調庸稅祖並免 是日本國人民百姓御年貢 三年間免給稅租官物ナリ

氏云其後又四个年惣前後七個年之間御年貢留施仁

德一給天下太平万民快樂然此御政上代應神天王

第四御子仁皇十七代仁德天皇御時三个年間留

御年貢一助民給故太子是先例引給 古老人云人

(二ツ)

皇六十代一條院御治世以慈悲爲德給諸道賢人

醍醐天皇

盡數生相奉故帝常御詞朕得仁自稱 然彼嚴

寒冬夜霜雪降埋庭上寒風通膚難忍折節脫

錦御衣一給近從人々驚恠勅問在天皇答言朕万民

主四海民寒何朕身溫哉言次人皇七十代後冷泉

院慈悲仁德有故河内國石川郡磯長御墓自記

文出現其記文御影堂在文云吾爲利生出彼

衡山入此日域降伏守屋之邪見終顯佛法之威德

於處々一造立四十六箇之伽藍化度一千三百余之僧

(三オ)

尼<sub>ニ</sub>製<sub>シ</sub>法華勝鬘維摩等<sub>ヲ</sub>大乘義疏<sub>ヲ</sub>斷惡修善<sub>ス</sub>

之道漸<sub>ク</sub>以滿足<sub>ス</sub>矣今年<sub>ニ</sub>次<sub>ニ</sub>辛巳河內國石川郡磯

長里有<sub>ニ</sub>一勝地<sub>ニ</sub>一尤足<sub>ニ</sub>稱美<sub>ス</sub>一故點<sub>ニ</sub>墓所<sub>ニ</sub>已<sub>レ</sub>了我入滅之

後及<sub>テ</sub>于四百卅余歲<sub>ニ</sub>此記文出現<sub>ル</sub>哉<sub>ハ</sub>時國王大臣發<sub>シ</sub>

起<sub>シ</sub>寺塔<sub>ヲ</sub>願<sub>シ</sub>求佛法<sub>ニ</sub>耳

天喜二年<sub>甲午</sub>九月廿日未時御出現畢或說<sub>ハ</sub>堀出<sub>シ</sub>之<sub>ヲ</sub>

太子入滅<sub>ス</sub>辛巳也天喜二年<sub>歲次</sub>甲午<sub>歲</sub>マテハ四百卅四年當歟

其時河內國丹南郡下菅<sub>ノ</sub>郷但馬入道云人之姫<sub>ノ</sub>其時參

相歌<sub>ヲ</sub>末代契置<sub>ヲ</sub>石簿之願<sub>ヲ</sub>世合喜<sub>ス</sub>

(三ウ)

是皆太子之變化神力也

同秋八月百濟國貢<sub>ニ</sub>駱駝<sub>一</sub>一疋驢<sub>一</sub>一疋羊<sub>一</sub>二頭白雉<sub>一</sub>一隻

太子奏曰白雉者鳳類也餘是彼土常禽也皆還給<sub>ス</sub>

時百濟使大奇<sub>ニ</sub>異信陪<sub>ニ</sub>多<sub>シ</sub>

○太子廿九歲<sub>庚申</sub>春正月天皇勅曰<sub>ハ</sub>新羅國王心貪欲<sub>ス</sub>

勳<sub>ヲ</sub>欲<sub>シ</sub>攻<sub>ム</sub>任那<sub>ニ</sub>汝如何思太子奏曰<sub>ハ</sub>彼國人心如<sub>ニ</sub>虎狼<sub>一</sub>無<sub>シ</sub>慈

悲<sub>シ</sub>我命不<sub>レ</sub>業常犯<sub>ニ</sub>任那<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>致<sub>ニ</sub>大儀<sub>一</sub>輒<sub>シ</sub>難<sub>シ</sub>靜<sub>シ</sub>即命<sub>シ</sub>將軍<sub>一</sub>

可<sub>レ</sub>加<sub>ニ</sub>誅罰<sub>一</sub>也太子命<sub>ニ</sub>阿陪<sub>臣</sub>部<sub>一</sub>曰<sub>ハ</sub>汝達<sub>ニ</sub>弓刃道<sub>一</sub>汝爲<sub>ニ</sub>大將<sub>一</sub>新

羅凶徒責伏<sub>ヲ</sub>詔<sub>シ</sub>爰阿部臣奏<sub>シ</sub>我朝<sub>ニ</sub>四夷逆黨伏<sub>シ</sub>夏

(四才)

甚以爲難。雖然隨御命急可令發向。由勅答申太子

大喜御以穗積臣爲副將軍率二万余騎二月一日都

立同月渡任那彼國之王大悅即命將軍等兵相共新

羅國渡破却五城新羅國王惶到旗下悉請降將

軍等免之上冬十月飯朝日本之大將軍阿陪臣穗積臣

是神國御世孫太子新羅自亦重責任那太子此由聞召非

本意云々

○太子卅歲辛酉春二月皇太子初宮造于班鳩林或說此處大成

槻木在班鳩ト云鳥其數不知又上宮太子申太子誕生宮名

(四ウ)

也故豐日宮上宮申也自內裏南山麓也河上成故上宮

申然彼班鳩宮葦萱葦御支度也近從之人々太

子奉諫樣抑君一天儲君万乘同如何宮殿葦萱御

支度有哉申太子答曰誠諸臣諫叶理但吾此代片時

不留心故宮殿莊嚴不入心凡有爲之諸法夢中如夢

幻中之如面影只吾常住樓西方極樂不退淨土也何

万民愁集此權棧造威成一人營果古老人云誠太子廣

同建法隆寺并三尊堂同三月太子奏曰高麗百濟

自令攻任那即大伴咋遣於高麗坂本糟手遣於

(五オ)

百濟、忽令救任那、給秋九月新羅之簡牒者、名曰迦摩多。

到對馬、即捕而進、天皇將加刑罰、時太子奏之、流于

上野國、早同五月太子往來客天下理之婆次欲

聞食、曲河堤一日異人形、學食既及暮處一人老

翁來同女牛引來矣、汝太子如政云、太子聞食明日

命、有司召寄賜寶、翁不得先世宿福眼前也。

此時ヨリ香支始ヌ曲河ノ香事ヲ河内ノヤヲヘ傳ミ

○太子卅一歲、壬戌推古天皇十年春正月奏曰、與數萬之軍

兵、新羅遣彼凶帝令伏天皇然、之即米目王子爲大

(五ウ)

將軍、此王子用明天王二萬五千之領、兵衆同月廿日門出、第三ノ王子也。

在夏四月到筑紫、臥病不進、太子聞之語左右曰、新羅

奴等厭魅、將軍疑不果渡、新羅種々謀廻欲禦、然任

那國新羅國、中間東城山云、新羅第一搆城郭、同

彼山峯東北取陣、其外多固要害、楯籠也、然任那

百濟高麗日本之打手、責伏、故百濟國勢西成深峻、

云、城押寄合戰、任那國新羅北成、高津浦合戰爲高

麗國者新羅國之北成、陵山合戰爲血川、流死人山見、

爰日本軍兵東城山、馳向、所楯籠、城郭破却、漸經三日

(六オ)

數一程新羅軍兵等彼城引退首陵山ト云 旣植籠新羅國

者秘術之謀賢故毒飯毒酒毒味食構置東城山引

退故日本之軍勢彼城亂入米目王子大伴ト云 大臣坂

本神手此酒飯不可食雖ト云 下知成ト云 旣大勢事成不聞此

酒飯食毒忽崇目暗心亂鼻口血流出前後不覺倒

臥御大將米目王子大伴ト云 大臣坂本神手始毒不犯

者三百余騎也餘二万四千六百余騎皆毒破時大將

軍日本神祇冥道奉ト云 祈念彼毒侵ト云 官兵安穩太平ト云 卽

蘇藥求十方馳走爰一之奇特在新羅國兵日本之

(六ウ)

軍兵隱高山峰登大木之陰忍居日本之兵毒侵伺

見處日本之將軍見出卽召寄速日本之朝命可奉

隨不然汝等命可失言彼新羅五人兵客驚怖答

言臣等則此國之君使也日本將軍等毒醉臥給者

悉擲取辜行奉爲遠目也言王子是聞食大喜給

勅樣先毒醉者忽平愈藥知哉分明不言汝等命

可誅急々可申御呵責有怖合掌言毒酒飯醉臥者

紫蘇申草令食給忽可蘇也申其時大將軍已下

人々悅卽尋令服官軍等悉平愈希代不思議之

(七オ)

事也其後米目王子彼新羅者共國案內城郭合戰

趣委問御坐客兵答申此國之王城是五十余里也

打手兵衆五十万騎是自五里內充滿小縁責伏

不可給軍兵陣固城郭八个所也山高谷深大河

落岩浮白浪立重波花面滿開凡夫可發向非軍陣

申米目王子大伴咋大臣坂本神手王子等重問是五

十余里之王城近道無分明可申不然汝等命可誅言客

軍長我等命助給道知可申近道侍也難處更無是王

城之直道僅十里計也申時日本軍兵喜彼客軍等前

(七ウ)

追立程無新羅王城責近新羅國皇帝數万騎軍兵

在々處々之城郭置給何危可有酒宴與宴伎樂管

絃在皇帝御遊覽最中不計時聲上王城之東南當新

王山云山峯打登鎗矢百余籠火一度敵城放給鳴聲

如雷猛火天滿王城忽燒時國王驚動大將軍副將軍征

將軍官軍等頓驚急出日本軍兵打向防圍雖不叶

爰天王勅言風聞日本神明御國皇法守護給人力不

及故朕八个所城搆數万官軍籠防處只今不圖此城

責來一重神明之教思侍也然朕神明人王乞降思如何

(八才)

哉時臣下大臣已下官軍尤可然勅答申故國王大臣諸

共日本將軍向乞降給日本將軍米目王子寬宥新

羅皇帝之助御命高名極兩朝無難筑紫歸朝有

雖然彼新羅國調伏道依有日本將軍呪咀奉依此米

目王子俄病床臥終筑紫葬給畢年一年隔太子同冬

十月百濟僧觀勒來貢曆本及天文地理遁甲方術之

書也是時選大臣之子共三四人以俾學習於觀勒矣大

陽胡史祖王陳習曆法是日本大友村主高聰學天文曆始歟

遁甲山背臣日立學方術皆學以成道也太子聞之

(八ウ)

謂左右曰吾昔在衡山修行也此僧為吾弟子在吾左右

常言作七曜度數山河利害之事吾以少術疾而去之

而猶追來將之如何宜取其性令習潤十月高麗僧僧隆

雲聰等來歸太子謂三僧曰汝來何晚二僧謝曰眞物未

饋久後披拜左右奇之左妹子大臣太子謂左右曰此等右蘇我大臣

昔日同行也今追來耳同推古天皇拾稔太子卅一願轉四歲

年壬戌春三月南閩浮提第一靈像大和國難波堀江

三世御且那相奉信乃國下向在多生利益明本懷今

善光寺如來也抑此如來根本奉尋遠月氏依二月蓋

(九才)

長者女如是五種大病忝 大聖釋尊手自月蓋本願造

立奉佛像也御衣木閣浮檀金御長一搽 手半左右

菩薩各一尺也天竺貴緣盡 震且來臨在 百濟之濟明王

像法入四百十六稔日本人皇卅代帝 欽明天皇治天下

十三年壬申十月十三日御來朝坐 日域既緣博 尾越

大連嫉 攝津國難波海沈 三十余年海中悲哀淚流

太子御年十四歲秋八月比海底 取出豐浦寺奉安置

又守屋大臣依嫉 難波堀江奉沈角 兩度海底水底悲

淚。給此土利生思食 實以難有而今三世御且那申 貧

(九ウ)

窮薄福善光 御憑雖有白床 草庵 光明赫奕 出現有

愁中奇特 其後人王卅五代帝舒明天皇御代 御寺主成

矣彼就如來御事 言語多端也委在緣起 同。年

安藝國嚴 鳴大明神始奉崇

或說 太子廿二歲推古天王即位癸丑端正五年十一月

十七日顯給卜緣起 見タリ 余時安藝國司同舍人

鞍作 云者 乘船恩賀嶋云嶋 遊侍處自西方 舉錦帆

小船見來龍頭船也彼船中 三人美女有如天女 端嚴美

麗也然彼女語 國司曰 自此日域百王為守護 離本所

(十オ)

顯此而自相見彼嶋實嚴嶋成和光利物也止此嶋

上宮太子弘給佛法并百王守護濟度一切衆生夫四

天自佛法東漸此萬里蒼海船中之災難大儀成此

嶋顯大明神一天風和四海波靜急此嶋中大小社壇臨

海上造竝百八十間迴廊自可崇國司驚信敬頭

就地返答申抑只今之物宣業侍只人不存何形貴

示現成私畏在天下奏聞申并上宮皇太子之可依勅

其驗天下化現可有言給彼三女房誠可然々自王城丑

寅之方顯客星并黑鳥現神技昨城中出現余時定

(十ウ)

諸人大恠天子竅慮可驚余時汝上洛此由可奉奏

即詔宣言法身恒寂靜清淨無二相爲度衆生故

示現大明神私云實法性不二ノ色身ハ寂光雖淨土朗也隨類應  
同之利生ニハ巨海ノ浪ニ和光佛法東漸之海上ヲ守給ヘリ

詫宣畢船諸共失希代不思議竟共也其後客星天出

現數千方鳥各咋榊枝洛中出現然一天帝奉始万人

恠折節國司上洛此由奏達太子帝奏言何形沙竭

羅龍王垂跡也彼龍王四人息女弟一本師釋尊御時

文殊教化依五障三從穢身顯南方無垢成道遂弟

三近江竹生嶋弟四相模國江嶋弁才天也是ニハ異說多シ  
一ニハ不可定

(十一オ)

然是才二息女影向在帝、守護臣佛法東漸力合四海、

風波靜天下太平万民安樂、示現也急勅意用奉、崇マ

天皇大有信敬、當國司命社壇令造巖嶋大明神奉、

崇給其後來臨神多亦推古天王御寄進田畠山埜敷、

不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>註其後及<sub>レ</sub>破壞<sub>ニ</sub>木姓將軍再興、切リ取リ

其後亦安藝國有德者在、異說アリ不及  
註云々彼巖嶋之御本

地大宮權現大日阿彌陀普賢彌勒等也中宮十一面觀

音客人宮毘沙門其外浦々奉<sub>レ</sub>崇諸神、釋迦藥師地

藏文殊不動等也然悲花經文云、我滅度後於末法中現大明神  
廣度衆生

(十一ウ)

實昔釋尊在世賢聖今諸神現給、

○太子卅二歲癸卯春二月大將軍米目王子新羅國調伏、

依二度無<sub>レ</sub>歸洛<sub>ニ</sub>薨<sub>ニ</sub>于筑紫太子此由聞食大嘆悲、

給謂<sub>ニ</sub>近從<sub>ニ</sub>曰、新羅奴等遂呪<sub>ニ</sub>煞將軍<sub>ニ</sub>返々無<sub>ニ</sub>本意<sub>ニ</sub>退、

其恨可<sub>レ</sub>果即勅命依軍衆選給冬十月天皇遷<sub>ニ</sub>于

小墾田宮<sub>ニ</sub>太子命<sub>ニ</sub>諸法師<sub>ニ</sub>令<sub>ニ</sub>安宅經講<sub>ニ</sub>此經三卷在是偏

新羅國調伏之爲也同十一月太子竝大臣卿相會議在、

大楯及勒双<sub>ヲ</sub>作軍<sub>ニ</sub>旗繪<sub>ニ</sub>其繪<sub>ニ</sub>四名<sub>ニ</sub>一獅子<sub>ニ</sub>一牛旗<sub>ニ</sub>三鱗

魚四金翅鳥旗也加樣之御軍用意支度有<sub>ニ</sub>

(十二オ)

同十二月太子始製五行之位、仁義禮智信也、各有大小、

合十二階德者攝五行也、故置首、群臣大悅、

一、仁ト云ハ慈悲弟一憐、人心也、二、義ト云ハ柔和ノ無僻事、

三、禮ト云ハ正直無二心一也、四、智ト云ハ憲法、無誤夏也、五、信ト云ハ

内外實方不遷心也、此五常正、人必積善餘慶、夙夜來也、

背人悉殃、餘身朝夕愁、成故釋尊說五戒、教化給煞、

邪妄酷也、然儒教五常如來五戒不同、護心一也、

一、傳外之夏、近江長命寺御本尊内三寸之銀聖觀音太

子先生御作外三尺千手御衣木赤梅檀太子御作也、

(十二ウ)

一、同國觀音寺太子御建立本尊三尺三寸三分太子、

刀三禮也、

一、攝津國仲山寺太子十六歲御建立御本尊五尺二寸十一

面御衣木赤梅檀太子先生舍衛國御作也、

勝勢者體善哉、疑、尼建子者開嚴懺王覺、昔善哉童子  
求法御勝勢

婆性云此刀山在其麓、大聚在其中、大乘法師其身投給ト云依善  
哉身投求法滿足、亦尼建子說法ノ嚴懺王之休疑、

大和檜隈寺欽明天王之御菩提爲造寺也、即高市郡也、

一、正法千歲有佛法天竺餘不傳入、像法二十六歲漢明帝、

御宇永平八年摩騰竺法蘭二人梵僧負佛教白馬、自、

(十三才)

西天漢來明帝悅王宮西建立伽藍號白馬寺佛法盛漢

事三百歲其後渡百濟國彼國百年未滿傳日域然是

像法四百餘歲忽釋尊御入滅自一千四百十六年吾朝渡

佛法此時我朝仁皇卅代欽明聖代治天下十三年壬申十

月十三日自百濟佛法東漸金銅釋迦阿彌陀智度論

百卷

釋尊御誕生周穆王十四代帝照王廿四年甲寅四月八日也

○太子卅三歲甲子春正月始賜冠位各有差別夏四月

肇製憲法十七個條一手書奏之

(十三ウ)

一云以和不爲貴無忤爲宗人皆有黨亦少違者是以

或不順君父二年違于隣里然上和下睦諧於論事理

自通何吏不成

二云篤敬三寶三寶佛法僧也則四生之終歸萬國棟梁

何世何人不貴是法人鮮尤惡能教從之其不歸三寶何

以直枉

三云美詔必謹君則天之臣則地之天覆地載四時順行

萬氣得通地欲覆天則致壞耳是以君言臣業上行

下靡故美詔必慎不謹自敗

(十四才)

四云群卿百寮以禮爲本其治民之本要在乎禮上

不禮而下不齊下無禮以必有罪是以君臣有禮位次

不亂百姓有禮國家自治

五云絶饗棄欲明辨訴訟其百姓之訟一日千支一日

尙尔况乎累歲治訟者得利爲常見賭聽瞋便有

財之訟如石投之乏者之訴似水投石是以貧民則不知

听由臣道亦於爰闕

六云懲惡勸善古之良典是以無匿人善見惡必匡

其誣詐者則爲下覆國家之利器上爲下絶人民鋒劔亦

(十四ウ)

佞媚者對上則好說下過下則誹謗上失其如此人

皆無忠於君無仁於民是大亂本也

七云人各有任掌一豆不濫其賢哲任官頌音則起奸

者有官禍亂則繁世少生知尅念作聖夏無大小得人

必治時無忽緩一遇賢自寬因此國家永久社稷國也勿

危故古聖王爲官以求人爲人不求官

八云群卿百寮早朝晏退公事靡監終日難盡是

以遲朝不速于忽一早退必夏不盡

九云信是義本每夏有信其善惡成敗要在乎信群

(十五オ)

臣共信、何事不成、群臣無信、萬事悉敗。

十云絶、忿、棄、頤、不、怒、人、遠、人、皆、有、心、心、各、有、執、彼、是、則

我非、我是、則彼非、我必非、聖彼必非、愚共是、凡夫耳、是

非之理、誰能可、定相共賢、愚、如、環、無、端、是、以、彼、人、雖、頤

還、恐、我、失、我、獨、雖、得、從、衆、同、舉

十一云明、察、功、過、賞、罰、必、當、日、者、賞、不、在、功、罰、不、在、罪

執、事、群、卿、宜、明、賞、罰

十二云國、司、國、造、勿、斂、百、姓、國、非、二、君、民、無、二、兩、主、二、率、土、兆

民、以、王、爲、主、所、任、官、司、皆、是、王、臣、何、敢、與、公、賦、斂、百、姓

(十五ウ)

十三云諸、任、官、者、同、知、職、掌、或、病、或、使、有、闕、於、夏、然、得

知、之、日、和、如、會、識、其、以、非、與、聞、勿、防、二、公、務、一

十四云群、臣、百、寮、無、有、嫉、妬、我、既、嫉、人、々、亦、嫉、我、嫉、妬、之、患

不、知、其、極、所、以、智、勝、於、己、則、不、悅、才、優、於、己、則、嫉、妬、是、以

五、百、歲、之、後、乃、今、遇、賢、千、載、以、難、待、一、聖、其、不、得、賢、聖

何、以、治、國

十五云背、私、向、公、是、臣、道、矣、凡、人、有、私、必、有、恨、有、恨、必、非、同

非、同、則、以、私、妨、公、憾、起、則、違、制、害、法、故、初、章、云、上、下、和

諧、其、亦、是、情、歟

(十六オ)

十六云使<sub>レ</sub>民以<sub>レ</sub>時古之良典 故冬月有<sub>レ</sub>間以<sub>レ</sub>可使<sub>レ</sub>民從<sub>レ</sub>春至<sub>レ</sub>

秋農<sub>レ</sub>桑<sub>レ</sub>之節 不可<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>民其<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>農何<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>桑何<sub>レ</sub>服<sub>レ</sub>

十七云夫大事<sub>レ</sub>不可<sub>レ</sub>獨斷<sub>ニ</sub>必與<sub>レ</sub>衆宜<sub>レ</sub>論<sub>ニ</sub>少<sub>レ</sub>夏<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>輕<sub>レ</sub>不可<sub>レ</sub>ニ<sub>レ</sub>

衆<sub>レ</sub>唯<sub>レ</sub>速<sub>レ</sub>論<sub>ニ</sub>大<sub>レ</sub>夏<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>疑<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>故與<sub>レ</sub>衆相<sub>レ</sub>辨<sub>ニ</sub>辭<sub>レ</sub>則<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>理<sub>レ</sub>矣

天皇大悅<sub>ニ</sub>群臣各<sub>レ</sub>寫<sub>ニ</sub>一本<sub>ニ</sub>讀<sub>ニ</sub>傳<sub>ニ</sub>天下<sub>ニ</sub>一也

古老人云太子卅三歲夏比捧<sub>ニ</sub>一通<sub>レ</sub>卷物<sub>ニ</sub>推<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>天王<sub>ニ</sub>參<sub>ニ</sub>内裏<sub>ニ</sub>天

奏<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>處也爲<sub>ニ</sub>王法<sub>レ</sub>之規模<sub>ニ</sub>十七<sub>レ</sub>憲章<sub>レ</sub>是也此書<sub>ニ</sub>太子<sub>レ</sub>殊<sub>レ</sub>執<sub>レ</sub>思

食<sub>レ</sub>故<sub>ニ</sub>四<sub>レ</sub>天王<sub>レ</sub>寺<sub>レ</sub>之御手印<sub>レ</sub>緣<sub>レ</sub>起<sub>ニ</sub>云<sub>レ</sub>臣<sub>レ</sub>忝<sub>ニ</sub>累<sub>ニ</sub>儲<sub>ニ</sub>君<sub>レ</sub>位<sub>ニ</sub>再<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>固

辭<sub>ニ</sub>出家<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>道<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>度<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>者<sub>ニ</sub>與<sub>ニ</sub>隆<sub>レ</sub>佛<sub>レ</sub>教<sub>ニ</sub>紹<sub>ニ</sub>隆<sub>ニ</sub>玄<sub>レ</sub>風<sub>ニ</sub>故<sub>レ</sub>製<sub>ニ</sub>十七<sub>レ</sub>憲

(十六ウ)

章<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>王法<sub>レ</sub>規模<sub>ニ</sub>流<sub>ニ</sub>布<sub>レ</sub>諸<sub>レ</sub>惡<sub>レ</sub>莫<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>教<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>佛<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>棟<sub>レ</sub>梁<sub>ニ</sub>遂

受<sub>ニ</sub>五<sub>レ</sub>戒<sub>ニ</sub>名<sub>ニ</sub>云<sub>ニ</sub>勝<sub>レ</sub>鬘<sub>ニ</sub>記<sub>レ</sub>給<sub>ニ</sub>

貼(下は切り取り)

亦太子最後<sub>レ</sub>之時<sub>ニ</sub>天<sub>レ</sub>奏<sub>ニ</sub>先<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>錄<sub>ニ</sub>十七<sub>レ</sub>憲<sub>レ</sub>章<sub>ニ</sub>奉<sub>レ</sub>進<sub>ニ</sub>王<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>之

規模<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>書<sub>ニ</sub>如<sub>レ</sub>斯<sub>レ</sub>隨<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>執<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>文<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>十七<sub>レ</sub>個<sub>レ</sub>條<sub>レ</sub>憲

法<sub>レ</sub>君<sub>レ</sub>臣<sub>レ</sub>願<sub>レ</sub>民<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>國<sub>ニ</sub>世<sub>レ</sub>間<sub>レ</sub>政<sub>レ</sub>道<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>理<sub>ニ</sub>悉<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>給<sub>ニ</sub>へ<sub>リ</sub>是<sub>レ</sub>皆<sub>レ</sub>孔

子<sub>レ</sub>老<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>等<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>製<sub>ニ</sub>漢<sub>レ</sub>書<sub>ニ</sub>後<sub>ニ</sub>漢<sub>レ</sub>書<sub>ニ</sub>論<sub>ニ</sub>語<sub>ニ</sub>孝<sub>レ</sub>經<sub>ニ</sub>等<sub>ニ</sub>抽<sub>ニ</sub>肝<sub>レ</sub>要<sub>ニ</sub>記<sub>ニ</sub>

給<sub>レ</sub>文<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>仍<sub>ニ</sub>太子<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>捧<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>天<sub>レ</sub>王<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>前<sub>ニ</sub>明<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>御<sub>レ</sub>講<sub>ニ</sub>尺<sub>ニ</sub>天<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>大

有<sub>ニ</sub>御<sub>レ</sub>感<sub>ニ</sub>末<sub>レ</sub>代<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>規<sub>レ</sub>模<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>勅<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>當<sub>レ</sub>座<sub>ニ</sub>命<sub>ニ</sub>群<sub>レ</sub>臣<sub>ニ</sub>令<sub>ニ</sub>書<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>世

間<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>披<sub>レ</sub>露<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>太子<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>筆<sub>ニ</sub>勅<sub>ニ</sub>封<sub>ニ</sub>付<sub>ニ</sub>法<sub>レ</sub>隆<sub>ニ</sub>寺<sub>ニ</sub>寶<sub>レ</sub>藏<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>納<sub>ニ</sub>

人王五十二代敏原天王御宇ナリ

早

(十七オ)

私云誠天下政道肝要成也故弘仁元年秋之比四天王寺

二階金堂内陣東脇之戸之上壁板弘法大師自染筆

書注給亦人王八十五代堀河院貞永年中於關東彼

十七箇條三段分五十一个條今之式目定天下御沙汰

(条)

用定給へり此十七个條王法御一代非後々末代之御記

文難有御夏也

秋七月改朝禮因以詔之云凡出入宮門以兩手押地兩

脚跪之越柵

(十七ウ)

同八月太子語秦造川勝云吾昨日夜夢是宮自北方

去三十里一到清淨林村其林皆楓木也大香其林中者

古朽木洞五百賢聖常集大般若理趣分轉見此夢

如何哉川勝御夢合勅答言樣臣此靈夢奉案思依

夏侍也自臣先祖所領從比去北十余里山城國愛宕郡

今ノアタコナリ

楓林中所大小楓多其中大成楓洞自蜂多飛出林中

充滿少童等來集以火燒之雖然燒朝夕出來夕燒

朝出來更不絕白時太子恠思食行此處可見言川勝

大悅舍弟川滿等談生前望也白急寃途橋初構渡

(十八オ)

御迎奉太子御喜在川勝先達行啓成其夕泉河北頭

宿四方觀覽在太子向南語左右言吾死之後二百五

十年有二釋氏修行道崇三寶於此地建立伽藍其

釋氏非他吾身一體成其弟子等尊法傳燈末法

之初佛教榮興古老人云是山階寺事也或說ニハ醍醐寺其

未來記相叶ヘリト云ヘリ太子入滅後聖武天王

百廿年當ナリ醍醐寺三百十餘年アタル然正法僧正太子之後身ト  
覺知スルカ故也障子傳云是聖武天王東大寺建立者則其記文相叶

云々其時太子假宮御跡ハ明日届イタリモ于菟途橋川勝眷屬ハ松  
建寺泉橋寺ト云ナリ妙衣寶也

服騎馬奉迎橋頭充滿道中太子謂左右云ハ親族其

眞人

家富饒亦手織絹線衣服美妍是國家之寶也至干木郡

(十八ウ)

川勝眷屬各獻清饗陪從輿臺已上二百余人皆悉醉

飽太子大悅其日臨楓埜而宿造假宮於蜂岳之下非日

而了太子彼楓林御覽有如御夢一大成楓之古木之洞

五百賢聖竝床行法會太子甚隨喜恭敬有故此楓埜

十箇日御逗留禮拜供養此林中異香薰

氏云太子御目五百賢聖顯凡夫眼蜂見也是凡聖之差別悲哉目在如盲

亦太子有日語陪從曰吾相此地一國之秀處也南晴朱雀之

地眇々北塞玄武峨々東河流其前青龍淵湛水西白

虎大道廣々尤四神相應無雙之砌也但我入滅後一百七

(十九オ)

十余季一帝王出世遷都佛法興隆苗胤相續不墜

軌小野臣染筆記之誠不變仁王五十年代然十個日畢太子還行

桓武天皇御代今之平京至ナリ

成其後或一年中再三或亦一兩年隔行幸成是楓野

稱別宮後以宮爲寺賜川勝一號三柱宮院異名峰岡寺

實名廣隆寺是川勝名亦大秦寺號并賜三寺前水田

乘廣隆云今ノウツマサ寺是

卅町寺後山野六十町但此寺造營畢テ太子四十歲御時本尊其

外之寄進共之時亦此寺之事ヲ明スト云亦ハ

太子御薨之後推古然爲繪佛像莊嚴定黃文畫師山背

畫師實秦畫師河内畫師檜畫師等免課役永以爲名

職是日本諸寺畫之始也

(十九ウ)

大鳥部松子傳云太子楓野之時相土車里曰今之平京見彼地

形國中秀名所也日本中心天下無雙之勝地也前朱雀後玄武左

青龍右白虎誠四神相應之砌也凡南州之東粟散國隨一也而

南晴陽也北塞陰北山南流水東西之遠山長連也皆福壽長

遠之謂顯故諸神先立守護給へり但我入滅一百七十余廻之星

霜隔一人帝出來可有遷都王法佛法榮北山之麓月神應

化百王守護之靈神也即賀茂下上之大明神御事也同北之

嶽龍神常止住是富貴也即貴船之大明神是也西有猛

靈鎮守即今之松尾大明神是也東醫王福壽瑞相在郎

(二十才)

今之祇園是也其外之諸神實我々王城守護シ玉カ爰大難

一侍相ニ當彼城之東北ニ有ニ高山靈嶽一昔拘留孫佛出現在

說法利生之古跡也今自後大伽藍出來常城之難可有但吾

今居ニ儲君位ニ下賤太子并三歲之御記文如說法結縁無吾入滅一百余歲誕生片土利

益ニ衆生ニ然後彼高山鎮護國家大伽藍立除ニ大魔障導

守ニ王法ニ已上松子 古老人云實太子御薨後一百余歲

近江國志賀郡生ニ下賤之家ニ給顯傳教大師ニ王城之牛刀

此叡山延曆寺立一乘円頓之教法崇給 即聖德太子也仍

彼遷都案 昔自七箇國四十七度之遷レ都在ニ一大和國

(二十才)

二日向國三近江國四長門國五攝津國六河内國七山城國

也已上四十七度遷都

抑仁皇弟一磐余彦尊大和國高市郡畝火糧 建王宮

何程無日向國宮前郡遷レ城五十九年申冬十月亦大和

國遷レ城在故神武自十二代景行天王大和國處々遷レ都坐

他國不レ遷爰仁皇十三代成務天王御代自大和近江國志

賀郡遷レ城御坐亦仁皇十四代仲哀天王御代二年即

位有秋九月長門國豐浦郡移レ都御年五十二歲崩御

治卅九年八幡御父也次神功皇后次應神天王二代御

延曆七年戊辰

(二十一オ)

仲哀ノ垂迹ヲ八幡ト號應神ノ垂迹ハ平野大明神ナリ  
治世一百年長門國仲哀八幡皇后生馬大明神應神平皇后ノ垂迹生馬大明神ト號

碓大明神也次仁皇十七代仁德天王御代攝津國難波浦遷

都在高津之宮申是也此内裏遷都之時荒獨住比卯月

上旬也天郭公初音遙音信侍間仁德天皇一首之御詠

在アレニケリタカツノミヤノホトミキスタレニナニハノコトカタルラム

次仁皇十八代履中天王御即位二年亦大和國高市郡

城返在是ハ仁德才一之御子御歲次仁皇十九代反生天王御正

世又自大和河内國移都有是建柴籬内裏住給

遠明香王宮申御長九尺二寸五分御齒一寸二分御年次仁王  
六十崩御仁德才一御子ナリト云

(二十一ウ)

廿代允恭天皇即位亦大和國城返在仁德才三御子也

次仁皇廿一代安康天王即位三年同國內泊瀬朝倉造

内裏給次仁皇廿七代繼躰天王即位五年山城國經

二代給次仁皇廿九代宣化天皇即位九年又大和國城返

在檜曲入野王宮住給次仁皇卅代欽明天王即位自七代

皇極御代大和國ト城給更他國移不給云ヘリ次亦仁皇

卅七代孝德天皇御代大和國自又攝津國長柄豐崎建

内裏御治世箇年也次仁皇卅十八代齊明天王皇極重祚ト云

又攝津國自大和國城返在明香岡本建内裏住給

(二十二オ)

次仁皇卅九代天智天皇即位六年近江國志賀郡遷城

在大津宮是也次仁皇四十代天武天皇即位又大和國城

返在岡本南宮申是也時人名明香ノ清見原宮白ス次仁皇四十一代女帝

持統天王九代之帝仁皇四十九代光仁天王大和國奈良

京更他國不移天下太平万機政久而聖德太子之御

記文不違御入滅後一百七十余歲相當

仁皇五十代帝桓武天王御治世年號延曆十三年冬十月

廿一日辛酉日大和國自奈良京山城國長岡京移彼長

岡京自同愛宕郡城移給自已來久積星霜福壽增

(二十二ウ)

長也余時桓武天皇以三人勅使令啓白賀茂之大明神

三人交名ハ一ニハ大納言小黒九次參議  
左大弁次右佐美臣等ナリ

亦此賀茂大明神年久御神也近江水海經千歲成桑原經千歲又  
成水海七度マテ御覽有程年久キ御年也ト申

彼三人勅使今之平京始吉凶之事賀茂大明神奏

聞勅使也自明神御返事太子卅三歲之記文一不違御

返答坐故東西重山遙連翠色深是偏君明德顯亦

万民撫育之德可有又三方河流福壽長遠之流顯

凡万民之眼不及境界也早兼日天下成披露以吉日可

有遷都但一難懸心侍也彼王城之東北當鬼門方

(二十三オ)

高山峨々聳<sup>トシヘ</sup>惡<sup>シク</sup>相有唯崇<sup>トシヘ</sup>佛天<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>然歟亦今年十月

今長岡京自彼方王相方也尤大吉也亦廿一日辛酉十死

一生日也取延可<sup>レ</sup>然歟託宣御座時三人勅使歸參神

託之由奉<sup>ル</sup>奏時天王進退極御座其比最證和尚<sup>トテ</sup>世無<sup>ク</sup>隱<sup>レ</sup>

貴僧御座奉<sup>ル</sup>請此由清談在<sup>レ</sup>是傳教大師之御事也最證  
其時末位僧正分<sup>ク</sup>坐<sup>ス</sup>

和尚勅答申サセ給ケルハ城陰陽其謂侍也但於<sup>ニ</sup>今月<sup>ニ</sup>吉

日無十死<sup>ハ</sup>努<sup>ク</sup>叡慮不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>懸給急件之以<sup>テ</sup>三月日<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>ク</sup>遷<sup>ニ</sup>城<sup>ニ</sup>

最證先於<sup>ニ</sup>此方角<sup>ニ</sup>建<sup>テ</sup>立<sup>テ</sup>鎮護國家大伽藍<sup>ニ</sup>晝夜法華

一乘之大乘講讀<sup>シ</sup>祈<sup>フ</sup>天泰平四海豐饒<sup>ニ</sup>別<sup>テ</sup>金輪王<sup>ニ</sup>祐安

(二十三ウ)

穩<sup>ク</sup>祈請可<sup>レ</sup>申峯藥師醫王勸請申同日月光光十二神

將七千夜又眷屬等共祈念奉<sup>ル</sup>則是根本中堂名惡魔

令<sup>テ</sup>拂<sup>テ</sup>東山麓<sup>ニ</sup>王法守護靈神佛法壅護神明奉<sup>ル</sup>崇唯速

以<sup>テ</sup>二件日<sup>ニ</sup>遷都可<sup>レ</sup>有<sup>ク</sup>陳奉<sup>ル</sup>帝大歡悅給然延曆十三年十

月廿一日遷<sup>レ</sup>城在仍比叡山<sup>ニ</sup>心竝<sup>ク</sup>書是桓武天王傳教大師

兩<sup>テ</sup>信心故彼山<sup>ニ</sup>比叡山<sup>ニ</sup>名心竝讀<sup>メ</sup>リ

一<sup>ノ</sup>聖德皇太子三十三記片土<sup>ニ</sup>託生<sup>セ</sup>願力故今彼傳教大師

生替<sup>レ</sup>天子共平京開給

一<sup>ノ</sup>件日十死一生惡日成<sup>ル</sup>天上僉議在諸道之博士等召集

(二十四オ)

今平京末代可レ久表示以レ土八尺之人形作着ニ申 冑持ニ弓

箭、向レ西東山、峯掘埋給是將軍墓名 天下兵亂出來時

必此墓鳴動 申傳、

○太子卅四歲乙丑推古天王常信ニ 太子妙說ニ 遂知ニ 佛法不

思議ニ發ニ大誓願、命ニ百濟國佛師鞍作鳥、造ニ銅繡、丈六、

佛像、金銅釋迦也

銅、二万三千二百斤黄金七百伍拾玖兩彼釋迦像、本元與

寺安置此時高麗大興王岡上大王

丈六分貢ニ 黄金參百兩、是助成結緣奉レ獻ニ太子大御

(二十四ウ)

悅有即奏ニ天皇ニ厚、以答レ之是新羅大王數万軍兵以高

麗百濟國任那等責伏、時自ニ日本ニ度々相議、爲ニ彼木之國、

新羅追罰、故如レ是其喜報謝、別紙云秋七月太子天奏、諸王臣木命謂、スリヲ令レ着寫

衣袴平帶亦是也、多十月太子遷ニ于班鳩宮、太子元居ニ南宮、

因爲ニ上宮、高市郡今坂田寺西、成廐、戶宮是也今班鳩宮

猶爲ニ上宮、太子別宮拜別可、由奏聞給者天皇流ニ御涙、

勅曰、朕雖ニ天主ニ唯皇太子憑天下方機、日夕下行、而太

子遠ニ別班鳩宮、朕之町不レ快、太子辭、謝奏曰、臣縱雖、

居、別宮、何敢奉、離ニ宮衛之下、臣寶飛行持ニ黑駒、故

(二十五オ)

晝夜參内侍万機百姓之訴訟皆以如三日來可執政侍天

皇大悅賜宴賜祿太子遷宮在其後太子斑鳩宮自

辰巳小墾田宮直道作日夕往還是道飽波模白其

路南成窪田油々申其比水在太子御馬彼田橫通給水

有間御馬足油々音間自其油々横道申也其比珙風

里通給程水命乞給水無申間調使丸太子御弓末以

原堀冷水出來甘露味成依珙風清水窪田里南在云

然窪田細道打過尾就唐橋打渡八木辻繩手遊橋

駒度打越昨日今日不日雨風痛無霜雪不驚朝夕

(二十五ウ)

參内有万機政直万民豐饒無盡故君臣大悅

同歲太子大和國中令付大道給先南北三路在上津路

中津路下津路等也上津路申東路長谷大道是也

中津路申吉埜大道是也下津路申今西大道是也亦

東西横大道令付皇太子彼中津路常御行成給然東

國自御年貢運上亦罷下百姓多亦傳馬共多引通

侍道邊喰糴損田馬共多然田主是見就大怒件留

馬人一蹶躑喧嘩鬪聲高折節皇太子御行有間

御馬引御覽有打擲馬人悲歎太子哀思食彼田

(二十六オ)

主馬主御前召彼者大驚怖御前畏太子打笑先告

田主勅有様抑汝筋力盡所立田藉彼馬損喰失間

主悲實理也雖然汝心思見此馬共東國自遙之道負

重荷苦身飢水草疲譬人倫望飢前後恥不弁況畜

生於身見目任足汝喰藉損田打擲支余不便也所詮

馬損分馬主可弁汝怒体汝具承一切牛馬六畜等

其跡雖異先世祖父生々父母世々兄才也然一念愚癡

業因引今畜類之受身汝當來長惡趣苦果不顧今

之一念嗔嗟先汝無方心畜生也早彼人馬罪吾覽

(二十六ウ)

田損分吾可弁言田主馬主信心命肝共發心皇太子

大喜貴給へり

○太子卅五歲丙春三月太子在斑鳩宮命駕往椎坂北

岡而望平郡里謂左右曰那地體麗三百歲後有帝王氣

或說云仁皇伍十九代宇多大王斑鳩宮法隆寺辰田宮巡幸次

龍田山椎坂平郡村宿給テ龍田山紅葉ヲ御覽シ侍レハ其時二百

八十餘歲相當也云或說云奈良之御門龍田御臨幸之次龍

田山紅葉御覽爲平郡椎坂之假宮宿給是成可云

此時平郡神手臣聞太子近光臨驚愕召集己之親族

(二十七オ)

相迎、再拜聊獻贊物、命神手臣曰、汝志誠以神妙也、但我

形顯在俗之躰、假妻子相伴侍、心中求法志深、故不好殺生、

宜取菓子美麗華、可獻神手臣、率已親族、爭擊雜花、

近進御輿前、太子拍手而受賜、祝願言、今日花菓供養三寶、檀主安穩、萬民豐樂、

神手臣等再拜、亦兩端巡々罷退、別紙云、一佛供養二世諸佛勝鬘、供膳十方菩薩、

又望勢夜里、謂左右曰、此邑無指氣、過給次望區德里、曰、三

百歲後有二帝王出、在平郡、是延喜御門之末七王子、此御辰田山立野平郡木嶋久度、勢夜里通暫住給ケルカ其當ナリ

後又有二臣氣、是在原中將業平ノ還御成、常龍田山通給當也

夏四月、丈六二軀造、竟居于元興寺、太子備威儀、奉迎時

(二十七ウ)

佛像高大、自金堂戶不得納、爰諸工等相議曰、破堂戶、而

納之、然鞍作鳥秀、工不懷扉、得入堂、太子設齋、大會有

此夕、於寺有五色美雲、覆佛堂之甍、上此丈六佛像、放大

光明、數度也、其中一度如火映、內外、太子禮拜、天奏曰、自今

年、始四月八日、自七月十五日至、設齋言給、是法華會勝鬘會維摩會、三部大會、每年大法會ナリ

五月、太子奏佛工鳥功美、賜大二位、并近江坂田郡田廿町、

秋七月、天皇詔太子曰、諸佛所說諸經、演竟、然勝鬘經未

具、其說、互於朕之前、講說其義、太子辭奏、臣項、將疏製

其義、理少未通達、伏念五六日至、于旬時、乃應會場、今之

(二十八才)

橋寺、大講堂是也、彼寺從、欽明天皇、至、推古天皇、五代之皇

居也、然時、帝推古天皇十四年七月、清涼殿之中央、莊嚴、美

麗之高座、立珠寶合成、玉机燒、梅檀沈水、明香、鈎、寶幢

幡蓋、珠簾錦帳、內、天皇奉、始、侍女采女、聽衆在、內陣者

唐、貴僧高僧并、大兄王子等同、着坐、外陣、小野、臣蘇我

臣、其、外、脚上、雲客盡、敷着坐、給、太子、御說法、聽聞、七

寶莊殿、天竺、靈鷲山、都率、之內、院、安養、世界、極樂、可

レ云、太子、自、例、殊、調、威儀、赤衣、上懸、御袈裟、左、御手、連、金

銀珠玉、握、首尾、右、御手、一卷、勝鬘、大乘、經、持、登、獅子、之

(二十八ウ)

座、時、天皇命、諸、名僧、大德、令、問、其、妙義、太子、釋經、御詞、

連、金玉、詞、林、花、鮮、法、水、浪、靜、一々、文、通、内外、答、給、上、推、古

御母、間、人、皇后、奉、始、下、及、三百官、隨喜、連、袂、渴、仰、思、不、淺、也

太子、受、天王、請、其、威儀、如、僧、持、三衣、一鉢、二卷、妙經、講說、給

三日、而、竟、或傳、三日、其、夜、蜜、空、蓮花雨、花色、赤白、二色、清涼  
三夜云、大、豎、三尺、橫、二尺、也

殿、庭、前、三丈、余、雨、積、明、且、奏、之、天王、大奇、駕、車、寂、覽、

合、掌、百官、低、頭、奉、隨喜、天皇、詔、太子、曰、朕、傳、聞、釋、尊、出

世、本、懷、天竺、靈鷲、山、之、說法、一、乘、法、華、之、砌、曼、陀、曼、殊、

四種、蓮花、雨、聞、勅、有、折、節、又、南山、峰、釋、迦、多、寶、阿、彌

(二十九オ)

施如來奉<sub>レ</sub>始<sub>レ</sub>其外一千佛首、涌出放<sub>ニ</sub>光明<sub>一</sub>、耀<sub>ニ</sub>清涼殿<sub>一</sub>、彼山、

佛頭山ト云ヘリ、天皇重勅曰、嗚呼尊耶、彼靈山淨土之圓頓妙

法折節、千界菩薩涌出給、聞夫昔在靈山事成經論、

傳聞今眼前奉<sub>ニ</sub>結緣<sub>一</sub>、間不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>敬<sub>一</sub>、誓御座、太子勅在、

清涼殿、伽藍成給、或說、彼在<sub>レ</sub>所、天王太子不審有、太子勅

答有<sub>レ</sub>樣、昔此<sub>レ</sub>所、七佛出世、說法利生、砌也、七佛云、毘婆尸佛

尸棄佛、毘舍浮佛、拘留孫佛、拘那含牟尼佛、迦葉佛

釋迦文佛等之轉法輪、砌、臣令<sub>ニ</sub>彼妙說<sub>一</sub>、講一天奉<sub>レ</sub>初隨

喜、渴仰其故、千佛出現、共感應給、申給、天王勅有<sub>レ</sub>樣、五

(二十九ウ)

障三從、女人可<sub>レ</sub>住宮中、非哉、急太子大伽藍取成給、ヘトテ

天王岡本之南宮、行幸成給、故太子寺成給、ヘリ、今七間

四面、大講堂、御本尊丈六釋迦、三尊并藥師、日光月光十二神將奉安置、雨積花長三

四尺厚、二三寸其花取集石櫃、納其上壇、築三間四面、金

堂、立本尊、金銅、彌勒并十一面楊柳救世觀世音等同、

四天王等、安置花雨積跡三四丈間、石疊如<sub>レ</sub>面法華<sub>經</sub>。書、

就參詣、貴賤手懸令<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>禮、成佛結緣之儀、爲也、同五

重寶塔三間、四面食堂五間、四面迴廊十六間、亦三面、

僧坊中門三間八尺、百濟、自身飛來四天王之像、二階窓

(三十才)

門二王等奉、同鐘樓經藏等有、之寺號名、菩提寺、今安置

○寺云、天皇復於、岡本宮、勅、太子、曰、法華經者是三世

諸佛、出世、本懷、一切衆生、成佛、直道、四十余年、未顯真

實、妙文也、聞彼如來、妙儀、宜、亦令、講說、太子謹受

勅、亦如、僧儀、講說、給夏、七日、天王、歸伏、率、王子、諸貴僧

等、俱、左右、大臣、已下、大、夫、相、具、聽聞、申、信、敬、頭、就

地、天皇、大悅、給、幡、曆、國、水田、三百六十町、施、太子、々々、施、入

法隆寺、此寺、與、宮、同、基、在、宮、之、西、也、後、割、納、中、宮、寺、

此、寺、間、人、穴、大部、皇崩、之、寺、也、皇后、崩御、後、爲、寺、件、

(三十ウ)

寺、二經、太子、略、製、其、疏、未、有、流通、高麗、惠慈、法師、法華、勝、聲、事、也

已下、各、在、講、場、諮、其、所、得、太子、取、捨、合、其、正、理、自、此、始、有、

究、竟、之、志、後、年、製、云

○太子、卅六、歲、丁、卯、夏、五、月、欲、下、先、生、御、本、尊、并、持、經、等、自、

衡、州、食、寄、上、天、奏、言、樣、抑、臣、先、生、衡、州、衡、山、六、生、生、替、

得、僧、鉢、弘、佛、法、也、第、六、生、法、名、念、禪、比、丘、號、生、年、七

十、及、最、後、問、詔、弟、子、遺、言、吾、盡、此、土、之、機、緣、只、今、譬

雖、入、滅、魂、必、生、東、海、粟、散、之、王、宮、弘、佛、法、利、有、情、故、吾

本、尊、并、持、經、等、彼、國、可、奉、將、來、吾、遷、化、相、當、卅、六、年、

(三十一オ)

時必可遣云置也今年其記文相叶也故奉隨君之命遣

唐使望在奏聞尔時天皇信敬驚歎曰可依左右

奏何臣唐使相叶太子勅言諸臣相見大禮是者姓名也小野

大臣妹子相叶依御前食出遣唐綸言被下臣等答言

勅命難背侍也臣夙承震旦衡州國滄海數千万里隔

高波惡風無間船筏難到山路險廣河重々凡人難

及所也豈非神仙得通人易可到哉白太子諫言大臣之

所奏誠叶理雖然吾衡山遷化自已來今年迎春秋卅

六年行路不忘如昨日今日彼國之路遠近悉可教汝先

(三十一ウ)

鎮西之連泉津可行彼博多津唐船可爲用意乘彼

船可着衡州津海上伍萬里也實蒼波路遠雲霞隱前後

數。万里也巨海漫々遙隔境智不仰奉神明佛施擁護

難渡故船大日靈尊奉初日本國諸大明勸請申渡

海安穩可祈無故着衡州之津衡山之行路二千八百九十

余里也已上松子彼震旦國在二十道東懸道 龍陽道 香山道 高陽道 西州道 北海道

南海道 中山道 爰大階之赤懸古之都也江南道云路自余

道自卅余里近始路北海道海邊三日可行次三日江北大

江河可渡但此川合戰可有歟縱雖有合戰臣表文高棒

(三十二オ)

先生法名今形言止ニ合戰ニ敬可レ通也自レ其眇々野鳥行吏

一七日也亦次七日峨々深山越彼山幾万丈云不知際雲霞

不ニ斷遣ニ佛日不レ曇時三千世界廣狡遮ニ眼前ニ闇浮提

遠近集足下ニ又深々谿底青嵐竝レ梢日月光幽雲雨常

不レ絶荆棘道閑一人跡絶無ニ往來客寒風徹レ膚身命危矣

袞袞袞笠可ニ用意譬唐天竺境流沙恣嶺相同汝

佛法重身命可レ輕則般若峯近付又四十里松柏竝木

有彼松原南方四五里行過吾住般若峯近可レ見彼

有五峯二般若峯二桂括峯三惠日峯四屬融峯五

(三十二ウ)

紫蓋峰等也一々峯各有ニ禪房靜室ニ思禪師此山

六生間堂塔建立惣此山般若閣等二十余个所在吾南

般若峯住也彼寺南向也同一階石樓閣在額圓通大

乘寺書彼寺吾先生御影有二人弟子躰移吾影左

右懸竝一人名ニ智者ニ常衡州天台山及荊州玉泉寺住

也次號ニ智勇ニ往ニ南岳衡山ニ修ニ行佛道ニ也汝必彼至可ニ拜

見吾住方丈松木造松室殿額打傍僧坊桂木作故

桂客殿額打此禪室更未ニ朽傾ニ於ニ吾遷化日道俗入ニ山

中ニ每年大齋大法會行連々不レ絶如ニ雲霞一人集結緣但

(三十三オ)

今衆僧皆逝去、僅三人殘也。昔一万三千、彼三人老僧許、遣人之衆也。

三具法服、亦三消息有入、一箱、任名字、可渡吾先生道。

具雖其員多、法華經一、大事思也相構、無相違、請取。

可參勅給於御前親承、此由人々奉成、奇特思、大臣勅。

答被申樣、縱雖須彌山鐵圍山峯、法華妙典御座、爭不。

奉尋之、雖蓬萊崑崙洞、傳有二乘妙典、何不求之、况。

是吾君依勅命、越衡州國、御先生御經於奉迎者、二。

聖二天十羅刹女必可擁護一言、君太子御悅有然、太子大

太子卅六高山自將來  
目録記口  
子給

臣共渡唐御用意也、其目錄之數々、一八軸法華經、入沈箱、金鎖差。

(三十三ウ)

一繪像如意輪觀音一幅、一釋迦如來繪像一幅。

一釋迦如來肉身御舍利、七粒奉入、一玉軸、徵言云、正教十七卷、瑠璃壺。

一金香爐、一砂瑚石御鉢一具。

一金玉首尾、一金錫杖一振。

一梅檀經臺、一赤梅檀之脇息。

一水瓶二、一唐珀珠數一連。

一七星之利劍一振、一赤梅檀之念珠一連。

一建陀羅國之紫御袈裟、已上十六種之御道具也。

同秋七月太子悉渡唐之御用意有、同小野妹子、大臣鎖。

(三十四オ)

西下向太子如御勅、彼唐船、日本國之大小、神祇勸請申立

莊、鉦、檣等、順風上、帆、夜、星、本、晝、亦、大、陽、東、出、夕、日、西、傾、

知部、一日二日重、七日七夜申、五萬里之海上、無、夏、故、衡、州、

津、付、侍、實、神、慮、惠、船、中、多、然、小、禁、臣、大、悅、上、下、二、百、余、人、

共、奉、香、尸、山、打、越、大、措、之、赤、懸、近、付、王、城、此、由、奏、聞、蒙、御、

許、足、早、行、程、太、子、御、定、不、違、陸、地、道、行、事、二、千、八、百、

九、十、余、里、也、高、山、惡、所、峻、難、不、及、言、語、故、二、百、余、人、衆、思、

外、此、彼、逗、留、間、衡、山、伴、人、數、十、人、不、過、云、然、昇、彼、般、若、峰、

二、階、樓、閣、在、額、太、子、如、御、定、圓、通、大、乘、寺、在、大、臣、彼、門、

(三十四ウ)

中、參、入、通、案、內、少、彌、一、人、出、來、見、即、念、禪、比、丘、御、使、知、

頓、告、師、匠、時、三、人、老、僧、大、喜、急、大、臣、出、合、給、尔、時、大、臣、聖、

德、太、子、御、狀、并、法、服、等、令、獻、三、人、老、僧、太、子、御、狀、玉、机、上、置、

向、東、方、燒、香、九、拜、有、其、後、開、見、先、生、手、跡、不、相、變、流、淚、

給、其、後、所、獻、法、服、呪、願、着、給、其、呪、願、云、先、亡、思、禪、今、現、聖、德、

諸、佛、因、緣、頌、畢、面、々、着、給、夏、誠、尊、侍、也、其、後、彼、老、比、

丘、達、妹、子、臣、等、俱、先、生、六、生、修、行、建、立、堂、塔、并、御、廟、木、

悉、教、令、拜、見、給、歸、朝、日、近、付、淚、共、命、少、沙、彌、思、禪、師、

遺、言、所、納、給、佛、具、等、召、寄、任、目、錄、妹、子、臣、讀、渡、悲、歎、之、

(三十五才)

淚咽給、大臣共流、淚御暇中、矣然彼方津出、自後夏共、

妹子、大臣歸朝、語侍、皆人知、之依來朝、明歲之四月也、其、

時百濟國之御使、臣十二人、妹子共來朝、同秋九月太子、

天奏曰、夫衆生之持、身命一併、依永田之助、凡水田之本、尤、

在池堤、儼當冗旱、是末世之、万民有用水愁、偏恨天、  
早魃事也

天默、而知禍降、于國、衆生祈、雨不叶、飢渴望、命、諸國、

催民築堤、令堀、池、末代國中、之衆生、欲令無用水之愁、

自是日本國、池堤、天皇有御悅、勅、大臣等、行、冬十月、倭、  
溝井堀、初給也

國作、高市、池、藤原、池、肩岡、池、菅原、池、三立、池、山田、池、鎌、

(三十五才)

池、對間、池、山城、國、堀、大溝、於粟隈、堀者是、嵯峨、南成、河內、國、  
大井事也、北河、大井、河名、

作、戶、池、依納、池、大津、池、安宿、池、和泉、國、久米、池、棒、市、池、

池、田、池、百舌、鳥、池、松尾、池、攝津、國、渡邊、池、小屋、池、又、每、國、

置、屯、倉、公、卿、上、奏、天下、無、冗旱、之、憂、百姓、有、豐饒、之、謠、

太子、名、厩、戶、更、名、豐聰耳、聖德、或、名、豐聰耳、大法王、或、名、

法主王、橋、豐日、天王、弟、二親王、天、國、押開、廣庭、天王、之、孫、

母、間人、穴、太部、皇女、也、神、異、有、驗、悟、冥、姓、能、談、過去、

因、兼、覺、方、來、之、事、豐、御、食、炊、屋、姬、尊、世、位、居、東、宮、總、

攝、三、方、機、行、天皇、支、始、與、佛、法、聖、製、王、憲、皆、是、聖、

(三十六オ)

德功也語在、用明天皇推古天皇紀、大唐傳戒僧名記傳委アリト云ク

每國屯倉トハ國々郷々造大倉納米穀貧成民施也

○太子卅七歲辰夏四月小埜大臣至來并大隨使人裴世

清等十二人從妹子來至筑紫有波方然妹子之大

臣入京衡州衡山之太子之御道具任目錄奉獻同衡

山三人之老僧返朝悉奉入錦之袋同佛舍利并種々

明香等太子大御悅有御道具差置給一番彼法華

經有拜見御氣色不快諸人奉恠良在勅給抑是朕

先身之非所持之經是吾弟子睡眠比丘持經也彼僧依

(三十六ウ)

過去宿業念誦讀經聞法々談之砌常睡眠間時人

睡眠比丘名此經正彼比丘經也四卷五百弟子品中其

不在此會會字勸喜未曾有有字飛火燒不可有

是多之天寒悲火邊各是聞可拜見有勅給近從人々開誦時睡眠入飛火燒之

有御覽實文字燒其跡正見諸臣今不始事成希

代不思議之思成太子奉信敬太子妹子大臣諫言是汝誤不可有彼衡山老僧臣置

在所分明不知次三人老僧送文開御覽雙眼御涙之色顯故他經取渡ナリ

給是昔衡山之御弟子皆遷化有彼御經并御舍利等四之文章成故御淚流侍一見後入火給

天王寺奉納在子今同夏六月隨朝使人裴世清

爾

(三十七オ)

等十二人臣下鎮西波方自到難波之館妹子臣奏申臣

等經過百濟國至漢土間彼百濟漢土之兩帝表文失

定以百濟國之人掠探取哉故不得捧依此郡臣等相議言是妹子大臣一定越

度解怠也隣國表文失其天皇問太子御座太子答曰妹子辜流刑合以狀具奏聞

罪寔不可寬雖然信好善隣妹子功也況於亦峻難

長遠海路深山凌輕身命重佛法到衡山般若堂請來

法華經實忠臣也諸臣雖多誰如是有功哉不而隨朝

使人等伴來妹子流事有彼臣等乍聞思亦如何哉

天皇聞食免妹子辜秋八月大隨使客可令入京評定在

(三十七ウ)

太子命大臣等飭騎遣七十五疋迎椿市街太子微服

看裴世清等遙跡皇太子所居林上曰彼有真人氣經

其林下下馬揖去觀者異之太子之御坐上必端相之雲有故也

表文隨帝書云倭皇尊問使人長吏亂蘇因高等至

懷具天皇問太子曰此書如何太子奏曰天子賜諸侯王

書式也諸侯者然皇帝之字天下一聞而用倭皇字彼

有其禮應恭而修天皇善之九月隨客還國復以妹子

爲大使吉志雄成爲少使天皇召太子以下答書之

辭太子握筆是書給東天皇敬問西皇帝不具謹

(三十八オ)

曰太子奏以高向漢人玄理等八人爲學<sub>ニ</sub>生<sub>ニ</sub>遣<sub>ニ</sub>大唐<sub>ニ</sub>或說

云大隨使<sub>ハ</sub>此國一年逗<sub>ル</sub>同九月太子入<sub>リ</sub>三尊堂<sub>ニ</sub>門<sub>レ</sub>戸<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>開<sub>レ</sub>七<sub>日</sub>留<sub>シ</sub>明年<sub>ハ</sub>太子卅八歲歸國

日七夜也

氏云此堂凡夫不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>心他推量不<sub>レ</sub>至處是斑鳩宮御寢殿傍

有<sub>ニ</sub>八角堂<sub>ニ</sub>御本尊阿彌陀三尊也故三尊堂白太子一月中

定<sub>ニ</sub>三度沐浴<sub>ニ</sub>在此堂入御坐明朝必海表雜<sub>ニ</sub>夏談<sub>ニ</sub>給<sub>レ</sub>惣

不審御夏有<sub>レ</sub>何時モ此堂入御座東方<sub>ニ</sub>金身來具<sub>ニ</sub>御不<sub>レ</sub>

審<sub>ニ</sub>開<sub>レ</sub>給<sub>ト</sub>云<sub>ヘリ</sub>夢殿申太子魂衡山遣<sub>ニ</sub>七日七夜御持經

將來在才八日申<sub>ニ</sub>彼經玉机上<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>太子躑<sub>ニ</sub>法師大臣以

(三十八ウ)

下勅吾先身小字一部一卷之經也言<sub>ニ</sub>故皆人夢取來御歟

申<sub>ニ</sub>自夢殿<sub>ト</sub>ハ皆人申也

時人甚奉<sub>レ</sub>異慧慈法師言<sub>ニ</sub>殿下<sub>ニ</sub>三昧定入<sub>リ</sub>給<sub>ニ</sub>宜奉<sub>レ</sub>驚

事無<sub>ニ</sub>太子<sub>ト</sub>亦時魂遣<sub>ニ</sub>衡山<sub>ニ</sub>般若臺<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>駕<sub>ニ</sub>青龍車<sub>ニ</sub>率<sub>ニ</sub>

五百化人<sub>ニ</sub>般若臺之中成先身御持經<sub>ニ</sub>自身取來<sub>レ</sub>給

但是口傳在<sub>ニ</sub>氏云青龍之車<sub>ニ</sub>駕<sub>ニ</sub>五百化人<sub>ニ</sub>率<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>明年妹

子大隨御門就<sub>ニ</sub>去年太子御持經<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>渡<sub>ニ</sub>他<sub>ニ</sub>經<sub>ニ</sub>夏<sub>ニ</sub>悲<sub>ニ</sub>

度<sub>ニ</sub>衡山<sub>ニ</sub>昇<sub>ニ</sub>般若臺<sub>ニ</sub>之老比丘<sub>ニ</sub>委<sub>ニ</sub>談<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>問<sub>ニ</sub>妹子<sub>ニ</sub>歸<sub>ニ</sub>朝<sub>ニ</sub>語

時<sub>ニ</sub>皆人悟<sub>ニ</sub>思<sub>ニ</sub>合<sub>ニ</sub>自<sub>ニ</sub>其先<sub>ニ</sub>唯<sub>ニ</sub>太子御夢<sub>ニ</sub>取來<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>思<sub>ニ</sub>ヘリ亦

(三十九ウ)

一口傳在彼青龍之車就也可秘々彼青龍御車忝住吉

大明神用意奉獻太子夫住吉沙伽羅龍王垂跡也故彼

青龍車五百化人太子奉給又彼青龍之出入納在野秘

野也彼出野入納野法隆寺未申小池在是五百井云人

不知太子大和國五百井掘給申其義不有彼五百化

人青龍之納故五百井申也太子住吉信太子建立之伽

藍處必住吉大明神勸請有內心得外人不可云聞

明八日晨玉机上一卷之御經在黃成紙黃成表紙織物

婦就玉軸也御經也八軸一卷之太子自內左右戸押開惠慈法師

(三十九ウ)

近從人々告言去年妹子將來處經吾弟子經也三老

比丘吾野藏不知他經送惠慈法師一年不審申文字

句共此御經悉可有被見給俱開御叡覽有小不變

万人不思議之思奉成信敬禮拜諸人太子夢奉取來

由申給其自已來彼堂夢殿申付上古始末世之今及不

退轉法隆寺在云

彼御經就奇特侍其故皇太子御遷化後才一御子大背

王子御讓有王子常崇壇上恭敬禮拜給六時在形實

尊重讀談淚結緣之袖潤太子御薨後丁亥年十月廿

(四十オ)

廿三日夜半忽此御經失給去程尋無由時大兄王子大悲

給詣太子御墓七日七夜之間深御祈請在七日滿曉御

陵中微妙音在唱云諸佛出興出世懸遠值遇難正

使出于世說是法復難無量無數劫聞是法亦難能聽

是法者斯人亦復難已上八句四十字成王子悲難之淚押

願吾本望開示給在御陵中放光明太子出現在余人不及

○太子卅八歲已夏四月八日始製勝覺經之疏同此月百

濟僧道欣等已上十人渡着肥後國聞太子風情願留住

仍安住元興寺太子召入斑鳩宮以問過去宿身之

(四十ウ)

事十人僧辭謝垂淚蜜語等齊曰上人等何無三天

眼乎此太子是衡山般若臺東房第一念禪比丘也

吾等與廬岳道人時々拜謁聞其說一乘妙義者也

太子聞之謂左右曰是實信ナリ太子秋七月蜜思食樣今年父用明

天皇卅三廻奉引上四十八歲極樂東門中心於四天王寺

七日七夜念佛取行一念多念稱名功德以具欲奉

則告近從曰夫世四恩尤秀父母御恩太節也吾遷化後

誰深可奉弔凡親子緣只一世也云興法修善契者多

生廣功恩愛也故捨身命憐子慈悲是常習也

(四十一才)

然自今月八日於天王寺一七日法會可興行言即七月八

日於荒陵寺一念佛始給同七月十四日御願了明十五日

以御書狀勅阿部臣信乃國水内郡芋井郷下給其時

御寺不立只善光葦葦草堂御座ノ利生之誓願折節也然善光ハ三世師且也故善光本ハ貧ナリシカ如來御方便ニテ後ハ國司ト成マ

五代、彼如來太子卅一歲願轉四年三月大和之難波堀江ヨリ善光合御御下  
舒明天向有世ニ秀給ヘル御夏ハ仁皇卅五代御門之御比ナリト委細ハ御縁起ニ有ト也

太子之御消息云名號稱揚七日巳斯此爲報廣大恩御歌  
抑願本師彌陀尊助成濟度常護念并二首

日數ヘテ行ウ法ヨ知ルヘノ先立人ヲ西ヘ導ケ  
仕テモ其古ヲワスレスハ吾カ成スヲサニワワリアラスヤ 進上本師利生院 七月日佛子  
勝鬘敬白

御使同廿五日下午着彼玉章奉ニ如來御前善光親子筆硯

紙奉ニ如來一其夜半御返事在阿部臣八月上洛其御返

(四十一才)

支云一日稱揚無息事何況七日大功徳汝能濟度豈不護并御製歌三首  
我待衆生心無間

一度モ御名ヲ唱聲聞ケハ長夢路チシサメニコソ行ケ自ヲ待チ見自者身ニソウル  
影ト同ク護ルトハ知レ待ワヒテ歎クトツケヨ皆人イソワイトテ急カサルラン

七月日大智真人狀

秋九月自ニ大隨一小椋大臣妹子歸朝啓ニ太子曰臣自ニ去年一至

當年一遲參申支無ニ別子細ニ一年御持經不ニ將來一他御經渡

事存外侍故重詣ニ般若臺然御持經去年自身駕ニ青

龍車ニ五百人率ニ化人ニ自ニ東方一履ニ空來採ニ舊房裏ニ取給

凌ニ虚空ニ飛去 住持僧言臣不レ及レ力退出太子默然微笑在  
云々

妹子心思樣是易將來有御經ヲ吾兩度間  
高山深谷捨身倉海水底沈命兩度マテ御經不渡悲  
良在妹子奏言先

(四十二オ)

到<sub>レ</sub>般若<sub>ニ</sub>臺<sub>ニ</sub>時<sub>ハ</sub>三<sub>ノ</sub>口<sub>ノ</sub>僧<sub>ノ</sub>座<sub>ニ</sub>一<sub>ノ</sub>口<sub>ノ</sub>遷<sub>レ</sub>化<sub>シ</sub>今<sub>ハ</sub>一<sub>ノ</sub>口<sub>ノ</sub>存<sub>在</sub>給<sub>ス</sub>白<sub>ク</sub>氏<sub>云</sub>此<sub>時</sub>妹<sub>子</sub>歸<sub>朝</sub>

後<sub>彼</sub>大<sub>隨</sub>之<sub>險</sub>難<sub>衡</sub>州<sub>衡</sub>山<sub>之</sub>在<sub>形</sub>一<sub>々</sub>語<sub>コソ</sub>彼<sub>衡</sub>山<sub>事</sub>  
書<sub>註</sub>太子<sub>駕</sub>青<sub>龍</sub>虛<sub>空</sub>詣<sub>二</sub>般<sub>若</sub>臺<sub>給</sub>事<sub>ヲ</sub>モ<sub>知</sub>ヌト<sub>云</sub>ク

○太子<sub>卅</sub>九<sub>歲</sub>庚<sub>午</sub>春<sub>三</sub>月<sub>高</sub>麗<sub>曇</sub>徵<sub>法</sub>定<sub>二</sub>口<sub>ノ</sub>僧<sub>ノ</sub>來<sub>朝</sub>太

子<sub>引</sub>入<sub>レ</sub>斑<sub>鳩</sub>宮<sub>ニ</sub>問<sub>レ</sub>之<sub>以</sub>昔<sub>身</sub>微<sub>言</sub>二<sub>僧</sub>百<sub>拜</sub>啓<sub>ニ</sub>太<sub>子</sub>曰<sub>僧</sub>

等<sub>學</sub>道<sub>年</sub>久<sub>未</sub>知<sub>三</sub>天<sub>眼</sub>今<sub>遙</sub>想<sub>我</sub>等<sub>昔</sub>殿<sub>下</sub>御<sub>弟</sub>子

而<sub>遊</sub>衡<sub>山</sub>者<sub>也</sub>太<sub>子</sub>命<sub>云</sub>僧<sub>等</sub>何<sub>遲</sub>來<sub>宜</sub>住<sub>吾</sub>寺<sub>一</sub>即<sub>住</sub>持

法<sub>隆</sub>寺<sub>一</sub>具<sub>法</sub>隆<sub>學</sub>問<sub>寺</sub>云<sub>也</sub>此<sub>寺</sub>地<sub>形</sub>大<sub>秘</sub>事<sub>多</sub>也<sub>秋</sub>九<sub>月</sub>太<sub>子</sub>駕<sub>是</sub>

烏<sub>駒</sub>小<sub>墾</sub>田<sub>宮</sub>臨<sub>幸</sub>駒<sub>錯</sub>太<sub>子</sub>御<sub>脚</sub>踏<sub>奉</sub>太<sub>子</sub>少<sub>愕</sub>謂

駒<sub>曰</sub>此<sub>年</sub>來<sub>汝</sub>契<sub>如</sub>妻<sub>子</sub>何<sub>無</sub>情<sub>如</sub>是<sub>哉</sub>早<sub>調</sub>子<sub>九</sub>此<sub>駒</sub>

(四十二ウ)

宮<sub>可</sub>還<sub>言</sub>即<sub>斑</sub>鳩<sub>宮</sub>還<sub>給</sub>自<sub>レ</sub>其<sub>彼</sub>駒<sub>草</sub>不<sub>レ</sub>喫<sub>水</sub>不<sub>レ</sub>飲<sub>低</sub>

頭<sub>雙</sub>眼<sub>閉</sub>掩<sub>三</sub>兩<sub>耳</sub>一<sub>似</sub>悔<sub>過</sub>及<sub>二</sub>一<sub>七</sub>日<sub>一</sub>太<sub>子</sub>聞<sub>レ</sub>之<sub>遣</sub>妹<sub>子</sub>大<sub>臣</sub>

早<sub>々</sub>可<sub>レ</sub>食<sub>ニ</sub>水<sub>草</sub>勸<sub>給</sub>言<sub>余</sub>時<sub>開</sub>雙<sub>眼</sub>喜<sub>色</sub>用<sub>ニ</sub>水<sub>草</sub>通<sub>力</sub>

自<sub>在</sub>御<sub>馬</sub>冬<sub>十</sub>二<sub>月</sub>太<sub>子</sub>謂<sub>膳</sub>嬪<sub>曰</sub>汝<sub>如</sub>我<sub>意</sub>觸<sub>事</sub>不<sub>レ</sub>違

吾<sub>得</sub>汝<sub>五</sub>百<sub>生</sub>昔<sub>契</sub>也<sub>吾</sub>死<sub>日</sub>同<sub>穴</sub>共<sub>哉</sub>妃<sub>啓</sub>白<sub>殿</sub>下<sub>恩</sub>

深<sub>庸</sub>妾<sub>侍</sub>寢<sub>常</sub>思<sub>千</sub>秋<sub>万</sub>歲<sub>如</sub>盤<sub>石</sub>如<sub>二</sub>大<sub>岳</sub>朝<sub>夕</sub>供

奉<sub>妾</sub>福<sub>足</sub>矣<sub>何</sub>以<sub>終</sub>夏<sub>有</sub>太<sub>子</sub>命<sub>云</sub>不<sub>レ</sub>然<sub>有</sub>始<sub>有</sub>終

理<sub>之</sub>自<sub>然</sub>也<sub>此</sub>生<sub>彼</sub>死<sub>常</sub>人<sub>道</sub>也<sub>經</sub>吾<sub>昔</sub>數<sub>十</sub>身<sub>一</sub>修<sub>行</sub>

崇<sub>道</sub>今<sub>爲</sub>小<sub>國</sub>儲<sub>君</sub>身<sub>一</sub>流<sub>通</sub>妙<sub>義</sub>二<sub>万</sub>未<sub>レ</sub>足<sub>一</sub>今<sub>釋</sub>典

(四十三オ)

漸々傳正燈、顏照九夷中、九夷ハ困居也亦片、境深山之洞ヲ云也、略演二一乘一故

不欲吾久遊、三濁妃流淚答、汝留意、妃之爲性聰敏

容悟御體有瘕、雖不命、處誠能拯之、亦思召群臣

妃知令召太子、可念預知之寒者、令溫暑者、令寒思往

者、令往思來者、令來欲起者、令起欲坐者、令坐舉動用

施如殿下意、故加寵愛、有同穴令

氏云閑案陰陽理、雖上天下界之隔、在心運一也、貴賤上下雖

別、夫妻心一也、故走山野、獸飛空、鳥類遊、江海鱗、共宿喜

然太子吾朝、不成唐、自僧俗來信敬禮拜恭敬、雖請膳、

(四十三ウ)

俱現世不成後生、同穴契深、如譬海老等月、示諸人給實

三世記錄也、故我朝得生人妻子俱、云建立佛法之志不可失

然男之福引、妾共福在妻之惡引、男共愁、故男女夫妻者

如天地、如陰陽、如日月、如晝夜、亦慈悲、赤白、善惡、

君臣、如雙眼、如胎金、一旦雖愛着染於化度、身二世之

芳緣可厚、努々男女惡事不犯、是太子難有御方便

也、神國相應心也、依是神書者、神秘多ト云々

(四十四才)

尾州山田郡内飽津保上村於

太子堂寄進之

松原下總守廣長(花押)

寛正五年<sup>甲</sup>三月六日<sup>申</sup>

聖德太子伝 五

(一オ)

○太子四十歳辛未春正月廿五日製勝鬘經<sup>ハ</sup>早此<sup>ハ</sup>太子卅八歳四

月八日令<sup>ニ</sup>慧慈法師已下大德等<sup>ヲ</sup>問<sup>フ</sup>竝皆讚歎誦習不<sup>レ</sup>加<sup>ハ</sup>始給<sup>ヘリ</sup>

一點不<sup>レ</sup>損<sup>ニ</sup>一字頂戴更無<sup>ニ</sup>余言<sup>一</sup>太子御不審事有<sup>レ</sup>夢殿入給<sup>ハ</sup>自<sup>ニ</sup>東方<sup>一</sup>金人來<sup>リ</sup>具奉<sup>テ</sup>教<sup>ス</sup>

夏五月五日天皇菟<sup>ノ</sup>田野行幸<sup>ス</sup>自<sup>レ</sup>虞人獸逐<sup>ル</sup>鹿射<sup>テ</sup>視<sup>ス</sup>

給<sup>テ</sup>太子此由<sup>ヲ</sup>聞<sup>ク</sup>食<sup>テ</sup>彼烏駒<sup>ヲ</sup>召<sup>シ</sup>急馳<sup>テ</sup>參<sup>リ</sup>給<sup>テ</sup>天皇御輿近<sup>ク</sup>跑<sup>ス</sup>

啓<sup>シ</sup>白<sup>シ</sup>給<sup>テ</sup>様夫<sup>レ</sup>煞生罪<sup>ヲ</sup>佛教尤<sup>ニ</sup>重<sup>ク</sup>故<sup>ニ</sup>儒童菩薩行<sup>ニ</sup>五常<sup>一</sup>漸

其<sup>ノ</sup>降<sup>レ</sup>禮<sup>ス</sup>故<sup>ニ</sup>釣<sup>テ</sup>而<sup>テ</sup>網<sup>ス</sup>弋<sup>シ</sup>宿<sup>ノ</sup>鳥不<sup>レ</sup>射<sup>テ</sup>云<sup>フ</sup>又<sup>テ</sup>釋<sup>シ</sup>氏<sup>ノ</sup>行<sup>ニ</sup>五常<sup>一</sup>儒<sup>ノ</sup>教<sup>ヲ</sup>五<sup>ニ</sup>常<sup>一</sup>

仁義禮智信釋教<sup>ヲ</sup>願<sup>フ</sup>天皇永<sup>ク</sup>斷<sup>ス</sup>此事<sup>ヲ</sup>令<sup>ニ</sup>停止<sup>シ</sup>給<sup>テ</sup>天皇悉<sup>ク</sup>勅<sup>ス</sup>五<sup>ニ</sup>戒<sup>一</sup>煞<sup>ヲ</sup>偷<sup>テ</sup>邪<sup>ヲ</sup>酒<sup>ヲ</sup>妄<sup>ス</sup>

曰<sup>ク</sup>朕<sup>ノ</sup>女<sup>ヲ</sup>主<sup>ト</sup>此<sup>ノ</sup>煞<sup>ヲ</sup>生<sup>ヲ</sup>好<sup>ム</sup>實<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>朕<sup>ノ</sup>過<sup>ト</sup>深<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>慚<sup>シ</sup>愧<sup>シ</sup>在<sup>リ</sup>自<sup>レ</sup>今<sup>ニ</sup>以後<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>

(二ウ)

太子<sup>ニ</sup>可<sup>ク</sup>斷<sup>テ</sup>勅<sup>シ</sup>有<sup>テ</sup>懸<sup>テ</sup>還<sup>テ</sup>御<sup>成</sup>マ<sup>リ</sup>釣<sup>テ</sup>而<sup>テ</sup>網<sup>ス</sup>者<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>針<sup>ヲ</sup>魚<sup>ノ</sup>鱗<sup>ヲ</sup>取<sup>リ</sup>ニ<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>エ<sup>ニ</sup>フ<sup>ケ</sup>リ<sup>テ</sup>失<sup>シ</sup>身<sup>ヲ</sup>失<sup>シ</sup>命<sup>者</sup>也<sup>ト</sup>亦<sup>ニ</sup>網<sup>ヲ</sup>引<sup>テ</sup>時<sup>ハ</sup>

萬<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>類<sup>ヲ</sup>引<sup>テ</sup>徒<sup>ニ</sup>死<sup>故</sup>也<sup>ト</sup>宿<sup>ノ</sup>鳥不<sup>レ</sup>射<sup>テ</sup>香<sup>ノ</sup>宿<sup>ノ</sup>鳥不<sup>レ</sup>射<sup>テ</sup>云<sup>フ</sup>鳥<sup>ノ</sup>獸<sup>ノ</sup>常<sup>ニ</sup>畏<sup>ル</sup>弓<sup>ヲ</sup>天<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>日<sup>ヲ</sup>月<sup>ヲ</sup>マ<sup>テ</sup>モ<sup>曲</sup>弓<sup>ヲ</sup>疑<sup>心</sup>在<sup>リ</sup>亦<sup>ニ</sup>湖<sup>ノ</sup>海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>鱗<sup>ヲ</sup>針<sup>ヲ</sup>網<sup>ノ</sup>之<sup>目</sup>ト<sup>ニ</sup>畏<sup>ル</sup>浪<sup>ノ</sup>立<sup>テ</sup>網<sup>ヲ</sup>

驚<sup>ク</sup>三<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>水<sup>底</sup>移<sup>ラ</sup>ハ<sup>ク</sup>釣<sup>テ</sup>之<sup>何</sup>之<sup>然</sup>文<sup>云</sup>夫<sup>群</sup>鶴<sup>鶴</sup>澤<sup>下</sup>昨<sup>時</sup>一<sup>ノ</sup>鶴<sup>ハ</sup>遠<sup>見</sup>ヲ<sup>シ</sup>弓<sup>ヲ</sup>箭<sup>ヲ</sup>疑<sup>テ</sup>鳥<sup>ノ</sup>獸<sup>ト</sup>生<sup>テ</sup>ハ<sup>心</sup>弓<sup>ヲ</sup>箭<sup>長</sup>無<sup>間</sup>亦<sup>ニ</sup>魚<sup>ノ</sup>鱗<sup>ハ</sup>得<sup>テ</sup>生<sup>ヲ</sup>暫<sup>モ</sup>釣<sup>テ</sup>網<sup>ヲ</sup>ワ<sup>ス</sup>ル<sup>ト</sup>無<sup>ク</sup>

問<sup>テ</sup>故<sup>ヲ</sup>煞<sup>生</sup>ハ<sup>五</sup>百<sup>戒</sup>之<sup>才</sup>一<sup>也</sup>天皇<sup>道</sup>間<sup>御</sup>詠<sup>歌</sup>有<sup>ク</sup>ユ<sup>キ</sup>ヤ<sup>ラ</sup>テ<sup>テ</sup>兒<sup>思</sup>鹿<sup>ノ</sup>シ<sup>ル</sup>ハ<sup>ニ</sup>ハ<sup>狩</sup>ノ<sup>山</sup>路<sup>ニ</sup>思<sup>止</sup>

昔<sup>天</sup>竺<sup>波</sup>羅<sup>奈</sup>國<sup>鹿</sup>野<sup>苑</sup>ノ<sup>釋</sup>尊<sup>ノ</sup>御<sup>弟</sup>難<sup>陀</sup>太<sup>子</sup>其<sup>外</sup>婆<sup>提</sup>太<sup>子</sup>諸<sup>王</sup>子<sup>等</sup>符<sup>始</sup>メ<sup>鹿</sup>ヲ<sup>射</sup>給<sup>テ</sup>釋<sup>尊</sup>御<sup>覽</sup>示<sup>給</sup>ハ<sup>ク</sup>我<sup>ハ</sup>實<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>畜<sup>類</sup>

ナ<sup>リ</sup>名<sup>曰</sup>人<sup>頭</sup>鹿<sup>汝</sup>ハ<sup>雖</sup>ニ<sup>是</sup>畜<sup>生</sup>ナ<sup>リ</sup>ト<sup>名</sup>曰<sup>ク</sup>鹿<sup>頭</sup>人<sup>以</sup>理<sup>而</sup>モ<sup>爲</sup>人<sup>不</sup>以<sup>レ</sup>形<sup>爲</sup>人<sup>我</sup>從<sup>テ</sup>今<sup>日</sup>始<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>食<sup>一切</sup>肉<sup>依</sup>此<sup>諸</sup>王<sup>子</sup>等<sup>皆</sup>煞<sup>生</sup>禁<sup>制</sup>給<sup>テ</sup>ト<sup>云</sup>

雙<sup>鹿</sup>之<sup>八</sup>之<sup>御</sup>耳<sup>ハ</sup>惣<sup>ノ</sup>人<sup>頭</sup>ハ<sup>在</sup>頭<sup>左</sup>ニ<sup>右</sup>ニ<sup>在</sup>合<sup>テ</sup>八<sup>耳</sup>也

○太子四十一歳壬申春正月十五日始製<sup>ニ</sup>維<sup>摩</sup>經<sup>疏</sup>同<sup>ニ</sup>八月

十五日天皇御前<sup>惠</sup>慈<sup>法</sup>師<sup>始</sup>學<sup>生</sup>諸<sup>大</sup>德<sup>并</sup>諸<sup>臣</sup>水

(ニオ)

中、講釋給一天百寮隨喜渴仰合<sub>レ</sub>快<sub>レ</sub> 氏云太子常自講言、  
吾釋尊一代於<sub>レ</sub>說教中、

殊得<sub>二</sub>三千大乘<sub>一</sub>、曰、謂法華勝鬘維<sub>レ</sub>等、三部之大乘、事也故此疏製  
作在云、此内維<sub>レ</sub>經ト白<sub>レ</sub>釋尊大聖文殊爲<sub>レ</sub>御使<sub>レ</sub>訪<sub>レ</sub>維<sub>レ</sub>居士病苦

給<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>維<sub>レ</sub>居士之文室、現<sub>二</sub>神變不思議<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>是御  
問答有<sub>レ</sub>釋尊示<sub>レ</sub>維<sub>レ</sub>、給<sub>レ</sub>故其問答釋<sub>レ</sub>セル御經ナリ云、 同五月比百濟

國、化來人有<sub>二</sub>白癩<sub>一</sub>、病<sub>二</sub>能構<sub>二</sub>山岳之形<sub>一</sub>、群臣惡<sub>レ</sub>、將<sub>二</sub>追却<sub>一</sub>、彼

人大辭罷飯、太子哀<sub>レ</sub>天奏<sub>レ</sub>櫻井村留<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>住<sub>レ</sub>其身<sub>レ</sub>其香

亦身万術備<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>其智分<sub>二</sub>凡智難測也<sub>一</sub>、同百濟國、樂人

味摩等來朝、或傳云人數上下  
十八人爲<sub>二</sub>化來<sub>一</sub>云、 自稱美曰吳國能妓樂曲、

相傳、吳國ト云ハ天竺ノ相<sub>二</sub>當<sub>二</sub>東北方<sub>一</sub>、豐用國有<sub>レ</sub>音<sub>二</sub>妙音菩薩<sub>一</sub>  
化現在<sub>レ</sub>一切舞音樂妓樂教給<sub>レ</sub>又故伶人名天竺ヨリ渡<sub>二</sub>震旦<sub>一</sub>、

震旦ヨリ百濟渡<sub>レ</sub>百濟自今日域渡<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>皆淨土音樂、太子大御悅  
別ハ天上之富樂ル音樂ナリ尤佛神感應ノ大切ナリト云、

(ニウ)

在天奏言、自<sub>二</sub>百濟<sub>一</sub>樂人來<sub>レ</sub>是西天月氏五唐三韓<sub>一</sub>相<sub>二</sub>傳<sub>一</sub>、彼

樂、今吾朝化來也尤三寶供養仰<sub>レ</sub>崇<sub>レ</sub>神明、以<sub>レ</sub>諸妓樂<sub>二</sub>功

德寔莫大也<sub>一</sub>、臣望<sub>レ</sub>命<sub>二</sub>小童等<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>習<sub>二</sub>傳此舞樂<sub>一</sub>、天皇悅許<sub>レ</sub>

尔時太子喜召<sub>レ</sub>彼伶人、大和國高市郡於<sub>二</sub>櫻井村<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>止住<sub>レ</sub>

集<sub>レ</sub>少兒、令<sub>レ</sub>學<sub>レ</sub>傳<sub>二</sub>太子重天奏諸氏之小童等<sub>一</sub>、勅<sub>レ</sub>吳鼓

令<sub>レ</sub>習<sub>レ</sub>故天下綸旨<sub>二</sub>下功田<sub>一</sub>、給<sub>レ</sub>此國伶人等<sub>二</sub>先祖也<sub>一</sub>

秦記云川勝子息<sub>二</sub>二人或傳云<sub>一</sub>、孫三人川滿子息<sub>二</sub>三人或傳ニハ  
伍人記云、 四人記タリ

孫一人或傳、彼秘曲悉<sub>レ</sub>習<sub>レ</sub>傳<sub>二</sub>竟故太子於<sub>二</sub>四天王寺<sub>一</sub>、限<sub>二</sub>永代<sub>一</sub>、調<sub>二</sub>

置<sub>二</sub>三十二人<sub>一</sub>、每年取<sub>レ</sub>行法會<sub>一</sub>、給<sub>レ</sub>太子在世御時<sub>二</sub>ハ名<sub>二</sub>法花會<sub>一</sub>、御  
入滅後號<sub>二</sub>聖靈會<sub>一</sub>、

(三才)

依是攝津國西生郡賜二千余町、亦住吉郡賜十一條二里水

田七百十代、并屋居八箇所、賜大和國城上城下高市十

市郡田島數町、賜吾朝伶人皆此子孫也

○太子四十二歲癸酉冬十一月天奏、令掘堤井溝等

或傳云此年大旱魃、百姓之愁有故太子悲給、亦諸國施仁

德、然前後七、年白、太子廿八歲、御時四月依大地

震、三、年、之、御、仁、德、亦、太、子、卅、六、歲、御、時、小、旱、魃、依

一个年亦太子四十二歲大旱魃、三、年、已、上、七、个、年、也

太子此時天奏、末世、旱魃細々、万民有用水愁、故令掘

(三ウ)

\* 固堤井溝等、給、亦有說一段、三百六十步、定置給へり

但六十步末世、旱魃細々成、間田一段之枕池、一掘其池

水、三百步、田地可、養、故本之一段、三百步、六十步池

之料心得、亦末世季之前後、人不、可、知、間、草、木、之、惠

本、豐、作、行、ハシ、倭、國、小、林、池、大、藏、池、二、井、池、葛、上、池、忍

海、池、飛、鳥、池、輕、池、加、留、池、當、麻、池、和、歌、池、內、山、池、惣、一

百十八个所也、井手溝五百是始也、山城國、二井池山本池

井出池山階池瀧池等始、一百一十一个所也、井出溝三百

八十个所也、河内國、八幡池葛原池大井池等始、八十个所

(四オ)

井手溝二百七十个所、和泉國、米田池、池田池、百舌鳥等、

始二百五十个所也、井手溝三百廿一个所、攝津國、渡邊、

池小屋池等、始二百八十个所、井手溝二百三十个所也、惣諸、

國遣使池溝等、令掘給へり、已上、數日本記明セリ、

太子亦攝津國難波自太和宮至、大道共令修治給其比、

道細、万民行通、心苦侍亦太子常四天王寺臨幸成其、

折節參合者、田中水中徘徊、亦牛馬喰損田畠、依此田、

畠主發嗔恚、及鬪諍、太子度々見聞在大道懸橋給、

猶牛馬喰物之愁可、有大道左右邊田、加三十余步入代、

(四ウ)

田、是一且牛馬損分定給、故大和河内、大道邊田、繩本申、

田地、面廣定侍也、或傳ニ立氣トテ、大道之左右、稻ヲ不レ刈立置云、  
今ハ是ヲ作那婆號スト云、

曆錄曰、十二月、太子陵、欲築、河内國石河郡東條科、

長山里御行成御、基造大工召ニ陵守一勅言、抑吾爲此、

世機縁既盡、此在所可築、基相ニ見、諸國、此處功德相應、

之靈地也、凡日域無雙、砌也、故過去七佛、此處轉法輪、

急可造基、夫多見世間陵、男墓、女墓、南北二竝、是唯、

男墓一可成基、後此山不、可連、卜一方一町余、三重高可築、

彼山、南山岸、北深切入基、廻大道、廣可造、是ハ大道ニ  
爲レ無其煩也、

(五才)

陵内可構巖四方上下悉石切敷内敷棺並置様仕戸

南方可開勅有大工陵守流涙白上抑君忝大聖權

化長生不老之御身奉抑侍玉躰陵門原上土之底

埋魂北亡露與消事實以悲御克也深歎太子哀

思食雙眼浮御涙良在陵守諫言夫生者必滅理吾

非一人一非情草木難遁然春花散風見生者必滅可

思秋月見隱雲老病死海之成愁無常轉變皆以如

斯況於有侍之身哉生死之本會別源也汝無悲歎

御諫在其召鳥駒還御成比十二月十五日也太子倭片

(五ウ)

岡山打過阿私多池堤過侍鳥駒俄物驚前後不

進太子頻加鞭給巡々猶駐舍人大恠其近邊走廻

見自道三四丈計去異相飢人臥問調使丸走返太子

此由奉奏太子行看言則下馬在丸申上様飢人乞食

非人非二人數何殿下御身下馬在耶尔時太子言定由

來有者成言行御覽在其邊甚香異香薰諸人大恠

太子飢人邊近付給彼飢人上頭奉見太子目中金色

光明在太子言哀也々々如何此臥給乎或傳云太子與飢人面顔指合數十言

御問答在ケルカ諸人へ聞不意趣大恠メリ彼飢人者面形長ノ頭大也雙耳長雙目小長シ眼中ニハ金色光明在其身甚香ノ人之推量不及ヲ語

(六オ)

言異相之飢人兒也太子命丸曰彼人香耶否 太子即脫紫御衣  
丸奏啓ク太香シ太子曰汝壽命長遠ナラン

覆其人一首有御詠一曆録哥

斯那提流耶箇多烏箇夜摩余伊比余惠弓許夜勢屢多

比々等阿波禮。於夜那斯 余那禮奈理鷄迷夜佐須達

氣能枳彌波夜。祇母伊比余惠弓許夜勢留諸能多比等阿波

禮是夷振歌也

志奈天留屋片岡山仁伊悲余宇惠天臥多比人阿波禮

於夜奈志 飢人起首進 答歌曰

伊珥瑠賀能等美能乎可波能多延婆許曾和賀於

(六ウ)

保吉彌能彌奈和須良延迷

怒鹿之富 小川之絶者 吾小王之御名者志目

太子相語給支數十言其 還御成 太子道 此歌口遊給へり

太子命大臣以使送美膳給使等片岡山尋見自太子

御衣覆 飢人死使返此由 白太子大悲給命左右納石棺

令築墓給余時馬子連 始已下大夫等皆撰美曰殿下

聖德難測 忝當帝儲君 一天四海奉仰 君道邊臥 飢人

是人非人者 輕々數下馬在 互交言 歌返問答 脫御衣手

自着死 悲納石棺 令築墓給御事 誠輕行 御有形也 奉

(七オ)

難太子雖是聞食、尙彼歌詠悲給諸臣甚奉、恠矣太子

相當七日、日告諸臣曰、汝各不審尤理也、雖然彼飢人大

聖權化之人也、各行發墓看之七、大夫等受命往開

無有其屍一棺、內太香荷、所賜歛物、置在棺上、曆錄曰衣

裳置棺上、詔取其衣、自服如常時、人異之者也、自是彼山路、衣置嶺中、也

依此人々成奇特思、大聖權化之方便實以尊覺信敬、

顯色禮拜讚歎有

古老人云此ヲハ大可秘知テ亦不知爲末世紀彼石棺蓋之裏有ニ不

思議之文、大事相傳也、其文云、

(七ウ)

\* 吾已片域、化緣盡海底、赴蘭波羅州、太子亦逝去、生天壽國、而

我大乘之深法八遷化經、五百六十余年、再來日域、遂與法利生之

本懷而已

古老云實此御記文不違達磨遷化之後相、當五百六十二年、仁皇八

十三代、土御門院之御宇、達磨再誕給、葉上僧正ト云ハレ給テ一院

御勅願トシ、建仁二年壬戌洛陽東大伽藍建立給、以二年號爲

寺號、今之建仁寺是也、吾朝禪院之始也、正達磨再誕爲本願

御建立ト思ヘリ、同時關東下向在右大將家御時壽福寺、建立給ヘリ

是日本禪法、始也、但其先仁皇五十二代嵯峨天皇時、大唐安國寺、

(八才)

惠圓法師申、人東寺弘法大師、義依渡越給東寺、西院奉置天

皇對面在後、又嵯峨寺立、令住持給へトモ禪法日本未記錄不

發飯國有是、嵯峨壇林寺是也故檀林皇宮白依此習事

在委檀林寺院緣起可有年號弘仁也

○太子四十三歲甲戌春正月八日始製法華經疏同三月震

且梵網經將來太子隨喜渴仰曰、此是衆生成佛師範

一切衆生之福田也是信是持生死之源、出離菩提果證得

也言太子自御手皮剝給彼御經外題押自經題書寫給

同三月比皇太子舍人宮池、鍛治師丸家首黑身白犬在鍛

(八ウ)

治師丸彼犬共皇太子之河内國臨幸成御俱申行侍信

貴山之北鹿園山邊、彼犬一鹿行合犬彼鹿見、嗔忽追行

鹿驚走皇太子命近從人追却、犬更不用終彼鹿脛、咋正

喰然太子悲歎有事不紅、太子彼宿報知食、爲誓移夢

殿時東方自金色之僧來謂太子曰、此鹿與犬者今生宿業

不有只過去業報、怨敵也然過去有男二人、妻具本妻子無

事悲新妻具彼妻如玉男子生、矣(前)男喜本之妻語彼妻

喜此子召寄、養育俱喜、此子年五歲申折節本妻惡

夏有打問彼繼子之脛、打折男悲、彼子本母返彼母短氣

(九オ)

嗔恚炎熾、曾悲歎、淚潤、袖、彼母曰、此子足之折、見付、嗔恚

晝夜不、休、彼兒抱深淵、臨誓云、抑此子、足無、罪、繼母脚打

折間其恨生々世々報、一千度可、成、云、終、彼淵、母諸俱沈、身

依、其惡念、此生彼生、牛馬鹿畜成、千度、誓、令、報、既、九百九十

九生報、今、度、滿、千度、也、汝、今、六、道、四、生、結、緣、折、節、成、彼

鹿與、大、弔、成、給、俱、成、佛、之、到、本、果、言、既、五、更、天、明、太、子

夢殿、御、出、成、語、近、從、之、人、因、果、不、思、議、理、言、故、皆、人、彼

鹿與、犬、之、過、去、宿、業、知、給、仍、太、子、信、貴、山、之、北、邊、一、宇、伽

藍、建、立、號、鹿、園、寺、給、自、供、養、成、給、其、夜、種、々、奇、特、在

(九ウ)

中、二、人、之、天、女、來、云、吾、等、此、大、伽、藍、之、功、德、翻、鹿、音、身、得、

天、上、果、名、乘、侍、貴、ケ、リ、仍、一、念、嗔、恚、熾、俱、胆、劫、之、善、根、

刹、那、怨、害、招、無、量、苦、報、云、證、據、是、也、故、太、子、捨、惡、持、善、

諸善奉行、勸、諸、惡、莫、作、言、給、同、秋、八、月、比、蘇、我、大、臣、臥、病、惱、床、二、万、死

一、生、也、大、臣、奏、太、子、言、抑、臣、得、病、侍、事、案、神、明、御、泉

覺、侍、也、吾、自、元、天、津、子、屋、根、之、尊、廿、余、代、之、子、孫、成、歟

依、太、子、御、勸、神、明、御、事、次、一、向、歸、佛、法、故、神、明、靈

荒、得、病、難、覺、也、然、此、年、大、埜、岡、寺、塔、建、立、折、節、不

思、議、之、得、病、患、占、崇神、所、爲、白、今、亦、如、是、覺、侍、也

(十オ)

是太子十四歲之御時 太子言 努 不可有 其義 一切神明之 豐浦寺建立事也

御本地皆是往古如來久成薩埵 歸佛法 免三熱大

苦 朗 和光慧命也 故先年石像彌勒命奉祈平愈

今又大臣之病案 先業之諸感也 然大臣過去此國

主與生 煩 一千人民 其故今受此病苦 侍也 早一千

人男女集出家成給大臣病依 彼出家劫助 忽可

平愈 勅有 大臣成 奇異思 道俗男女 一千人集太

子御自令出家 授戒給 大臣之病即時平愈 誠尊

不思議成事也 同秋九月 或說ニハ 太子自岡本宮還御 四月比

(十ウ)

成給信貴山之北椎坂 證心吹三尺八 給號スル御尺八也 山神不

堪感出來秘曲之舞 太子之御後侍舞其面影競懸

樣也 故太子御馬引返御覽 山神恐山中逃隱太子

御笑有 其時之山神舞太子四天王寺移留名 蘇

莫者與號今舞傳但余所 舞非舞 云亦守屋誅給

軍有形 天王寺 舞也是他所 不舞名 倍臚號手楯面

持入組入違 舞也是軍之心也 亦一說ニハ 御廟所御影堂在トモ云

○太子四十四歲 乙亥 夏四月十五日 製法華經疏 竟傳漢土

數五卷 上宮王疏稱而復諸法師等義理并金人所授 疏釋ナリ

(十一才)

妙理等製釋以令問惠慈法師一忽領悟一言不加嘆末

曾有仍信敬稱上宮御疏謂弟子曰是義非凡奉敬

禮

或傳云此時太子於岡本南宮讚嘆在天皇大隨喜有種々寶物布施有

其時蘇我大臣申樣世間之財寶雖其數多無程盡末代不盡寶物

田地也下奏依天皇清談在云幡磨國伊保郡之内佐勢之庄三百六十余

町御布施アリ今斑鳩庄名太子即法隆寺御寄進在法華勝鬘維广木三下大乘  
令講給

多十月廿日御經疏釋欲令傳大國惠慈法師暇申版唐

之由奏皇太子給太子殘惜言樣朕既欲此世機緣盡一

(十一ウ)

君吾先立版國給支實哀也亦何時奉相見種々寶

獻法師給法師深辭退有太子重勅定有樣此朕師弟之

報物也惠慈法師言曰抑先生此身殿下之御弟子成何以

殿下吾弟子號哉太子言先生吾爲弟子今吾神國得

生定惠具妻故在俗之身成佛法興隆懸心折節大德將

來在忝教釋尊遺法給一日師恩猶難盡況於此數年之

恩德哉一字千金一點多生之恩成依歸國御見物何辭

給耶哀難會易別人問緣也言忝太子雙眼浮御淚給

惠慈法師淚流衣袖潤重申給樣實師弟之契今非

(十二オ)

一世之親、生々世々、機縁也、縱吾數千里、隔山海、雖居他

州、魂定在君邊、當來一佛淨土、生值奉、申流涙、余町袂

潤、太子御心中實愁歎、理也、然惠慈法師太子之製作、

法華經、疏懸頸高麗國返、惠慈法師太子廿四歲、五月化來有、

廿一年送春秋、太子四十四歲、本國へ飯

依此義、太子御入滅之明年二月廿二日、自日本高麗使渡

給、惠慈法師法華經講讀、皇太子御入滅、聞悲歎之思、

命、肝押涙誓、亦明年之二月廿二日、法華經、結願高座不

下、氣閉入滅、給思合、飯國御時一佛淨土御約束不違、

此、惠慈法師入滅之由、種々雖申一説之

口傳如、是斯知、千様一様、難セサレト云義ナリ

太子師匠之恩德深、

(十二ウ)

明眼論釋、給凡一日之師檀百劫、之結縁一度、之聽法五百

生之結縁、故一字聽法、之道俗其師、如父母、可奉敬、況二字

三字、十字百字、乃至數日、之於聽法、哉言語、難盡矣

○太子四十五歲、丙春正月私、御心中思食様、吾此世之機

縁案、入滅已近付、一重期寶之具足、末代形見之物共、

荒陵寺菩提寺法隆寺等、施入在其外、諸寺施入、大

小有、五月三日、推古天皇御惱、在事、万事一生折節成者、上死大

臣奉、始下及三百官、大小立誓願、悲歎、太子驚晝夜之御

誓願様々、中發大願、給此御惱、忽平愈、御命延長、天下

(十三才)

太平寺塔建立末代佛法奇特顯皇法信敬不<sub>レ</sub>失御祈

誓在<sub>レ</sub>御惱即時平愈一天悅不<sub>レ</sub>紅依<sub>レ</sub>此皇太子忽太平寺

塔思食立給<sub>レ</sub>此御喜亦太子天皇岡本之宮斑鳩宮奉<sub>レ</sub>御

行成一折節途中天王俄御心亂雙眼忽闔阿穴闔哉勅有

良久曾中觀音御祈念有者山端自月日出如雙眼

明成御惱即時平愈有故天皇自身御誓此地伽藍建

立觀音安置奉勅在斑鳩宮御行成大和之長林寺是

也世間之人是名穴冥寺號佛師鞍作多須那勅在聖觀

音令<sub>レ</sub>作給<sub>レ</sub>異本<sub>二</sub>天御座<sub>一</sub>云<sub>レ</sub>此歲太子天奏國々郡々大臣

即吉祥天女御事

(十三才)

百官建立之寺塔隨<sub>二</sub>大小<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>齒々給<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>林々給<sub>レ</sub>田<sub>二</sub>墾<sub>一</sub>山野依<sub>二</sub>

多少<sub>二</sub>施與<sub>一</sub>皆天下太平祈願有<sub>レ</sub>秋七月新羅國大王金銅

之藥師如來之形像一軀奉<sub>レ</sub>獻<sub>レ</sub>御長<sub>二</sub>二尺奉<sub>二</sub>安置<sub>一</sub>廣隆寺<sub>一</sub>俗名

寺今之城西北宇積摩沙<sub>一</sub>彼御本尊光明赫奕<sub>一</sub>萬民奉<sub>二</sub>敬禮<sub>一</sub>

太子御參詣在禮拜<sub>一</sub>勅<sub>二</sub>川勝<sub>一</sub>曰<sub>レ</sub>此佛有<sub>二</sub>靈瑞<sub>一</sub>輒不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>觸<sub>一</sub>

垢<sub>一</sub>宜<sub>二</sub>下<sub>一</sub>權<sub>二</sub>宮殿<sub>一</sub>垂<sub>レ</sub>錦帳<sub>一</sub>若聊<sub>二</sub>亦<sub>一</sub>成<sub>レ</sub>護法天等怒<sub>二</sub>加<sub>二</sub>呵責<sub>一</sub>也

自<sub>レ</sub>此宮殿戶帳<sub>一</sub>太子御在世<sub>一</sub>楓<sub>二</sub>行詣<sub>一</sub>卅三歲之秋八月之

懸事始<sub>二</sub>タリト云<sub>一</sub>比<sub>二</sub>常臨幸<sub>一</sub>成宮<sub>一</sub>號<sub>二</sub>桂宮院<sub>一</sub>太子御入滅之後推古天皇

御勅願在太子一周忌之御佛事建立有<sub>レ</sub>今之宇積摩

(十四才)

沙之藥師堂也宮殿之中々尊東方藥師并彌勒尊也

御長者三東脇金銅藥師如來御長二尺西脇金銅如意尺八寸ナリ

輪御長二三尊立竝給推古天皇御寄進狀之編旨曰

廣隆寺奉寄進寺領田園等東限東山峰西限西

山峰北限北山峯南限淀川流右奉爲天子玉躰安穩天

長地久也此寄進狀至今廣隆寺在藥師如來明御

利益言語無盡一善知識價值德 二現世安穩之德 三未來生佛前德 三德強盛

之如來衆生尤可奉隨順故六十六箇每國府建立有

國々衆生貧令得福愚令得智惠也是即我比名號一經其耳 衆病悉除身心安樂依誓

(十四ウ)

然傳教大師手自積二刀三禮之二功比叡山根本中堂之御

本尊定給弘法大師手藥師之形像作高野山四十九院

之本尊奉安置金堂行基并聖武天王尤此尊奉依

亦興福寺東金堂丈六金銅之藥師如來御本尊安置

佛法最初四天王寺之六時堂御本尊彼藥師如來也此

藥師秘蜜口亦諸社之神明之御本地皆是藥師如來化現傳多可秘

也故熊野新宮日吉二宮華蓋菩薩住吉四所隨一關東

鎮守箱根權現其外神明皆悉藥師根本奉成或日光

亦月光十二神七千夜又化現在神顯給へり爰彼廣隆寺

(十五才)

中尊者彌勒菩薩也言左脇立藥師號本尊宇積摩沙之藥師堂申也

○太子四十六歲丁夏四月八日天皇勅太子曰太子先年

初講勝鬘經自余已降天下豐饒朕身平穩也望亦

於朕前重講疏文太子預請展梵筵再稱揚讚嘆給

夏三日而竟諸落大德并大臣卿相座侍奉聽聞奏

曰儲君太子所講給妙義寔甚深無辨說滯義理明々

莫通內不該外天皇大隨喜曰忝哉西方大聖之所說其

義甚深也太子彼經王妙義說給四弁八音如振玉末世之

(十五ウ)

衆生普蒙其大利五濁惡世還同正法是不可思議功德

也天皇奉獻種々御布施其布施物天王勅大臣等儲君湯沐之戶加給へり年中雜用常式二

倍セリ太子固辭給天王不許太子彼以乃班造所諸新田ニ施入シ給へり湯沐之戶年中雜用清膳湯藥溫室等也其田數十个町

秋九月召黑駒出逝諸良邑指東山下謂左右曰吾死後

二百余歲有二帝王崇貴佛法彼金剛盧舍那山是大佛之後ノ山事

谷前於岡上建伽藍與隆妙典亦西原下指曰於彼平

原亦興寺塔遍望四方曰此地帝都氣近今於二百余

歲都遷在北方

障子傳云太子入滅在一百廿余年仁皇四十五代聖武天皇治天平八年ニ東大寺大佛建立太子未來記相當天平九年建立戒旦

(十六オ)

院、又於彼谷前、伽藍可、有仁皇四十三代元明天皇高市郡藤原宮、奈良ノ京へ引移給シ時本ノ元興寺ヲ同奈良之飛鳥へ引移給次天

智天皇即位八年己嫡室鏡女王大職冠之御爲ニ山城國宇治郡山階郷ニ建立伽藍、給又仁皇四十代天武天皇即位元年壬申

近江國志賀郡大津宮ヨリ又大和國高市郡岡本南宮都ヲ移給、時彼寺ヲ同郡麻坂引移シ建立在テ名麻坂寺云フ又仁皇四十三

代元明天皇即位和銅二年ニ都ヲ同國倭ノ上郡平城宮へ遷給時、淡海公春日勝地下此前岡上、建立伽藍、今興福寺是也是等之寺

共モ太子之未來記文ニ相當又西ノ平原ヲ指シ太子寺塔可有言、天竺之祇園精舍移大唐國西名寺ト號シ建立ス伽藍、皇太子我朝へ

移大和國高市郡熊磯林、建立太宮大寺ト名給ヘリ有記文云熊磯、村者平郡内額田里太子始テ一ノ伽藍ヲ建立給フ彼寺ハ西明寺ヲ移

給ト白ス又推古天皇治廿五丁丑太子四十六歳ニ行末夏知食爲、夢殿ニ入御座ノ明且天奏曰、後々百歳時帝王有形象、案ニ定、多ハ短祚成ラン

耳非佛法力、何以奉助護、願熊磯村建伽藍、欲令護代々帝王、言、推古天皇、御悅有同廿九年辛巳太子五十歳ニ及、鶴林之時、

命ニ田村王子、曰吾遷化即近付ヌ望ハ天皇遠覆護伽藍、三寶令與、行給ヘ若尔者、天普覆ヒ四海常安樂成ラムト此由天王聞食ノ忽流

(十六ウ)

御涙給テ召ニ太子并大臣等、大宮大寺以下之寺々之玄記縁起、田島等ヲ記録令早

又要支華記三十余卷製作申聞給、天皇隨喜給ヘリ其後舒明天王田村王子受太子命、彼寺ヲ御興行アリ又皇極天皇是仰崇

給フ太子天智天王御付屬又其次持統天王繼崇給又文武天皇、彼寺内ニ九重大塔建立次元正天王丈六釋迦三尊安置供養給フ

其後聖武天王依道慈和尚奏聞、天平元年己此寺、奈良之京へ引移建立在號ニ大安寺、給彼寺々悉太子之未來記不違

一太子卅三之御時自四十六歳、度々之未來記等是有奈良平城京太子御入滅後一百十余年相當也

○太子四十七歳、戊寅春二月謂大臣已下、曰海表國與軍大戦西

方、大國將滅、東方小國、小國待拒、大國稚王、各將滅、國有

一、木姓、將奪神器、大隨之運今年可盡我國無事唯

聞、舉動、大臣已下未識、所命、皇太子命曰、秋中聞北國

(十七オ)

事、秋八月高麗王使貢、方物、因以言曰、隨煬帝興三十

萬衆、攻我、我爲不破、故獻俘、貞公普通三人及鼓、

笛、弩、拋石之類十物并駱駝一疋矣、冬十月太子妃與俱、

諸御物語、命妃曰、吾昔爲卑賤人、逢師說法華經、或僧

便品偈頌之文入於、深山思唯佛道之文、八代宗逃家剪髮爲沙彌、修行、卅余年捨

身、衡山之下、今憶此時、當晉末、世次魂宿韓氏之腹、復

得爲人、出家入道、誓生々世々、不擇中邊、傳通佛法也、

即登衡山修行、五十余年、當宗文帝世、次又捨身命、

託生隆氏、復得男、出家入道、經卅余年、捨身於彼、次

(十七ウ)

託生高氏、此時齋王君臨天下、又修行衡山、六十余年、

捨身命於此、次當于梁世、託生梁相之子、復出家入道、猶

在衡山、經七十年、歷東周世、誓願必生東海之國、流佛

法、裏云大唐國衡州衡山道場釋思禪師七代記文云、

往昔西國有婆羅門僧、其名達磨、此人應化魏文帝、

即位大和八年、歲次丁未、十月到來漢土、徘徊衡山、吟詠草堂、

於是達磨問思禪師云、汝此處幾年、答曰、廿余歲、亦問何

見靈驗、何被威力、答曰、不見靈驗、不被威力、達磨良久歎

息云、禪定易厭、濁世難離、余忽遇素交、永滅塵劫之

(十八才)

重罪、暫隨清友、長殖來生之勝因、阿師努々、何故留此、

山、不遍十方、所以因果沒誕生、東海彼國無機人情、儼惡、

貪欲爲行、爲食宜、下令宣揚正法、諫中止殺生、思禪師問曰、

達磨誰人答曰、余者虛空也、相談已訖、向東先去、聖容、

不停、來儀髣髴、禪師戀望、朝夕啼泣、六時行道、將五十一、

後魏帝紹拔皇、元年庚申永逝也、凡思禪師到此、

山、所由不知、遠祖不聞、身留於第六生、機候於第七之、

世、生死大空、凡夫濟於苦海、菩提純淨、含類運於覺、

路、然則應化之語、不妄也、往生之身、不謬也、所以生倭國、

(十八ウ)

之王家、哀矜百姓、棟梁三寶、朕惚於華梵、修行功重、

或託生王族、得昇儲君、法華一乘、顯傳或后妃采女、臣下、

生家修行、歷數十身、今來臨日域、用明天皇爲父、得宿皇室、

后、御腹長成人、自廿二歲、天下之儲君、成國々、處々、建立、四、

十六个、伽藍、弘大小之法門、渡一千三百余僧尼、隨分之本懷、

已雖滿足、猶懸心有、理朕成儲君、故普不親下賤、今捨此、

身命、託生微家、出家入道、救濟衆生、是吾發心誓願、惣、

朕此土、五百度生、替弘說如來教法、濟度有情、而已、妃押淚、

啓白、殿下之談、非妾所識、殿下捨妾、託生給、太子曰、吾雖、

(十九オ)

託生子何得留妃夫妻別悲御淚咽給已上松子冬十二月太

子后王子悉奉引具調色節科長墓處御出成氏云是御葬之

儀或ヲ兼テ人ニ令知教給フ心也其行幸道自葦垣宮者龍田山之東岡南

西路衣路山打越河内國科長里付給然御陵三返御廻

有是大道之趣也其後御陵御前御輿下給勅墓工曰汝此陵

貞神妙仕四方廣路切廻朕意趣二在一ニハ大道之時爲令無煩ニハ吾子孫爲

令無日本日本ノマヤレハ供奉之上下咽淚太子謂妃曰遙憶過去因相續ナリ

果未賽了二思禍及三子孫是ハ守屋ヲ誅給義也陵大工申樣貴賤

男女以三子孫爲寶殿下何御子孫空樣勅給哉子孫不續

(十九ウ)

者豈天之咎白太子曰孔子遺言無後者爲不孝矣吾

爲釋迦大聖弟子豈爲孔子小賢弟子乎答啓白左之右

之奉依殿下命妃大悲給太子善之妃曰三從之妾更何異望

○太子四十八歲己卯春正月天奏言吾廿日御間許御座畿内

欲巡見天皇許命給太子命駕巡見畿内諸臣連國造共

呵建寺無地者給地無木者給林無田者給田無墾者給林歌

園經廿个日至蜂岡給建塔心柱定常住僧十口貴持戒擯

出破戒令命壇越川勝令傳子孫給其後越近江給巡檢

志賀栗本郡諸寺竟駐駕栗津命左右曰吾死之後五

(二十オ)

十<sub>二</sub>个<sub>一</sub>年<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>帝<sub>王</sub>都<sub>ヲ</sub>遷<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>處<sub>ニ</sub>治<sub>レ</sub>國<sub>ヲ</sub>十<sub>年</sub> 九<sub>代</sub>天<sub>智</sub>天<sub>皇</sub>御<sub>即</sub>位

六<sub>年</sub>大<sub>和</sub>明<sub>香</sub>岡<sub>本</sub>之<sub>宮</sub>ヨリ近<sub>江</sub>國<sub>志</sub>賀<sub>郡</sub>有<sub>ニ</sub>遷<sub>宮</sub>ハ<sub>ニ</sub> 此<sub>時</sub>近<sub>江</sub>國<sub>々</sub>司  
居<sub>住</sub>給<sub>大</sub>津<sub>宮</sub>是<sub>ナリ</sub>舒<sub>明</sub>弟<sub>一</sub>御<sub>子</sub>ナ<sub>リ</sub>ス

持<sub>ニ</sub>異<sub>形</sub>物<sub>ヲ</sub>太<sub>子</sub>御<sub>前</sub>參<sub>奉</sub>奏<sub>抑</sub>近<sub>日</sub>浦<sub>生</sub>河<sub>異</sub>形<sub>物</sub>俄<sub>ニ</sub>

出<sub>來</sub>侍<sub>其</sub>形<sub>如</sub>人<sub>非</sub>人<sub>又</sub>如<sub>魚</sub>非<sub>魚</sub>四<sub>之</sub>手<sub>足</sub>有<sub>於</sub>一<sub>身</sub>備<sub>ニ</sub>

多<sub>畜</sub>類<sub>之</sub>躰<sub>ニ</sub>世<sub>間</sub>人<sub>更</sub>不<sub>ニ</sub>弁<sub>知</sub>定<sub>御</sub>存<sub>知</sub>侍<sub>備</sub>上<sub>覽</sub>持<sub>ニ</sub>

參<sub>仕</sub>侍<sub>奏</sub>尔<sub>時</sub>太<sub>子</sub>御<sub>叡</sub>覽<sub>有</sub>勅<sub>言</sub>此<sub>異</sub>形<sub>者</sub>五<sub>色</sub>之<sub>人</sub>

魚<sub>申</sub>物<sub>也</sub>是<sub>爲</sub>朝<sub>家</sub>守<sub>一</sub>賢<sub>人</sub>欲<sub>レ</sub>失<sub>時</sub>出<sub>現</sub>者<sub>也</sub>物<sub>賢</sub>臣

滅<sub>時</sub>天<sub>地</sub>顯<sub>ニ</sub>之<sub>恠</sub>虛<sub>空</sub>飛<sub>兔</sub>翔<sub>レ</sub>天<sub>金</sub>色<sub>之</sub>兔<sub>出</sub>來<sub>大</sub>地<sub>ニ</sub>

五<sub>色</sub>人<sub>魚</sub>必<sub>出</sub>來<sub>亦</sub>賢<sub>王</sub>麒麟<sub>鳳</sub>凰<sub>等</sub>靈<sub>鳥</sub>出<sub>現</sub>

(二十ウ)

世<sub>間</sub>增<sub>ニ</sub>天<sub>長</sub>久<sub>壽</sub>筭<sub>也</sub>然<sub>此</sub>五<sub>色</sub>之<sub>人</sub>魚<sub>國</sub>之<sub>禍</sub>始<sub>物</sub>也<sub>吾</sub>

入<sub>滅</sub>之<sub>後</sub>誰<sub>是</sub>弁<sub>知</sub>哉<sub>急</sub>可<sub>ニ</sub>拂<sub>失</sub>故<sub>近</sub>江<sub>湖</sub>水<sub>被</sub>放

氏<sub>云</sub>是<sub>太</sub>子<sub>御</sub>入<sub>滅</sub>物<sub>恠</sub>始<sub>也</sub>其<sub>外</sub>之<sub>物</sub>恠<sub>天</sub>變<sub>世</sub>間<sub>無</sub>問<sub>諸</sub>

人<sub>大</sub>恠<sub>二</sub>月<sub>大</sub>星<sub>從</sub>東<sub>流</sub>西<sub>其</sub>光<sub>如</sub>火<sub>移</sub>時<sub>尅</sub>良<sub>久</sub>流<sub>聲</sub>如

雷<sub>諸</sub>人<sub>驚</sub>耳<sub>目</sub>其<sub>後</sub>消<sub>去</sub>亦<sub>虛</sub>空<sub>無</sub>雲<sub>雨</sub>下<sub>又</sub>客<sub>星</sub>飛<sub>ニ</sub>

十<sub>方</sub>入<sub>三</sub>月<sub>宮</sub>是<sub>早</sub>魁<sub>大</sub>難<sub>アリ</sub>三<sub>月</sub>八<sub>日</sub>自<sub>東</sub>方<sub>五</sub>色<sub>雲</sub>聳<sub>來</sub>覆<sub>斑</sub>鳩

殿<sub>上</sub>覺<sub>良</sub>久<sub>連</sub>天<sub>不</sub>消<sub>不知</sub>其<sub>後</sub>諸<sub>鳥</sub>類<sub>來</sub>殿<sub>上</sub>悲<sub>鳴</sub>良

久<sub>四</sub>方<sub>飛</sub>翔<sub>皆</sub>差<sub>東</sub>方<sub>飛</sub>去<sub>後</sub>思<sub>合</sub>太<sub>子</sub>御<sub>遷</sub> 九<sub>月</sub>河<sub>内</sub>國

茨<sub>田</sub>池<sub>水</sub>始<sub>諸</sub>國<sub>池</sub>水<sub>變</sub>成<sub>血</sub>色<sub>亦</sub>金<sub>色</sub>也<sub>一</sub>切<sub>之</sub>江<sub>河</sub>大<sub>海</sub>中<sub>大</sub>

(二十一オ)

小魚悉死漂浪浮又山林鳥獸以悲音泣侍後思合ハ太子七歲自殺生禁斷ノ喜

又太子別之御弔也マ

太子其後還三峰岡二宿明日届三山崎一指北岡本謂左右曰此

地勿垢應建伽藍觀音利生祠也氏云今之寶寺是也

大河二交野御幸成自三茨田堤二直到三堀江二宿三江南原是攝州長柄之豐崎也

謂左右曰此地形帝氣在吾入滅後一百年間有二帝皇都

興三此處僅十個年在其後孤鬼聚勅云氏此未來記ハ人皇卅七代ノ帝孝德天皇大和

國自明香宮攝州長柄之豐崎遷都在十個年其後齊明王御即位自攝津國亦大和之明香岡本遷都有彼齊明天皇者皇極重祚

御即位明日參詣住吉至河内駐三茨田寺東側蜜謂三左名ナリ

(二十一ウ)

右曰吾死之後廿個年有二比丘智行聰悟流通三論救

濟衆生爲衆被貴是比丘非他是吾身一體成氏云太子薨後廿

年河内國三寶院云所惠觀僧正三論宗渡宗旨其後北望流通救濟衆生給正可知太子御再誕ナリトマ

大懸山西下謂左右曰吾死後一百年後有二愚僧於彼

立寺造像高大縫一萬之袈裟施于諸比丘是非他吾

後身之一妹行基菩薩葛木山東下香水寺建立相當リス卽科長御廟巡見在

命三墓工二曰吾以巳年春必至彼處汝早可造墓土師連

啓白墓已造畢未開三疑道太子命曰勿開遂道但墓

内設三二床三墓工啓曰卽構早太子入廟峴神妙也再

(二十二才)

三勅、在西方之立石御一期、本地垂跡之利生悉書注給

碑文云、松子侍、願内、親見之云

大慈大悲本誓願 愍念衆生一如一子

是故方便從西方 誕生片州興正法

我身救世觀世音 定惠契女大勢至

生育我身大悲母 西方教主彌陀尊

眞如眞實本一體 一體現三同一身

片域化緣亦已盡 還歸西方我淨土

爲度末世諸衆生 父母所生血肉身

(二十二ウ)

遺留勝地此廟嶺 三骨一廟三尊位

過去七佛法輪所 大乘相應功德地

一度參詣離惡趣 決定往生極樂界

其後太子還御成至勢益之原、願北謂左右曰、可憐此處

有二信女、可建小寺、在卅年以來、其後屆彼椎坂、東一本

宮、還行成、詠曰、斑鳩宮之薨、丹炎之火、村中心者入治

太子入斑鳩宮、諸物哀侍是傾、無常日影遷化、嶺有

待花、勻沈轉變霞也、夏四月、津國宰奉獻異形物、其

形如下出、蒲生河者、太子觀覽在惡、謂近從曰、此禍之物也

(二十三オ)

早令<sub>ニ</sub>捨去<sub>一</sub>、勅<sub>ニ</sub>在<sub>一</sub>秋八月太子晨朝王宮參<sub>ニ</sub>天皇<sub>一</sub>勅<sub>ニ</sub>朕

去夜夢見<sub>ニ</sub>太子容儀<sub>一</sub>艷麗、異<sub>レ</sub>常、又服<sub>ニ</sub>錦衣<sub>一</sub>、見<sub>ニ</sub>此何之<sub>一</sub>祥、

也太子流<sub>レ</sub>淚奏曰、是臣奉<sub>レ</sub>離<sub>ニ</sub>陛下<sub>一</sub>祥也、天皇忝<sub>ニ</sub>龍眼<sub>一</sub>、御

淚流給、冬十月太子天奏曰、臣觀<sub>ニ</sub>神恠<sub>一</sub>、身沈<sub>レ</sub>病伏願賜<sub>ニ</sub>

貴藥<sub>一</sub>治<sub>レ</sub>之、天皇賜<sub>レ</sub>藥千餘種、太子合藥施<sub>ニ</sub>諸病人<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>服、

一丸、天皇詔問曰、朕幼弱、忝<sub>ニ</sub>登<sub>ニ</sub>大業<sub>一</sub>之位、幸太子得<sub>ニ</sub>良

佐、而天下和平、如<sub>レ</sub>聞太子不豫、寢膳不<sub>レ</sub>宜、晝終日憂念、

夜通夜<sub>レ</sub>勞慮、將念留<sub>ニ</sub>迹於久年<sub>一</sub>、紹<sub>ニ</sub>隆佛法<sub>一</sub>、住<sub>ニ</sub>化於長

齡<sub>一</sub>、經<sub>ニ</sub>理天下<sub>一</sub>、而今不<sub>レ</sub>服<sub>ニ</sub>朕與藥<sub>一</sub>、如何太子所<sub>レ</sub>懷何事耶、

(二十三ウ)

若有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>思奏<sub>レ</sub>之、朕以<sub>ニ</sub>遂<sub>一</sub>、其懷<sub>ニ</sub>朕之意<sub>一</sub>知之、

上宮返答

臣厩<sub>レ</sub>戶曰、伏蒙<sub>ニ</sub>天恩<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>勞如<sub>レ</sub>控、此身無常、難<sub>レ</sub>保、此體

有漏、易<sub>レ</sub>滅業之所<sub>レ</sub>制、有<sub>レ</sub>限命之無<sub>レ</sub>緒、以<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>近臣荷<sub>ニ</sub>天

慈<sub>一</sub>、猥<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>熱烈天恩<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>頂、奉<sub>レ</sub>謝<sub>レ</sub>之、何<sub>レ</sub>背、因錄<sub>ニ</sub>十七箇條<sub>一</sub>、

憲法并<sub>ニ</sub>天皇國記<sub>一</sub>等、以<sub>レ</sub>先年奉<sub>レ</sub>進臣亦爲<sub>ニ</sub>國家<sub>一</sub>、建<sub>ニ</sub>立<sub>一</sub>、

諸<sub>レ</sub>寺塔、只念<sub>ニ</sub>住持三寶<sub>一</sub>、更無<sub>ニ</sub>餘樂<sub>一</sub>、將願與<sub>ニ</sub>隆三寶<sub>一</sub>、

導<sub>ニ</sub>引<sub>ニ</sub>蒼生<sub>一</sub>、率<sub>ニ</sub>土安穩<sub>一</sub>庶民快樂、因有<sub>ニ</sub>四節意願<sub>一</sub>、二云

奉<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>天皇<sub>一</sub>、并<sub>ニ</sub>御<sub>レ</sub>世<sub>一</sub>、御<sub>レ</sub>世<sub>ニ</sub>天皇<sub>一</sub>、營<sub>ニ</sub>造<sub>ニ</sub>七箇寺<sub>一</sub>、法隆學問

(二十四ウ)

四天王法興法起妙安菩提定林也以二件伽藍敬奉累下

階下并御世御世治二 天下二皇 邦上有三神珠者靈魅莫侵

レ之國興三寶二亦有二何禍二哉伏願天皇遠以覆二護伽藍二

紹三隆三寶二久保二國家二云住二法隆學問寺一僧侶每年

九旬令講二法華勝鬘維摩三部經一法輪常轉而濟二

万民護甲率土三云惠日佛法以八蕃興隆素服受用

法則滅是故佛經云一切俗家不レ得受二用 三寶財物田

園不レ得二販二使 三寶奴婢牛蓄若有受用販使一者破二滅

佛法二破二滅 佛法二故國家滅亡伏願臣町レ建諸寺階下

(二十四ウ)

并御世天皇厚願世々相續都不二妄預二伽藍事二恐愚

朦之侶 犯用財物二破二損 伽藍二欺縱使雖不二犯用一觸事有

レ失 必殖二泥利之因 夫流濁 無二源清一君代々國皇大臣背二臣

本願二而將二臣子孫後胤二爲二彼統領一令三執掌 伽藍二者得破二

滅佛法二咎二其王臣等不レ令三永保二官位二子孫致二瘖瘂病一

非時天死 八部神王以爲二死敵 四云臣於二熊磯村二始造二

道場一區二營 支未レ辨伏願陛下并御世御世天皇 相續

營成二大寺一以護二 邦家二臣不敬 深揖 仰三寶二深望三此四

節謹錄二遺願一以寄二臣田村一以聞臣廐 戸言 正木法隆寺御 倉在之

(二十五才)

天皇大有御感更不違給此熊蹯之寺本大宮大寺成今已上松子傳大安寺號委八四十六歲之御記文

○太子四十九歲庚辰春三月三日於斑鳩宮三日三夜間桃花

宴執行御會推古天皇奉成行幸故大臣已下百官有

參內天下之見物也太子勅曰人々向顏申夏今不幾我人

之憂世思出穢土之祥是也勸酒宴給吾生自以來

雖在俗身成不近酒肉五辛尤如來制戒恐在各酒可

任意依之面々作詩吟亦讀歌詠各思々侍形々御

風情有故三日三夜淨菜饌賜錄物罷出周詩楚賦ト云周時作詩楚國

作賦古詩云今賦云又和歌云皆是雖詞變意ハ一也漢家之既ト一句中述其心和歌ハ我朝詞元自神代事起戀引極一首中故我朝知事也

(二十五ウ)

秋九月太子亦奉勸一天下臨幸於斑鳩宮四天王寺之召

伶人卅二人三日三夜之間盡管絃之秘曲極舞數上備天

皇觀覽下施万民見物給青調詫木絲仔呂律秘曲澄

渡宮中賀殿輪臺之舞翻廻雪袂庭上見物諸人如雲

霞太子謂左右曰夫誕生已來四十九年隨分普雖施利生

宿生無緣者不近過去有宿緣者來近付侍然吾自廿二

歲時成一天儲君日本我間進退衆生雖施一子平等慈

天下人民百姓吾結緣者万分之一難有昔舍衛大城九億

家有三億衆生詣佛得悟三億衆生至佛所耳目結緣

(二十六オ)

有三億衆生佛不見法不聞云故日本吾名字聞者希

有亦當國中男女間吾不見者多有今此大會思立別

不有子細上天子爲仰諸臣叡感下隣國他國人民百姓

爲令結縁ニ未來佛果ニ吾最後方便也勅 皆人咽涙給

松子云彼折節太子御簾高奏上諸人御白令見結縁引導之御志深ク思食コソ難有ケレ然西天之釋尊御入滅之折節如斯自面門

放光上虚空ニ高七多羅樹出ニ大梵伽陵御音ニ告ニ人大會ニ言吾無量億劫ヨリ以來難行苦行成就紫磨黄金色身汝等可レ見吾身指卍字

之御旨最後示給フ一會大衆國王大臣后妃采女二界八番等雜衆至マテ盡數集會シ十二由旬ノ拘尸那城ニ滿タリ凡禽獸蟲ニ類者雖ニ

三十四億ニ多ト僅五十二類計コソ爲ニ如來最後之結縁ニ也今東土皇太子其御利生方便ハ色コソ變レ結縁之御志ハ同侍故四十九歲秋比ハ

執行御賀ノ大會ニ太子奉結縁事コソ難有是救世之御方便也然太子四十九歲春ノ花見ハ無常之風ニ令知難遇亦九月之秋會因月成詠必

(二十六ウ)

生者必滅示給ヘハ一天學催レ哀萬民悲テ冬十二月始。現ニ赤大變ニ流涙事實ニ哀之理ト思出レテ悲有ト云

長一丈餘其形如ニ鷄尾ニ不消數刻光照ニ十方ニ萬民見驚佐

諸人見知不侍爰百濟之國道傾法師申高僧是見蜜告

皇太子曰君此天變知召侍是必賢王聖主并忠臣欲

失御代出來物也日本人更不可知此名字 蚩尤旗申者

也昔震旦御代始出現

蚩尤申物ハ大鬼神王也長一丈余三教指歸之下卷云蚩尤云物ハ銅頭鐵額在テ身ハ獸トノ語ハ似レ人不レ食ニ五穀ニ喰ニ沙石ニ兄オヲ持

八十八人唐土九州間有威勢廣大ノ高名無並武也唐土ニハ合獸之時彼蚩尤形顯ノ幡ホコノ上ニ安亦楯之面ニモ書顯セリ又旗之象ニテ侍也

是殿下御入滅之後相ニ當六年ニ天下起ニ大軍ニ御子孫及ニ大事

(二十七ウ)

王子達悉滅御家日本可ニ絶給ニ敷申給ニ太子默然是非不レ言

同月中旬比太子御惱氣侍間調ニ色節ニ岡本宮御參莖

有、天奏、曰、抑臣今年様々形々物性侍受病條定一大事

出來、存最後爲ニ奉拜ニ參内侍也有漏依身忽沈ニ病苦ニ君

玉躰難レ拜夫君雖ニ女人御身申ニ依ニ先世之刑善功力ニ賢

王聖主聞天下普有道御政無レ陰無漏慧無比臣亦依ニ

前世積善ニ天子備ニ儲君ニ思様弘ニ佛法ニ助ニ万機之政、既

一期機緣盡受ニ病苦ニ待レ死今幾乎誠今生假宿夢幻之

棲也設遲速之不同雖レ侍必來世亦奉レ期ニ同生一國之再

(二十七ウ)

會、押レ涙奉拜在御前立還御成給ニ皇君采女月卿雲

客今限別悲給宮中愁歎思遺、哀也多十二月自二十六

日、受御惱ニ万死一生成間、三人后王子嬪宮侍女采女歎

侍中膳嬪愁歎殊深太子言給何君聞食自從レ元不

員、貪女侍君廿七御年忝備ニ后位ニ既廿余歲也宿ニ一樹

之影、汲ニ一河之流、其因緣不レ淺、言況於ニ夫妻之契、哉體雖ニ

男女替ニ心是別無、御淚露深見給、誠大聖權者皇太

子雙眼浮ニ御淚、言、尤御理也人間八苦中愛別離苦悲

實以切、其上照ニ四重閣、三明月朗御座太聖釋尊、親子思

(二十八才)

愛別、悲羅、睺羅、尊者惜名殘、給況東愚於凡夫、哉、勅有

皆人愁歎不紅

古人云、實太子、后トノ愛別離苦、悲理也、凡ソ上ハ自入重玄門之菩薩  
聖衆下ハ至邪見放逸之凡夫禽獸鳥類、嗚アカス別ハ悲也

太子廿二日之暮、起御惱床、御座御母間人皇女三人、后十

七人、王子其外侍女采女群臣已下百官已上、勅曰、夫各

對面、只今計也、凡一期四十九年、向顔者唯一睡之夢

侍也、但依、曩劫之宿緣、吾人假暫爲親爲子、結君

臣主從之契、先世機緣、今欲盡臨終限、今也、但今生

契深、互一佛淨刹之期、再會、吾生々世々、備億持不

(二十八ウ)

退德、故結緣、值遇於三万民、世雖及、未世、必一佛淨土

結緣、諸人啼淚悲泣、良有太子曰、遷化已近付

各止言語、給住正念、觀本有佛性、還皈、西方淨土、勅

閉雙眼、良久息絕、給其折節、不及言語、中太子御后膳嬪

太子之御枕、近付歎言、何君入無人員、給事悲我身、永可

明日有不侍、偕老同穴、契實者、死生路、引具給、悲歎有良

在太子蘇、勅曰、夫妻子生死、鬼綱妨、菩提道、實也、一切

衆生、必依臨終之一念、趣善處、惡處、有高橋、嬪歎音

入耳、忽正念、亂蘇、侍也、臨三人最後、近付者、恩愛、妻子也

(二十九オ)

自<sub>レ</sub>兼<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>月<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>死<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>別<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>侍<sub>レ</sub> 正<sub>レ</sub>念<sub>レ</sub>亂<sub>レ</sub> 故<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub> 僅<sub>レ</sub>經<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>ニ

遷化<sub>ニ</sub>曰<sub>ハ</sub> 御<sub>レ</sub>惱<sub>レ</sub>忽<sub>レ</sub>平<sub>レ</sub>愈<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>悅<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>限

古<sub>レ</sub>老<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>太<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>四<sub>レ</sub>十<sub>レ</sub>九<sub>レ</sub>歲<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>滅<sub>ハ</sub> 自<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>化<sub>レ</sub>他<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>教<sub>レ</sub>化<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>便<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>ナ<sub>リ</sub>御<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>證<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>遷<sub>レ</sub>化<sub>ハ</sub>一<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>五<sub>レ</sub>十<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>歲<sub>レ</sub>春<sub>ニ</sub>月<sub>レ</sub>廿<sub>ニ</sub>日<sub>レ</sub>夜<sub>レ</sub>半<sub>ニ</sub> 定<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>共<sub>ニ</sub>入<sub>レ</sub>滅<sub>也</sub>

○太子五十歲 辛巳 冬十二月御母間人皇后奉<sub>レ</sub>別<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>

松<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>太<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>四<sub>レ</sub>十<sub>レ</sub>九<sub>レ</sub>歲<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>滅<sub>ヲ</sub>延<sub>レ</sub>給<sub>ニ</sub>二<sub>ノ</sub>理<sub>レ</sub>在<sub>一</sub>ニハ御<sub>レ</sub>老<sub>レ</sub>躰<sub>ノ</sub>御<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>ヨ<sub>リ</sub>モ先<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>悲<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>次<sub>ニ</sub>ハ膳<sub>レ</sub>嬪<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>敷<sub>切</sub>ナル故<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>延<sub>レ</sub>給<sub>ヘリ</sub>故<sub>レ</sub>恩<sub>レ</sub>愛<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>借<sub>レ</sub>老<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>后

彼<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>苦<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>ケ<sub>ル</sub>コ<sub>ソ</sub>實<sub>ニ</sub>大<sub>レ</sub>聖<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>深<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>示<sub>也</sub>依<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>皆<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>願<sub>ヲ</sub>可<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>耳<sub>然</sub>太<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>滅<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>時<sub>日</sub>ヲハ何<sub>ノ</sub>月<sub>日</sub>トモ吾<sub>レ</sub>朝<sub>不</sub>知<sub>ラ</sub>

太<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>滅<sub>六</sub>百<sub>年</sub> 已<sub>レ</sub>來<sub>ハ</sub>更<sub>不</sub>知<sub>實</sub>ニハ太<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>滿<sub>五</sub>十<sub>歲</sub> 十<sub>二</sub>月<sub>廿</sub>一<sub>日</sub>癸酉日ノ酉<sub>ノ</sub>時<sub>也</sub>

太<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>飽<sub>レ</sub>別<sub>レ</sub>悲<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub> 吾<sub>レ</sub>十<sub>六</sub>歲<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>夏<sub>レ</sub>父<sub>レ</sub>王<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>別<sub>レ</sub>孤<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>侍<sub>レ</sub>母

養<sub>レ</sub>育<sub>三</sub>十<sub>余</sub>年<sub>今</sub>又<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>離<sub>レ</sub>母<sub>一</sub>期<sub>始</sub>從<sub>レ</sub>悲<sub>也</sub> 言<sub>レ</sub>潤<sub>ニ</sub>御<sub>レ</sub>衣<sub>袂</sub>

(二十九ウ)

給<sub>レ</sub>皆<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>理<sub>レ</sub>咽<sub>レ</sub>涙<sub>レ</sub> 間<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>后<sub>者</sub>推<sub>レ</sub> 太<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>最<sub>レ</sub>後<sub>御<sub>レ</sub>孝<sub>レ</sub>養<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub> 古<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>女<sub>也</sub></sub>

荷<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>棺<sub>ニ</sub>涙<sub>レ</sub>共<sub>レ</sub>大<sub>和</sub>出<sub>レ</sub>河<sub>内</sub>國<sub>石</sub>川<sub>郡</sub>科<sub>長</sub>御<sub>レ</sub>陵<sub>造</sub>御<sub>レ</sub>葬

禮<sub>有</sub>雙<sub>御<sub>レ</sub>足<sub>ニ</sub> 血<sub>流</sub>出<sub>草</sub>紫<sub>染</sub>秋<sub>最</sub>中<sub>見<sub>レ</sub>者<sub>見</sub>物<sub>諸</sub>人</sub></sub>

不<sub>ニ</sub>一<sub>方</sub>成<sub>ニ</sub>涙<sub>也</sub>然<sub>三</sub>度<sub>大</sub>行<sub>道</sub>竟<sub>御<sub>レ</sub>棺<sub>ニ</sub> 岩<sub>屋</sub>内<sub>奉<sub>レ</sub>納</sub></sub>

枋<sub>御<sub>レ</sub>陵<sub>門</sub>外</sub>逆<sub>様</sub> 手<sub>自</sub>立<sub>太<sub>レ</sub>子</sub>押<sub>レ</sub>淚<sub>言<sub>レ</sub> 吾<sub>レ</sub>孝<sub>養</sub>之</sub>

志<sub>實</sub>有<sub>者</sub>佛<sub>天</sub>是<sub>感</sub>應<sub>末</sub>代<sub>利</sub>生<sub>之</sub>其<sub>爲</sub>靈<sub>木</sub>生

付<sub>大</sub>木<sub>令<sub>レ</sub>築<sub>給<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub> 古<sub>レ</sub>老<sub>レ</sub>人<sub>云</sub>今<sub>大</sub>乘<sub>木</sub>號<sub>御<sub>レ</sub>廟<sub>之</sub>門</sub>外<sub>ニ</sub> 有<sub>木</sub>是<sub>也</sub></sub></sub>

其<sub>後</sub>余<sub>人</sub>皆<sub>歸<sub>ニ</sub>大<sub>和</sub>ニ</sub>太<sub>レ</sub>子<sub>者</sub>親<sub>子</sub>別<sub>悲</sub>御<sub>レ</sub>陵<sub>前</sub>無<sub>ニ</sub>他<sub>念</sub>

御<sub>レ</sub>念<sub>誦<sub>押<sub>ニ</sub>御<sub>レ</sub>淚<sub>言<sub>レ</sub> 抑<sub>母</sub>尊<sub>靈</sub>雖<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>本<sub>地</sub>安<sub>養</sub>教<sub>主</sub>二</sub>濟</sub></sub>

(三十才)

度群類之垂慈悲、出極樂上品臺、交分段同居塵、忝

隨類應同形也而御魂去至淨土、給歟亦穢土垂濟

度、給歟願吾告令、知給御祈誓有程滿、七日曉御陵

内光明在告太子、宣給自此國之機緣盡、不還西方淨

土、猶施穢土利益、自生町中天竺、末申天壽國云國行

假立淨土、穢土亦非穢土、利衆生、汝明年青陽清辰比

必來、彼土示給、皇太子流、隨喜涙、重言上有仰願母廣

大之垂慈悲、彼國土有形、眼前顯令見、阿兒給勅、皇后

利生之廣大、施給爲御廟屈、彼國樣悉令出現、太子

(三十ウ)

悅手自繪書留、其太子今生別悲還御、推古天皇

御奏聞在共綾、惟三爲御衣絹、以五色絲、縫顯如

綬縫竝四方緣、平組押付、金鈴、錦袋七重、入納、朱

唐櫃、法隆寺奉納、高倉、余人更不知、就是人々多ノ太子、  
說共在秘事

未來記、吾入滅後六百年、此曼陀羅出現、不思議

之事共錄、置給、或傳云、此曼陀羅ニハ太子一期始終ノ御事縫リ  
百濟國ヨリ奉獻云ヘリ

古老云、實太子、未來記不變、御入滅後六百四十年、出現スルヲ在リキ

余時、八人皇八十九代帝龜山法皇御代年號、文永十一年、現給ヘリ

其故大和國法隆寺之東中宮寺、ト申寺、問人、皇后御建立  
有テ御善提定置給、委ク如レ有、前忝手、自引、地居、石立、柱、太子  
十六之御年ヨリ御興行有、僅十、年、造畢成、太子廿五ノ供養、  
其時、五色之瑞雲堂塔懸ルヲ御覽在、三百年後、薨破レ五

(三十一オ)

百年後ニ破壊セント言不燹、四面廻廊モ頽レ堂塔ノ藁、破レ住持中絶シ秋霧ハ不斷香ノ烟ト立登扉落テハ夜ノ月挑ニ常燈ニ可レ云常住

御本尊ヲ拜スレハ霜雪降テ烏瑟ノ頽ニ載ニ三冬雪、風雨滋時青蓮御眼ヨリ流ニ紅涙ニ侍カト疑カイ人跡絶テ苔深シ僅カニ殘ル物テハ二字梵

闍計也爰文永年中河内國古市之西栴寺長老日淨上人彼中宮寺ノ金堂參籠在テ再興修造ヲ太子御祈誓有ケレハ太子

夢中示曰此寺ハ自昔尼衆興行有レハ今モ又尼衆可レ有ニ再興一示給ハ日淨上人流感涙退出シ南都移ニ西大寺ニ此由ヲ披露有リ其

時西大寺長老ヲハ思縁上人、白ス彼尼長老ト日淨上人ト清談有レハ思縁曰此眞如房トテ器尼在勤行精進余ニ勝レタリ彼ヲ中宮寺長

老ニ可定即彼中宮寺令ニ住持ニ時ニ眞如房住スルヲ實貴機縁也然間人皇后ノ御菩提深奉ノ問年忌月忌之日更無ニ答人眞如

房大誓願住ニ金堂之正面ニ七日參籠シ願ハ此月日令知祈給ハ太子子又夢中示給様抑汝カ祈請實貴ノ間人皇后ノ月日人不知

實理也吾滿五十歳之時縫顯シ天壽國之曼陀羅之銘文ニ記レ之、法隆寺之置ニ高倉ニ汝是尋テ可レ見朱唐櫃内入錦袋ニ就ニ金鈴

四面縁ニハ平組ヲ臥綾ヲ爲ニ御衣綱、縫タル大曼陀羅也彼曼陀羅ノ銘之座敷ニハ大ナル錢程ノ龜甲ヲ一ツ、縫竝彼ノ龜甲ノ上ニ四ツ之三文文字ヲ

(三十一ウ)

縫、已上四百字也吾一期利生乃至母御入滅之月日、悉縫顯シテ納置行尋可レ拜見ニ勅在テ太子ハ失給早依眞如房夢覺流惑

涙、法隆寺行一和尚ニ此由ヲ語リ開寶藏、令見給申和尚答曰自昔付勅封私ニ不レ得開、靈夢コソ貴侍レト言ハ眞如不レ及力送年月、給フ爰一ノ不思議出來シヌ明年文永十一年ノ春比法隆寺之

高倉ハ盜人入タリト披露有是太子ノ御方便也故爲レ校レ寶物、經ニ

公家奏聞、自京都勅使ヲ申下ス法隆寺若輩、眞頭ノ儀式ニテ開ニ高倉、給ハ眞如房悅臨、彼寶物校給ヲ見給ハ御寶ハ一モ不レ失

言ス此朱唐櫃之寶、校給時鈴ノ聲聞ヘケレハ眞如悅テ如夢申シ彼曼陀羅所望シ開テ拜見在レハ太子之夢中、之御教不燹一百

龜甲之上、四百之文字在、太子御一期之利生方便乃至滅後、生處天壽國ノ依正二報悉縫顯セリ依法隆寺ノ大衆竝眞如御

釋子之勅使ト共ニ上洛シ彼曼陀羅ヲ備、觀覽ニ一天貴奉拜在、彼龜甲之文字ヲ時ノ儒者ノ中ニハ平野神主兼輔讀解、給テ次才

書連子點ノ副、曼陀羅、送ニ本寺、自此時、中宮寺法隆寺等ニハ間人皇女御隱日委知給ヘリ、十二月廿一日癸酉也

○太子五十一歳壬午推古天皇卅年春二月廿二日晚景命

(三十二オ)

妃沐浴殿ニ新衣裳一勅在太子同沐浴在殿ニ新潔之

衣袴一共葦垣宮寢殿錦帳内臥給謂后曰吾今

夜生者必滅理會者定離無常正極侍問今生向顔

言語交今計也子共去哉妃太子床副結同穴契一誓

御物語在太子告妃曰閑心無他念御西方淨土奉共

言后告太子云自今一度富井水飲度侍也太子答

曰今五濁水飲給早詣淨土可服八功德水言御詠

歌有 其歌云

法深浮世中能忘水如何川君余今勸可  
斑鳩能富井水伊加那國絶有物富井水

(三十二ウ)

后之御返歌

伊佐佐良波五濁水者欲須登早歸哉彌陀御國  
富井之水能心者世救彌陀之御國之泉成物之

太子后此御詠歌後無御物語一錦帳内閑成者宿衛

卿相等大恠雖夜半子刻程事者侍女諸臣成恐

不參東西閑待天明自常太子后久不驚給近從之

人々恠寢戸開奉見遷化給依之三悲有一天子王子悲

二大臣侍女悲三田舍万民悲此時近從侍女采女大臣已下群

臣百官一天衆生悉如別父母哭泣之聲滿道路天皇

聞食大悲駕御車宮臨幸放御聲二位悲給大臣已

(三十三オ)

下復大聯、踊、相語曰、日月失、耀、天地既沒、大臣携、御棺、

將、斂、奉、太子后、其御容如、生、其身太香、奉、聖、御屍、何

輕如、衣服、造、雙棺、置、大輿、葬、科長墓、

松子傳云、御入滅、大和國法隆寺東斑鳩宮南成羣垣之御宮也

最後之御道次、自羣垣之宮、今法隆學問寺前、西へ龍田山東之

麓ヲ南へ蜜路山ヲ西へ打越へ五里ノ道ヲ奉レ送侍リキ侍女采女ハ  
后ノ御共ニ立テ垂レ網泣々御共在倍從之人各擊ニ雜花ニ釋

衆ハ梵唄唱誦ニ伽陀ニ御輿前後ヲ立邁、四天王寺、伶人等、  
竹林廻骨等ノ奏ニ無常樂ニ後陣御共仕自斑鳩宮ニ至ニ于

墓處、道ノ左右ニハ百姓如、各擊ニ時花、或失聲大哭シ或佛歌、  
連、韻ヲ不レ待ニ宣告、素服皆着天皇墓送御覽ノ涙之御袂

更不、輒御詠歌有伊津地衛與吾於見捨、石川之科長、里者夕闔空

其、後天皇勅、大臣、有、廟、奉、納、其、後外國、百姓自遠來廻、墓相  
聚、日夕不、絶、五十日

(三十三ウ)

一、烏駒御棺納、岩屋、見名殘奉、借、兩眼流、黃、淚、腮、頭、

平、臥、雙、膝、持、頭、實、愛、別、離、苦、悲、歎、難、堪、氣、絕、雙

眼、閉、悲、之、中、哀、成、萬、民、復、流、淚、潤、袂、昔、悉、達、太、子、

紺、泥、駒、且、德、山、御、返、在、時、流、黃、淚、嘶、悉、達、太、子、之、別

悲、申、既、命、不、捨、今、烏、駒、後、世、御、共、申、實、以、哀、也

一、調、使、丸、見、之、悲、歎、不、紅、也、丸、中、悲、哉、皇、太、子、死、別、今、生、之

御、共、成、雲、上、水、底、可、奉、共、生、死、二、之、其、路、御、共、申、悲

今、又、烏、駒、吾、見、捨、死、事、愁、中、歎、也、聲、不、惜、泣、叫、見

聞、之、諸、人、同、流、淚、彼、烏、駒、群、臣、大、哀、屍、中、宮、寺、南

(三十四オ)

被<sub>レ</sub>埋置<sub>一</sub>今駒墓<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>之

或傳云太子四十九歲十二月廿二日死太子是哀中宮<sub>寺</sub>。前埋

給<sub>イ</sub>今在申<sub>トス</sub>

古老人云昔西天釋尊二月入滅今亦東土皇太子二月遷化

給<sub>イ</sub>西天東土雖<sub>レ</sub>異大聖權化<sub>別</sub>。春示給事以<sub>レ</sub>實不思議成

然吾人此土得<sub>レ</sub>生難<sub>レ</sub>請人身申<sub>ト</sub>。如來出世入滅ヲモ不<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>見送<sub>ニ</sub>

春秋<sub>ト</sub>實悲也亦上宮利生之折節奉<sub>ニ</sub>生相<sub>一</sub>者猶下<sub>ニ</sub>浮身<sub>ト</sub>

送<sub>ニ</sub>光陰<sub>一</sub>待<sub>ニ</sub>生死<sub>一</sub>恨成<sub>レ</sub>

一、異鳥來住<sub>ニ</sub>御陵<sub>上</sub>其形如<sub>レ</sub>鵲<sub>ト</sub>。其色白常住<sub>ニ</sub>墓<sub>上</sub>上<sub>ニ</sub>爲<sub>レ</sub>

(三十四ウ)

鳥到者即遠令<sub>ニ</sub>追去<sub>ニ</sub>時人名<sub>ト</sub>守墓鳥云三年之後

更不<sub>レ</sub>來但來去不<sub>レ</sub>知況在處不<sub>レ</sub>知<sub>ト</sub>

一、惠慈法師講說之日我朝使至通<sub>ニ</sub>太子<sub>ト</sub>薨狀<sub>ト</sub>法師停<sub>レ</sub>講

失<sub>レ</sub>聲大哭即命<sub>ニ</sub>衆僧<sub>ト</sub>轉<sub>ニ</sub>大乘<sub>ト</sub>既而語<sub>ニ</sub>衆僧<sub>ト</sub>曰聖德太

子寔眞人也扶桑下<sub>ニ</sub>流<sub>ニ</sub>通妙法<sub>ト</sub>日本洲演<sub>ニ</sub>說微妙<sub>ト</sub>言<sub>一</sub>

吾自頓悟<sub>ト</sub>唯因<sub>ニ</sub>太子<sub>ト</sub>山海異<sub>レ</sub>境心如<sub>ニ</sub>斷金<sub>ト</sub>吾至<sub>ニ</sub>今日<sub>ト</sub>存

命故者而爲<sub>レ</sub>聞<sub>ニ</sub>太子<sub>ト</sub>舉動<sub>ト</sub>也而今聞惠日蔽<sub>レ</sub>暉慈

雲銷<sub>レ</sub>潤吾<sub>ト</sub>生無<sub>レ</sub>驗不<sub>レ</sub>如追參<sub>ト</sub>仍擎<sub>ニ</sub>香爐<sub>ト</sub>大發<sub>ニ</sub>誓願<sub>ト</sub>

曰生々世々必<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>逢<sub>ニ</sub>上宮聖主<sub>ト</sub>於淨土<sub>ト</sub>也吾來年二月

(三十五才)

廿二日必死 竟如其言 明年二月廿二日無病逝時人大

異彼此大聖誰測其深乎

一太子御子孫男女交名廿五人即廿五菩薩也

山背大兄王 殖粟王 茨田王 卒末呂王

營手女王 春米女王 近代王 桑田女王

磯部女王 三枝王 三枝末呂古王 馬屋女王

財王 日置王 片岡女王 白髮部王

手嶋女王 孫難波王 末呂女王 弓削王

佐保女王 佐々王 三嶋女王 甲可王

(三十五才)

尾張王

聖德太子御實子十七人此內男十人女七人

孫八人男五人女三人

已上廿五人

一欽明天皇釋迦 用明天王藥師 間人 皇女阿彌陀

太子救世觀音 芹摘后 勢至 蘇我臣多門天

妹子臣持國天 秦川勝增長天 迹見臣廣目天

守屋臣地藏 調使丸 執金剛 烏駒 帝尺天 亦馬頭

膳 老女彌勒

(三十六才)

一推古天王然燈佛亦吉祥天

悉皆久成化現與佛法

一聖德太子御崩御在後廿四年即位仁皇卅七代孝德天

王之御宇攝州長柄京之時有朝義廣略多本之傳

記取捨ノ撰一本天王寺之東百濟寺ニノ平郡之翁基

親ト云儒者蒙レ勅宣撰此傳平氏傳ト云外ハ皆被レ捨了

一太子之聖ニ就テ習事アリ聖ハ智也自レ身馨香出テ未然ヲ

知内外ニ通ヌ德ニ有三德ニ是三世得脱ノ義也

元興寺記見ヘタリ

一太子御乳母松子玉照姫守屋女玉安姫妹子女

(三十六ウ)

月增姫蘇我女 日增姫近江臣女 唐花姫秦連女

一太子若湯井之事 千歳 赤染 春井等三也

千歳井ト云ハ廐戸之西シノノヤ南之谷ミナ在 赤染井宮ハクシヨミヤ西北之

原在春井宮之東南ハルノミヤ在仙洞云谷

右此傳者芹田坊之秘傳也於四天王寺東門村蓮

華藏院護摩堂書寫之彼本與書云不可出

院中雖然以起請文唯一人付屬穴賢不可カ他見ス

可秘々々

(三十七才)

右傳者龍雄長老雖為秘本道見依有誓

約之儀蜜寫了

于時寬正三年壬午孟夏吉日

筆者沙彌元泰誌之

尾州山田郡內飽津保上村於

太子堂寄進之

松原下總守廣長(花押)

寬正五年甲申三月六日

聖德太子伝 五

(三十七ウ・別装)

壹貫四百文目田地同畠万徳寺江

永代令寄進者也

松原下總守廣長(花押)

寬正五年甲申三月六日